副院長は助手と顔見合はせて、「ぢや爲方かない、絶望ですよ。」

「何ですッて。」

「絶望〳〵！」と副院長は出て行く。

狩野は追駈けて何か云はうとしたが、口をモグ〳〵さすばかりで、空しく其所に突つ立つて居る。

雪はサラ〳〵と降る。

私は狩野の顔を見ぬやうにして居た。然し存外取亂せる風もなく、付添室の柱にもたれて、腕組して凝つと靜まり返つて居る。まあ云つて見れば、好く人が待設けて居た結果を正しく得た時にする形だ。細君はもう見得も何も無い、病床の裾に頽折れて聲を立てゝ嘘欷つて居る。

何時の間にか電燈が點いた。外の雪は音も無く積るらしい。

狩野は又深い溜息と共に、愚痴らしくその金の事を云出して、切りと細君をせめ立てるのだが、片方がテンで相手にならないので、ボンヤリと何か考込んで居る。

先の醫員が看護婦を二人連れて入つて來た。そして脈搏や瞳孔など精しく檢べた上、何か二人に目くばせして、ソツト出て行く。看護婦共は後に殘つて、枕許の藥壜やら檢溫表やら、邪魔ッ氣なものを一切室外に持出して、そこらを奇麗に片付け初めた。

狩野は目を光らしてヂツトとそれを見て居たが、突然、太い掠れた底聲で、「おい、貴樣達、何をする。」

と叫ぶ。

年寄つた方が、「餘り汚ないやうですから、些とこの邊を片付ます。」と幾らかオド〳〵する。

「嘘を吐け、死ぬんだらう、正志が死ぬんだらう。」と聲が筒抜ける。

「いゝえ、そんな譯は御座いません、ただ餘り汚ない——」

「嘘だ、嘘だ、今の醫者、正志は助らないと云つたんだ。」と兩手で掻拂るやうに髮の毛を引掴んで、其邊中をグル〳〵歩く。そして、偶と思出して押入の中から此頃の徹夜に養生飲にして居るウキスキイの角壜を取出し、湯飲茶碗に取けてそれをグイとあほる。

細君は突と病人の枕許に寄つて、大きな目にボロ〳〵涙を零しながら、脣をかみしめて、その憔悴姿を凝つと見成る。

「狩野君、醫者もあゝ云ふんだ、駄目と思つてもその注射を遣つたら何うだね、存外利目がないとも限らんから。」

「僕はいやだ。」と又壜を取る。

「しかし然う君のやうに云つても爲方かない。」

「いやだ、僕はいやだ。寧ろ死んだ方が好い、然うすりやあの兒も救はれる、僕も救はれる。」

「萬一の事があつて救はれるとは可笑しい。」

「可笑しからう、いや可笑しからう、順境の君に僕の心持が解るものか、救はれるとは超脱する事だ。この苦痛から脱する事だ。何うでも好い、僕はたゞ脱しさへすればそれで好い

んだ。……おう、救はれるで思ひ出した、君に見せるものがあつた。」と手を伸して枕の上から雜記帳やうのものを探出して「君はあのノレエグの蠅の歌を知つてるだらう。」

「知らんね、僕は近頃一向そんな種類の本を讀まないから。」

「知らん筈はない、それ、學校で讀んだリーダアの三か四にあつたらう、確か尋中で讀んだと思ふ、有名な詩だよ。」

「然うだつたかね。」

「君は忘れたんだ。」とノオトを繰ひろげて、「近頃ある雜誌から頼れてね、佛蘭西の或る小說を譯して居るが、その中にこの詩が引照されてあるんだ。全く感動したね。あの時分は何の氣なしに讀んだが、今見ると實に堪らない、何とも云はれぬ感じだ。昨夜です、夜深けてあれの頭を氷嚢で冷しながら吟誦したのさ。すると何うです、自分の聲で泣けるんだ。胸に泌込むやうに自分の聲が自分の耳に響くんだ。僕は詩を讀んでこんなに感動した事がない。」

「そんなに面白いのかね。」

狩野は苦い目付をチラリと私にくれて、「いや、面白いものぢやない、悲しいものです、讀みませうか。」

「え、——然し後にしよう。」

「いや、讀もう、短いもんだから譯は無い。」とウキスキイに咽をしめして、その沈んだ響の無い聲で吟誦を初める。

いたましや、あはれ、蒼蠅

情知らぬわが手もて
いましが夏の遊びをば、
うるさきものに打拂ふ。

似たらずや、わが身こそ
あるに甲斐なき、いまし、蒼蠅
似たらずや、いましこそ、
世の榮知らぬ、われ、人間に。

今こそは舞もすれ、飲みもすれ、
歌はありとも世の終り、
くらき死の手に、あはれ、
打拂はるゝ、わが身哉。

「これだ、似て居るだらう、君。僕の感想をソツクリ歌つて居る。」と拳を固めて譯もなく自分の胸元を叩く。

「何所が似て居るのさ、私には些つとも解らない。」

「似て居ない事があるものか、（今こそは舞もすれ、飲みもすれ）さ、僕の生涯はこれだ、秋の蠅だ、その秋の蠅だ。」

「然うかね。」

「さうさ、聞給へ、その後を讀む。」

眼が覺めたのか、病人は眼をつぶつた儘、うゝんと苦しげに呻き始めた。

細君は度拍子を失つて、「貴方〳〵、早く來て見てやつて下さい、正志が目を覺ましたやうですから。」

狩野も僕も枕許に立つた、病床のまはりは痰壺まで奇麗に片付けられたので、病室は急に寂しくなつたやうな氣がする。病人は口をピシヤ〳〵さして、力無く頸を振動かしながら、何を探めるのか、ウツトリ鈍つた目を一所にあつめる。

看護婦はその吐出す眞白い唾を紙に拭取つてやりながら、「おゝお苦しいでせうね、今お樂にして上げますよ、そら、最うお嫌な氷囊も取りました。」と天井から吊下げた氷囊を取除けると、些と伸氣味の軟かい髮毛はピツタリ額に張付いて頰から下の瘦が一層目に立つ。汗がフウと蒸れ上がつた。

細君は涕をすゝりながら、溶劑の土瓶を取つて口にあてがふと、病人はコクリと幽かに咽を鳴らして飲んだ。そして、無力性な目を擧げて切りに周圍を探して居る。

「正志！苦しいか、確乎するんだよ。正志、お母さんだよ、正志、正志ッてば。」と細君は押覆さるやうに病人に取すがる。

「お父さん！。」と病人は幽かに呼ぶ。嗄れて老人のやうな聲だ。

狩野はヌツト顏を突出して、怒り聲に、「何んだ、正志。」と呼んで、睨めるやうに病人の顏を見詰める。

「お父さん！。」と最う一言。

美しい夢でも見たのだらう、ニツコリ寂しく笑つて、又昏〳〵と眠に入る。

「あれだ、君。」と狩野は私の肘を摑んで、染々云ふ。

看護婦は氣を利かして、上包にしてある晒木綿を取除けたので、蒼白い電燈の霜光りはサツと、病床に流れて、その小さな顏を蠟のやうに美しく見せた。狩野は付添室に戻つて、又チビ〳〵強い酒を味つて居る。僕も默つてその傍へ來る。

「そこで詩だ、今の續きを讀まう。」と又ノオトを取上げたが聲は大分縺れて言葉尻が怪しくなつて居る。

……

……

くらき死の手に、あはれ、
打拂はるゝわが身かな。

世を思ひ、稽ふるこそ、
生命なれ、力なれ、あゝ、
思はずば、何處浮世ぞ
其所永久の死にはあらじか。

さはれ、たゞ、わが身こそ、
世にも幸ある靑蠅なれ、
生くと云へ、はた死ぬと云ふ、
そのいづれともあらばあれ。

讀終つて狩野は目を寂しく膝に落した。

「人世はこれだ、思はずばいづこ浮世ぞさ。僕等は今まで强ひて自ら痛苦を求めて謂ゆる浮世を造つて居たのだ、思はずば……だ、全くよ、生くと云ひはた死ぬと云ふ、そのいづれともあらばあれ、と云ふ氣になれるぢやないか。」とシンミリ云ふかと思ふと、不意に高々と笑つてコロリそこに仆れる。眠るのかと見れば然うでも無い、沈んだ聲で繰返し〳〵その詩の末節を打吟じて居る。私はその詩に動かされるやうな事は無つたが、友人の寂しい瘦ばつた姿を見ると、妙に胸を搾られるやうに覺えて、思はず涙含んだ。

細君が鋭い聲で、「貴方〳〵、早く來て見て……貴方、正志が何うも變ですから。」と叫ぶ。

「何？」と狩野は半分身體を擡げたが、酒の深醉にベツタリ仆れて、「又かい、もう何うでも好い、打棄つて置け。」と酒の醉を吹いて居る。

「貴方、貴方ッてば。」

「何んの事だ、業々しい、正志が惡いと云ふのだらう、好く知つてるよ。」

「でも、餘程變ですから、早く。」

「好いよ、解つてるよ、死ぬものは死ぬさ、見たつて爲やうが無い。」

病床に寄つて見た。小兒は正氣らしく目をパツチリ開いて空しく一所を見詰めて居る。そして痰がからんで來たと見えて、咽佛をゼイ〳〵鳴らしてゐる。

「狩野君、些いと。」容態が變なので、私も友人を呼起して見たが、渠は例の詩を吟じて居るばかり返事がない。

「お父さん、水を。」と病人は苦しさうに蒲團の外に手を出す。

「おゝ、氣が付いたの、正志や、私だよ、お母さんだよ。」と細君は又溶劑を飲ませにかゝるのだが、小兒は頭を振つてそれに應じる風がない。

……

……

思はずばいづこ浮世ぞ
そこ永久の死にはあらじか

……

……

「お父さん、お父さん！。」と小兒の聲は次第に掠れて、目も一所に凝執する。そして咽は獵犬のやうに烈しく鳴り騷ぐ。

「貴方、後生ですから見てやつて下さい、貴方！正志が、あれ……貴方。」と細君は遺瀨なさに身をもがく。

今まで左の脈を秒刻音に合せて居た看護婦は、パチンと時計に蓋をして、病人の手を細君に確と握らせて、

「貴方、シツカリ握つて上げるんですよ。」と自分はそこを退る。

「お父さん……お父さん……。」と舌もやゝ強直して來る。
「貴方、正志が探して居ます、貴方、何うか遇つてやつて下さい、拜みます。」と泣く細君も、ヨクセキであつたらうと思ふ。
「いやだ！死ぬ奴は見ない。」と狩野はムックと起きて酒壜を引寄せたが、中身の空しいのに舌打してドンと投出す。壜は板敷の病室をコロ〳〵と病床の方へ轉つた。
看護婦も見かねて、「貴方、今もう何んなのですから、些いとでも見て上げて下さい。」と傍から口を出す。
「いやだ。」
「……。」と病人は口を動かしたが、言葉は聞取れなかつた。唯痩せた乾いた指先がピリッと動いたばかり。
「貴方！まあ何と云ふ邪慳な……こんなに繼しがるもの……貴方！貴方！。」
狩野は見向もせぬ。嚴しい聲で、「馬鹿、何を狼狽する、見ッとも無いぞ。」
「だつて貴方……。」
「今頃になつて何んだ、些つとは平常を耻ぢろ。」
「だつて、今死んで……あれ、貴方。」
「死んでも好い、正志は俺の兒だ。」
「貴方〳〵。」
「死ね、死ね、死ね。」
狩野は又バタリと其所に仆れる。

見るに忍びず、僕はソットその傍を離れた。狩野はと見ると、電燈に顔をさらして無心に眠る人のやう、投出した兩手に身動さへ無い。
看護婦の白い裾が、ヒラ〳〵と室外へと動いた。

弟の碑

一

妹のけいは着物を着換へて、これから芝の親戚へ行くと云ふ。郷里の母堂から御依頼あつて、是非御相談したいと端書が三度も來て居る。本來ならば高村自身が出向く可き筈なのだが、今日は明日はと引張つた上、昨夜になつて急に仕事が忙しいから行けないと言出した。着る物の整はないのも相手が相手ゆゑ厭だと云ふ。
用向は大抵知れて居る。何れ送金の催促か弟の碑を建てる相談に違ない。來月廿五日は弟謙二の三回忌に當るが、未だ石碑が建たずに居るから多分はその事と思ふ。例今他家を繼いだにもしろ、家から葬式を出した以上、世間の手前何時まで標木では置けない。第一養子に遣つた先方の意嚮も口惜しい、芋割石でも好いから此方で建立しい、高々十六七圓で濟む事だ。そればかりの金、今のお前には何んでもあるまい。長々送金も斷れて居るがそれの愚痴は云はぬから、是非その金を調達してくれとの手紙が幾度も〳〵母から來て居た。それに一度の返事も出さずに居るから、大方それを芝の親戚へ持込んで寄來したものと見える。芝の親戚と云ふのは大藏省の屬官で、高村とは復從兄に當つて居る。腹の小さい、夫婦とも揃つてケチ〳〵した性分なゆゑ、高村の氣儘な檢束ない暮を平常から好く云ふては居ない。それを知つてるから高村も餘り出入りしないで居る。
お母さんもお母さんだ、何もこんな事を芝なぞへ相談する事はあるまい、この手紙を見ろ、言草が癪ぢや無いか、俺ァあんな奴等に指圖される覺は無いんだ。」と高村は端書を見ていやな顔した。
昨夜である。兄妹揃つて夕飯を喰べて居る所へその端書が來たのだ。
「それと云ふのも皆苦しいからです。日は段々迫つて來る、お母さんの身になつても氣が氣ぢや無いんでせう。」と妹は自分の事のやうに兄を怖れた。
「だから石碑は僕が建てると云つてるぢやないか。何んだ二十や三十の金。然う大金らしく騒ぐ事はあるまい。」
「兄さんは大金でなくても、お母さんには餘ッ程の大金です。本宅の家賃と私の仕送でやつと暮を立てゝるんですもの。」
「又始めやがる。」と箸を置いて、火鉢に凭れて烟草を吹して居る。
「でもお母さんも取る年ですし、考へると全く可哀さうです。この頃の手紙にも、メッキリ體が弱つて、偶に洗濯ものなどしても次の日は骨節が疼む。とても最う前のやうな荒い

仕事は出來ないと書いてありました。」と妹は俯向いて長い息を吐いて居る。

近在の小學校の女教師をして居るが、心臓が悪るいと云つて、保養ながらこの頃から兄貴の家へ來て居る。

「最う少しの我慢さ、石の上にも三年と云ふぢや無いか。今に樂隱居だ。俺のお母さんと云はれたゞけでも名譽ぢやないか。その位の辛棒が出來んのかな。」と高村は目をつぶつて貧乏揺ぎして居た。

「そりや分つて居ますけど。」と妹は膳に向いた儘、矢張り自分の膝を見詰めて居た。

「貴樣たちは鼠見たいに外へ出ないから、何も知るまいけど、俺は昔の俺ぢや無い、高村遠樹と云つては、これでも多少世間から注目して居られるんだ。」

「それは知つて居ます。この頃は始終新聞へも小説の評判が出て居るし、私ども國の人たちへ何の位肩身が廣いか知れません。」

「なら好いぢやないか、今に見ろ、これまで僕を見くびつてゐた郷黨の奴等を立派に見返してやるんだ。」

「それですから猶更なんです。兄さんの名が揚るほど家の困るのが目に立ちます。何しろお父さんが死んで七年と云ふもの、全で寢喰同樣ですからね、兄弟共は多いし、お母さんの苦勞も一通りぢや無い。」

「云ふな、云ふなよ。貴樣の話は何時も決つて居る。此方で贅澤する金があつたら少し宛でも送金してくれ と然う云ふんだ。」

「それも澤山ぢやないんですからね、月々十圓もあれば本當に助かります。」

「最う止さう、お前にや何を話したつて分かる氣遣は無い。雀ッ子位しか無いケチな腹で俺と云ふ人がわかるもンか、詰り、一生地を劬つて活きてる人たちなんだ。」

「だつて無い腕なら爲方ないけれど、兄さんなんざ書きさへすりや幾らでもお金になるんだもの。世間にや働いても〳〵困つて居る人がドッサリあります。」

「馬鹿云へ、貧乏は僕等の身上なんだ。へタクタ書いて耐るもんか。」と高村は尊大らしく笑つた。

「それに一體の暮が贅澤過ぎます。少し心懸けて詰めさへすれや、媼やと二人ですもの、然うかゝる譯はありません。兄さんが一日愉快するだけあると、お母さんは貧體にして一月も暮して行ける。」

「愉快と云つて、高が三好の婆さんと芝居へ行く位なもんだ。」

「でもそのお金だつて皆兄さんの手から出るんでせう。中々大きいわ。それに兄さんは一體に派出好きな方だから。」とネチ〳〵して低い響の無い聲である。

「最う好いよ、貴樣の話を聞いて居ると、僕ア腹が立つばかりだ。」とグット伸をして立上つた。

「ですが、ねえ兄さん。」と妹は矢張り何か考へ込んでる。

最う好いッて云ふに、僕ア湯へ入つて來やう。」と高村は手拭を持つてサッサと出て行つた。そして、けい子が兄の代理に芝へ行く事と、その後で話が決つた。

二

「兄さん、行つて參ります。ぢや他に御用は御座いませんね。」と妹はその次の日の朝飯後兄の書齋の敷居際へ來て膝を突いた。

「用は無い。芝へ行つたら皆に宜しく云つてくれ。」と高村は讀半しの新刊雜誌を投出して、怠けた體を疊へ起きた。「然し何も云ふ事は無いよ。先方の話だけ聞いて居ればそれで好いんだ。」

「私は何も云ひません。」

「厭だからな。格別世話にもならん癖に、あいつ等に彼是云はれるなア。兄が萬事取決めるさうですとさへ云や好いんだ。」

「それも、先きの話を聞いた上でせう。」と妹は未だ思切悪るい口振である。

高村が苦い目をした。妹を見て、「先きに何んな話があるもンか。決つてらア、高々石塔代の一部を補助する位の話だらう。御免蒙らうよ。斷然、立派に斷つて來てくれ。」

「承知しました。」

「僕の事を聞いたつて、餘計な事を喋るんぢやないぞ」。と高村は心元無さゝうに又念を押した。

「え、私は何も云ひません。」とけい子はそこに坐つて、俯向いたまゝ、凝つと自分の掌を眺めて居た。水仕業に肌が荒れ立つて、指節も太く高い。定紋を鑄つた銀の指環を篏めて居た。矢張り眺めて居る。

妹は今年二十六になる。上せ性で顏が赤い、齒並が悪るい髮が産婦のやうに薄い。始終氣にしちや唇の皮を剝いて居る。それに、この年まで獨身で通して來た所以もあらうが、目付が如何にも寂しく、トンと濕味の無い顏立である。低い響の無い聲である。小説は嫌ひ、物見遊山は嫌ひ、第一は小兒が嫌ひで、一人しか無い二番目妹の子すら煩さがつて近付けない。樂みと云ふのは、喰べる事と寢る事ばかり、日曜日なぞは自分の洗濯さへ爲ずに午近くまで寢て居る。何時も憎ッとして生欠伸の涙を目に溜めて居る。

父が亡くなると直ぐ女學校を退して、訓導の資格を取り、それから此方ズッと小學校教師をして家計を助けて居る。殊に兄の高村が東京へ出てからと云ふものは、幼少な弟妹を引からがいて、母と二人地味に貧體に家を維持して來た。二三度あつた縁談も自分から斷つて一生獨身で暮らすと云つて居る。直ぐ下と三番目の妹と二人を嫁にやつたのも全くこの妹の働きである。月給の前借までして、何うやら斯うやら仕度をしてやつた。所を、丁度この春、世話する者あつて南葛飾

の小學校へ轉任して來た。月俸が幾らか好いのと東京近いのを便利にして、自分が年來の希望たる音樂を勉强する積りで郷里の仙臺を出て來たのだが、來て見た模樣は先の話と大變な相違、科外の單級教授まで受持たせられて、滅多に東京へ出る暇も無い。高村も笑止がつて「なら學校なざア止して了へ。十五圓や十八圓の金なら俺が少し勉强すると大丈夫餘計に取れる、お前にも長々苦勞を掛けた、その恩返しに音樂の免狀を取る間俺が世話してやらう。」と口先ばかりでなくすゝめるのだが、妹は別にそれの不平も云はず、來年の昇給を樂みに色の褪めた袴を穿いて毎日學校へ通つてる。

「あ、出來たね。」と高村は妹の羽織を見た。半年も前から念願して、毎月身を詰めた幾分宛の貯金に、やつと買求めた八ツ橋織の羽織である、せめて被布ならばと注意しても、それでは儀式張つた時に着られないと云つて、花菱の五ツ紋をつけて晴着の羽織に仕立てたのである。

「え、やつと今壓板を取つたばかり。」と太い手で紋なぞ撫で廻して居る。

「好く似合ふよ。」

「でも些と色が地味過ぎて、私は氣に入らないけど。」

「そんな事は無いよ。それで寫眞をとつて國へ送つたら好いだらう。」

「止しませう。弟の碑を建てないで居て、私ばかり氣樂さうで皆へ悪いから。」

高村はやゝ險しい目をした。「そんなら始ッから拵へないが好い、羽織を着ないで弟の碑を建てる程の親切はあるまい。自分のものとなると一錢でも吝い癖に俺ばかり責めて居やがる。好いだらうよ。」と冷かに鼻先でセヽラ笑つた。

「でも私は怠らず送金して居ます。」と恨しさうに兄を見た。

「もう好いよ、好いよ、貴樣の腹は分つて居らア。」と毒付いてゴロリ寢返つた。厚い白毛布に腰をくるんで居た。

妹は暫くして云ふ。

「そして今日も仕事をなさらないんですか。」

「今日は書くよ、二十枚は書くつもりだ。」

「昨夜鳴潮社が二度來ましたよ。」

「知つてるよ。」

「それでも、又定子さんが見えたら駄目になるでせう。」

「何うして。」と苦い目を妹の方に見せて、「來たつて好いぢやないか。」

「全體、定子さんも何か小説でもお書きなさるんですか。」

「煩さいな、何うだつて好いぢやないか。」

「ですけど。」

「ですけど、何んだ。」と高村は相手の心を讀むやうに目を光らした。

「まア、好ござんす。ぢや行つて參ります。」と膝を重さうに立つ。

高村は何時に無く妹を玄關まで送り出して、「寒いよ、氣を

付けてお出で。」と云つた。

「寒いたつて、何有。」と妹は冴えない聲して出て行く。

高村はその俯向加減に出て行く妹の後姿を默つて見送つた。持つた毛繻子の蝙蝠傘も見窘らしければ、些と後のチビた塗下駄も見窘らしさうだ。

午後は何も爲ずに暮した。書半しの原稿に向つても見たが、妙に氣が浮付いて書けない、と云つて落付いて讀書しても居られぬ、大弓をひきに行くも間が惜しいやうな氣がする。別に定子が今日來る約束はしないが、何時の留守に來ないとも限らぬ、本屋への約束は兎に角、諸拂にも差閊えて居るのだから是非書かなきアならぬのだが、さて何うにも乘氣は無い。心は慌てゝ、體は矢張怠けて居る。机に坐つて、膝を小蒲團にくるんで原稿紙を前に舒べて。そしてボンヤリして居た。

風は段々强くなつた。西へ〳〵と廻つて書齋へ眞向に吹付ける。庭の蒼桐の落葉がバラ〳〵と障子へ吹付ける。そして、その度に建具の隙間を吹込む砂埃は今拂つたばかりの一閑張に白ろく、墨を擦ると心持悪るく硯に軋む。いぶり炭の所以か頭が岑々痛んで、唇の皮が裂けたがる、恐しい潔癖な媚やは曇からブサクサロ小言云ひながら、烟草を吹ふ間もなく、家中を掃き廻つて居た。

「旦那樣、些つとお立ち下さいまし、お掃除しますから。」と白手拭を姉樣被りに箒を持つて入つて來た。

「好いよ、僕ア仕事があるから。」

「だつて貴方こんな砂で、氣味が惡るいぢやありませんか。」

「好いよ。」と聲は高かつた。

それでも關はず媚やは高村の机の廻りを掃き始めた。

三

「まあ甚い風！」と雪駄を鳴らして、若い女が息急き玄關から入つて來た。

高村は座敷から耳を聳てた。

「定子さんですよ。」と媚やは高村の耳元に來て大事らしさうに聲を潜めた。高村は急に机の上の原稿を見た。

「あら、お留守なの。」と定子の聲は茶の間に停つた。そして

「媚やさん〳〵。」と臺所の方に向いて呼んで居る。

「此方に被在いますよ、貴方。」と年寄は今一度注意深かい目射でソット高村の樣子を窺つて樣先から出て行つた。

「まア御勉强なの。」と派手な被布を着た定子は襖を明けて、そこに立つた。

一目見て、そして高村は偏屈らしく目を机に落した。

「何うしたの、來ちゃ不可なかつて？」と入りかねて居る。

「後を。ピッタリ締めて。」と高村は氣重さうに初めて口を開いた。

云はれたやうにして、定子は小走りに火鉢の側へ駈寄つて、

「何うでせう、まアこの風は。」と火鉢に膝を掛けて、高村に近々と蹋んだ。

「まア、坐るさ。そして何所かへ行つた歸り？」と火鉢の火を搔き起した。

「何うしてなの。」と風に赤く曝された頰を兩手に凝つと抑へて見た。ミットの飾りがキラと光つた。

「いやに飾してるからさ。」

「誰が？　私？　何うして。」

「この頃は一體に飾すよ。」

「然うかしら、好く氣が付くのね。男のやうでもない。」

「だつて見えるもの。」

「なんぼ見えたからつて、男が着物の事なんか云つて可笑しいわ。」

「そこが小說家さ。」と高村は笑つた。

「厭ね。」と被布の裾を捌いて、そこへ坐る。

「そして、けい子さんは。」と小聲の耳を傾けた。

「居ない、芝へ行つた。」

「お留守？　然う、ぢや好かつた。私は又始終來るんだから何んだか極が惡るくつて。――昨夜あのあとで何とか被仰つたでせう。」

「何を。」と高村は自分で立つて袋戸棚から西洋菓子の箱を出して來た。

「何んでも私の事を。」

「關うもんか何を云つたつて。」

「でも、屹度變に思つて被在るわ。」

「思つたつて好いさ、何うせ變なんだもの。」と高村は笑つた。

聞えませんよ、と言つたやうに定子は俯向いて火鉢の灰をならして居た。

「ね、何うせ變なんだ。」と女の指先をギッシリ握つて窺くやうに顏を差寄せて、そして「何うだ、この手の冷たい事。」と笑つて居る。

「でも厭だわ、けい子さんは餘程惡るく私を思つて被在るもの。」と手は男にまかせながら定子は火氣にホッと上せた顏を上げた。躾み深い女の白い額は軟かく光つた。

「何うして？　ぢや那奴が何か云つたね。」

「そんな事はないけれど、何う云ふもんでせう、私何うしてもけい子さんとは親しくなれないやうな氣がするわ。」

「趣味性が違ふだらう。」

「それもあるわ、それに……。」と又俯向いた。

「それに？」と高村は忙しなく目を瞬く。

「まア舍さう、そんな事云つたつて爲樣がないから。」

「何故、可笑しいわ。」と凝つと目を離さぬ。

「何んでも無いですよ。」と言つて定子は急に元氣らしい顏を上げた。

そして、二人は暫くの間默つて居た。手は握り合つたまゝ。

高村は片手に机の上の辭書を開いたり、繰つたり、落付かぬ樣子を見せながち、些い〳〵と定子の扮裝を偸み見て居た。帶も被布も着物も、花やかにパッとして、品質は兎に角、

格にも好みにも若い女の油斷なき氣配と才氣とを殘りなく見せて居る。襦袢の袖、半襟、人の氣を引く濃い色彩である。リングもルビイを欽めて居た。そして、それ等が些いと品づくつた所のある姿に好く調和する。その上、些いとした坐り癖にまで鹽があつて、被布の裾から横に流した足袋の眞新しのも輕々と見好げである。

定子、今女子大學の英文科に籍を置く。繪も器用に描き、些いとした小說も作る。中國筋の可也物持の娘で、祖母さんを監督にッイ近所に住んで居る。

妹の云つた三宅の隱居さんと云ふのがそれで、切髮の尊大ぶつた物言をする年寄である。見物聞き物なら何んでも好きで、始終高村と連立つて歩き廻つて居る。

「好く吹くのね。」と定子はゴーと空に吹荒れる風音に耳を澄した。

「外は寒むいだらう。」

「けい子さんは何うしたでせう、屹度途中で困つてるわ。」

「電車だらうから然うでも無いさ。それに田舍の者は風位にや馴れて居るよ。」

「だつて甚いのよ。全で目が開けないですもの。私のコートでも着て行けば好いのにね。何うせ私は着ないんだから、全體けい子さんは遠慮深かすぎるわ。」

「何有最う歸るよ。」

外はホンノリ暮れて、障子の上桟は薄すら暗らくなつた。一次ヒッソリ吹止んだと思ふと、又ドッと來る。庭先の青桐の葉がバラバラと椽の先に降つた。

「あ、それからね、私忘れて居た、米國に居る從弟からこれを送つて來たの。」と被布の前を開けて帶にからんだ鎖を男に見せた。

「時計だらう。」

「え、些と形ちは大きいけれど、金の性が好いからつて、降誕祭の贈物に送られたの。」

「然うかね。」

「だつて十一月ぢやありませんか、なんぼ何だつて些と早過ぎるわ。」と時計を出して、蓋をば開けて見せた。

「然う。」と重く答へて、高村は他の事を考へて居た。何と云ふ譯は無いが、偶と妹の太い節高い指、物欲しさうな銀の指環を欽めた指を思つたのだ。そして、木枯の吹荒れる夕暮の空に、顏をさらして、俥にも乘らず軒下を選んで歩いて行く妹の姿を思つた。出がけに氣の付いた、妹の駒下駄の後がチビて居たのも目に殘つた。

風は時どりして荒れて來る。

「晩いな。」と高村はヒョックリ妹の事を口へ出した。

「誰？　けい子さん？」

「最う歸つて被來る時分？　ぢや私も歸らうや。」と云ふ、と云つて、急に立つのでもない。

「未だ好いさ。」

「だつて遇つちや工合が悪いもの。」
「關ふもんか、あんな老孃。」
「貴方は然うでも私は厭だわ。極が悪るいもの。何んだか始終ムッとして居るやうな方なのね。」
「然うでもないんだ、あれで僕にやひどく遠慮して居るんだからね。」
「貴方のお母さんと云ふ方も矢張りあゝ云ふ方なの？」
「何故？」と見る。
「何故でも、氣になるわ。」と笑談らしく俯向いた。
「あれでも氣分は優しいんだよ。兄弟中ぢや一番同情家なんだ。」
「貴方何人の兄弟？」
「八人。」と投出すやうに云つた。
「隨分大勢ね、皆家に被在るの。」
「家に居るなア那奴とも四人だ。」
「責任が重いのね、大變だわ。」
「でも僕ア何うで始終同居する氣は無い。家族は家族、僕は僕さ、家族の事など氣にして居られるものか。何うで藝術家の家族は犧牲さ。」と高村は急に元氣らしく云ふ。
玄關の戸がガラ〳〵と明いた。
「あら歸つて被來てよ。」と定子は狼狽して男の指を握つた。
「違ふだらう。」と聞耳を立てゝる。
「あら、然うよ〳〵。」と定子は膝を搖ぶつて手を振動かした。
「唯今。」と妹は頰を眞赤にして入つて來た。鬢が砂埃にそゝいげて、息を切らしてせい〳〵云つて居る。
定子は固くなつて會釋した。妹も會釋した。でも何とも云はなかつた。
「大變だつたらう、この風ぢや。芝ぢや變る事も無いね。」と高村の聲は慌て切つて居る。
「え、何れその事に付いて、後程お話しませう。」と妹は言葉少なに間の襖を締めて次へ立つた。
「惡いわ〳〵〳〵。」と定子は又小兒のやうに身を振つた。
「なに關ふもんか。」と流石に小さな聲で云つて、目は次の間に据ゑて居た。
「ぢや私歸る事よ。」と机に擦寄つて、そこにある鉛筆で原稿紙に、（今夜うちに御出なさい、御馳走します。）と書いた。
「何の御馳走？」と高村は笑つて云つた。
「あら。」と目で制して、（なんでも、一番あなたの好きなもの）と又書く。
「酒だ。」と云つて。そして紙へは、（屹度行く）と書いた。
（本當ですよ、けい子さんに内所で。）と書いて、二人の字を鉛筆で黑々と塗消した。
「はゝはゝゝ。」と高村は笑つたが、その聲は決して冴えなかつた。
「ぢや左樣なら。」と定子は立つて玄關へ出る。
高村は先きに立つて定子を送り出しながら、玄關脇の三疊

へ來て見ると、顏でも洗ひに行つたのか、妹は居なかつた。今脫棄てた衣服や帶がソックリその儘になつてゐる。
高村はそれを定子に見せまいとでも思つたのか、急いで脫棄を足で隅ッこの方へ押遣つた。
「左樣なら。」と玄關で見送つて、高村は暫時表の吹荒れを眺めて居たが、「あゝ、ひどい風になつた、今夜は氣を付けなくちや。」と何氣ない體に云つて、自分の書齋へ戻つて來た。

男柱

一

午後の四時頃、父は學校から歸つて來た。いつもより、大丈夫、三十分は早い。茶の間に蒲團のがんがくに忙しく、糸屑だ、綿屑だ、襤褸切だ、足の踏どこも無く引散つて居るので、母は些と狼狽氣味で出迎へる。私、妹のさち、そのお友達律ちやん、これはそこへ出て坐る。近頃東京から來た鑛山技師の娘で直ぐ近所に住つて居る。

父は玄關口から「九十九老爺は來ないか。」と、斯う聞いて入つて來た。袱紗包のクレオソート丸がプンと鼻を衝く。

「いゝえ、未だ參りません。」

洋傘は傘棚へ朴齒の下駄は下駄箱へ、それ〴〵始末しながら、母は上目遣ひに答へた。

「何んしてるんだ、來ない氣ではないか。」

「そんな事御座りますまい、今日は遲くも參りすよ。」

「來ないぢや困るぜ。」と、父は不機嫌の聲、眉根をしかめて母の顏を見据ゑた。母は最うとちつて了つて、單衣の袖で切りと小鼻の汗を拭いて居る。

「端書は出したんだらうな。」

「は、さちに出させました。」

茶の間はその通りだ。父は默つて緣側づたひに奥へ入らうとする。

「まだ、お退りで無いと思つて、こんなに散かして居りして。」とそつちを見い〳〵母はあやまつて居た。

「校長先生、こつちの袖が。」と律ちやんは自分の袖を見せて父へ注意する。

母も見付けた。「貴方何う爲すつたのしや、羽織の袖が白墨で眞つ白。」

母がわざ〳〵手を出すのに、父は自分で袖を拂除ける。それでも律ちやんだけには笑顏を見せて、「大泉さん、お父樣は毎日お役所ですか。」と聲も優しくなる。

「え、今日は最う歸つて來ました。」

「然うですか、おとなしく遊ぶんですよ。」と座敷へ入つた。

私は北口の小座敷へ歸つた。障子際に胡坐を掻いて、明日先生へ出す輪廓地圖の彩色に取掛つた。繪の具は先刻、明礬水で溶いて置いた。

襖をそつと、妹のさちが來た。十一になつて尋常の三年、痩せてる癖に背ばかり高い。腺病を疾つて、去年も一昨年も落第した。足音をソッと歩るく癖の、口數を利かない子である。

「お兄さん、大變でがすわ。」とそこへ坐つて秘み聲になる。

「何んで。」と繪筆を置く。

「裏の丹波栗切るんだとしや。」

「何時や、誰に聞いた。」

「お父さんに聞いた。今お母さんと話して居したつけ。」

「惜しいもんだ、本當だらうか。」

「本當でがすとも、そだから明日畠のもの皆拔いて了ふんだとしや。茄子など未だ未だ〳〵何時までも生るのにね。」と大人のやうに溜息を吐く。

「惜しいな、嘘だら好いな。」

「本當にね、嘘なら好いけれど。」

「そんで、九十九老爺を呼ぶのか。」

「然うだと。酒屋の男柱にするんだとしや。」律ちやんが呼びに來た。さちは表へ出掛けて、又戻つて來る。そして、

「それでも、今の事、私に聞いたと云はないでくないよ、後で叱られるから。」と念を押して出て行く。

引違つて母が來た。赭ら顏の肥つた人で、地性のくたれた紺絣を着て居た。恐しい汗ッ掻で、何時も滿足に折目のある着物を見た事がない。

「守さん、これ窃つとお父さんの抽斗へ入れて〻下なんせ、見付けられると惡るいから。」と大きな赤い柄の西洋鋏を出す。

「又出したの、何故出すんだらう、叱られるに決つてる。」と兎に角鋏だけは懷へかくした。

「そんだで、こッちの鋏は切れないんだもの、全體鋏ぐらゐ使つたて、然う小言云はなくても好いのさ。餘り喧し過ぎるもの、男のやうでも無い。」ときまりの愚痴をならべる。私は聞かぬ振して居た。

「病氣の所爲だと思つて我慢してるけど、あゝ難しくされては、全く生きてる空がない。」と、ブツ〳〵云ひながら出て行かうとするから、私は振向いて今の栗の樹の一條を尋ねた。矢張り事實で、屋敷へ借金の利子を拂込むために、九十九老爺に仲買させて、ある酒屋の男柱に賣るのだと云ふ。

「惜しいな、あの木は切りたくない。」

「それさ、私もさう思つたから色々停めて見たんだけど、あのお父さんの事だもの私の云ふ事なぞ聞かさるもので無い。」

「然うかな。」

「あの木は鬼門塞ぎと云つて、この屋敷には極く〳〵大切の木なんだとしや。」

「んでも、九十九考爺は今日來るんでがすべ？」

「さ、未だ來ないけれど、何んしてるんだか。」と出て行く。

二

夕方手紙を持つて、首座教員のところへ使に出された。返事に手間取つて、歸りは最う暗かつた。月が好い——夏の夜の十二日である。飯前なり、遠方なり、親ながら小腹が立つて、厭で〳〵泣出したい程であつた。母が新しい下駄を下してくれたのに、わざと舊いチビ下駄を穿いて出てやつた。門へ出て、二三度手紙を土へ踏付たりした。でも歸りにはケロリ

と忘れて、妙に足取がいさむ。眞暗な六道の小路さへ、本當に眩けて來た。來る筈の九十九老爺が待たれたのである。

九十九老爺は飯田在の百姓長年の出入である。身代は悴へ讓つて、自分は栗木羽の賣買なぞして居た。頼まれゝば葬方もする、背の高い、骨組の嚴丈な、そして掌の大きいズラリ上齒のない老爺である。私得金を持つてると云ふ評判で、母なぞも父へ內所で、多少融通して貰つて居たらしい。外に女教員にも二三人はあつた。毎月、月給日の翌日あたり、好く北口の座敷へ集つては、貨幣を前に勘定を始めたものである。人好しの母も時には、「なんぼ何んでも、九十九老爺、それでは餘りひどかんべえしや。」なぞ云ふ事がある。

「そだツて、私は金貸が商賣で無いもん、これ位も貰ないでは、態々出向いた日傭にも合ひせんでがす。折角頼まさるからこそ貸して上げたんだ。」と低く笑つて取合はない。そして掻込むやうに錢を大きな皮財布へ仕舞ふ。若い裁縫教員で恨めしさうな顏してたのもあつた。

老爺の他に好かれる癖は、他の話を喜ぶ事であつた。特に新しい事、新しいものには根堀り、葉堀り、腑に落ちるまで聞質さなければ止まない。お蔭で母や私の狹い知識も老爺には役に立つ。狡い老爺の喰へないのと惡るく云ふ人でも、面と向つて不調法らしいその口から、つく〴〵感服されて見ると、決して惡るい心持はしない。誰にしても、聞くより聞かせたがるものだ。そして直ぐ「町の人は本當に仕合なもんだ、較べて見ると在鄕者ほど損な者は無い。」と、心から今日の世を賞立てるのが癖である。老爺に云はせると、父も、母も、自分も、皆偉い仕合な、福德の人なのである。手もなく我々は、小さな粉りと滿足をこの老爺に充たされて居たのだ。で、氣難しい父ですら、老爺を相手には飛んだ寛いだ樣子も見せ面倒も厭はず色々の話をして聞かせて居る。特に私は大の老爺信仰で、來さいすれば腰つ骨に掻絡まつて些つとも離れない。綿の厚い布子にムク〳〵と膨れて窮屈さうに木尻に長つてる風は、妙に心强くもある。頼もしくもある。煤拂ひや併搗きの時、來ては宰領顏されるのが家內中の見得ともなつた。たゞ何う云ふものか、妹のさちだけは老爺が嫌ひで、然う相手にはならなかつた。

門の前まで來ると、妹一人、袖塀のところに立つて居る。月の光に顏が蒼く見えた。

「九十九老爺、もう來たか。」と、先づ聞く。

「未だ來いせん。」とぢつと一つところ、足元を見詰めて居る。涙ぐんだ聲である。

「こんな所に一人今頃、何んして立つてる。」と、聞いても返事がない。「あゝ又叱られたんだな。」

「誰叱られッけな、惡るい事ないもの。」

それ限り、妹は默つた。私も默つた。勝手口にはボンヤリ灯は射してるが、森として、話聲も無い。父の咳嗽すら聞えない。門前の繞林は眞黑く重茂つて、葉裏返しの風もない、

月光の中から急に蔭へ入ると、冷々と夜氣が肌へ觸るのが知れる。ちろ〳〵と地虫が鳴出した。

暫く經つと、妹は窃つと門をあけた。先へ入る。

「お兄さん」と、後から小さな聲である。「屋敷の中で、大番大きい樹切ると、そこの家さ病人が出るんだとね。」

「然うかな、お母さん云つたか。」

「旦那つて云ふから、家だら屹度お父さんだらうね。」

私はそれを言破る氣も無つた。

妹は又云ふ。私最少し外に居ッから貴方、早く返事を持つて行かんせ。お父さん待つて居したぞ。」

私は勝手口から入つた。廣い臺所の爐傍に母が一人ボンヤリ俛れて居た。窃つとその背後を拔けて奥へ行くと、机に凭掛つて何か書き物して居た父は、鋭い目付で口上の返事を聞き、そして、「今夜は早く寢るんだ。」と云ふ。ランプが明る過ぎたゝめか、座敷が妙に廣く見えた。

暗い茶の間に出て臺所へ來ると、母はカタコト、膳拵へして居た。

三

些と早いが、蚊帳へ入つた、後れてさちも寢る。顏は見合つて居るが、默つて居た、さつきお茶を命じた限り、父は何時までも讀書してる樣子、何の音も無い。時々コン〳〵と乾咳が天井へ響く。母も默つて爐傍に坐つて居た。さちは何度も〳〵寢返りばかりして居た。

「九十九老爺は何故來ないんだらう。」と私は小聲で妹の目を見た。

「何故だかね。」

「お父さんは何んで憤つてるんだ。俺の居ない時、お母さん叱られたのか。」

「いゝえ憤つてなぞ居いせん。」

「そんだつて憤つたやうな顏付だつたもの、口上云つても返事も爲ない。」

「默つて最う寢すべわ。」と妹はコロリと向の方へ向いた。

十時打つた、女學校のベルが鳴る。母はランプの心を引込めて表へ出た。門の開く音もないが、其邊に凉んで居るのだらう。その內に私は眠つて了いた。

何時か知らない。偶と目を覺ますと、茶の間がまんどうに明るい、奥へ寢床を伸べる間、ランプをこちへ移したのだ。痩せた父が、座敷の眞中に突立つて居た。

「嘘を云ふな、顏付で知れる。」と、父は暗い方を睨んで居た。

母の聲は聞えなかつた。

「貴樣の目には俺と云ふ者が何う見える、情ない奴だ。」低いけれど鋭い聲である。

「何んでそんな事、私はそんな事思ひせんです。」と聲尻が顫えた。

「然うさ、然うに違ない。」と、今一度險しく云つて、「見ろこ

の身體を、この痩せた事。去年とは衰弱が全で違ふ。學校の梯子段を上るのに二度位は休む。羽織一枚さへ重くて苦になる。それに、貴樣達は何んだ。亭主が外へ出て苦しんでる間、家に長々と樂寢して居るだらう。」

母は默つて相手にならぬ。何時もこんな時は然うするに決めて居るのだ。父は何時迄も〳〵同じ事を繰返して、母の姿を追駈けて居た。

四

夜が明けた。一枚繰つた雨戸の間から、爽かな朝の空氣が颯と流れて、身熱を冷して行く。蚊帳の裾が動く。外へ出たのは妹であつた。母は片腕を投出して、枕を深く、スヤ〳〵眠つて居る。脂が顏に浮上つて、それが光つて見えた。

竊つと外へ出た。

外は未だ仄暗い。夜露にシットリ落付いて、草も木も動かぬ。踏む土に音が無い。身體中の肉が引締るやうで、手足の指がわれながら美しく見える。野良犬が一匹、桐の木の下からノソリと起きて、ノソ〳〵と行く。

板倉の蔭を廻つて裏畠へ出る、茄子畠である。强さうな濃い紫の葉、花、實、みな勢好く朝濕に甦つて居る。長いしほたれた玉蜀黍の葉からポトリ〳〵雫が落ちる。土の香が快く鼻へ來る。そこから三本ならんだ栗の樹が見える。中で一番太いのが丹波栗、これは東北の隅、お明神樣の祠の上へ被覆さつて居る。三抱の以上あつて、枝下が十幾尺とある。ぐるりは根深い唐竹籔で、刺草、鋸草、水引、バカなどの雜草が、人の背丈も見えないほど蔓延つて居る。

何か白いものと思つたのは、お明神樣のかげに妹が立つて居たのだ。白い浴衣が肌に袭れて居る。私の近寄るのも心付かず、沈つと梢を見上げて居る。手に古釘の五寸ばかりなのを持つて居る。

「何うしたんだ、それは。」

「これ？」と、妹は手のうちを見て居る。

「栗の木へ打付けて置くべか。」

妹は石を拾つて來た。自分は力を籠めて釘を根方へ打込んだ。鏽びた鐵が喰入る度に、ハラ〳〵と雫が身體へ落ちる。打つ、打つ、打つ。石の響は朝の靜寂を破つて、梢へと傳つて行く。

「これでよし。」と、二人は言合せたやうに栗の木を見上げた。

男五人

一

第一、おせんが氣に入りの唄。

男五人持ちや、五々二十五日、あとの五日は誰と寢よ、と、斯う云ふ。これをのべつ唄つてる。もう不斷、口措かずだ、よく〳〵口が馴ッこになつたものと見える。朝が、晩が、夜深け夜中でも、そんな事に遠慮は無い、帳場、湯殿、料理場、何所でも御座れ、例の高張附な調子で元氣好く唄つて居る。客膳をはこびながらも矢張りこれ、取分け大好きなは海を見晴らす四番前の廊下で、客の無い晩方なぞはキットそこの欄干にもたれて、足をバタ〳〵、往還を見下ろしながら、暗らくなるのも知らずに居る。「あれ、また殆めやがつた。」と通りすがりのものまでも然う云ふ位。

尤も、偶には他のはやりものなぞ唄ふ事はあるが、間拍子のないドス質の聲格ゆゑ、何うもつりが惡るい、譜がきれない。何を云つても「男五人」がこの女の身上である。一體この房州邊には餘り聞かぬ唄で、もと三州邊から流れて來た導引さんに敎つたのだと云ふ事だ。

晩方、いつもの廊下へ出て、おせんがそれをやる頃は、丁度、下のつばくろ爺さんが商賣から歸る刻限だ。毎年——もう三十年以上も——年の半方をこの界隈に送つて居て、秋口かろ翌春までの寒さ時を、つばくろ見たやうに、上總九十九里の方へ渡り稼きに出る蝙蝠傘屋の爺さんである。まことに頭の低い、謙語好きの、他には大層克明がられる爺さん、まずま話なぞさせては眞似手も無い程だ。商賣と云ふよりそれからそれと勝手口を喋り廻つて居るのだ。沖休の退屈しのぎに、「つばくろでも來れば可いに。」と漁師どもまで待構へて居る。些いとした儀式事にも明るく、料理氣もある所から、近所に調法がられて不幸や客事でもある時は、仕事を一日休んで、袴を穿いて大抵そこの調菜役に雇はれる。酒の上の惡い僻は泣上戸で、少し醉が廻つて來ると、聲を立てゝメソ〳〵やり出すので、緣起事には却つていやがられる六十、幾つになつて身寄身格も無く、全くの獨り者である。妙に外鰌を蹈む僻のある、乾からびた眇目の老人で、性他愛も無く眠りこけてる姿なぞ見ると、これでよく天秤にすがれたものと感心する。内々小錢を貯つて歩に廻して居ると云ふ評判もあるが、そんな樣子は素振にも見せず、いつも、「あゝ根つから詰らねえ、今日もみな食べッ了つた。」と、愚痴たら〳〵で歸つて來るのが、その僻。

爺さんは井戸端で、草鞋足を洗ひながら、二階を見上げて必ず話しかける。おせんとは不思議に性分が合ふと見えて、何時も爺さんが相談役にまはる。何日かおせんが口熱で難澁

した時なぞは、わざ〳〵三里の山越えして、平群里様のお水を頂いて來た程の親切がある。

「おせんさア、相變らず景氣だな、中濱まで聞えるぜ。」

「あいさ、景氣は氣のもンだわで。」

「苦勞が無さゝうだ。」

「當り前さ、毎日の事ッたもン。」

「あゝ俺等も一日で好い、そんな氣になつて見てえ、氣樂だッぺえにな。」

「また、お株だ。」

「本當の話だよ、斯う年寄つちゃ往生だ。樂は若い間に限つたもんだ。」と、時には溜息も吐く事もある。

「然うだらうかね。」

「然うとも。」

「然うかも知れないね。人間これで死場が苦勞になるやうぢや、もう上つたりだ。年は取りたくないものさ、時に、爺さんは幾つだッけね、五十？　六十？」

「あれだ——何時でもだ。」

爺さん頬を張まして、急に苦り切る。まるで小兒だ。もう何云つても返事もしない。俯向いてブツ〳〵云ひながら、濡足のまゝガタコトと自分の九番へ引込んで了ふ。ランプ部屋の直ぐ隣り、薄ッ暗らい六疊で、赤い疊がベト〳〵と足の裏に喰付く。一日々の目を見ず、連陰つゞきの日なぞには、壁濕が透して骨節が疼むと、爺さん始終こぼして居る。

おせんはクス〳〵笑ひながら、元氣よく又唄出す。

おせん、二十三、こゝ掛田屋の女中である。安房一番の札所、那古觀音さま裏坂下の商人宿で、お毘沙か本祭の外はいつも、腰高障子を閉切つてある家。井桁に三の字の置行燈が看板に出て居る。狹い裏庭先に直ぐ田圃つゞきになつて、松原越しに波靜かな内海が見える。はだか火のなつかしい今日この頃、濱の方から見ると、青々しい青田の中に一軒、凉しさうに乘出して見える。白鷺が觀音山に巣を持つ頃には、闇にもその眞白な姿を見せると云ふ。

恐しく日に焦けやすい女で、小半日も波の子堀りに出ると春先でも見違えるほど眞黑になつて歸つて來る。その上、暑がりの汗ッ搔きで、日にどの位生水をはかるか知れない。目の大きい、齒の大きい、そして顎の大きい女である。話するたび些と唇の上反る癖がある。デップリと總體が大々しい體で骨組み肉置き、何所から何所まで好く發育して居て、よく此邊の女子達に見るやうな見臭い胴長ではない、脛のかゝりも伸びてる。もとより食も良いが元氣も良い。その癖、酒もタントは行けないのに、何時も燥いで、笑つて、喋つて、そして唄つて一生を暮らす女である。素天氣な濱の輩には誠に恰好な相手で、町方の寄合事なぞ此家にある時は、先づ第一の利者にされて居る。

無知の船頭共まで、「おせんさアの氣で暮らしたい。」なぞ、よく云ふ。

生れ土地は矢張りこの那古だが、今では便り便られる程の身内も無い。尤も餘三と云ふ跛の弟が一人あつたが、四年前、十一の時、開帳に來たからくり師の後を追驅けて、姉の下駄を突ッ掛けたまゝ家を出た限り、今以つて歸つて來ない、音信も無い。上總で見かけたと云ふ者があつても、おせんは別に探さうともしなかつた。

こゝへ來るまで、おせんは野房の濱屋と云ふ飲屋に奉公して居た。漁場に是非なくてならない、髮の薄い枯れ聲の女共の大勢居る家である。そこでは可成鳴らした女で、「男五人」の通り名は館山柏崎あたりまで知られて居た。掛田屋へ來た後でも、白地の浴衣をかぶつて昔馴染の若い衆達が、時々、裏木戸から呼出しをかける。口笛を吹いたり、小歌を唄つたり、中には雨戸へ小石などあてるものもある。取分け目張の榮太さんと云ふが一番よく來た。船形では相應の網持ちである。手閑な晩なぞにはおせんも、

「待つてお出でよ、あの目張はドッサリ持つてるんだから、いたぶつて來て御馳走するよ。」と後を朋輩共に賴んで、帳場に內所で裏口から驅出し、何を何う騙すものか、必らず若干かの小遣錢を捲上げて來ると云つても、それを身慾にするたちの女では無い、つばくろ爺さんの室に朋輩を集めて、綺麗に大番振舞して了ふ。そんな風ゆゑ、野房に居ても何時までも身上りが付かない、三年の年期三十圓の前借金で往込み、年期だけ滿足に濟ましても借錢は幾らも減らなかつたのを、こゝの御亭が何所に見込を付けてか、これから忙しい夏場の客扱かひに、前借をついて連れて來たのだ。

こゝへ來た當座のおせんは、家中の餘され者であつた。特に朋輩の氣受けが惡るい、「あの人と一緒ぢや勤らない。」とは好く聞く小言である。一體、野房女と云へば一概に貶しめられる。兎に角に那古は町續き、商業の地である。掛田屋は商人旅ながらも他所者が相手。漁師や棒手振りを客にはしないのだ。自然女中共の氣位もザラの茶屋女よりは高い。その中に來ておせんの傍若無人さと云つたら無い。幅びろ白メリンスの腰帶を伊達らしう腰ッ下りに結んで、二挺櫛が御自慢、鬼灯をブウ〳〵鳴らしながら、何の話へでも罷出る、お客も主人もあつたもので無い。何所でもかまはず家中を搔廻して歩るく。皿殘りがあれば平氣でお客の前で頂いて了ふと云ふ風。給仕に出ても踵を揃へて坐つた事が無い。朋輩の苦情も出る筈だ。やれ客をねだつて西瓜の仕舞買ひをさしたの、帳場よりさきに湯へ入つたの、斷りなしに濱へ出たのと、それは〳〵煩さいほどである。その上、寄つて集つて蔭口利く、宛付は云ふ、果ては申合せの困らせ事までする。機嫌買ひの上さんなぞは、最ら肝癪筋を立つて、「おせんにも困る、野房に居て漁師の着襟を算へた氣で居やがる。家が違ふぞ、うちの商賣は旅屋だぞ。」なぞガミ〳〵嚙付くやうに云ふ。云はれても平氣なもの、よくせきの事で見て、頸を縮めて舌を吐出す位の者だ。朝も他より一番晩く起きて、咬楊子で湯殿の窓から早孤の客

を相手に無駄を喋つて居ると云ふ仕末。佛性の主人も持餘まして時々酷い折檻をする、鬢を引廻はされた事も一度二度では無い。でもおせんはケロリとしたもの、たゞの一度「私が惡るい。」の、「勘辨して。」のと云つて謝つた事がない。打たれるなら打たせて置いて涙一つ見せない。先方が呆れて手を引くまでは野太く構えて動くものでない。嘯しに動く女ぢやないのだ。その代り癇てやうによつては隨分他の二人前も働く。いやな顏一つせず身骨を粉にして他の分まで買取つて働くが、直ぐ氣が變れは、持つて居る箒を投出してその方に飛んで行く。兎に角、厄介な女である。

そのおせん、近頃男が出來た。長い事表二階に滯在して居る尾山と云ふ若い畫工で、おりんと云ふ前の女中とも評判のあつた男だ。髮の毛を長く分けた、小指の爪を長く延した男で、さほどにもない瓦斯大名の浴衣を、何時も見よげに着て居る、まことに物云ひの優しい、歩るくに兩の裾を蹈むやうにする癖がある。一日家に居てもコソ〳〵仕事をして居て、コトリとも音を立てない。

おせんの氣分なら、男が出來ても平氣なもの、誰に遠慮の事ではない、大膽に大びらに喋り廻る筈だ、と、誰も然う思ふ。また、今までは實際然うだつたのだ、何も盜み泥棒はしまいし、いろ事の御法度は未だ出ない位に考へて居たのだ。處が、今度といふ今度ばかりは、何う云ふものか甚く秘し隱して、誰一人に嗅付けさせまいとする。圖を打たれてさへ知らぬと通す氣で居るらしい。

それを一番に嗅付けたのはつばくろの爺さんだ。顏さへ見ると煩さくつけ廻して彼此れと探りを入れる。「へッ、へッ。」と厭な笑方をしながら妙に洗立てをする。初めの内はおせんも隱しかざんで居たが、餘りしつこいので、ツイそれを喋つて了つた。

つばくろは目を細くして、擽るやうに咽で笑つて、「へッへッ、おせんさアお樂みな、好い人に喰い付いて仕合せだよ。」

「なんのさ、馬鹿〳〵しい。」

「男前は好しよ、腕はあるしよ、些と荷が勝ち過ぎる、ギッシリ縋つて追離されねえ要慎するだね。」

「煩さい人だ、何うでも好からう。」

「へッへッへッ、だが、おせんさア、お前にや過ぎもンだぜ。あんな身分のある人と係合ふなア今度が初めてだッペ。拜んでるが好いだよ。」

「馬鹿云つてらアこんでも野房に居た時ア、海軍の士官と寢た事もあッぞ。」とそんな事を平氣で云つて居る。

二

盆の十三日——無論ふるい暦である。この日はこの家の習慣で、鷄著團子を佛へ供へ、泊合せの客へは卷纖料理を出す事になつて居る、接待酒も一本づゝはお膳につく、小供ども は袖のある新しい浴衣を着て、四人が四人、切籠と束線香を

さげて、もう先刻お寺へ貰火に出掛けた。臺所へは近所出入の鳴聚や娘共が大勢集つて、それは大業らしい菜料理が初まる。赤襷の娘どもは木鉢を取圍んで團子まるめ、女房だちは刻みものに忙しい。俎には響板までかつて庖丁の高鳴るのを見得にして居る。客へ出して、隣近所へくばつて、自分等もたらふく喰つて飲んで、それから二階座敷へ集つて、賑かにお念佛を始めるのである。つばくろ爺さんは生憎昨夜から風邪をひいて床の上にゴロ〳〵してたが、それでも時々は料理場へ來て、

「おせんさアは未だ歸らねえな何してるんだつぺい、もう六時なるのにさ。」と用ありさうに、先刻から何度も同じ事を聞いてる。おせんは今日半日の暇をもらつて買物ながら北條まで行つたのだが、今もつて歸つて來ないのである。

「おせんさア〳〵つて、終へねえ爺さんだ。いろ男ン所さでも行つたッぺよ。」と、おいちと云ふ、こまちやくれた赤ッ毛の小女が嘲り顏に云ふ。

「何んしに行つただ。」

「寢に行つたぞ。」と、ほかの一人。

皆がドッと囃立てる。そして、云合はせたやうに皆爺さんの方を見返へる。つばくろは唯ニヤリしたばかり、「然うかな、何しても氣揉ませる事ッた。」

「本當だよね、いろ男も斯う内外にあつたんぢや、爺さんになつても、嫉き切れなかつぺえよね。」

「そこがそれ、男五人だわでよ。」と、横から口を出す者もある。

「だけんど、燒くだらコンがりに賴むンだ、なア爺さん、お盆の火は焦すもんで無えつてから。」と、横町の氷屋の嚊である。

「大きに一言も無い。」と、爺さんは笑ひながらそこを立つて、今にもこぼれさうな大腹をして、袂で顏の汗を拭き〳〵竈前に油を炒つて居る上さんに話かけて見たが、上さんはロクな返事もしないので、又ブラ〳〵自分の部屋へ歸つて來る。

廊下の曲り角で繪師の尾山に出遇つた。湯上りを糊の强い白地に着換へて團扇を持つて、濱へ散歩に出る所らしい。

何時になくつばくろの方から聲かけて、

「お客樣、明日は愈々お立ちですつて、本當ですかい。」と、小腰をかゞめて、御丁寧なもの。

「えゝ直ぐ歸つて來ます。保田までですから。」と畫工は眼鏡ぐせを些いと直して、肌綺麗な素足に濱下駄を突つかける。

「それはまアお結構です。矢張お仕事の御都合で。」と小さな目の隅から疑深かさうに窃つと客の顏を見上げる。

「鴨川や天津の方、外房州は未だ遊歴した事がありませんからね。」

「ぢや先づ當分はお目にかゝられませんね、外房州の方はこれからが格別です。然しお羨しい御身分で、お客樣のやうに

然うして氣樂に旅をなすつたら、嘸お面白い事ばかりでせうて。」と、ニタ〳〵世辭笑をする。

「なアに。」とばかり、尾山は尊大らしう身を捩つて、芭蕉や龍舌や棕櫚やの植込の間を裏口から拔けて濱の方へ出て行く。ここらに見慣れぬ白絹の帶も輕るさうで見好い。

それから一時間は經つた。夕飯をすまして、爺さんはこれから蚊燻しにかゝるところ。戸障子をピッシャリ閉切つてムッとするほど部屋の中に汗をダク〳〵、目をつぶつて、蒼朮をドシ〳〵火鉢にふすべて居る。蛋より蠅より蚊が一番苦になるのだ。外はホンノリ暮れて、十三日の薄月は青葉の色を一しきり重黑く見せて居る。

「何うだらう、このまア暑苦しい事、よく我慢して居られたもんだ。」とおせんが入つて來た。そして、そこらの障子を無遠慮にサッサと開けひろげる。涼しい沖上げがサッと座敷へ流れ込んだ。

「最少しだ閉めて置かつせい。スッカリ追出して了ふから。」と、つばくろは煙の中に素ッ裸で坐つて居る。

「暑くつて〳〵」と、おせんはベタリ椽際へ坐る。踵を横に投出して塗骨の小扇をバサ〳〵動かし居る。北條で買つて來たのだらう。濃い潮染の派手な浴衣に、帶も何時になくキチンと胸高く結んで居る。頭も何卷とか云ふ束髮である。

暫くの間、鬼灯をブウ〳〵鳴らして居たが、「そして何んね、用ッてな。」

「大變な事が出來たんだ。俺アもう貴方の歸るのを待兼ねてた所だよ。」

「おとくさん所へ寄つて遊んで來たのさ。」

「何しろこゝじや工合が悪い、人に聞かれると面白く無え話だ。何所かお山へでも行つて話すべえかよ。」と、爺さんは小聲である。

「厭だアよ。もう草臥れて居るから。」

「出る方が好いにな、貴方に取つちゃ本當の大事な事ッたよ。」

「晩くまで遊んで來たから帳場が憤つてる、その位の事だつべえが。」

「そんな所ぢやない、大事な事ッたよ——尾山さんの事ッさ。」

「煩せえな、何が何うでも可かべえにさ、他の事なぞ。默つて見てるもんだよ。」

「だかさ、だかさ。」と、爺さんは目をパチクリ、些と吃調子になつて、「何も好き好んで口を出すのぢやないがね、詰り爲打ちがあまりひどい、貴方が可哀さうだから云ふんだ、悪く取られて合ふもんかな。」

「尾山さん、何うしたのさ。」と、髮をグイ〳〵搔上げる。

「今尾山さん居るかね。」と、爺さん要愼深かさうに二階を見上げる。

「居なかつた、船形へでも行つたッべよ。」

「那りや見かけによらないひどい人な、貴方を棄てる氣で居るぜ。」と、ヅキリ云つて、その底の光る小さな目で凝つとおせんを見戍つたもの。

「棄てるなら棄てるで好い、それが——。」

と、おせんは何うしたと云ふ顏付。

「あれ、それだもン。」と、齒痒さうに一膝乗出して、「その氣で居るから終へねえ、全體、おせんさアは明日尾山さんが立つ事ア知つて居つべがな。」

厭だアよ、この人ア。今朝荷物を會社へ賴んだり、切符を買つたり、みな俺が行つて來たんぢやないか。」

「でも貴方は荷物を保田上りに賴んで來たッべが。」

「あいさ保田の松ち宿屋へさ。」

「それが手だよ、何うして〳〵そこは東京者だもの、チャンと細工してるんだ。誰が二度とこゝへ歸つて來るもんか、貴方を騙して東京へ遁る氣に決つてるだよ。」

「何うしてね。」とおせんには何が何やらサッパリ飲み込めないのだ。

爺さんの云ふ所は斯うだ。今日の晝頃おせんの留守へ、汽船會社の人が來て、先程當人の尾山が直接濱へ行き、一旦保田行きで賴んだ荷物の荷札を直して、靈岸島上りにしたとの話を聞いた。何が何でも、然う一時間ばかりの間に氣の變る筈は無い。何うも變だと思ふから、先刻素知らぬ振して尋ねて見ると、何所までも保田から鴨川天津の方へ行く、直ぐ歸つて來ると云ひ張る。これで見ると今迄の關係上、この儀東京へ歸ると云つてはおせんが一苦情ならべて自分を離さないに相違ない、どの道面倒な事になる。それよりは女を騙して知らぬ顏で立ちさへすれば、それでイザゴザはないと肚を決めたに相違ない、と云ふ推量なのである。然うなつては身も蓋も無い、今夜の中に何とか一工夫をしたら好からうとの事である。

「ぢや何かね、私に追駈けられるとでも思ふんだらうか。」

「さア、そこどこは分らねえな、俺には他人だもン、お二人の仲にや又、どんな約束があるもんだか——。」と、つばくろはヘッヘッと厭な賤しい笑方をしてその僻狡るさうな目を離さない。

おせんはマジ〳〵爺さんを見て居た。

呼返しの鈴が消魂しく鳴る、何度も鳴る。そして甲走つた聲で上さんが、「おせん〳〵、何うさ行つてるだよ。おせん。」と、表二階を我鳴り散らすのが聞える。

「煩ッせえや、また初めやがつた、河豚め。」と、立上る風も無い。

爺さんは妙に聲音を潛めて、「どうで先はおせんさアを騙す氣で居るんだ、隨分旨い嬉しがらせも云つたらうよ。男はみな然うだ。斯う爲やうで女子を釣るそんな奴はそのまゝにして置くと地僻になる。ウンと取締めてひどい目に遇はせるが好いだよ、向ふぢや高が旅屋の飯盛風情だ。強い事を云つて

も數が知れてる。騙して遁げさへすればそれで好いと高を括つて居るんだ。東京へ歸りや舌を出して笑ふ積りで居る、騙されるものは馬鹿よ。」

「もう澤山だよ、で、何うすりや好いと云ふんだね。」

「そこどこは貴方の考一つよ。」と又聲を小さくする。

「私の考たッて何も無い。」

「先にや荷札一件に弱味もある事ッた。こちの出やうで何うもなる。少し強く捩込めば貴方の身上り位は譯のない話だッぺ。」

「金に轉ぶのか。」

「まアさ、そこは貴方の考一つよ。」

「厭だアよ〳〵、爺さんの二言目は金だ。そんなに金が難有いものかね。」

つばくろは目をパチクリさして、「金々ッて何も俺の利益にするんぢや無い、みんな、おせんさアの身體思ふからだよ。何なら俺アから話込んで見べえかね。」

「餘計なお世話だ、私は私の思ふやうにする、これから行つて思ふやうに取締めてやるから。」と氣早に立上る。

「だから困るぞ。威張つて見て何になるだ。こゝは下手に出ても金にする所だッぺえに、なアおせんさア。」

「厭だアよ。野郎、ウンと云ふほど弱らせてやるだよ。」と早や庭下駄を穿いておせんは出る。

「あれ、その氣だもン、折角向いて來た運を遁がすと云ふもんさ。」

「關はねえだよ、馬鹿々々しい。」とおせんはサッサと出て行く。

三

月は良いが、海は暗かつた。盆中は地引網も休み、濱には人ッ子一人居ない。中空に立迷ふ薄靄を漉して來る月光は、砂濱に落ちて、碎けて、霧のやうに打煙つて居る。好く見えるやうで、直ぐ先が見えない。丁度海はそこつて居て、黑い淵潟が遠く續いて居る。靜かな夜、月夜には波も低い。海の面、藍墨でも流したやうに仄暗い中を、眞白な波頭が、時どりして南から北へ、ザッと突走つて來る。

おせんは尾山を探して來たのだ。いつもの濱茶屋にも居ない、馬頭觀音にも居ない。船形へとは思ふがそこまで行くのも億劫。しばらく涼んで行つたら、大抵歸つて來て居るだらうと、おせんは浪際に下駄を脱いで、そこに舫つてある網船の小縁に腰かけ、あてもなくボンヤリ海を眺めて居た。ドブリと汐先の寄せるたびに、船がゆれて、足先がチョイ〳〵と水に浸る。そしてオゾオンを含んだ、爽かな海氣は、汗ばんだ肌をスウと冷して、襟に、小脇に、言はれぬ好い心持である。裾を取られるのも知らずに居る。

遠く河名の方から、松明が二つ、靜かな夏の海を洹つて濱傳ひにやつて來る——河魚突の人達だらう。姿はハッキリし

ないが、聲は至つて近い。月が雲に入る毎に、松明の焔がパッと水に映つて淺い波に碎ける。

耐らなくなつて、おせんは肌をグットくつろげて、蹋まつて長い髪を梳き始めた。船はグラ〳〵と大搖れに搖れ、偶もすれば體の中心を失ひさうになる。いつもと違つて、油氣がないだけ、涼しさは櫛の齒から肌に滲むやうである。ムッツリした肩付きが月に光を持つて、肩岬骨の白く動くのが見える。

河魚突は船近く來た。腰に巻をつけた屈竟の漁士が二人、踝ほどの淺い水を盪いで、右の手に魚扠、左に松明を水近く振翳し蹋んで獲物を探しながら來る。

「源吾さアだッぺ。」と、おせんが聲かける。

「おうよ、おせんさアか、何んしてるだね。」

「餘程突いたゞかね。」

「駄目だよ」と、矢張り俯向いて探してる。

「お盆の十三日だもン、今日の魚にや先祖の精靈樣が乘移つてるとよ。」

「然うかも知ンねえな、今夜は駄目だ、茂三、もう上つぺえかな。」

「然うすべえ。」

二人は松明を海に投棄てゝ、陸へ上り、サッサと家の方へ行かける。

「源吾さア、主ア家に居る尾山さんに遇はなかつたかね。」

「今夜は未だ遇はねえよ。」

「然うかね。」

二人の影は黑ろく試驗所の方へ消えて行く。海冷えがしたのだらう、靄が吹晴れて、月の光は晝のやうに明るくなつた。波も一層和いで、虫の聲は降るやうだ。今投げた松明が何時までも〳〵同じ泡の所に蕩ふて居る。

餘程經つてから、畫工の尾山はおせんを探しに來た。途中、漁士達に遇つてこゝに居ると聞いたのだと云ふ。土產にでもするのか、船形の貝細工を絹ハンケチに一杯さげて居る。

「尾山さん、貴方は私を騙したね、騙すなら騙すが好い。誰がそんな手に乘るもんか、些と氣を付るもんです。」

尾山は足を濡らすのが厭さに、濱際にしやがんで白扇をパチ〳〵さしては居るが、聲はやゝ慌てゝ居る。「何の事だらう、餘り突然で僕には分らないね。」

「分るも分らないもあるもんで、私は皆知つてますよ。保田から鴨川へ行つて直ぐ歸つて來るなんて、何も他を騙す事は無いさ。」

「誰が騙すもんか、それが本當ぢやないか。」

「ぢや、何故荷物を東京上りに直したのさ、白々しいのも大概にするもんさ。」

「お前、誰かにしやくられたね。」と忙しさうに眼鏡の目を瞬く。

「餘計なお世話、嘘つきめ。」

「あれ、僕は保田へも行くんだよ。怪しけりや一緒に來て見

ても好い。」

「行くさ、私は明日一緒に行くよ、かねての約束だもの。連れてかないだつて行く。」

「何うともするさ、人を疑るのも大抵といふ所がある。」と尾山はムッとした様子でグル〳〵其邊を歩いて居る。そして又。「然し斷つて置くが、行くとしても、僕は、お前の前借金なぞ一文も拂はないからね、誰が、他を疑つてそんな事する者の金まで拂つて耐るものか。好いかね。」

「憤つたのね。」と、おせんは鼻の先で笑つて、「大丈夫だよ、着物をスッカリ置いて行けば、身體位はぬけられるから。御心配は要りません。」

男は何とも云はない。俯向いて砂地を歩いて居る。脂を塗つた頭髪が時々キラリと光る。おせんは快さゝうにその態を凝つと見て居た。

遠くの沖合を、蟹船が一艘、艫を鳴らしながら通る。

到頭、根負けして男の方から口を切る。それは斯うである。成程惡るかつた。東京へ歸ると云つてもそれは些いと行くだけで、師匠の用事さへ濟めば、直ぐ又那古へ來る積で居るのだ。でも然う云つてはなにかに面倒が出來る。再び戻ればそれで事は濟む。と思つたのが僕が惡るかつた。腹も立たうが勘辨して、些いとだけ東京へ中歸りさしてくれ。決して棄ても忘れもせぬ、と男は言葉をつくして云ふのである。然し、おせんは承知しない。何所が何所まで一緒に行く。先生の名も所も知つて居るから、何なら後から追駈けてゞも行く。誰が何と云つても聞くものか。行かれて困るのは貴方の不運、私の知つた事でないと受付けない。果ては男も涙聲になつて頼んだが、何うしても駄目、一緒に行くと云張る。

終には尾山も決心した。眞蒼になつて唇をブル〳〵さして居る。汐がズッと退いたので、尾山は下駄のまゝ女の前に立寄り、近々と顔を見合はせて

「ぢや、頼まんから何うとも勝手にするさ。その代り、後で悔んでも駄目だよ。そつちが人困らせに出るなら、僕も覺悟がある。」

「あいさ、私は何うでも好いのさ。」とさげすむやうな目付で正面に尾山を見て、

「食はしてさへ貰へば、それで文句は無い。」

「歸してくれと頼むな。」と聲は低いが、鋭い。

「誰が頼むもんか、よく〳〵懲りるまでは喰付いて離れない積りなの。」

「それも好からうよ。」と、尾山は聲だけで笑つて、「東京と房州では違ふ。こんな離れ島見たいな所だからこそ、お前達も羽を伸してそんな高慢ちきな事を云つてるに好いんだ。房州ぢやおせんでも、東京へ行きァ何んだ。自分で恥しく恐しくなる時が來るぞ、その時、驚くな、喫驚するな、顛え上るな。」と、疊みかけて云ふ。

「最う好いよ、何うでも。貴方に負けて居て耐るものかね。」と、小兒のやうに兩手で船をグラ〳〵さして居る。

「馬鹿め、些と廣い所も見るが好い。」

「何うでも好いよ。」と、もう相手にならない。さも勝誇つた態度で、眞蒼な男の顔をシゲ〳〵と見込んで居た。

やがて、二人は家へ歸る。道々も男はやたらに激昂して、せか〳〵と急足になるかと思ふと、急に萎れて溜息を吐く。寄つて來て何か話かけたい様子も見える。おせんは後からその態を見て、默つてついて來る、

おせんだけ裏木戸へ廻つて、つばくろ爺さんの所へ行つて見ると、それでも爺さんは寢ないで待つて居た。二階のお念佛も最うすんだと見えて、ヒッソリと人氣がない、供養の切籠燈籠が其所此所にかゝつて居た。灯の點いてるもあれば、中には消えて了つたのもある。

おせんは蚊帳の枕元に坐つて、明日は何うあつても一緒に東京へ行く事を話して聞かせると、爺さんはムックリ起上つて、「そりや惡るい〳〵、そんな無勘定だから俺が心配して居るんだ。先へ行つて苦勞を見せられるに決つてる。」と云ふ。

「何うだつて好いだよ、負けて居られるもんか。何所までもいぢめ拔いて困らせてやるんだ。あのまァ、ビク〳〵して居る様子を見るが好いだで。意氣地がないたつて餘りだ。その又甲斐性なしの癖に、他を陷穽にかけやうとする所が面憎い」。

爺さんも押しては云はなかつたが、惡い顔して沈んで居た。所へ、亭主が眞赤になつて我鳴込んで來た。兎に角に客の座敷へ入るのに、尻も下ろさず、肌も入れない。手拭浴衣を着た、肥ッちょの大男だ。

「畜生！　今まで何所行つて來た。用ある、此所へ來い。」と、行成來て、グイとおせんの手をしよ引く。

「何んするのさ。」と、坐つたまゝだ。

「何んするも糞もない、來い、來い。」

「用があるだら行くよ、嚇したつて聞くものか。金さへ突けば俺の身體だでよ。」と立つてサッサと自分が先きに帳場へ行く。

つばくろは別に仲裁に出やうともしない、ランプの心をグッと引縮めて、臥ながら耳をヂッと勝手の方へ澄まして居た。

何う話がついたのか、翌朝の一番でおせんは東京へ立つ事になつた。亭主も朋輩共も、近所のものも相應に見送りはあつた。後ればせにつばくろも濱まで駈付けた。そして、おせんを片影に呼んで、これから先きの心得や、萬一男に棄てられた時の用意やら、クド〳〵と話して聞かせるのを、おせんは唯上の空で「あゝ〳〵。」と聞いて居た。

解が出る。

尾山は帽子の庇を深く下して、蝙蝠傘を力に胴の間にしやがんで居た。

おせんは荷物の間に立つて、何時までもハンカチを振つて居た。その間に蒸汽が館山から來て、お客も荷物もやがて黑塗の艙門へかくれて了つた。

船が大武の岬を曲つても、つばくろの爺さんはボンヤリ後を見後つて居た。睡が足りない所以か目も充血して、瞼が重垂れて居る。

「何時まで立つてるだよ。いろ女に遁げられたもんだから。」と、艀の船頭が後から背中を一つどやし付ける。爺さんはたゞ、「へッへッ。」と笑つて居た。

四

東京へ歸つた當座、先づ四五日旅屋住居として、その内に適當な家も見付け、色々の準備をしやうと云ふ約束。で、兎に角、着いたその晩は芝口のある旅屋に泊る事にした。三間間口のしもたや掛りの家で、見世に掛並べた看板さへ無ければ、これが旅屋かと怪まれさうなところ。軒前にはニス書きの煤けた軒ランプが出て居た。

通されたは四疊半、塗籠づくりの一海ッ暗い二階座敷である。床も棚もない、眞ッ四角な間。後に坪窓はあつても、そとが塞んでるので、風通しは素より日の目もロク〳〵通さない。鞄や行李や手廻りのものを壁際へ積重ねて、狹苦しい間に二人は席取る。ヒョロリと悪伸びした雌松を心に、二坪ばかりの小庭が距てゝ、開き前は直ぐ隣りの石藏——午後の照反しがさぞと思はれる。

「どッか最少し廣々としたとこは無いんでせうか。」と、おせんは着く早々、突立つたなり然う聞く。忙しい扇遣ひである。

「そりや有るとも、然し、何方しても懷と勘定合の上さ。」と、尾山は別にそれを苦に疾む模樣もない。

「なんぼ東京だッて、こんな暑苦しいとこばかりぢや無いでせう。」

「これ位の事で、今から然うへこたれるやうでは、この先き何うする積りだらう。困るね。」と、笑つて居る。

那古を乘出してから、尾山の樣子はスッカリ變つた。女の我儘を憎む風は些とも無い。何も無い前々通り、至つて親切に物優しい、痒い所へ手の達く介抱振りである。所詮、遁れぬ所と觀念したのだらうと、おせんは氣の毒にもなつたが、幾らか又拍子抜けの形もある。

風呂へ入つて、夕飯が出た。ムンと熱する白熱燈の下で、二人は足付の小さい塗膳をつき並らべた。瓦斯はシュウと音立てゝ、小さな羽蟲が煩さいほど周圍を飛ぶ。

給仕に出たは、目の細い、痩削けた、厭らしいほど銀杏返しの根を下げて結つた女——つくつては居るが三十は出てるだらう。この女、恐しいお喋りで、面白くも無い事をさも大業らしく笑立てる。二人を見物客と見くびつたものと見え、博覽會やら花火やら人形芝居の話を、獨りでペラ〳〵喋り立つて居る。尾山は田舍者と見られた面白さに、わざと房州辯

など使つて、詰らぬ愛嬌を賣つて居る。酒もはずんで女中のお酌で三本ほど飲んだ。終には如何はしい場所の噂なども始まつて女中は得意さうに說立てながら、それでも時々、「こんな事まで敎へて上げては、後で奥樣がどんなにか——ねえ、奥樣。」などと、擽つたいやうな目付しておせんを見返る。その樣子が如何にも小面憎い、他を馬鹿にして居る、些と言籠めてやらうとも思つたが、億劫なのでそれも舍した——言葉の不自由なのも幾らか氣になるので、それに氣の所以かも知れないが、東京へ來てからの尾山は急に元氣付き、言葉まで勢付いて居るやうだ。前の因循した人らしくも無い。

おせんは壁際に小さくなつて、御飯も輕るく二膳を舍し、あとは素湯ばかり呷つて、二人が面白さうに喋るのをボンヤリ聞惚れて居る。眩しいほど明るい瓦斯も何と無くいやだつた。

「何うした、今夜は馬鹿にお人柄ぢやないか。」女中が膳を退いた後で楊子をせゝりながら寢ころんで尾山は問ふ。

「私より貴方がはしやぐんです。」

「然うかね、矢張り東京の酒は旨い、自分の家へ歸つたやうな氣がするもの。」

「よく喋る女ね。いけ好かない。」とおせんは顏を顰めた。

「東京の女は皆愛嬌がある。お前も早くあゝならなくちや駄目だ。」

「厭な事ッた、何うで田舍者だもの。——頭が痛くなつた。」と、それでも周圍に氣兼しながら窃つと兩足を投出す。まだ足袋を穿いたまゝである。

寢るにも早い、時間があるから限座の夜見世をひやかしに行かうと尾山は云ふが、おせんは最う草臥れたから先きに伏せる事にした。尾山は團扇を持つて一人出掛ける。

おせんは蚊帳へ入つた。些つとの風も無い、ムシ〳〵といやに蒸立てる晩であつた。瓦斯は消したが枕元の置ランプが苦になつて眠られない、ボウッと頭に火照る。日のうち一杯に吸込んだ溫氣が夜具に籠つて、寢返りするたび氣味惡るく肌へさはる。今着たばかりの寢間着が、もう汗にじとつてヒタヒタと軀に粘り付き、虫にでもわたられるやうに痒さがあちこちと遁げ廻はる。蚤も可也煩さい。帶を解きたいとは思つたが、流石にそれだけは遠慮して、バサ〳〵と絶間なしに團扇を動かして居た。これまでは大抵寢座の上へ躾身で長々と寢て居たのだ。それに蚊帳までが獨苦しい木綿蚊帳なので、動くたびに髮の毛が觸つて心持が好くない。せめてもと、頭を擡げて闇の涼味を尋ねたが、空はドンヨリ低く曇つて、十四日と云ふに月も無い、夜の暗らさも常のやうでは無く、何だか底に光を裏んで居る、今に地震でも搖りさうな晩である。

昨日からの疲勞が出て、枕に就くと間も無くトロ〳〵と眠りかけたが、カアブに軋る雷車のギュウと重い地響きに目が覺めた。惡い方の齒に悚えていやな響である。夜が深けるほどます〳〵耳に立つ、頸筋や顏は脂が浮いて、觸る手がギタ

く〳〵する。そして、それから後ちと云ふものは何うしても眠られない。心がつかれて、所在ないほど手足はかつたるいのだが、枕ばかり熱つて目は段々冴えて來る。十時も聞いた、十一時も聞いた。おせんは幾度となく寢返りを打つてる。

「何うなさいましたらう。旦那樣はお晩いぢや御座いませんか。」と、例の女中、建端の惡るい急な梯子段を踏鳴らして樣子を尋ねに來て、蚊帳の外からペチヤ〳〵喋り始める。又博覽會と芝居の話だ。初めの間は好い加減にあしらつて居たが、終にはそれも煩さくなつて、眠つた振りして返辭もせず居た。

「ぢや、もう閉めますから、――好いでせう。」と、女中は念を付いて、建付の惡るい雨戸をガタゴトと鎖め始めた。一枚、一枚、暑苦しさが身に怵える。それで下りるかと思ふと、今度は中へ入つて枕元の邪魔ものや何かを片付ける。脱棄ての着物を疊むのは好いが、襟を些いと嗅いで顏をしかめたり。帶をランプ際に持出して裏と表を檢めたりして見て居る。起きて行つて引たくッてやりたい位であつた。

又睡入つたと見える。目を覺ますと、尾山が傍に寢て居る。何所かで飲足して來たものと見えて、ハア〳〵淺い呼吸遣ひで、流行唄を小聲に唄つて居た。

「好く睡るね。そとは賑かだよ。」と、頗るの上機嫌だ。

おせんは默つて目を冥つた。

「おい〳〵、眠つちやいやだよ。面白い話があるんだ。お起きよ。」と、肘を取つて搖起す。

「起きてますよ、何です。」

「憤つたね、はは〻〻、何もそんな憤るやうな話ぢやない。今日出た序だから、田澤ッて友人の家へ廻つて見たのさ。丁度、妻君も居てね、久し振りだッてんで、西洋料理を御馳走になつた。旨かつたよ、殆んど半年振りだからね。房州も好いが、喰べものぢや全く閉口した。」

「私は睡いから……。」と又寢返らうとすると、肩をスッカリ摑んで、

「まア、お聞きよ。何故然うなのさ、田澤の妻君がね――。」と、顏を近々と差寄せる。

「離して下さいッたら、暑いから、ほんとに自分で自分の軀のやうな氣がしない。」

「嘘だよ。嘘だよ。」と、低く笑つて、「何か憤つてるに違えない。晩く歸つて來たのが惡るいんだらう。」

「いゝえ。」

「へん、然うさ、決つてら。お止しよ、見ッともないから。これからもある事ッた。それよかね、今も田澤と相談したんだが――家を持つ事さ、何うも然う急に探しちや好い所が見付かるまいと云ふんだ。少し氣に入つた家だと高い事を云ふしね。矢張り當分は間借りの方が好からうッて然う云ふのだが、何うしたもんだらうね、何れにしても一家の主婦たるお前の意見次第による事だが。」

「私は何方でも好御座んす。」

「まア然う憤らないでさ眞面目な相談だよ。」

「誰も憤りやしません。暑いから最少し距れて居て下さい。」

「何うしたのさ、本當に。」と、氣遣しさうに顏をのしかけるやうにする。

「暑い、暑い。」と、突然大きな聲をして、蚊帳をスッと拔出して緣端へ出る。

「馬鹿だね、お前は。」と、男は後を見やつて、妙な低い笑ひ方をして居る。

おせんはその晩幾度となく目が覺めた。今まで一度も覺えのない事で、枕にさへ就けば翌朝までグッスリ寢込む癖なのに、今夜に限つて何うも眠られない。暑苦しいので、息の塞まる夢を見ては、キット目覺める、汗でグッショリになつて居る。尾山はと見ると、これは傍に小さい足をちぢめて、クン〳〵と眠つて居る。そして、時々目を覺ましては、おせんを見て小さくニッと笑つて、又スヤ〳〵と眠りつゞける。コトリと音させてもキッと目を覺ます。おせんはその度、男の腕を邪慳に突除けてやる。汗がランプにひかる所以か、男の顏が小さく皺んで見える。眼鏡ぐせに目鞠がはじけて居る。全るで疲れ果てて力ない人の寢姿だ。賤しく媚びるやうな笑方も氣になつてならぬ。撲られても蹴られても憤らぬ人の笑ひ方である。些いとの安心も油斷もなく、始終心をコセ付かせて居る人の笑ひ方である。終には顏を見ても腹が立つ。おせんは譯も無く向ッ腹を立てゝ、クルリと後向きになつたものだ。

翌日からは市中の見物。博覽會を見て、勸工場を見て、停車場を見て、公園や三越を見て、ニコライ堂も淺草も見た。芝居には行かないが、寄席なら落語と義太夫と二晩つゞけて行つた。すべて、田舍の人、女の目に喜ばれさうな所なら、端から〳〵見て行く。これは何、あれは何と親切に說明されながら、おせんはキョトンとして跡に喰ッ付いて行く。淺草の仲見世に行つた時、男は冗談顏に、

「おい、こゝで僕に突つ放されたらお前何んとする。」と、聞く。

「歸れますよ。獨りでも。」

「方角がつくか。」

「つきますとも。」と、笑ひながら口には云つたものゝ、おせんは不安さうな目色であつた。

初めの内は自分からせびつても、無理に男を誘出したものだが、段々氣不勝になつて、外に出るのを億劫がるやうになつた。「家を持つてからは減多に出られない、今の内に見物して置くさ。」と、男がすゝめ立てゝも、成可なら家に居るやうな工夫をして、餘り外へは出ない。そして一日も早く家を持ちたいと迫る、どんな所でも好いから貸間を探してくれと迫る。

「何うしたんだ、恐しく元氣が無いね。」と、男も氣にして時偶は尋ぬる。

「東京ッて所は厭な所ですね、ツク〳〵厭になつた。」
「もう房州に歸りたいか。」と、笑ふ。
「誰が房州になんか歸るもンで、お迷惑でも喰ッ付いて放れませんよ。」
「恐しい執念だ。」
「當り前でさ、今歸つたら貴方に負けた事になります。」
「ぢや好いさ。夫婦だもの一生一所に居るが好い。」
然う云ふ口の下から、おせんは又、早く家を持ちたいと迫る。男は何時も、「最少し〳〵。」と遁を張つて居た。
おせんはもとのおせんぢやない。日一日元氣が悄げて、顏の色も引立たぬ。いつもボンやり欝ぎ込んで居て、お喋りするのも大儀さう。第一、ひどくもの忘れするやうになつた。
「困るぜ、今からそんな事では、些と元氣を出してハキ〳〵しないか。例の男五人でも唄ふ氣分になるさ。」と引立てゝ見ても、「えゝ」と生返事ばかりして煮切らない風だ。
それでも、「もう里心がついたらう。房州が戀しくなつたと見えるね。」と冷かされる時だけは、妙に氣立つた。反抗もするが、それも何時まで續かう、相變らず浮かぬ顏でブラ〳〵して居た。これも畢竟、窮屈な旅屋住居をして居る所以と、尾山はこの頃になつて急に身を入れて貸家貸間を探し始めた、そんな事が五日ばかり續いた。
それは然しおせん自身にも分らない。日頃念願して居た東京へ來て、何が然う氣になつて氣が重いのかテンで當りが付かない。那古にも、船形にも然う心を引付けられる絆が殘つてやうとは思はぬ。たゞ東京がいやだ。この家もいやなら、そとに出て他に顏を見られるのもいやだ。群集や電車の中は猶いやだ。人の力の限りを盡して建連ねた壯大な建築や、榮華の極みを盡して寄集めた見物見世物を見ると妙に心が焦ついて、居ても立つても居られぬほど辛らい。それなら、世の榮を羨み嫉むのかと思ふに、必らずしも然うではない。他は他、自分は自分、と、チャンと境の埒は心にある。世の女心を擾し惑はすと聞く三越の陳列場に立つた時でも、紅、紫、黄、青、色さま〴〵の繪畫を見るとだけで、他に何の慾も起らなかつた。無歇の多い、見え透くやうなお世辭や、强いて曲繞つた、せゝこましい、煩瑣な應對振りや東京の暮らし向きも、こちらさへ相手にならねば別に苦になる筈もない。無論、それでは無い。
おせんは近頃になつて初めて身の行末と云ふ事を考へた。毎晩〳〵それが苦になる。何うなる身體だらうと云ふ事が妙に苦になり始めた。そして、それを考へる毎に妙に氣が鬱いで心細くなる。忘れて居た弟餘三の事まで氣にかゝる。無論、考へても〳〵、これはと思ふ結局も豫想も付かない事は解り切つて居る。それで居て、氣になつてならぬ。ひどい時には乳の下が重苦しくなつて、咽喉佛から胸先まで軟かな羽毛でスウとなでられるやうに氣がそゝる。こんな事は今まで覺えもない事で、賴まれてもこんな苦勞をした事はなかつ

た。
もし、强いて云はゞ、都會の威壓とでも云ふものか、おせんはこの忙しない、派手な、そして限りなく大きな都會に壓倒されたのだ。今まで自由自在に振動かして居た自分の手足も、こゝでは思うやうに動かない。窮つと周圍を見廻はす氣にもなる。歩るくに自分の足音が氣になる、右から、左から、前から後から自分の姿を他に見詰められると思ふと、己が身ながら思ふやうにはならない。それに宏壯な建物のうちに住んで、些の拔目もなく、縱横に飛廻り切つて廻はる人を見ると、如何にも自分の小さいのが顧られる、些いと表に出て、賣出し樂隊や電車の警鈴を聞いても、何となく後から追駈られるやうに氣が騷いでならぬ。歩るく足まで浮いて來る。賑かな所から、暗い闇へ段々追除けられるやうに心細くなるのだ。
「あゝ、矢張り來るんぢや無かつた。」と、口へは出さぬが然う思はぬ日がない。
着いて九日目、やつと貸間が見付つた、牛込の矢來と云ふ所で、女隱居の間を借りる事に決つた。兎に角一緒に來て見ろとの事ゆえ、行つてみると間は八疊に六疊の二つ、狹いながら些いとした庭もある。
隱居は六十近い、白痘のある、切髮の老女で、黑絽の被布を折目高く着て居た。活花の指南もして居るとの事だ。
「これは奥樣で、はい、お初めて御目に掛ります。御覽の通り私共は下女と二人暮しで、到つて無人で困ります。何かと御面倒になる事で御座います。」と、些と國訛はあるがハツキリした口上。
おせんは蒼い顏して頭を下げた。そして、歸途の電車の中でも、ボンヤリ何か考へ込んで居た樣子である。
諸道具の買求めや何かで、尾山は終日奔走して宿へ歸つて見ると、おせんは何日になく夜食膳に酒をあつらへて、獨りで飲んで居る、もう可也醉つてゐるらしい。
「何うしたんだ、この態は。」と、尾山が不興氣にそこへ坐る。
「何うしたもないさ、私は到頭貴方に負けた、惜しいけど仕方がない。」と、眼は醉はずに凝つと尾山を見詰める。
「何を突然に。」
「私は今日はスッカリ肚をきめました。とても貴方にや勝てない、今夜の夜航で房州へ歸ります。あとでさんざ馬鹿を笑ふが好いのさ。」
「借りた家は何うする。」
「何うするとも御勝手。こんな東京なんて所に、一時だつて居られるもんか、矢張り房州に限ります。」と、又がぶりと呷る。
「何うして又、急にそんな氣になつたのさ。歸ると云ふなら止めもしないが、その譯が分らんぢやないか。」
「あれは何時だつた、然うさ、東京へ來る前の晩、貴方斯う云

つたわ。で、こんな離れ島見たいな所だから羽を伸して高慢ちきな事も云ふが、東京へ行たら歸してくれと賴むな、と然う云つた。」

「云つた。したら、死ぬまで喰付いて居て見せると、お前は云つた。」

「その事なの、私も言つた口があるから意地にも面あてにも居通したいのだけど、もう駄目、もう〳〵こんなシチ煩さい、みゝつちい所に居るのはいや、負けるのは殘念だけど、もう歸ります。御緣があつたらだ。」

「けれども、僕も色々準備までしたのだから、せめて……。」

「もう〳〵〳〵、御免です。私はもう歸ります。」と、何うしても聞かない。

おせんは獨りで景氣付いて、女中やら番頭やらを集めて、汽船の出るまでの間を、賑かに飲んだり騷いだりして居たが、尾山のすゝめるまゝに、例の「男五人」の唄まで高々と唄つた。

愈々出發と云ふ間際になつた。尾山はもう一度、「然し折角出て來たんだ、酒を醒して今一度考直して見たら何うだ。」と、止めて見たが、おせんは勿論聞入れもしない。

店先まで送出して、尾山が、「では左樣なら。」と、名殘惜しさう。

「左樣なら。」とおせんは俥の上。

「掛田屋の皆へよろしく、つばくろにも。」

「左樣なら。」と、おせんの俥は勢よく靈岸島へ駈出す。

壁の花

一

「今度は僕の番か。好し話さう。」江刺は勢好く撥起きた。曇から横に寢轉んで、銘々の話を聞きながら、舌の痛くなるほど卷煙草をふかして居たのだ。

「然し、前以つて斷つて置くが、僕の話でも多少の嘘は混るだらうよ、話す時は最う嘘だ。たゞ、僕の話は山村君のやうに、寫生、雜木林、ミレイの話、袴の濡れ、獸、あゝ上品に手際好くは行かないかも知れない。」と冷え切つた酒を呷り付けつゝ、調弄ふやうな笑ひ振を見せる。

「何うでも好いよ。序樂の必要は無いぢやないか。」髮の毛の長く美しい山村は、スツカリ自分の話に醉ツたやうに、若々しい目の邊を未だポツと赤くして居た。

××會と眞面目な名目の下に毎月一所に集まる青年美術家文學者の一群が會合の役目を終えて後、茶とかヂンヂヤとか銘々勝手な飲料に寛いで、取纏の無い雜談に耽つた。そして、こんな場合に是非一度は話題となるべき筈の戀物語が始まつた。籤を引いて順序を決めたら、江刺は八人の中その第三番目に當つた。

月の無い寒い晩であつた。鋭い星光は暗く廣い湖上に煌いた。出來るだけ瓦斯を明るくさせて、火鉢の緣が焦げるほど火を盛り起した。江刺はこの席で一番の年嵩、顎の重いほど頬髯の厚い、額の遠慮なく拔け上つた、大顔の男である。まだ獨身、本當の年の三十よりは五ツも六ツも老けて、時には四十二三とも見られる事がある。

「然し、何所から話さう。些いと緒に困るがな。ねえ薄口、何處から話したもんだらう。」と俯向いて火鉢の灰に無駄書きして居る眉の沈んだ前額の屹と秀でた友人の一人に話掛けた。

「何處からでも好い、例の山の件でも好いだらう。」

「山の件？　ありや行かんよ。あれを話すと小說になつて了ふ。矢張山村君のお仲間入りする譯だ」

「そして、又今晩も僕がお引合ひに出されるのかね。」

「今晩は出しません。御安心なさい。ズツと前からの事を話すんだ。たゞこれだけは、承知して居て貰はないと話すに都合が惡い、僕ア諸君と違つて到つて晩熟の方だ。僕の身體は二十四の年まで清淨であつた。尤もその前から道樂はした。大抵の事は知つてる。嘗て二十二の年、亞米利加へ行く積りで、なけなしの田地を賣拂つて、それを旅費に東京まで飛出した事がある。その時、惡い友人に引張れて旅費の無くなるまで毎晩のやうに惡所へ通つた。二月東京に滯在する間に殆んど二三十度も通つたらう。然し、僕は決してその戒を破つた事がない。相手に出た僕の女が氣を揉んで、その友人に再三泣き付いたさうだ。友人は僕を冷評して、毎晩寢床の中

でお經でも讀んでるのかと笑つた事があつた、僕ァ內心得意だつたよ。それと、その前、田舍に居る時分、土地の或る藝妓に惚れた事がある、これでも可也費つた。且つ機も熟して居た。然し、これも自ら護る事は破れなかつた。亞米利加行を企てたのも詰りそれが動機だ。その女を自分が媒介して友人の細君とした。今でも親しく往來して居る。その女の爲めに、有りもせぬ財產を費ひ果すし、學校にも居られなくなつた。棄鉢になつて亞米利加行を企てたんだ。ねえ、溝口。溝口は好く知つて居る。」

「君は好く然う云ふね。」と溝口は蜜柑の汁を啜りながら氣の無い返事であつた。

「あれだ、諸君。これが溝口の癖なんだ。僕ァ實際溝口のこの癖に邂逅すと、カットするほど腹が立つんだ。せめて、嘘だとでも云つてくれると未だ我慢の爲ようもある。（好く然う云ふね。）實に張合の無い言葉だよ。」

「然し。君はそれを事實だと云ふぢやないか。」

「最う好いよ、默つて聞いてくれ。溝口とは僕ァ五年以來兄弟同樣に暮して居るが、未だ僕を理解して居ないんだからね。事實だと云ふから事實だらうと云ふんだ。尤も溝口だけぢやない。僕ァ他の戀物語を聞いても小說を讀んでも、その段取りがトン〳〵拍子にうまく搬ぶには驚いて居る。何うして他はあゝ自然に自分の感情を流露し得るのか不思議で耐らない。この頃もツルゲネーフの父と子の翻譯を讀んで、全然バザロフ黨になつた。自分の中の或る一部分を强く廓大して見せられるやうな氣がして、嬉しくッて耐らなかつたが、あの人がオディンツオーフ夫人に戀を打明ける所、あすこまで讀んで厭になつて本を投出して了つた。バザロフと僕は全く別の人だつた、もし今までの僕にして若しバザロフの友人であつたら、如何に平常渠を尊敬して居ようと、この一事を以つて渠を譏るね。僕ァ近頃、何故俺だけ一人斯うなんだらうかと心細いやうな氣がしてならない。」

江刺は新しい赤紙の袋を切つて卷烟草を喫して居る。逞しいと他に見られる骨太いガッシリした渠の顏にも、何處かシンミリと寂しい影が隈取つて見えた。多く渠の平常を知らぬ人々は、例の元氣らしい調子に較べて、力なく沈んだ聲を聞くのを不思議に思つた。

渠は又云出した。

「全體僕は他の弱點に乘じたがる男だ。特に他の戀には殘酷なほど同情の無い男だ。僕は自分の持論として、快樂には必らず木戸錢を拂ふべきもの、又、女の前に五分〳〵の交際するなと云つて居る。だから、木戸錢を拂はぬ素人との關係を否定もするし、惚れた惚れましたと暗い所で呟き合ふ戀を卑しんで來た。僕ァ未だこの年まで木戸錢を拂はぬ女に悅ばされた事が無い。それが僕唯一の誇だつた。溝口がある女學生と戀して、双方泣面立てゝ居た時なぞは、僕頭ごなしに罵倒して、男の權威を棄てたものだなぞと恥しめた。又高が女ぐ

らゐの事で、紛紜の渦中に入るを辭さぬ男を恥として見て來た。——然し、今にして思ふまでも無く、こりや僕の本心ぢやない。僕ァ實に弱い男なんだ。特に女にかけては弱過ぎるほど弱い男なんだ。」

「そりや、知つてるさ。だから僕ァいつもその積りで君に對して交際つて來た。」

と溝口は横合から口を入れた。

「默つて居てくれ給へ。君は今日までそれを云ひたくて〳〵耐らなかつたんだらう。君にそれを云はれると感情が煽られて、强いても嘘を云ふ事になる。懺悔は議すべからずだ。まア後を話さうよ。」と笑ひながら、新しく酒を命じた。

皆は冷える足先を火鉢に乘せたり、座蒲團を掛けたりして寢轉びながら聞いて居る。

江刺は厚い頰髯を掌で撫上げながら話し出した。

二

僕は極めて嚴格なる家庭に育つて、小兒の時から女友達と云ふ者を持つたことが無い。他の家の家庭に立入る事すら大なる恥辱と父は僕に敎えた。「男は玄關から眞直に主人の座敷へ通れ。茶の間の話聲なぞ耳にも入れるな。」と物心付く頃から固く申付けられた。

恥。話は違ふけれど、父の道德標準は恥と云ふ唯この一語に過ぎなかつた。善惡二つの中にも、恥づべき善事、恥づべき惡事をハッキリ區別した。損な方法を取つても、決して卑怯な活き方をするな。寧ろ恥の無き惡人となれと敎えられた。特に舌怠るい男女の情交なぞは噂を聞くさへ自ら辱しめるものとしてあつた。だから双六とか歌留多とか、少くとも若き男女に接觸の機會をつくるやうな遊び事は、如何なる場合にも、家の閾內に入れられた事がない。僕は小兒の時から可笑しいほど女と云ふものに油斷は無かつた。

偶然、餘所の歌留多會なぞに招かれて行く事があつても、僕は何時も壁の花として壁際に窘んで居たものだ。——花が可笑しければ棘でも好い。若い女のはしやいだ笑ひ聲窘なく頽れた坐り振り、白く目の前にチラ〳〵する手頭、それ等のものを强く感じながらも、頸が聞へて、眞直に見る事が出來ない。友達どもがその女どもと一緒になつて、平氣でキャッ〳〵騷いだり巫山戲たりするのを見ると、羨しいと云ふより、何うしてあゝなれるものかと、その不思議さに驚いて居た。その癖、何時も弱味は見せたくない。

「江刺さん、貴方もお入んなさいな。下手でも好いわ。私が組になつて上げるから。」と何時であつたか自分より五ッも年の多いたきのと云ふ宿屋の娘に話掛けられても、私は返事すら出來なかつた。カッと血が頭へ上つて、

「僕ァ嫌ひだ、誰がそんな事。」と眞蒼になつて睨み付けたものゝ、その二三日はそればかり氣になつて、夜寢床へ入つても心配して居た。

父が死んで東京の義兄の家に引取られて、そこから中學校へ通ふ頃は、幾かその拘束を免れたものゝ、矢張り女と云ふ者に油斷はなかつた。義兄とは話するが、女學校出の若い嫂とは打解けて話が出來ない。義兄の宿直の晩なぞは滅多に茶の間へも出なかつた。親切に世話されるのが嬉しい癖に出來るだけブッキラボウな態度に構えて居た。そして、話の序さへあれば何がなし始終女性の罵倒をして見たかつた。その頃初めて讀んだ創世紀から思付いて女總體を「肋骨〳〵。」と呼んで居た。義兄は笑つて聞いて居るけれど、嫂は何時もムキになつて反抗する。何時かなどは本當に泣いて憤つた。後は必らず後悔するのだが、その時は何んとなくその反抗されるのが面白いのだ。

終には嫂も煩さくなつたと見えて、「何んとでも被仰い。肋骨で結構です。今にその肋骨の事なぞで煩悶しないやうにして下さい。近頃の流行物ですから。」と口を閉ぢる。餘り爭はないやうになつた。

「馬鹿を云つてらア。煩悶する暇があつたら、僕アその肋骨の前に眞珠を救付けてやるさ。」と、實に幼稚な反語を得意さうに用いて居た。

然し、「何うでせうかね、平吉さん（僕の名）はこれで存外情熱家だから。」

と嫂は何氣なく笑ふのだが、それが僕には針のやうに鋭く觸る。そんな時の目付には、「知つて居ますよ。」と云ふ皮肉な文字が書いてあるやうで、顔を見返す勇氣も無くなつて了ふ。

その頃から僕はそろ〳〵自分の性格を疎み始めた。疎むと云ふより心細くなつた。この性癖の續く限りは僕の一生は寂寥に終りさうだ。僕一人取殘されるやうな氣かする。

然し、僕は間も無く自らの寂寥を慰める方法を見出した。それは外でも無い。

僕はこの頃から、唯の一日でも心の戀人を持たぬ日はなかつた。總ゆる女に惚れた。毎晩寢床へ入ると、その戀人を心から呼起して、美しい對象と笑つて話して、興じて、醉つて、そして、その優しき情緒に搖られながら睡付くのを樂しみとした。同じ人との中が十日も二十日も續く事もあれば、たゞ一日か二日で別の人を見出す事もあつた。可笑しい事には、それが必ずしも自分に近いものとか、又は近づき得るものと云ふのではない。名も知らぬ、途拍子の無い女が多かつた。中には雜誌の口繪で見た藝妓の寫眞もあつた。未だに名を記憶して居るが、阿波の德島で何屋の雪松といふのだ。その頃二十二三であつたから、今では最う好いお婆さんだらう。唯最う無性に遇ひたくて、懷かしくて、遠い三百里もある阿波の國、一生遇う時が無いと思ふと、耐らなく心が搖れて、夕方暗い庭の隅に咲く辛夷の花を見詰めて、無闇に泣いたものだ。學校用書の四國地圖に赤インキをベタ〳〵塗つたりした。

その他、今でも目をつぶると、數多い戀人の顔が有々と浮

んで來る。嘗て英國遊學の藩侯を出迎へに新橋までの鐵道馬車に乘合せた、田舍出らしい雀斑のある娘。これはその頃流行つた海老茶毛絲の腕貫を篏めて居た。遠足行軍の時、高崎の旅屋で見た色の黑い、目の大きな娘。初めて結つた島田髷を恥かしがつて遁げ廻つた友人の宿の養女。絹ハンケチを頸に卷いて籐の中から義太夫を語つた十二三の少女。總てそんなのが算し切れぬ程ある。

牛藏門外の中學校へ通ふ時分。英國公使館から九段坂までの間に必ず出遇ふ混血兒の娘があつた。これは中でも長く自分を引付けた。始終遇ふためにその顔の輪廓がハッキリ頭へ來る所以もあつたらう。泣いた顔、笑つた顔、樣々の樣子を描いて自から慰めた。この娘は仲間の學生間の評判で、態々後を褪けて見たり、身元を調べて見たりする者もあつたが、僕は唯、每朝その顔を見るだけに滿足して居た。それ以上を知りたいとも、求めたいとも思はなかつた。

私の戀とでも名付けやうか、僕はこの癖は長い間續いた。中學を出て國の醫學校へ通ふやうになつても矢張りそれが續いた。僕はこの戀人のある爲めに放縱な抑制なき「醫學生」の中にあつても、自分を潔く保つ事が出來たとさへ思ふ。現實の女は僕に痛い。誰に遠慮なく自在に動かし得る戀人は、この頭の中にしか居ないやうな氣がして居た。

醫者はもと〳〵僕の志望では無い。その頃から藝術を以つて世に立つ氣があつた。昔氣質の母や親戚と度々衝突した上大抵の不平家がするやうに、その頃から盛んに放蕩を始めた。放蕩の口實も立つし、又多少の財產も僕の名として家にあつた。

然し放蕩と云つても、僕は女の道樂は一度もした事が無い。茶屋小屋へ入つて馬鹿騒ぎや亂暴はするが、それ以上の暗い所へは一度も足を向けなかつた。

「江刺さんは亂暴をなさるが根に確然した所がある。」とか、「男らしいサッパリした方。」とか藝妓や女中どもに噂されるのが何よりの得意であつた。一言一句の末まで女には神經質である癖に、外には何處までも女性を侮蔑し度外視する態度を取つた。

母や兄弟どもは、僕の放蕩に手を餘して居ながらも、外に向つては僕の遺り口を私かに誇りとして居たらしかつた。

遊び屋で名高い同級生の一人は、ある時煩さく僕に仲間入をすゝめた。丁度酒の席であつたゆゑ、僕は苦い酒を飽迄飲んで、泥醉を裝ふた。俥に乘せられたのも、俥夫がある町の方に飛出したのも、總て承知で居ながら僕はグッタリ俥に凭れ掛つて、空鼾まで搔いた。

何うせ先方は節操を金に易える女。恥を恥としない事は分り切つて居た。摑まれる、抱かれる、……總て平常の事として怪まれないのだ。自然の成行にさへ任せて居れば好いと、

心に高を括つて居ても、胸は用捨なく跳つて呼吸が熱くなつた。

僕の相手に擇ばれた女は、顏の蒼い目の吊し上つた、痩せた女であつた。容色は惡るくは無いが、癇癪の强さうな鋭い顏であつた。僕は一目見るなり、こりや不可ないと思つた。顏立はなつて居ないが、友人の所に出た愚鈍さうに惚けて、眉毛の飛放れた女、せめてあんなのでもあれば と思つて居た。

一人と一人とになつた時、僕は女の顏を見る事は出來なかつた。制服を着たまゝ寢た振りして蒲團の中に打仆れて居たが、火鉢に凭れて落付拂つて煙草をふかして居る女の險さうな顏が、僕には痛く〳〵感じられる。樟腦氣の强い白粉垢が蒲團に滲込んで居て、それが頭の底まで不快に傳はるやうだ。

女はやがて出て行つた。僕はホッと息を吐いて、窮窟に組んだ双腕を解いて居るところへ女は又入つて來た。そして睡つた振りをして居る枕元へベッタリ坐つて、僕にも煙草を喫めと云ふ。返事もしなかつた。

「まア厭だよ、たぬきなどして。」と女は響の强い聲で云つた。僕はその聲を聞いて、背中から水でも浴びせられたやうに感じた。ムックリ起きて女を突倒してやつた。

「何を云ふ、貴樣は何んだ。」と眞蒼になつて顫えながらそこを飛出した。外の冷たい空氣にあたつて、初めて自分の身體を見出した。

「前置きがいやに長くなつた。御愈屈樣。その後はなる可く端折つて話さう。」

と江刺は皆の顏を見廻はした。話する人の懸念はこの逞しい人の顏にも見られた。然し幸に聞倦んだ顏も無かつた。

「君はその調子で最後まで話しする事が出來るかね。」と溝口は又口を入れた。

「何うだか、まア聞いてくれ給へ。」と江刺は話出した。

暗い湖の上を渡つて賑かな聲が聞えて來た。

前に話した田舍藝妓と云ふのは、それから間も無く起つた出來事だ。僕アこの人に就いては餘り話すまい。今は現に親友の細君となつて居る。

この時ばかりは友人等も僕の家族も、僕が女に溺れたものと見て居た。伯父なども目に餘して、「それほど氣に入つたものなら家へ入れろ。」とまで云つたが、僕には決してそんな氣は無かつた。何か物足りない氣はありながら一足前へ踏出す勇氣が無い。唯懊惱しながらその女の周圍をグル〳〵廻つて居るだけである。そして二三ヶ月をそんな事に送つて居る中に、親友の某は既にその女と相思の間に落ちて居る事を知つた。

然し、僕には大した悶えは無かつた、初めから自分のもの

とは思はぬものが、偶々親友の手に零れ落ちたゞけである。或る苦痛からやつと免れ出たやうな氣もした。僕は喜んで二人の間を取持ち、親友の家へ入れる事までの周旋して、そして自分は學校を廢めて、亞米利加行きを企てたのであつた。

打明けた話、僕は然うまでしても、その人と全く無關係にはなりたくなかつた。全く路傍の人に相終るよりは、せめて親友の妻としてでも、この感情の墓場を保存して置きたかつたのだ。

亞米利加行きとても然うだ。今から冷靜に考へても、僕はその時眞に行く氣は無かつたらしい。何がなし、斯う傷しい悲慘な自分の姿をその人の前に見せて、悲しい印象を彫り付けて置きたいと思つたらしい。その證據には愈々國を出發する朝——六月の糠雨が若葉にシト〳〵降つて居た——年老いた祖母と母とは傘も翳さずに門前に立て、何時までも〳〵自分の姿を見送つて居たけれど、僕は別に悲しいとも何んとも思つて居なかつた。停車場に立つ間も、汽車に乘つてからでも、その人が窃つと家を拔出して、お高祖頭巾でも被つて、餘所ながらでもこの悲しい旅立ちを見送りに來ては居ないかと、そればかり探して居た。

「私のやうな者の爲めに、大事な貴方の一生を……。」と、涙含んだ聲が聞きたかつた。汽車が動き出した時は、僕は何んだか騙されたやうな氣がした。女が急に憎くなつた。

斯う話して來ても君等には信じられまい。僕自身すら餘りに芝居染みて居るのに驚く。高が田舍藝妓で煩悶して、その優しい涙を見たいばかりに、——それも自分とは何んの結び付きもない——學校を棄て、目的を捨て、なけなしの財產まで棄てゝ了ふとは餘りに馬鹿げて居る。

然し事實は事實だ。謂ゆる信じられざる事實なんだ。戀ばかりではない、僕の一生は他に信じられざる事實の連續なんだ。溝口君、殘酷な言葉を以つて、僕のこの感情を傷けてくれ給ふなよ。

東京へ着いて見たが、僕には何も爲る事は無かつた。旅行券の、洋服のと義兄は切りに心配してくれるが、僕はボンヤリして寢て居た。親友とその情人との二人を宛名に、唯最う譯も無く悲しい、果敢ない文句の手紙ばかり毎日書いて居たそして豫定の汽船には態と乘り後れる、惡友の誘ふまゝに旅費を攫み出しては毎日毎晩惡所に通つた。

然し、この時も自らを堅固に持した事は前に述べた。

この頃、僕は初めて「彼女の戀」と題するゴルキイの短篇を某氏の翻譯で讀んだ。誰も關い手のない或る醜女が、目的も無い戀文を書いて自ら慰めると云ふ筋。僕は自分の創痕を酷く剔られるやうな氣がして、讀んで居る間も心が休なく顫えた。僕も目當のない戀人の戀に醉ふて一生を終る人かも知れない。

母が弟を連れて、僕を引戻しに上京した。そして、自身校長やら教授やらの間を泣き廻つて、無理に僕を醫學校へ復校

させた。

然し、相變らず放蕩は止まない、冷酒の旨味を覺えて、方々を飲み廻つた。その爲めに學校も亦退學し、私立中學の物理の教師をしたり、病院の代診をしたりした。

親友の某がある海濱に牛乳屋を初めた時なぞ、僕は半年以上もそこに同居して事業を助けた。その細君は前に云つた藝妓である。商買づくで友人が一日も半日も家を明ける事もあるが、當人も疑はず僕も疚しいとは思はないで、寂しい松原の家に細君と二人限りで留守居して居た。

四

これまでの話で、餘りに自分を說き過ぎた。然し、これを云はなければ、自分と云ふ者が他に解らないやうな氣がしてならない。外の事なら格別、僕は女性の問題で他人に忖度されるのを何よりの耻辱と思つて居る。何うせ事實を云んだ。あゝは云ふけれど內々斯うだらうなぞと忖度する、溝口流の冷酷は御免を蒙りたい。

處で僕の戀物語となる。

五年前、僕が二度目の上京は無論藝術修業のためであつた。然しその動機は何うにも斯うにも、國に居られぬ破目となつて國を飛び出したのだ。國では江刺と云へば相手にもされなかつた。その時の考では、三五年に電車の車掌でもして、眞面目にこの道を研究したいと思つた。現にその頃あつた淸島町の會社支部へ願書まで出した。今日から振り返つて見ると、存外平易な坦道を歩いて來たやうに思ふが、その間他の食客もする、筆耕もする、お伽噺の翻譯、訪問記者、隨分色々の苦勞を嘗めた。

丁度、ある雜誌社の翻譯物をして居る頃の事であつた。同鄕出の一青年を相手に、小日向の臺町に一軒の家を持つた。間數は三間、家賃が廉いだけに木柱の舊びた、暗い家であつた。それに昔建の家ゆゑ棚造りの押入が茶の間にも座敷にもあつて、箪笥や、鼠入らずの用意すら無い男世帶には、その凹みを集すに困つた。茶の間の方は崩黃カアテンの舊物を買つて來て下げ、座敷の方へは空な本箱やら、行李を置いて塞いだ。

左隣は細い露地を距てゝ大家の家、右隣も座敷の壁一重距てゝ小島といふ家である。門が別々に付いて居るゆゑ、初めは氣も付かなかつたが小島と僕の家とは鍵の手になつた同じ棟木で、それが僕の居る座敷の壁で隣の茶の間に續いて居る。外から見ると、その小島の家まで僕の家と一軒に見えるので、初めて來る友人なぞは大層廣い家に越したものだと賞めて居た。

引越して二三日目であつたらうと思ふ。僕はその押入のガランドウなのを氣にして、少し變だがこゝに額でも掛けて見やうかと思つた。丁度、樽底マドンナの大きな判畫があつた、古い折釘を探して壁に打込んで居ると、

「まア甚い。この砂は何うだらう。」と呟やく女の聲が直ぐ傍に聞えた。若い女の聲であつた。僕はハツとしたが直ぐ止めるのも變なものだから、關はずドシドシと打込んだ。

「何うかお靜かに願ひます。机の上が砂だらけです。」と若い女は少し聲を高くして云つた。

今更、默つて引込めもしない。態と强く打込んでやつた。

「隨分意地惡るね。爲やうがありやゝしない。」とプン〳〵怨りながら、故と手荒く机や本を片付ける音が聞えた。耳を澄して聞いて居たが、それ限り何の音も無い。僕は腋の窩に汗を搔いて居た。

隣の小島は親子二人の女暮しであつた。母親と云ふのは六十恰好の、上品らしい切り髮の年寄りである。親切氣のある人で、家の書生が馴れない手付で水仕事なぞして居るのを見ると、好く出て來て世話を見てくれる。賑やか好きの話の多い人で、僕とも直ぐ懇意になつた。岐阜あたりの相應な商人で、本鄕の美術學校へ通つて居る娘の監督ながら、東京へ來て居るのだと云ふ。

娘を學校へ出して終へば、別に用の無い身體である。獨り居るのも寂しいと見えて、家を明けッ放しの儘、裏木戶から廻つては話しに來る。寄席とか芝居とか、總てそんな賑やかな所が大好きらしいが、娘が嫌ひなので出掛けられないと始終零して居た。ひどく娘自慢の人で、何彼に付けて娘の事を吹聽する。岐阜の女學校も首席で通したとか、こちらの學校へ來ても學年毎に賞品を貰ふとか、英語は小兒の時から女宣教師に就いて學んだゞけに、立派に女學校教師ぐらゐ出來る實力はあるとか、年頃なるに扮裝振に關はず、今日まで香水一瓶買はせられた事がないとか、始終それを云つて居る。

それに、幾らか娘を恐れ憚る風も見えた。娘に叱れたとか娘に相談してとか云つて居た。

午後娘の歸つて來る時間になると、「最うお孃樣のお歸りなさる時分だ。そろ〳〵晩の支度でもして置きませう。」と笑ひながら歸つて行く。

「何より娘は喰物の好嫌ひがあつて、それにや本當に困るんです。腥いものは魚も肉も何も喰べません。鷄肉なら笹身の所をほんのポッチリ、毎日〳〵の事ですから、お物菜の心配ばかりも大變です。」と困り切つて居た。

僕等はこの年寄を小母さん〳〵と呼んで居た。

然し僕は未だその娘の後姿も見た事はない。書生に聞くと容色は好い方ぢやない、繪だつて二三枚見せられたが、小母さんが自慢するやうなものではないと話した。夕方なぞ大家の抱兒を借りて來て、唱歌を歌ひながら露地內をブラ〳〵して居る聲は好く聞えるが、僕は障子を開けて見るだけの勇氣もなかつた。笑聲やら、話振りやらで、自分で色々に想像して居た。

五

ある晩の事。

書生を遠くまで使に出して、雨戸を閉切つて座敷の中に新刊の小説なぞ讀んで居た。蟲のチロ〳〵と鳴く、靜かな初秋の夜であつた。

隣りの家から背伸でもするらしい大きな欠伸が聞こえた。娘に違ない。そして座敷に寢て居る母親に話掛ける言葉の中に、「お隣り。」と云ふ聲が混つて聞こえた。僕は何んと云ふ事なしに飛起きて、窃つと押入に蹋んで耳を濟ました。

「出掛けたらう、先刻そんな事を云つて居たから。」と云ふのは小母さんの聲である。

「文學者つて何んの文學者だらう。小說家なら私も行つて教へて貰はうかしら。」と何かトン〳〵叩きながら云つて居る。讀書に草臥れた肩を叩いて居るのだらう。

「あゝ行つて御覽、そりや氣の置けない、顏に似合はず優しい人だから。私を小母さん〳〵つて、何んでも相談するのさ。」

「酒を飲むのね。」

「あゝ飲むよ。然し外に道樂は無いやうだよ。自分でも女道樂は嫌だつて云つてる位だから。然うだらうよ、あんな氣分では。」小母さんは何時も云ふ自分の話を正直に信じて居る。

「隨分背は高いのね、何寸着るだらう。」獨言のやうに云つて居た。

「好い人さ。この頃の中に私を歌舞伎座へ連れて行くつて云つて居たつけ。」

「お母さんは、芝居へさへ連れて行かれれば、誰だつて好い人なんだから。」と大聲で笑つて居る。そして思出したやうに「あゝ最う寢やう。勉强も詰らなくなつた。」と、さも詰らなさゝうに云つて、押入れからドシンと寢道具を投出す音が聞えた。そして、母子は寢床の中で暫く話し合つて居たが、それは、僕とは關係の無い鄕里の事らしかつた。

僕はその晩寢苦しかつた。何時の間にか德子（その娘の名）は自分の新らしい戀人になつて居た。顏も姿も自分から作り上げて、話する事も笑ふ事も出來た。然し當の相手が壁一重隣りの部屋にスヤ〳〵眠つて居ると思ふと、流石に心が搖れ動いて、靜かに空想の快樂を味はふ暇が無い。何かなし强い力が追駈けて自分に薄つて居るやうに思ふ。

この慌しい、譯の分らぬ動搖は夜ばかりでは無い。晝間でも始終僕に付き纏つて居た。唯急がしい。大事な用事を控えて居るやうで、些いとの間も氣の落付く間が無い、それと共に、自分は他に隱して或る恥づべき事をして居ると氣が咎めてならない。考へて見れば、仔細もない事と自分でも知るけれど、何んとなく後護い、足の裏が痒いやうな心持である。

小母さんの顏を見てさへ氣が引ける。その癖、娘の話は聞きたい。それとなく話を導いて、德子の話題に出るやうにする。何氣ない、大膽な樣子で、此方も話する。相手は誰でも

好いから、德子、德子と其名を呼ぶだけも現實にして見ないでは氣が濟まぬ。

「これから、そろ〳〵溝口が役者に出るんだぜ。好いかね。」と江刺は話を切つた。

「あ、何うか御隨意に、何うせお引合に出される事は覺悟して居るんだから。」

「待ち給へ。あの方は出さないよ。然し、德子事件ぢや君は大事な役者ぢやないか。」

「あ、何うでも。」と相變らず寢轉んで居る。

江刺は笑ひ乍ら話し出した。

德子を初めて見た人は溝口なのだ。何時か遊びに來て居た時、德子の乾いだ笑聲が外に聞えた。

「美人が居るね。」と緣側へ出て行つて、垣根の外に首を伸して居た。僕はその思切つた態度が羨ましかつた。

「何んだ、あれか、あれなら好くこの下で見掛ける女だ。」と呟やきながら戻つて來た。

「僕を君と間違えたのかしら、慌てゝお辭儀して居たよ、いやに鼻の大きな女だね。」と笑つて居る。

僕ア何んだか、自分の顏を見詰められるやうな氣がした。品物を擇分けるやうに、無遠慮に女を擇り分け得る人は幸福だ。

間も無く僕も德子を見た。ある時、僕が門を出る拍子に、袴を穿いて向ふから來る女學生がある。直覺だ。慥かに德子に違ひないと思つた。先方は挨拶する氣であつたらう。僕の顏を見い〳〵近付いて來る。然し僕は頸筋を眞直にして、油斷なく、知らぬ顏して通り過ぎた。潛り戸をピシヤリと荒々しく閉めたので、冷りとした。

小母さんは來る度に德子の事を話して、繪畫の外に文學も遣りたいと思つて居る。暇があるなら教へてくれと始終云ふ。僕は何時までも會ひたくないと云つた。女は僕の性分に合はぬ。書いたものを見るぐらゐの事なら格別、來る事だけは御免を蒙りたいと、キツパリ斷つて了つた。小母さんは押しても云はなかつた。そして又、餘り德子の話をしなくなつた。

僕はその頃から、ウロ覺えの謠曲を唄ひ始めた。話するにも笑ふにも、なる可く大きな聲をするやうになつた。友人と話して居る中でも、男らしい態度の僕の主張は、なる可く高く、壁の隣りまで聞えるやうにした。そして又、その方に氣を配る事も多くなつた。

「小母さん寂しいな。又浪花節でも聞きに行かうか。」

僕は殆んど毎晩、壁越しに怒鳴つた。德子なぞは、目にも入らぬと云つた態度であつた。

「あい〳〵、今直ぐ行きます。」と小母さんは烟草入と眼鏡をハンケチに包んで、カタコトと暗い路地を出て來る。

こんな事が三月以上も續いた。その年が暮れて、正月の末徳子はヒョツクリ僕を尋ねて來た。

六

女は大人のやうに見えた。

「今日はお願ひがあつて來たんだから、何時ものやうに人臭くも無いつてやうな顔をせずに聞いて下さいね。」と徳子は馴々しく火鉢の傍へ寄る。袂に大きな燒焦げのある被布を着て横ざまに坐つた。

「貴女も小説を書きたいんですか。悪い事つた。お止しなさい。」と僕は女の壓力を押し除けるやうに、分別する暇も無く斯う強く云つた。

「私が小説を書く？　嘘だわ、誰が云つたの。」と徳子は目を丸くして笑つて居る。骨の高い、大きな顔である。その大きな目が然も誇つたやうな顔立に見せる。

「お母さんに聞いたさ。」僕も負けじとゾンザイに云ひ張つた。

「嘘よ。そんな譯ぢやないの。この四月學校を出ると他に仕事も無いから、容易しい翻譯ぐらゐならばして見たいと思つて居たゞけなの。それを間違えてるんでせう。輕卒しいんだから。」

「お伽噺でも譯すさ。」

「お伽噺なんか厭よ。私、ヂユーマかユーゴーのものなら譯して見たいの。直ぐ原稿を本屋で買つてくれるでせうか。」

「何うだらうね。」

「私、本當にお錢が欲しいんだがな、せめて自分一人を供給するだけでも好いから、お錢が欲しいな。でないと、父は卒業したら直ぐ田舍へ歸つて教師になれつて云ふんだもの。」と長い指でゴシ〳〵前髪の間を掻いて弱つて居る。

「繪を描いたら好だらう。折角其を稽古したんぢやないか。」

「厭目よ。私どもの繪なんか。理髪屋の看板にもなりやしない。よう、お願ひだから、何か翻譯か何かの仕事を見付けて下さい。繪も繪だけど、少し頭の仕事をして見たくなつたんだから。」と小兒のやうに、膝をバタ〳〵させて責立てる。

初めて會つて、初めて話する僕にも、女は平氣で無遠慮に話して居た。初めて僕を見た時はいやに氣取つて居る人と思つたとか、謠を唄はれる度に指を耳に蓋して讀書したとか、遠慮なくツケ〳〵云ふ。可笑しい事があれば男のやうな聲して笑つた。

そして僕が小母さんと一所に出歩るくのを見ては、「貴方は餘程物好きね。あんな年寄と歩いて、それで何が面白いの。」と怪しんで居た。「私なんか、頼まれたつて眞つ平だ。電車に乘せたり降したり、馬鹿〳〵しいぢやありませんか。」

「年寄にや性が無いから好い。」

「私なんかこれでも性がある方かしら。厭だね、未だDAS徳子さんッて譯にや行かないだらうか。」

「駄目だ。大有りさ。有り過ぎるほどあるぢやないか。」

「然うかしら。」と笑つては居るもの丶、顔の色には慥かにある動きのあつたのを僕も認めた。

その後徳子は殆んど毎日のやうに來る。來ては夜遲くまで話し込んで居る。無論小母さんは知つて居るが、別に怪しみもしない。最初に怪しんだのは溝口君だ。

「嘘を云ひ給へ。あんな事を云ふ。」と溝口はムツクリ起上つた。「僕等が何も知らん内に江刺が自分で、情人が出來た出來たつて吹聽し廻つたんだ。全く出來てるやうな事を云ひ振らして歩いたんだ。斯う見えて存外臆病者だから内々疚しかつたんだらうよ。」

「無論、僕ア疚しかつたね。然し何かなし斯う第三者に、僕にも戀人のある事を聞かせたいやうに思つたんだ。」

「然うだ。第三者が無ければ世間の戀は半分より少なくなるだらう。」と隅の方から一人が云つた。

「第三者は戀の裏書人だ。」と髪の毛の美しい山村が云ふ。

「然し、同じ裏書人でも江刺君の裏書人だけは實際閉口した。自分で笛を吹くのに、何故踊らないつて格なんだ。」と溝口は笑つて居る。

「進行〳〵。」と誰かゞ拍子してその後を促した。

臆病な爲めとも云はれやう、裏書きさせる爲めとも云はれやう。然し大根は信じたかつた爲めである。如何に要愼深く疑つても、又如何に細かく見ても、徳子が既に僕の手に陷ちて居る事は僕自信にも知られた。それが十日半月の事ではない。三四五と三月の間も同じく續いたのだ、何處から見ても疑ふ餘地は無いにも拘はらず、僕には何うしても渠の女の戀を信ずる事が出來ないのだ。

五月の卒業試驗が濟んで後と云ふもの、徳子は殆んど僕の家に常浸りと云つてよい。初めの中は翻譯とか何んとか口實を作つて來たが、終ひには寢る時より外は自分の家へ歸らなくなつた。先方も我の強い方ゆゑ言葉尻に乘られるやうな事は云はぬが、相互の心は相互に讀合つて居た。相互に氣が急がしくなつて、落付いて一つの事を話しては居られなくなる。話出して見ても、それも詰らない、これも詰らないと、直ぐ性急に搔拐つて棄てゝ了ふ。と云つて默つて居るのは猶苦しい。妙に兩方が恐れ出した。

或る晩、火鉢を對向ひに何か話込んで居たが、私は何んの氣もなく徳子の目を見詰めた。徳子も見た。兩人は云合せたやうにサツと眞赤になつた。僕は妙に苦しくなつて、目を外らさうと勉めて見るのだが、先に外らした方が疚しいやうな氣がして、凝つと我慢して居た。

「何んです。」と徳子は火のやうに眞赤になつて、今にも掴み掛かるやうに云つた。默つて居ると、

「何んです。何んです。」と聲が顫えて居るけれど、目は動かせない。

蓋はれた心か、それとも生れつきか知らぬが、僕は、「一生何人にも戀せられる男ではない。」と云ふ事を疑はなかつた。自分の周圍を如何に贔屓目に見廻はしても、異性を引付ける何かゞあるとは何うしても思はれぬ。この戀せられぬ自分を、無理にも戀せぬ自分としやうとして勉めて來た。

僕は何時も戀する甘味よりも、捨てられる時の苦味を嘗めまいとも勉めた。だから、僕は錢を以つて換え得る女に接する場合には、拂ふだけのものは拂ひ、買うだけのものを買ふより外に、一歩でもその埒を越えた事が無い。後に引續く言葉は無論の事、此方の名も先方の名も、相互に知らぬのが多い。行くから還るまで目を他に外して居て、先方の顏さへ全るで知らぬのがある。斯うして置くと、若し電車の中で乘合はせても、此方でさへ知らなければ恥かしい思ひをせずに濟むと喜んで居た。

この片意地な心は、自分の感情を蓋して了つて、互の戀を素直に受入れる事を許さなかつた。熟して足元に落ちた果實でも、界實は自分のもので無いと思つて居た。

七

僕は何うにかして、自分も戀せらるゝ人の一人と信じたくて耐らなかつた。その日〳〵の經過を喋り廻つて友人どもに煩さがられたのも、單に自分の喜悅を抑えきれぬためではない、寧ろ公平なる第三者の判斷を聞いて、その事實を確めたいのに過ぎなかつた。

でも、さア話しするとなると、知らず〳〵の間に嘘を云つて居る。後から氣が付くと、自分の話振りが、「それほど君に戀してるのか、それで、疑ふ餘地が何處にある。」と云ふか、又は、「その上自己を捨てる事は止し給へ。君は欺かれて居るんだ。」と云ふか、何方にしても、その場合望む通りの返事を云はせるやうに爲向けて居るのであつた。僕は第三者から何者も得たとは思はない。

然し、それに對する友人どもの意見は、戀されて居ても居ないでも、そんな事は何うでも好い、相互に動きの取れない破目になるまで事を擲ばせよ、解決は自らその後に付くものだと極めて造作もないやうに云ふ。K君などは僕を笑つて「馬鹿だ、劍の長さを探ぶ場合ぢやないよ、目を瞑つて一足蹈込むんだ。」と小兒の喧嘩でも嗾けるやうな事を云つて居た。

理屈ならば僕でも知つて居る。一足蹈込まれるのを待構えて居る。女の様子は僕にも明々見えて居る。然し、僕には駄目だ。

その時、僕に最も親切な友人は溝口君であつた。今も然うだが、この人は無闇に結論を急ぐ人ではない。「まア緩り考へてから。」と云ふ落付いた態度を見せて僕を頼もしがらせた。尤も同君もその頃、同じ問題に惱んで居たから、自分の爲めに僕の事件を考へてくれたのかも知れない。僕は始終行つて

溝口君の判斷を待つた。

「君、それ位ならば寧その事、表向に結婚を申込んだら何うだ。僕の見る所ぢや、德子より先の小母さんの方が惚込んで居るぜ。」と勸められた事もある。

「然うだな。」と云つたが、結婚となるとそれは又新しい問題である。僕はそれまで一度もそんな事を考へて見なかつた。

二三日はその事を考へた。

この儘直ぐ結婚するとすれば、餘りに事が呆氣無さ過ぎる。斷層に邂逅すやうなものだ。そして結婚となれば勢ひ先方の性格とか境遇とか事情とかそんな事も考へなければならぬ。それぢや詰らない。僕は毎晩寢床へ入つて、情人を心に描いた事はあるが人妻と云ふものを考へた事がない。考へた事が無いばかりで無い、考へて見ても根つから面白くない。先の夢は餘程面白いものであつた。

人を恐れ恐れる戀人のあひゞき、疑つて悶ゆる甘い涙、恨み、憎み、笑ひ、爭ひ……色彩された色は皆消えて了ふ。何う考へ直しても、夫婦關係は美しい夢にはならない。

溝口に會つてそれを話すと、溝口は持餘した目付で僕を見詰めた。

「ぢや、一體何うすれば好いと云ふんだ。」と却つて當惑して居たやうだ。

「僕はたゞ德子が戀して居ると云ふ事實を確かめればそれで好いんだ。」

「然し、そりや分つてるぢやないか。君自身でも然う云つて居るだらう。」

「然し、當人の口からハッキリ聞いた事はない。」

溝口は噴出して了つた。

「誰が君、女の方から私は貴方に戀しましたと云ふもんか。特に相手は君ぢやないか。警戒して居るよ。」

「でも僕はその言葉を直接に聞かない中は滿足出來ない。」

「困つたものだ。では眞正直に口說いて見るより外はない。然し、君はそんな馬鹿が出來るものかと云ふだらう。全體、餘り主我的過ぎるよ。此方の弱點は隱して先方の弱點ばかり摑まうとするんだ。」

「僕は何う云ふものか、この戀が圓滿に成立するとは思はれないんだ。現在は醉つても居やうが、將來を思ふと心が冷たくなるやうな氣がする。妙なんだよ。」

兎に角、溝口が女の意嚮を確める役を受取つた。僕はその日の午後、態と家を外して或る料理屋に飲みながら、溝口の返事を待つて居た。髮の毛の薄い厭なおたきが酌して居た。所へ溝口が結局君の爲めを思つて德子と君との間を絶交して來たと云ふ。

德子は俯向きもせず、理窟つぽい溝口の話を平氣らしく聞いて居たと云ふ。そして何んとも返事しない。突込んで聞くと、「私はそんな積りで江刺さんの所へ上つて居たのではない。」と何處までも言張つた。

「偖迄然うなら爲方がない。會へば會ふだけ江刺の情緒を刺戟するばかりです。僕が江刺に代つて絶交しやうぢやありませんか。」と溝口が激しく責めると、「それでも爲方がありません。」と女は云つた。

そして、溝口はその遣り口を僕に對する好意と思つて居る。好意だらう。然し、僕がその冷かなる好意に從ひ得ると思ふのは間違つて居る。それにしても判らないのは他人の心持である。

「好し、僕ア自身で德子に會つて話しやう。」と僕は奮ひ起つて溝口に云つた。

「ぢや、君は僕が中間に立つて、餘計な事をしたとでも思ふんだね。僕アこれでも君の爲めに隨分働いたと思ふんだがね。」と不平の色が有々とその顏に讀まれた。

「然うぢやない。君には僕が判らないんだ。」

「何故だらう。不常主張する君自身は、相手の憫みに訴へて、女を捕える事を恥辱として居たんぢやないか、だから僕は君の權威に關する事は一言も利かなかつた。」と云つて憤る。

僕はこの半年以上の間、情緒を煽られ、悶えつ若しみつした事を、友人の親切でこのまゝ別れて了ふのは餘りに呆氣なさ過ぎる。同じ別れるにしても、僕の考へて居た方法は最少し複雜で最少し色彩の濃いものであつた。

これでは、路傍の人の別れやうではないか。女の胸に何んの印象が殘つた。

八

その翌日は、流石に德子も遊びに來なかつた。小母さんに樣子を聞くと、昨夜から頭が痛いと云つて居て、今日は鉢卷して讀書して居るさうだ。

「あの人にも困つて了ふわ、學校が濟んで用がないものだから、終日ブリ〳〵して私ばかり苛めて居るの。お父樣が今度國から出て見えたら、何んとかしなきアなりますまいよ。」と云つて居る。

「何う出來るものかね、あんな我儘ものを。」と笑ふと、

「本當に困つたお孃樣です。」と小母さんは笑つて了ふ。

小母さんは德子のこの頃を見て、未だ東京で學問を爲上げたい、田舍教師に行きたくないばかりの我儘と見て居る。續いては又仕事の口を探して吳れと頼むのだ。「何しろあの人は初め國を出る時から、下田歌子さんになる氣で國を出たのだから、減多な事では國へ歸る氣なぞありません。」とも付加へた。

斯う云ふ場合は、何時も父親の贊成者になる。小母さんの前でも德子の前でも、始終教師説を主張して、女學者を罵るのであつた。德子は口惜しがつて、

「もう聞かない、最う聞かない。」と好く耳に蓋したものだ。僕は然うせずに居られなかつた。

怵切れなかつたと見えて、午後德子は庭口の木戸から入つて來た。緣側に腰掛けても默つて居る。煩さく目を瞬いて居るのは激して居る時の渠女の癖である。

僕は奥底の無い大聲で、「何うだ昨日は弱つたらう。」と先方の云出さない中に笑つて掛つた。

德子はチラと僕を見た。そして、

「弱つたわ、私。一番困るのね、あゝ云ふ人には。」とこれも強いて笑つて居る。

「あれでも親切なんだ。」

「然うでせうね。」

その話はこれ限りになつた。そして、相互に昨日の事なぞ忘れて了つたやうに、笑つたり語つたり、常の如く半日を話して暮した。

と思ふと、僕はこの晩ひどく德子を叱り付けて、泣かして歸した。別にこれと云ふ問題はないが、話し話して居る中に何かなし突掛つて見たくなつた。撓ふものなら何の位まで撓ふかも驗して見たかつた。初めはたゞ例の如く渠の學問說を否定して居たが、段々聲が激して來て、女性通有の總ゆる弱點を剔り出して渠を責め立てた。自分ながら物狂はしいほど激しく叱り付けた。德子は初めの間こそ反抗も辯解もして居たが、終には眞蒼になつて顫えて憤つた。

「私は何も貴方に然うまで干涉される筈はありません。」と、吃となつた。

「干涉も何もあるものか。そんな女は見たくも無い。二度と來て下さるに及ばない。」と云ふ僕も呼吸が窘つてる。

「來ませんとも、誰が來るもんか。」と戸障子をガタビシさせて出て行つた。

間も無く僕も家を飛出した。そして久し振りで牛込のある料理屋へ飛込んだ。

こゝで話して置く事がある。後で出るものゆゑ話して置かねばならない。この家の女中風におつまと云ふのがある。髮の毛が濃いから老けて見えるが、本當の年は三十一とか云つた。容色は滿更でも無いが、脈に拈つた口を利くのと容態ぶるのが何より氣に喰はない。

度々行つてる中に、此女が僕に些い〳〵脈な樣子を見せるのが友達仲間の評判となつた。僕の座敷へ出て來る時には、必ず葡萄色の長繻絆を着て來るなぞ云ふ者もあつた。いやに僕を弟扱ひして、「こんなヤンチャさんに思入り撲られて見たい。」なぞと、醉ひさへすると僕に抱付いたりする。僕アその度、「婆ア婆ア。」と氣にも止めない風に見せて居るものゝ、撲られるほどこの女が氣に入らぬ。近頃はブツツリ足を切つて居た。

この場合僕がこの家に飛込み、多少でもこの女が僕の戀事件に關係あるとすると、諸君は餘りに話が小說過ぎると云ふだらう。然し、これが事實だから仕方がない。活きた世間は小說ほど秩序立つて原因結果の理法が明確でない場合が多

い。大詰の幕になつて、初めて主人公が飛出すなぞは間々ある例である。

驚き給ふな、僕はこの日懐に持合はせの金がないばかりで、この家に飛込んだのだ。

「婆ア、今日は金がないんだぞ。美しい女を見せてくれ。」とも元氣の好い僕になつて居た。

「厭ですよ、金が無いのが見得ですか。今晩は藝妓なぞ呼びません。婆アと對で飲みませう。」

「馬鹿を云へ。僕ア今日女と喧嘩して飛出して來たんだ。大に騒ぐよ。」

「あら、貴方でも女が出來ますかね。廢物はありませんね。」

「美人だよ、そして學者だ。見せてやりたいな。」

僕は唯陽氣な事ばかり云ふ。蠟燭のやうに始終心を摘取らないと心が自然と暗らくなる。僕は暗らい心を抱くに耐えがたき男である。その晩は賑かに飲んだ。そして醉つた。

その晩僕は眠れなかつた。僕は漳棚から卷紙を下して來て德子へ宛てる長い感想文めいた手紙を書掛けた。別に用事は無いのだ。唯何がなし書いて見たかつたのだ。でも半途にして筆を投出した。

九

毎日〳〵德子とは會つて居る。僕は又遣り切れなくなつて溝口に訴へた。溝口は要慣深い目付して僕を見詰て居たが、結局今一度話してくれやうと云ふ。然し、この前のやうな事があつては不可ぬゆゑ、僕の居る前で話さうと云ふのであつた。僕は承知した。

「然し理窟ぢや話は乾まい。手綱は短かいに限る。大抵僕が好い所まで話したら、君は女の手を握り給へ。然うでもせんぢや、ウンと云ふものでない。」と溝口は敎へた。

「宜しい。ぢや相圖に疊でも叩いてくれ給へ。」と僕は反返つて笑つた。

「だもの、君は。こんな場合でも眞面目にはなれないのかね。」と嘆息するらしい口振りであつた。

溝口は切りに反對したが、僕は白面で德子を見る勇氣は無かつた。その晩、書生をやつて德子を呼寄せた頃には、僕はもう可也醉つて居た。

溝口の女に云ふ口振りは話すと云ふより寧ろ說くと云ふ方であつた。坐り直して正面から德子を說き伏せやうとして居る。流石に德子は餉臺の陰に俯向いて、一言の言葉も無かつた。

その間が一時間以上もあつたらう。然し女はドチラともハツキリした事を云はない。涙含んで俯向いて居る。

僕は面倒臭くなつた。行也横合から出て女の手を握つた。その時何んと云つたか忘れたが、大方、「面倒臭い、最う別れませう。」と云ふやうな事であつたと思ふ。

すると、女は以前のまゝの姿勢で居ながら、溝口に見付けられないやうに僕の手をヂツと握り返した。熱いやうであつた。

德子の心持が判つた。そして……

「不可んよ。こゝに江刺の警句があるんです。それを話さないぢや判らない。」

と溝口は面白さうに口を入れた。

「あれか、あれは困る。」

「僕代つて話し爲やう。僕ア江刺の手を握つたのを見て、場を外して障子の外へ出た。すると、女も物に驚いたやうに立上つたもんです。

（あゝ、道德の無い國へ行きたい。）と斯う云ふ江刺の聲が聞えた。僕ア思はず噴出しさうになつた。振返つて見ると女は立つて江刺の肩へ手を置いて、顏をその胸に埋めて居た。」

「月はあつた晩だね。折々ハラ〳〵と雨が庇に來た。六月中旬の事だ。」と江刺は幾らか顏を赤くして、障子のガラス越しに暗い外を眺めて居た。

聞いて居る人々は足の冷えるので氷の消えたのに氣が付いた。又酒を始めやうと云出した人もある。

僕等二人はその晩遲くまで小雨の中を歩るき廻つた。然し二人とも多く語らなかつた。暗い夜であつた。

十

その後の事は多く云ふがほどの事もなからう。山村君も溝口君も、その他の諸君の話と少しも違つては居ない。「戀人のいそがしさ。」を僕も經驗した。

僕等はしめやかに物語つた。話しても話しても戀人の話は竭きるものでは無い。それも相互の感情を避けて、他愛も無い事に倦が來ない。夜はランプを細くして、緣側に腰掛け、初夏の涼を追ひながら話込んで居た。小母さんとて滿更その中を知らぬでもないらしいが、ついぞ二人の邪魔になつた事は無い。時々、「德子が遊びに來るやうになつてからは、芝居へも餘り連れて行かれなくなつた。」とそんな愚痴は聞いた。

樂しき日が續く中に、僕はこれまで知らぬ或る苦味を知つて來た。他が自分等を何う見るだらうと云ふ、これが一つ。然し僕は友人の間には少しの秘密も持たず、初からの經過を何人の前にも喋り立てゝ來たから、これは然しての苦痛と云ふ程でも無い。が他の一つの苦しさは、僕に取つて何より耐らぬ苦痛であつた。

僕の姿は女の前で何時も小さく見えた。少くとも段々女と同じ大さになつて行く。女の笑ふ時には僕も笑はなければならない。實際その時は一所になつて笑つて居る。女を相手に五分〳〵の話して居る事を自ら知るのは、何よりの苦痛又は恥辱のやうに思はれる。で、ある時は不意と女を叱り付けて

見たり、突のめして見たり、故と慘らしく出て見る。突然頭からビールを打掛けたりした。

德子は何時も、「本當にこの頃は邪慳になつたのね。」と云つて別に憤りもしない。憤らないのが又癪に觸つた。

殊に德子の云ふ說には一つでも同意したくない。多少の敎育はあると云つても高が女である。因襲的な、上品振つた、そして感情的の事を喜んで居る。僕は出來るだけの機會を作つては頭ごなしにその說を退けた。デューマを云ひユーゴーを云ふ時は、僕はたゞお話にもならぬと云つた顏して冷笑してやつた。

德子はこの頃不眠の氣味があると云つて、小母さんの許可を得て、夜深けて好く前の草原を散步した。無論僕も一所である。二人は暗い方〳〵と探して步るき廻る。欅の巨木の木下闇に二時間も三時間も話耽ける時があつた。

七月の頃には好くある、月はあつても霧の深い夜であつた。例の如く草原を散步して居ると、周圍は森と寢鎭まつて犬の吠えるのが通を越した向ふの高臺の闇から聞えた。

手を連いで步るき步いて居る中に、德子は偶と立停つた。

「江刺さん、詰らないぢやありませんか、詰らないわ、私。」と白い靄の中に蒼白い顏を見せた。

「戀ッてこんなもの。」と云ふ聲は顫を持つて居る。

「何故だね。」と常の調子で云ひながらも、女の目の光りを見る事が出來なかつた。

「私、こんなものぢや無いわ。」と女は物狂はしく僕に縋り付いた。荒い呼吸遣ひが聞える。

僕の足はガク〳〵と顫えた。

「厭だ。」と女は熱狂して、叩き付けるやうにその頰を僕の頰へ持つて來た。僕はその頰を外した。そして、女を振離して步るき出した。

女の姿は夜更けの濃い靄に埋もれて動かない。

僕は咳拂ひの注意を與へながら、家とは反對の方に坂を下りた。そして俥を牛込の料理屋へ走らせた。

十一

その晩は自分の寢床に明方まで睡らなかつた。初めて觸られた處女の嫩かい頰、窘つた呼吸遣ひ、眼の色、それ等が頭の中を激しく回轉する。ウト〳〵と夢になりかけては又ハッキリと見える。

「臆病者。」と心の底で叫んだ。

翌日、德子の樣子に變つた處が無い。例のやうに話して、例のやうに笑つて居る。矢張り夜は草原へ散步に出掛けた。窃つと手だけを握り合つて。德子の方から話出さないので苦しかつた。

ある時、何かの話の序から、女はこんな事を云つた。

「私は感情がカッと興奮して、自分を忘れて色々な事をして後からそれを考へると、居ても起つても居られないほど自分

が厭になるの。死んで了ひたいと思ふわ。」

「色々な事ッて？。」

「誰だッてあると思ふわ。色々なことが……。」と赤くなつた。

「それが僕にや判らないんだ。」

「隨分なのね。」と德子は僕を睨めて話を外した。

僕には物足りなかつた。何故今一足突込んで弱點を自分に摑せぬか。僕はその弱點を摑みたい。

女の弱點は僕の弱點である。僕は調子を變へて、相互の肉を尊重すべきを說いた。現に二人の知つて居る某が、某女學生と通じて、戀そのものよりは身體の始末に困り切つて居る例を引いて、さも恥づべき事、さも愚しい事のやうに說いた。自分等の戀こそ本當の戀であると誇つた。

女は恥入りながら、僕の說に首領いて聞いて居た。

女が默つて居るので張合が無い。少しは反抗するだらうと思つた。で、こんな事を付加へた。

「然し僕は違ふよ。僕ア生理的に異性を求める、だから、片手で君を戀して居ながらも、片手では始終惡所の女を摑んで居る僕ア戀だけしちや居られないんだ。」

と、蟠りの無い高聲に話して、机の抽斗から日記帳を出して見せた。それには、德子に對する感想を重に書いて、その隅に、「善らぬ家に泊る。」と所々に書いてあつた。無論德子は僕が時々家を明けるのを知つて居る。場合によりては、自分の潔白さを——僕の解する——證明するために、態と高々と自分の放蕩さを吹聽して居たものだ。何屋の誰と名を知つてるのもある。

で、德子は口癖のやうに、「でも、そんな所へ行くのだけは止して下さい、何んだか私まで侮蔑されるやうな氣がするわ。」と好く訴へる。

そんな時には態と笑つて、

「僕ア公々然遣つてるんだ。假令貴方が留めても、これだけは舍すもんか。」と然も自分の權利を遂行するやうに、又女なぞは眼中にも無いと云ふ態度を見せたものだ。

日記を讀終つて、德子は物云ひたげな眼を上げたが、僕の顏を見ると何も云はなかつた。そして小さく溜息を洩した。

僕は云顯はしがたき勝利を感じた。で、牛込のおつまの事を、尾鰭まで付けて若い美しい女のやうに、話して聞かせた。

「判らない人なのね。何う云ふ心持なんだらう。」と德子には判斷が付かない。

「今夜も行く筈になつて居るんだ。六時だ。行つて見やうかな。」と僕は揶揄ふやうに女の顏を見た。

「本當に行くの。」

「あゝ行くさ。僕アあゝ云つた女と話してるのが大好きなんだ。」

「然う。」と云つた限り、德子は默つて居た。

僕アその晩泥酔した。

立てば棟木に頭の閊へるやうな、煤ぶつて低い女髪結の二階である。下の間には甲斐性なしの亭主が、鼻の汗を袖口で拭き〳〵辻ビラの版下を書いて居る。

泥酔して居る僕を擔ぎ込んで、「本當に亂暴なんですよ。爲樣がないんです。」と亭主に挨拶した。

「あゝ、然うかい。」と亭主は筆規しを廻はしながら應揚な返事である。この男の癖なのだ。

「婆ア、俺ア睡くなつた。」と僕は蹌きながら立上つた。拔衣紋にベタリと膝を割つて坐つたおつまの後姿が、見るのも厭味らしかつた。

後生だから婆アだけは舍して下さいな。何んぼ何んでも氣が射すわ。」と長い煙管で烟草を吹つて居る。

「ぢや何んと云ふ。婆アだから婆アさ。御遠慮なさるなよ。」と僕はギシ〳〵搖れる二階へ上つた。

「萬事があれなんですからね、世話の燒けるッたらありません。」

「あゝ、あゝ。」と亭主は答へた。

僕はこの晩の光景を德子へ委しく話して聞かせやうと考へて寢て居た。

僕と德子の間は其後三月ほども續いた。又おつまとの間も同じ位に續いた。僕は德子の前で感ずる、或る苦痛と努力とを、この年の多い、見識なきおつまに依りて償はれた。おつまと一所に居る時だけは、厭な〳〵と思ひながらも、自分を辱しめ、又は抑える事なくて濟んだ。

心では德子を望みながらも、僕の足は多くおつまに向けられた。

御退屈樣。これで僕の戀物語は終りました。

「然し、何うしてその德子と云ふ女と分れたんです。それを話さないぢや話に結論が付かない。」と山村が斯う尋ねた。

「理屈も何も無いさ。德子は僕に戀を求めて居たんだ。戀は自然なる感情の流露によりてのみ永續するものだ。僕の如き不自然なる感情は長く人を結び付けるものぢやないさ。」と江刺は腹の底から寒むいやうな顏して笑つた。

「そして、おつまとは。」

「新しい代りが僕の方に出來たからさ。今では始終會ふがね、奴さんケロリとしたものだ。」

小春日

若い女が一人行く。塚田がその後をつけて行く。たゞ、これだけの話。

月、十月に入つて、初めての快晴。ドンヨリと日射の重い、物染みな鈍い光を持つ、人の顏が黃ばんで見える日だ。こんな日には却つて汗が髮際に滲み出るものだ。赭がゝつた町並は常より長く見え、そこにこゝに、煙草屋や葉茶屋の白暖簾が冷く白く目に立つ。無いと云つても矢張り微風はあると見える。

それは日曜日、午後の三時頃。「あゝ、メッキリ日が短かくなつたね。」とお店者の若いのさへ、怠けた欠伸の一つもして、年寄染みた、そんな事を云ふ日である。

娘はサッサと行く。塚田も負けじと步調をはやめる。苦しいには苦しい。何しろ先々月以來脚氣に罹つて、朝と晝は食パンで濟まして居る男なのだ。それは、何時もはなるべく道の眞中を選んで、ユックリと構えて、自分の足音を聞き濟すやうにして步るくのがこの男の癖なのに、今日は場合が違ふ。ソンナ悠長事では居られない。曲り角でも何時もの大廻りでは濟まない。チョコ〳〵と人の袖も搔潛つて急ぎたい位の心持で居る。娘は關口町の角を曲つて、通りを眞直に中里へ出て、矢來の通りを眞直に寺町の方へ出る積らしいが、場所も場所、時も時、うるさい人通りの無いのが、塚田には何より以つて嬉しい。

煙草を忘れて來た、と、塚田は途中で氣が付いた、生憎、財布も机の上に置いて來た。湯に行くつもりで家を出たのだもの、何の用意もあらう筈は無い。途中でこの娘に會つた。それは知つてる。そして、その後をつけて見ようと思つた。それも知つてる。たゞ、それだけの話である。なぜもなにゆゑもない。かと云つて、嘗てコンナ馬鹿らしい眞似をした覺えがあるでも無い。

塚田の日曜は斯う決めて居る。聊か兵士染みては居るが、先づ湯へ入つて、髯を剃つて、爪を切つて、手紙を書き、自分で茶を烙じて飲み、額緣の拭掃除をする位なもの、その他は平日の如く食べて、平日の如く寢て、平日の如く起きるだけの事だ。そして起きて見る時はもう日曜ぢやない、働き始めの月曜日になつて居る。一斤のパン、半分は食べて、半分は新聞紙に包んで、電車に乘つて、陸軍省へと出仕する。三度に一度、寄席やビヤホールに暇を潰す事があつても、それとて別に氣が進むと云ふ樣子も見え無い、閑過ぎて困るから位の所なのだ。

一體がこんな風である。そんな人に休日の喜ばれやう筈は無い。着飾せて見誇す美しい人があるぢやなし、訪ねて喜ばれる友人があるでも無い。朝から一日、默りこで暮らすのも仲

々傍で見るほど樂ではない。日が短かいと思ふと夜が長い。生欠伸ばかりして居るのゝ切ない事。——だから、塚田は日曜が大嫌ひ、星を割らせたら佛滅日に數へるかも知れない。

娘は何ものだか、塚田にはわから無い。遇つた時に一度、チラリ、横顔を見たのと、帶を氣にして二三度背後を振返つた時、幾らか輪郭を見たばかりだから、然う委しい事は云はれないが。何にしても惡いの見醜いのと云ふ方の女では無らしい。要するに何方でも好いやうなものゝ、まあ氣に入つた顏立として置きたい。紫紺がかつた銘仙ものを着た、小柄の娘だ。何うも町家の娘らしい。年はまア十九位のとこ。女には必らず歩るき癖があるものだが、この娘にもある。蓮葉らしう外輪を蹈んで、歩るく毎に駒下駄を輕るく土へ打ち付けるのがそれだ。高齒の足駄なら何うするだらう。然し娘々して好い形である。

矢來の交番前へ來るまでに、塚田は心の中で、娘は小間物屋か繪草紙屋か、何れにしても世辭商賣、子に遊戯の一つも仕込まうと云ふ家の娘と決めて了つた。名はお夏か、お京か、お朝と云つたのであれば好いと思つた。

そこに一軒、リボン屋がある。女子獨行者と云ふ嚴しい看板を上げて、五十恰好のみつちやの髯男が店番をして居る。簪や置物の、色々造花ものが、飾棚の中に出て居る。土佐繪の靈引きのやうに紅紫さま〳〵のリボンを棚引かせて、夜は眩しい花瓦斯の下に人の目を牽付けようと云ふ仕掛らしい。

娘はその前に立つた。ホンの些と、そして、又、歩き出した。

塚田もその前を通る時、チラとその方を見た。「一體、ドレが欲しいんだ。」と云ふ心持もしたので。すると、拭込んだ硝子に細長い痩せた自分が映つた。同時に直ぐ、帽子も被つて居ない事に氣が付く。

二三丁行くと、見窄しい時計屋がある。八角時計や柱時計を十二三もならべて、店の硝子障子に二割引の貼紙がしてある。

店前に同僚の岡村と云ふ、文書課の雇員が立つて居た。

「何所へ行きます。」と、岡村は兩手で塚田の肩を、押戻すやうに抑へる。

「そこまで、ツイそこまで。」と首を前に伸出す。

「散歩でせう。」

「まア、そんなもの。今日は急ぐから失敬する、些と遊びに來給へ。」と、身を援けようとする。

「神樂坂ですか。」

「ツイそこです。」

塚田は友人に別れて急ぎ出したが、五六歩行つた頃、偶と立停つて、

「岡村君」と呼かけて、「夜分は居ます、些とお出なさい。」

「難有う、行きますよ。」

「御馳走するよ。」と、些と高聲に云つてフンと鼻先で笑ふ。

そして、又セカ〳〵と歩調を早めた。

「景氣好さゝうだ。」と、蒼い顏の友人は、今一度、同僚のあとを見送つて、時計屋の店を覗き込んだ。

娘は二度ばかり、こちらを振向いた。恐しく派手に着飾つた貴婦人を乘せた、ゴム輪の俥の音もなくスウと擦違つたからである。鼻の高い、水照のした、金緣の眼鏡をかけた婦人。

「女はあれだから厭さ。」と、塚田は娘の方を見ながら口の中に呟いたものだ。俥が塚田とも擦違ふ拍子に價高い香料の匂を強く浴せかけて去つた。

娘は思ひ切りが付かぬと云つたやうに、今一度振返つて見た。そして凝つと見送る。塚田は自分の下駄を見た、衣服を見た、黑メリンスの平常帶、これも餘り新しくないのを見た。そして、自暴に指を頭髮に入れて、グシャ〳〵搔廻して、睨むやうな目付に娘を見据ゑた。無論、それは娘に知れる筈もないが。

横寺町へ曲る角、何とか云ふ呉服屋の前で、娘はそこに吊してある賣出しの冬物を長い間眺めて居る。立つて居る譯にも行かないので、塚田は已むを得ず、娘を通り越さなければならない事になつた。見ると、娘は吊してある縮珍らしい丸帶の端に、臆病らしくチョイと人差指の先きを觸つて見て居る。何れ何十何圓と云ふ代物なのだらう。

塚田はベッと唾を吐いて、足早にサッサと行き過ぐ。

「馬鹿な、こんな方まで來て了つた。」と、嘲み笑を洩らしながら、誇しう肩を聳かして居るものゝ、一丁と行かぬ間に二度、三度もツイ後を見る。そして娘が横寺町の方に折れたのを見ると、今度は急に後戻りして、追駈けるやうな急足で、その後をつけた。

曲つて二町ばかりの所で、娘に辛つと追つ付いた。やれ、安心と、歩調をゆるめて、急に苦になる襟元の汗を袂で拭ふ。

娘は曲つて、又曲つて、段々道幅の狹まる御殿の方へ行く。今までの道とも違つて人通りも少ないので、塚田も幾らか間隔を遠うめて、見えがくれに隨けて行く内に、路傍に車井戸のある四角に來て、ウッカリ娘の影を見失つた。然し、左も右も見通しの小路で、些いと隱れ場も無い。眞直の路を行つたのなら、來るに見えぬ筈は無い。と、云つて潛り門の明く音も聞かない。塚田は井戸の前を二度ばかり往復して居る。

丁度、そこの掛陰に屑屋が休んで居る。塚田は聲かけた。

「君、今こゝへ若い女が來ませんでしたか。」

「若い女さんですつて、生憎、氣が付きませんでしたね。」と屑屋は煙管筒で吸殼を叩いて云ふ。

「然うですか、何所へ行つたらう。」と塚田は斯う呟きながら、まだその邊をウロウロして居ると、直ぐ前の水口の戸が内から明いて、若い女、さきの娘が、ヒョイと顏を出した。そして、塚田を見てバッタリと戸を閉めた。大方、今云つた若い女と云ふ聲を聞付けてなのだらう。

塚田は眞赤になつた。でも、何氣ない風で曲り角までユッタリ行き、そこを曲ると共に、駈出すやうに、通りの方へと急いだ。

途中、石に躓いて、鼻緒の前坪を傷めて、難澁らしう前の時計屋の前まで來ると、岡村がまだそこに立つて居る。

「大層お早いですね、お歸りですか。」と、聲かける。

「え、少し……。」と、そのまゝ其所を行過ぎようとして、「そして、君は何してるんですか、同じ店の前に立つて。」

「時計を修して貰つて居ます。ゼンマイが磨減つたとかで、毎日決つて十二三分づつ後れますから。」

「あ、然うですか。」と開流して足許にばかり氣を取られながら交番の方へ行く。

岡村は夕日を眞向に浴びながら、「不愛憎な男だ。」位に思ひながら、友人の長い影を默つて見て居る。

塚田の下宿は小日向下の素人家で今日の日曜、關口の溫泉湯へ行く途中、そこの角で娘に遇つたのだ。

癌腫

一

母方の祖母は僕が二十一の夏亡くなつた。六月一日のお佛樣である。曾祖母がまだ達者で居るので、それと別けるために、僕は祖母を若いお婆さんと呼んで居る。病症は俗にも犬の病、六十日病など、他に厭がられる膈の症であつた。前の世で貰子の食をつもつた報ひで、六十日を苦しみ通す難病と云ふ俗說すらある。尤もそのずつと前から好くものに噎びたがつて、三度々々のお膳の上に飲水のコップを絕やした事がない。一度吃逆が出だすと、二時間も三時間も時には、小半日もそれで見せられる。そしちや、何時もあとで激しい空嘔に苦しむのだ。死ぬ前の二三年は特にひどかつた。氷の破片や能膽ではとも治まらないで、醋を盃で飲んだ事さへある。風が乾く春の木芽時が一番重く來たやうだ。痩せ切れた頸筋に靜脈を脹上がらせて涙に顏中を汚しながら、ギクギク嘔くさまは、傍で見てもみぢめでならない。そして、强い時は胃底まで差込んで來ると見え、鳩尾をグッと抑へて、ウン〳〵唸りながら、粘つた唾ばかり吐いて居る。

「お婆さん、水を上げやうか、水を。」と外に手の盡しやうも無いから、僕は何時も骨張つた細い背筋を擦つてやる位なのだ。

「もう、好い、好い、もう好うがす。」と然う云つて僕の手を振拂ふ癖に、矢張り盥に突ッ伏して苦しんで居る。

「お醫者を呼んで來やうか。」

「なアに、もう些ッとで治まる、大丈夫。なんの錢乞食にお醫者樣なぞッて。」と强ひても落付いて見せるが如何な事にも醫者にかゝつた事がない。押してすゝめると、却つて此方の慌て方を叱られる位なものだ。

內臟の痙攣には電氣が一等、根治にその療治を受けたら好からうと、他に聞いたまゝを煩さく說いても、祖母は何うにも聞き入れない。尤も病院へは入らなきやアならないさうだ。「タントは掛らないさうです、高々一月か一月半の辛抱だから。」と云つても、「この病は私の里方の系だ、藥や療治でなほる病氣ぢやない。」と云ひ張つて受付けない。だから、おみきを伯母なぞさへ陰口に祖母の吝いのを嘲つて、「何んぼ何んでも餘りだ、貯まるほど穢いとはあの事だ、見なさい、今に屹度あれがもとでドッと見せられるから。その時になつて後悔するのさ。錢で買はれぬ生命を粗末にして御座る。」と茶飲話に笑つて居た。

曾祖母はその頃八十幾歲であつた、下田のおひい婆さんと云ふと、達者と辛抱人とで評判なもの。若い時の强い癇症のため、今でも間斷なしに頸をブル〳〵顫はせて、脣を始終ビシヤ

〳〵鳴らして居る。眼も少しやぶであつた。「ひい〳〵ひい婆首を振るから牛婆。」などとよく日和に緡つくりをして居たものだ。目も達者、耳も達者、解き物に眼鏡をかけず、下女の髮なぞは自分で元結を締めてやつて居た。自分の體は何處までも約めて、何時も身上〳〵と身上ばかり悲しがつてゐる。鹽神さまの鹽釜樣が大の信心で、可笑しいほど鹽氣を大切にして居た。「私が此年まで穀に不自由しないのは皆鹽釜樣と舘起樣とのお利益だ。斯うして長年見てるのに鹽氣や穀を粗末にするやうな家は必らず皆潰れた。」と始終口癖のやうに云つて、僕等が喰殘した皿やお碗にまで湯を注いで「勿體ない〳〵。」と嘗めるやうに飲んで居た。恐しく物持の好い人で用達しの度ごとに清水小路の河原から前掛に一杯づゝ擔んで來た小砂利で、到頭門前の道を普請したと云ふくらゐ。家に居ても些つとも間を置かず、始終テタクタと立動いて居る。その癖、縫ものとか接物とか、そんな落着いた仕事はして居られない性分で始終忙しさうに屋敷内に用を探し廻つて居る。風が吹けば杉葉、雨が降ればほし物、たき物の要慎、些つともジッとして居られない。祖母に宛はれる一枚の雜巾が二月もかゝつて未だ出來上らない。他に意見を云ふ事が好きで、若い者の顏さへ見ると直ぐ意見だ。先方の氣色を損じないやう、お世辭を云ひ〳〵意見して居る。「又ですかい、おひいさん。」と出入の棒手振にまで笑はれながら、「然うでない主等は若いからそんな事を云つて居られるか。」と直ぐヤンワリと始まる。

その上、早合點で、早飲込で、他の話を終まで聞とゞけないで、獨り決めに自分の言狀ばかり落付拂つて云つて居る。相手になると何時までも際限が無い。隣近所に揉事や夫婦喧嘩でもおひいさんが顏を出せば大抵は先からあやまつたものだ。名代の暴れもの灰源太でさへ弱つて、下田の年寄に出られると話が饒えて了ふ、と云つて居た。それでも曾祖母の方では自分が仲を治めてやつた積りで、あの息子もこの夫婦もと、何時も自分の手柄を數上げて居た。だから、祖母なども忙はしい話は何時も曾祖母の耳に入れないやうにして、「おひいさんに聞かせると面倒臭くつて。」と零して居た。何時も地木綿の布子をムク〳〵と膨れて、杖もつかず日和下駄を鳴らして小さな身體をまめにカタコト歩き廻つて居た。

それでも、祖母の病氣はヨクセキ氣にやめると見えて、鹽斷ち穀斷ちまでして平癒を鹽釜樣に祈つて居た。少し長く寢るやうな事があると、曾祖母はガッカリ力を落して氣の毒なほど元氣が無い。外へも出ないで家の中でばかりウロ〳〵して居る。

曾祖母は祖母をおど〳〵と呼んで居た。嫁に來た頃からの名である。母の兄、僕には伯父の謙吉は長く他所を歩いて居た留守を、二人の年寄が貞體に守つて、女手だけで家を張つて來たので、年寄どもは嫁姑と云ふよりも姉妹のやうに夫婦のやうに相互に便つて居たのだ。若い婆とは云ふが、これも七十に近かつた。だから祖母の加減が些いとでも惡るいと、

曾母祖はそれこそ最う大騒ぎ、大狼狽、日に何度と無く枕元へ來ては、これを食へあれを食へと氣を揉んで居る。おしまひには、病人の方が煩さがつて、「お母さんのやうに然う忙しくされては寢る暇もない。」と叱られて「ほう〳〵。」と引込んで行く。かと思ふと、又直ぐやつて來て、「金治郎鰈の生の好いのが來た、これを醋で食べたら何うだ。」なぞと煩さがらせる。

何時であつたか、祖母が寢て居る處へ曾祖母が元氣無く入つて來た。矢張り例の持病であるが、常よりは重くて、二日二晩を苦しんだ揚句である。

「のう、おご。」と枕元へピタリと坐つて、「何時まで默つても居られないから私は云ひますが貴方の了見が分からない。今の内にミッシリ療治もしないで何する勘辨だね。」と思込んで云ふ。顏色も惡るく何時よりはひどく顫えて居た。

「又お母さんの癖だ、二三日も寢れば治りしてがすよ。」

「貴方は然うでも、私は何ぜうにします。謙吉もある事ッたし、家は立派に立つて行くべえけれど、私はまことに心細い、便がなくなりす。私はもう八十九、九十と云ふ人だから明日が日どんな事がないとも限らない身體だ、それに、大切なおごに然うして寢られるのを見ると、私は氣が氣でがァせん。」

「大丈夫で御座りす、お母さんのやうに然う心配しては際限が無い。」と病人は痩せた頸を伸べて、何より好きな烟管を取つた。

「そんでもな、斯うして見るのに、唇の色も段々土氣色になつて來るやうだ。それに下田の家は逆さ不幸が續いて、私も貴方も亭主と早別をした。散々二人で苦勞して辛とこれまでにした身上だ、それにこの年になつて又逆さ水をとらせられるやうでは私は何うなります。私の身を思つて見さい、思つて見さい。」とホロ〳〵涙を零した。

「可笑しいお母さんだ。私の病氣はそれほど大した事で御座りせんから、それに、私が萬一何うなつたにしても家には謙吉といふ立派な旦那もあるし、然う力落したもので御座りせんよ。

「それでも、謙吉は私と血もひいて居ない。九十になつて、氣心も知らない孫嫁の手にかゝるのは私は厭でがす。何んぼしても貴方の手で死にたい。」と涙も拭かず、オロオロ泣いて居る。

病人も目を濕ませた。「好う御座りすよ、お母さん、大丈夫、大丈夫二三日も經つと治りすから、御面倒でも最少しの間辛棒して下りせ。大丈夫で御座りすよ。」と慰めて居る。

「何んでも氣をガッシリ持つて、お飯をドシドシ喰ふやうでなくては駄目だ。全體おごはもとから食が細過ぎッから、どれ〳〵舌を出して見せさい。」とズル〳〵這寄つて病人の顎に皺の手をかけた。

「は。」と病人は云はれたやうになる。

「眞ッ白だ、熱氣もある。」と厚い袖で涙を拭いて居た。

「寢て居るからしや。」

「然うかな。そんだら好いけど、貴方の寢てる姿を見ると私はやッしや無くて、自分まで病氣になるやうだ。お願だからこの上の泣を見せて下さるな。秋口になつたら今年こそ屹度湯治に行かんせ。腹の疾には鳴子のお湯が一番だ。私が一人で留守居すッから。」

「は、然う致しすべ。」と病人は逆らはない。

「屹度行かんせよ、湯治は心の藥だ。」

「は、參りす。」と祖母は素直に聞いて居たが、來る年もく身上の事にかまけて居て氣樂らしい湯治でも無かつた。

曾祖母も祖母も揃つて上緣の無い人達であつた。二人とも三十代で寡婦となつた。特に曾祖母は子持たずなので、親戚から寄せ養子にしたのが祖母である。母の兄弟はその間に生れた。惣領の謙吉伯父は早くから他所を經歷つて居て、當時北國の某警察部長を務めて居た。母は三番目の末ッ子で、仲がおみき伯母である。これも田舍の收稅吏に嫁づいて、滅多な事には仙臺へ出て來ない。だから、二人の年寄は自然近くに居る母一人を便にする事になる。それに末ッ子と來て居るから猶更の事だ。伯父にも伯母にも從兄弟はドッサリ居るけれど、手近に居る孫といふのは僕一人。下はあつても皆女子ばかりである。僕は六ッの年から引取られて母の里、下田の家に育てられた。今は停車場の構内になつたが、屋敷内も廣く、家も大かつた。孟宗藪、椽林、栗の木も丹波栗をまぜて八九本、生り果實もふだにあつた。柿なぞは毎年箕で賣つた、門前に長屋が四五軒もあつて、看守や機關士やその外に龜田と云ふ特務曹長なぞも居た事がある。僕は屋敷中の大將である、誰も頭の抑へ手が無く、我儘に育てられた。そして二人共僕には極めて甘い年寄連であつた。父は氣を揉んで、「強もあゝ育てられては困まる。」と、好く迎ひに來ては連れて歸られるのだが、何時も直ぐ遁げ歸つて來た。父は小學校の校長で兄弟は大勢ある。狹い家に大勢せつぴんたらしく暮して居るのを見ると、何うも自分の家のやうな氣がしない。妹が小さい妹を負つて、油壺なぞ提げて歩く姿に遇ふと、僕は何時も知らぬ顏してやつた。下田の近所は大抵鎭臺官で、秋山倉橋なぞ云ふ大尉や少佐なぞが居た。皆僕の友達の家である。

下田の家も曾祖母の代までは名代の貧乏大番組で八人扶持に幾らとか聞た。祖母が來た晩なぞは、鼠穴だらけの壁を隱すために、家中に懸軸を下げならべたと云ふ。一體、曾祖父と云ふ人はひどい飲だくれで、御扶持米を三つ二つを酒米で納めさした位の人である、曾祖母の不容色を嫌つて身持も餘り好くなかつた。それを凝つと耐へて、曾祖母は一度も嫉妬らしい顏を見せた事が無い。そして、その養子に來た僕の祖父は稀らしい辛棒人で、何彼にぐづり出す養父をなだめながら、何うやら家計を立直さうとする頃、慶應の大痲疹にかゝ

つて、後の月の九月十三日に、この世を去つた。曾祖父は同じ年の春なくなつた。祖母は當時の話をして、今ならあんなに酷く殺すでは無かつた。」とその度に泣く。ひどい熱で水を飲みたがるのを無理に抑付けて飲ませず、唇に西瓜の皮を貼つて置いた。果ては上圃の歸りにわざと鉢前のところに打仆れて、そこの手洗水を飲まうとさへした。誰でも新しい人の顏さへ見ると「水、水。」と嗄れ聲で呼ぶ音が今にも耳に殘つて居ると云つて泣いて居た。死ぬ晩ごろは、目の黑玉が魚の目のやうに白くなつたと云ふ。

曾祖母と祖母と二人殘された。家督の謙吉伯父は辛つと十二でであつた。親類吟味の上、それを、お上の前は十七に仕立てゝ、元服さして、小さな腰に父の大小をさゝせて月の二度のお城當番に出す。戊辰の役にもボロ服を着せて後仕末狀の書置を書せて白河口まで出した。伯父が十三の年である。五月雨の降る日、小さな草鞋を蹈締めて「左樣なら。」と重吹の下を從助といふ家來に送られて、勇んで行くのを庭先の白辛夷のかげから見送つたと、何時も寢物語に祖母から聞かせられた。

戰がすんで、御維新になつて、間も無く伯父は兵學校志望で家を出た。それから此方ずッと他所ばかり歩いて居て家に歸らぬ。惣領は悌一と云つて僕には五つ年上である。時々寫眞は送つて來るが、八つか九つの年に會つたきり、會つた事は無い流行の獨逸服を着て髮を長く分けて、見るから悧發らしい從兄であつた。でも僕は下田家の若主人の、この寫眞を見る事を好まなかつた。逸氣になつて居る自分の足許をさらはれるやうな氣がしたのである。

祖母が今の商賣を始めたのは維新後間も無くであつた。商賣は質屋である。下つた公債證書をもとに幾らかでも身上を伸したらとすゝめる者があつたので、家來の從助を宰領に女手ながら兎にも角にも始めて見た。野地小路、連坊小路なぞ云ふ、近所の貧乏町を目的であつたのだ。ところが好い鹽梅に祖母の固いのが評判になつて、何うやらかうやら利分が見え、板造りながら雜倉の一つも建てるやうになつた。初めは大風呂敷に品物を包んで裝振かまはぬ曾祖母が毎日々々三丁目の土屋と云ふ大店まで上下して居たものが、到頭店の信用も出來、後には正金で資本を廻してくれるやうになり、母が僕の父へ嫁ぐ頃は町内での、と云つても士族町ではあるが、有福者に算へられるやうになつた。おみき伯母には屋敷が一つ、家の母へは田地が九反幾ら、これが二人の祖母の手からこぼれた持參金であつたのだ。

二

伯父の謙吉は僕が十四の年、任地の岡山をやめて鄕里へ歸つた。牡鹿郡長に轉任したのである。それと云ふも、一つは祖母の健康を氣遣つたためもある。從つて、僕は實家へ歸される事となつた。

伯父の歸郷がいよ〳〵然うと決つた時、祖母の喜びと云つたら無かつた。妙にソワソワして、來る人々を捉へては、「私も長年辛棒した甲斐があつて、愈々身上を悴に讓る事になりました。これからは樂隱居です。今までは身上が悲いばッかりに、下田後家の何のと、人に云はれまじい事も云はれしまたが、悴が郡長でも勤めてくれると。」と、ホク〳〵ものであつた。曾祖母には郡長と云ふ役目が分からないゆゑ、昔ならば御郡奉行ですと云聞せたところ、これも孫の出世の意外なのを遇ふ人々に吹聽して居た。

中で一番不平なのは僕。持川也の算盤の裏へも、本姓の平井は書く事を嫌つて、下田の强さんで通つて來たのを、あの父、あの家、あの兄弟の大勢ある中へ歸へらなければならない事になつた。實家は停車場の裏町、友達と云つても町家の小兒どもで、とても今までのやうに鎭臺官や官宅の小兒たちと遊ぶわけに行かない。自慢にする數もない、栗の木も無い、雞舍も無いのだ。だから、僕は今更家へ歸る位なら、いつそ澤乙の里親の所へでも引込んで了ふと切りにダヾを捏ねて見たが、祖母は何時に無く屹とした口振で受付けてくれない。何うしても家へ歸へす了見で居る。

「例令何と云つても、伯父さんは兎に角、伯母さんの意嚮と云ふものがあります、貴方一人ばかりを孫と思つてるやうで惡るい。だから嚮後は貴方も氣を付けて、近所へは餘り遊びに來てもなりせんぞ。」と云ふ。

「だつて伯母さんの家ぢやない、俺アお婆さんの家へ來てるんだ。」

「それそんな事を云ふ。他の耳さでも入つて見さんせ、飛んでもない事ッてがす。例令私たちの身上でも、讓つて了へば伯父さん伯母さんのものさ。そでなくてさへ私は貴方や貴方のお母さんばかり世話してるつて、他に彼是云はれてるんだもの。そんな惡態口は間違つても利いてはなりませんぞ。」と祖母は色を變へて云ふ。

「それだッてお婆さん達が殖した身上だ、何もそんなに伯母さんを恐がることは無いさ。威張つてさへ居れば好いんだ。」

「恐ながる？　私は恐ながりはしない、これが世間の順當と云ふものでがす。」と、それでも目力を瞑めて、靜かに云つた。

「恐ながつてるのさ。誰だつて皆然う云つて居すからね。」と態と横に出てやつた。

祖母は僕の顏を見て暫く默つて居た。で、僕は何うしても歸りたく無い、第一あの狹い家では勉强も碌々出來ない——僕はこの年齡常中學へ入る事になつて居た——玄關脇の三疊でも好いから置いてくれと繰返し賴んで見た、が、祖母は「そりや出來ません。貴方には平井と云ふ立派な家がある。」と何うしても聞き入れない。

「ぢや好いさ、悌一さんばかりお婆さんは大切なんだから。」

「又それを云ふ、いかに貴方が愛くとも、下田の家と平井の

家とはキッパリ區別をつけなきアなりせん。强一人の面倒ばかり見て、依估贔負すると思はれては何より第一私の身が立たない。これから若い人達に扱はれる身體だから、然う今までのやうな自儘放題の事は出來ません。」

「そだから好いさ、俺ア最うお婆さんのお世話にやなッないから。」と腹立紛れに毒づいてやつても、祖母は憤る樣子もなく、膝へ手を置いて何か外の事でも考へて居るやうだ。

で、僕は曾祖母に向つてその不平を洩らすと、曾祖母は例の首を忙しく振り立てゝ、

「まあ好い〳〵。誰が何と云つても貴方は下田の孫だ、若いお婆さんが何とか云つたら、ソッと隱れて來るさ。私から內所で小遣をやるから。」と然う云つて居た。

祖母は瘦身の、女には背も高い人であつた。だらしの無い事が何より嫌ひで、何でもキチンと几帳面でなければ氣に入らぬ性分。始終口癖のやうに、大きい手を動かすより、細かい手を動かせと然う云つて居た。家の母がツイ不精して汚れた茶碗や何かをそのまゝ放下して置いたり、竈前で煙草を吸つたりするのを特の外に嫌つて、人は不精に馴れては駄目、「お前なぞは貧樂と云つて、貧乏を樂がるやうになつたのだ。」と始終口小言が絶えない。何時も身奇麗にして、シャンと坐つて居る人であつた。字も好く書き、質物の帳面や札書きは自分一人でして居た。餘り口數を利かない人で、世間には下田後家の男まさりと噂されて居た。

いよ〳〵伯父が歸つて來た。先づその晩の事が思出される。

伯父夫婦、從兄の悌一とその妹のけい子、金澤から連れて來たお時と云ふ赤肥りの下女、書生が一人、都合六人の人が着いた。太ッ腹な、けち臭い事の大嫌ひな伯父は、その子その妻をも流行に着飾らせて車を揃へて威勢よく玄關から奥の座敷へズウッと通つた、伯母の持つた緋色のバック、今年十三になる從妹が着て居た目の醒めるやうな藤色チリメンの被布や、小豆色の變り袍などは直ぐ臺所の評議に上つた。黑でなければ鼠、稀にあつても空色か淺黃くらゐより外、その頃國では見られなかつた。そゝけ鬢の母は襷がけになつて御馳走の用意に忙しい。僕は俯向いて暗い茶の間に火鉢にもたれて、母の忙しぶりを淺間しく汚なく眺めて居た。

「さア皆來て御着祝を申上げるんだ。」と祖母は奥から入つて來た。

「俺アやんだ。」と僕はづごねた。

「やんだと云ふ事があるものか、さア早く來たり。お辰、從吉、お德、ちよッと手を洗つて旦那樣の前へ出るんだ。」と、最うドサクサして常の落付いた祖母のやうでも無い。

「馬鹿婆ア。」と僕は小聲で罵つて、自分の着て居る着物を見た。從兄は紺メルトンの金銀光かる洋服、僕は地木綿のそれも時に鍵裂きのある筒袖であつた。

「强さん、强さん。」と座敷から呼ぶ。

僕は爲方なしに伯父の前へ出て安着のお祝を述べた。辭が咽にからんで思ふやうに出ない。伯父は大毛布を座敷の眞中へ敷かせて、厚ぼつたい長外套のまゝ禮を受けて居た。下女までが襟を拔いてシャンと坐つて居た。

「强さん、こちらへ被來しやい、悌一も居ますから。」と伯母は座を辷つて悌一の傍に席を明けた。

「は。」と私は閾際に小さく畏つた。

「大きくなつたな、もう幾つだ。」と伯父が問ふ。

「十四。」

「こッちへ來いよ。」

「は。」と云つたが耐らなくなつて僕は急に席を立つた。そして、「何うしたんだ。」と怪しむ曾祖母に返事もせず、裏口から眞暗な外へ出た。雜倉の前に太い楓の木がある。私は何かなし急に悲しくなつて、その下でメソメソと泣いたものだ。曾祖母も祖母も憎くて〳〵ならなかつた。

二三日經つて荷物が着いた。大行李が六ッと茶箱詰が十幾ッもあつた。伯父は黄八丈の寢衣に兵兒帶をグル〳〵卷付けて、香の强い葉卷を咬えながら、自ら指圖して荷物を解始めた。何よりも先づめげ物が心配と云ふので、器物類から繩を解いた。伯父には集古の癖があつて、古器物をドッサリ藏して居た。古錦に包んで、鋸屑をつめた中から色々のものが出た。

「おッと大切に〳〵。」と伯父は切りと書生へ聲掛けて居た。伯母と從兄妹どもが一包みを解いて、破損を檢めてそして一々床の間や違え棚へそれを飾り立てる、曾祖母と祖母は閾際へ遠退いてそれを眺めて居た。

これが八兵衞、これが仁清、これが何、これが何と伯父は一々その說明を年寄どもへ聞かせて居た。三百圓五百圓なぞ云ふ代物が幾つもあつた。でも、年寄どもにはそんな物より、祝形の銀瓶とか、瑪瑙一輪挿とか隱岐で求めたと云ふ珊瑚珠の置物とかそんなものが特に目に付いたやうである。器物ばかりで彼是八疊の座敷一杯になつた。

伯父はシガアで指し乍ら、「ねえお母さん、これだけ集めるにも隨分の苦勞ですぜ、中には金錢で求られないものもある。私は二十年間諸國を順禮して歩いて、些つとも家を顧みなかつたし、財産も出來なかつた。たゞ、これ丈がお土産でさア。」と笑つた。

「本當に大したもんだ。この銀瓶は幾匁かゝりすべね。」と曾祖母は手に取つて眺めて居る。

「量は幾らでも無いが、高いなアその象篏、つまり細工賃ですね。」

「それに、この瑪瑙がさ、まアおゝ見て見さんせ。」と切りに見恍れて居る。

祖母は初めから默つて一語も云はぬ。伯父が自慢で色々說明するのを、たゞフンフンと上の空で聞いて居る。別に喜ぶ風も無い。心持かも知れないが、顏も冴えないやうである。

最後に伯父は古青磁の香爐を取出して、何うです、この香爐は、私が自慢のものですから見て下さい、何れ千年以上の支那ものでせうが、大阪展覽會へ出して六百圓と云ふ値がつきましたぜ。」と欝金木綿をほどいて見せる。

祖母は些いと見たゞけである。ホッと長い溜息を吐いた。

「六百圓と云ふと、下田一町歩の値段だね、私は香爐一つなぞより田地のお土産の方が好いがな。」と云ふ。

「だッて貴方、田地は何時でも買はれる。これなざあ然うは行きません。何所にもあると云ふ品ぢやないから。」

「そんでも、私は田地の方が好がす。」

「はゝはゝ相變らずですね、お母さんは。」

「まア死ぬまぢや斯うですべね。」と笑ひもしない。

「それも好いでせう、尤もそのお氣性だからこそ、斯うして長い間の留守を守つて居て下さつたのだ。お禮申上ますよ。」

「私はさつきから色々見て居て、恐しくなりました。あれが三百圓だ、これが五百圓だつて、まア誰方が價をつけたのか知れないけれど、全で金を玩弄にして居るやうなもの、金には金の位と云ふものがあります。一文一錢の錢だつて身を約めなければ出來るもんぢやない。それを然うザンブゴンブに使つては、金の位が死んで了ふと云ふものでがす。」

その心持だもの。世間を見ないんですよ、私だつて盜んだ金や不淨な金で買つたんぢやありません。」と伯父は笑つた。

「あゝあ、私は世間見ずだかも知れないが、金の位だけは尊く使ひたい、何んぼ有りあまるからと云つて然う位を殺しては金罰があたります。」と俯向いて染々云ふのであつた。伯母や從妹は變な顏して祖母の方をチラ〳〵見て居た。

伯父はたゞ高く笑つた。

着祝の宴、祖父のお祥月の佛事、從兄の誕生祝と、それから毎日のやうに酒盛が續いた。萬事に派手好きな伯父ゆゑ、町藝者まで家へ入れての大騒ぎであつた。その度毎に祖母は顏をしかめて、餘りお祭騒ぎが過ぎると愚痴をこぼして居た。でも伯父は耳にもかけず、田舍者を嚇すのはこれに限ると笑つて居た。祖母は默して浮かぬ顏である。座敷でワア〳〵騒いでるにも關らず、自分は玄關脇の薄暗い三疊に引込んで、質のものゝ帳合に餘念がない。

「お婆さん、何うです、此方へ被來つて一口召上つては。」と從兄の悌一が何度迎に來ても、「私は田舍者だから。」とツイ顏を出した事がない。殊に伯父の連て來た下女や書生が家中をわがもの顏に振舞ふのを見て、面白くない顏をして居た。道具の出し入れに、女中なぞが雜倉の戸でも啓けると、祖母はどんな急しい用事も拋出して、「いゝえ、そこは私が爲ます。貴方がたは向の御用をして下んせ。」と、戸前をかばうやうにして一度も手をつけさせた事が無い。顆顆に梅干を貼つて居る日が多かつた。口も餘り利かない。年寄ども二人集りさへすると、座敷の方を氣に爲い〳〵何かひそひそ、話ばかりして居た。

伯父も氣が付いたと見えて、酒に醉つてこんな事を云つた。

「ねえ、お母さん。貴方は私が金を貯めずに歸つて來たので、不足らしい樣子だが、私はこれでも一萬五千圓からの身代を持つて居ますぜ。」と云つて、先づ相手に不審がらせた。

「懸軸や道具ですぺ。」と祖母は相變らず低い聲であつた。ものに興まぬ人なのだ。

「いゝえ そんな物ぢや無い。立派に現金で預けてあります。」

祖母は目を上げて格服の好い悴の顏を見遣つた。

「私の年俸は八百圓だ、それ御覽なさい、銀行へ預けて八百圓の利子を取るにや、此頃の日歩で先づ一萬五千か二萬と云つた所でせう。私は身體でそれを取るんだ、ねえ、おいいさん。然うでせう。金を褌に入れて置いたつて利は產みませんものな。」と笑ひながら曾祖母に云つた。

「然うだとも〳〵。貴方は出世なすつた。」この年寄は例のやうに調子が好い。

伯父の詭辯に皆ドッと笑つた。一番伯父が笑つた。それでも祖母は何とも云はず、何か深く考へ込んで居るやうであつた。

間も無く祖母を初め全家擧つて石の卷へ引移る事になつた。石の卷には牡鹿の郡役所がある。でも、この時は一悶着あつた。祖母は今更ら住馴れた家屋敷に別れて、知らぬ他所へ行くのは嫌だと云ふのである。留守は固く守るゆゑ、是非仙臺へ置いてくれと賴んだが、伯父は何うしても聞入れない。年寄ばかり二人離して置く譯には行かぬ。これまでの苦勞を慰めるため、御隱居さまにして立派に扱ふからと、伯母共々達つて勸めるのだ、祖母は爲方なく石の卷へ移る事となつた。質屋の株は他に讓つた。立つ前に祖母は僕をコッソリ呼んで「伯父樣があゝ云ふから私は石の卷さ行きます。年寄の强情は見臭いものだ。こゝに三十圓の貯金があるから。學資の補足にしろと云つて、僕へくれた。必ず〳〵他の耳へ入れるな、と何度も〳〵念を押して。

三

下田の家が石の卷に引移つてから、その年——祖母の亡くなつた——まで、まる七年になる。その間、謙吉伯父は大抵二月目位には仙臺へ出て來るが、年寄どもは滅多に上つた事がない。僅か十三里の道ではあるが、鹽釜までは是非汽船の便を藉らねばならぬのが何より億劫なのだ。曾祖母なぞは到頭一度も出た事がなかつた。

その前に僕の事も云つて置く。云ひ憎くい事もある。僕は全體怠け者だ。何をやつても直ぐ飽きる。勉强しても遊んでも何方にも根が無い、直ぐ飽きて了ふ。三日坊主と云ふ評が一番當つて居る。別に深い仔細も無く、ただ貸本や芝居を見たいばかりで、ヅル〳〵に怠けて中學校を半途退學し一二年東京の私立學校めぐりをして見たが、これも相變らず脈になつて、今度は高等學校の醫學部の入學試驗を受て及第した。

怠け者の珍らしがり、初めの内は隨分好奇からの勉强した。それに自分ながら然う頭も惡いとは思はない。何より先づ高尙らしい專門學や莊重なラテン學名が嬉しくて、組織學とか有機化學とか、他の難かしがる科目に一層興味を持つた。親戚の醫師から骸骨を借りたり、顯微鏡を借りたりして、殆ど夢中になつて勉めた。でも、デル、ドネルの獨逸語と器械體操とが大嫌ひで、その時間は大抵遁げて出ない。學校馴た落第生どもと一所に、生徒控所の大爐に股火しながら、小說を讀んだり雄誌を讀んだりして怠けて居た。試驗の度にまごつきはするが、他の學科の點數で補つて、まア何うやら斯うやら誤魔かして來た。

と云つても例の三日坊主だ。三學期の初め頃からソロ〳〵厭氣がさして來て、缺席が多くなり出した。鏡花の何とか云ふ小說、剃刀磨ぎが剃刀を磨ぐ小說、あれを讀んだが病付で、自分も書ける者なら書いて見たいと云ふ氣になつた。そして書いた。さアそれが面白くなる。手帳とインキ壺をぶら下げて、彼方此方と講堂を駈ずり廻つて、指にペン胝を出すよりは、家に居てユックリ小說でも書いて居る方が何の位面白いか知れない。初めは友達ども、家族、終には世間を驚かして見たいと云ふ謀反氣が手傳ふ。何某は醫學博士で文學者、あゝ云つた風になりたい、と道樂が嵩じて段々本氣がゝつて來ると云ふ始末。母なぞは女氣の唯やッしやない所からそれを甚く心配して、あゝだ斯うだと色々に僕を勵まし勉めさせるのだが、腐り始めた心や身體が高か女の愚痴ぐらゐで修まるものではない。ふてゝも反抗して見たくなる。學校が直ぐ近所ゆゑ、朝の始業の鐘が好く聞える、靴を蹈鳴らして勢好く出て行く生徒が家の前をゾロ〳〵通る。それを聞き、それを見る度に母は氣が氣で無く、夜深しに疲れてグッスリ寢込で居る僕の枕元へ來てガミ〳〵云ふ、甚くなると無理に蒲團をはがしたりする。そんな事をすると意地にも起きない。世間を眞直に渡つて來た母は、學校にさへ滿足に行けば立派に成功されるものと信じて居るのだ。云ひ忘れて居たが、僕の父はその前の年肺病で亡くなつた。これでは爲方がないと云ふので、祖母は石の卷から出て來る事になつた。僕の監督と云ふ譯なのだ。

僕は初めから母を敬する氣はなかつた——大暮しに馴てこゝろよいお世辨ばかり聞馴れて來た自分は、せつぴんだらしい實家の暮しが、何より汚なく情なく見えたのだ。で僕も初めは弱つた。父を除いて最も畏い人は、恐ろしい人は、氣の置ける人は、祖母である。その祖母が家へ來て直接僕を見張る事になると、今までのやうに母や家族をないがしろにして怠けて居る譯には行かない、それは亡くなる前の年の春であつた。

今度遇つて見た祖母の健康は甚く衰へて居た。二年ほど前に秋湯治の歸路に寄つた時から見ると、スッカリ樣子が變つて居る、炬燵になぞ滅多にあたらない人であつたが、何をす

るにもしぶつけなく朝も然う早起をしない。氣ばかり急いて毎朝床の中から母の指圖しながら、日が枕元まで射さない内は起きない。寺參りに行くのも親類廻りするのも甚く億劫がつて、多くは内に引込んで計り居る。そして、僕なぞに云ふ小言も妙に底意地惡るくなつた。廻りくどい事を云つて窘められる。これには何より困つて、僕も厭々ながら學校へ出なければならぬ。兎に角出て居た。で、まア春から夏まで三月の間の勉強で、僕も何うか斯うか一年から二年へ進むを得た。

祖母の健康で第一に氣の付いたのは、食味のひどく變つた事である。甘いもの好きで、中でも唐黍の甚太餅が一等好きであつたのが、この頃は目に立つて甘味を嫌ふやうになつた。そして、唐辛とか山葵とか甚く刺戟性なものを好んだ。豆もやしの辛鹽なぞが何よりの御馳走と喜んだ。吃逆や空咽が甚く高ぶつて來て容易に治らない。前からの癖ゆゑ、それは驚かぬにしても、その後の疲勞の酷らしさと云つたらない。疲れて、我折つて、直ぐ枕に就いてグン〳〵眠つて了ふ。枕を深々とかぶつて、口元をゆるめて他愛もなく眠りこけて居るさまを見ると、年の衰は著しく知れる。唇の色も變に土氣色になり、肌も何うやら、病理の講義に聞いた惡液質らしう荒れて穢なくなつた。

それは、然し、自分にも氣が付いたと見えて、夕暮なぞはボンヤリ楊先へ出て、何か深い物思ひに沈んで居るのを好く見掛けた。潔癖な人で、髪なぞソ、ケさした事のない人なのに、全るで手を入れない、小さな髷が油と塵にまみれて居る。

「お婆さん、何うかしたの。」とウツカリして居る後から聲を掛けて見る。時々ある事である。

「うむ。」とダルさうな目を振向けて、「何んだか氣が沈んでね。」

「胃が惡るいからです、氣の重いなア胃病の特徴と云つても好い。」

「頸筋がゾク〳〵惡寒がして困るが、何かこの惡寒の取れる藥は無いものかね。」

「藥はあるだらうが、僕には未だ分らない。明日にも病院へ行つたら何うです。」

「なあに、病院さ行く位の事でもない、それよりか早く強の藥を貰つて飲むやうになりたいがね。」

「最うです、後二年すれば。來年の暮あたりからでも内科を習ふから、然うしたら僕が療治して上げませう。」

「あア、私もその積りで居るが、何うだかね、それまで生きて居られると好いがさ。」

と侘しげにシンミリ云つて笑ひもしない。

「馬鹿な事を云つて、僕はこれから成功してお婆さんを大切に養ひます。樂隱居だね。その時まで待つて居さい。」

「さうさな、何にも私は樂隱居になる氣はないが——今でも

最う澤山だけれど、この今井の家が立ち行くのを見て死にたい。」

「今に見せますよ。」

「何うぞ、そればかりがお願ひだ。」

「全體お婆さんは死ぬ〳〵ッて心細い事ばかりを云ふが、本當に心からそんな事を考へる時があるのかね。」

「考へるとも、私は最う八十三だもの。」と流しに目を落す。

「八十三が九十でも、おひいさんを見さんせ、今二十年は活きて居て貰はなくちや、折角僕の孝行榮えがないぢやアせんか。」

「それも然うだが……。」と自分の骨立ッた掌を裏返し〳〵凝つと見詰めながら、「今も云ふ通りさ、伯父さんも私を大事にしてくれるから、この上に孝行して貰ひたいとは思はない。下田の家はあれで立つが、今井の家が心配でならない、私の事などは何うでも好いから、何うか一日も早く家の立つ事をしてくなんせ。遺言とも、何とも他に云ふ事はないから。」

「伯母さん伯父さんは何うでも、孫の飯は又別なものです、まア然う云はないで食べて見るものです。」

「まア、それも然うさね。」と押しても云はない、そして唯口癖のやうに僕を鞭韃して學校大事と務めさせた。全體祖母は他の事は他の事、自分は自分とかたく分境を立て居る質で、自分の身も立たない癖に他の世話燒きなぞする人は何より嫌つて居た。

祖母の健康は益々衰へて來た、顏色も勝れず、目の緣には何時も鉛色の瘡さへ見える。食慾はトント進まず、嘔氣も激しくなつた。時には煤色の水を吐く。そして、何時からと云ふ事なく、鳩尾の直ぐ下に凝りものが出來て、食べるものがそれに痞へる。痛む。手を當てゝ見るとグリ〳〵した拳位の大きさはある。自分もこれには慌てたと見えて、間も無く病院へ行つて胃液の檢査を受けた所が、まだ確かと云ふ譯には行かないが、何うも癌腫の疑がある。今の内にシッカリした治療をせねば、どんな大事にならぬとも限らぬとの事である。シッカリした治療はと聞くと、腹部切開の大手術であるが、老年ではあり豫後も疑はしいからと醫師は言葉を濁した。

「癌腫とは一體どんな病氣でがす、古血の凝りのやうなものでも。」と祖母は醫者に尋ねた。

醫者は片頬に笑ひながら、「癌腫と云ふのは昔で云ふ膈の症ですな。」と云ふ。

膈の症と聞いただけで、祖母は何とも云はなかつた。

「然うかね。」と小聲に云つたばかり、俯向いて足許を凝つと眺めて、そこを動かなかつた。

「でもまア明日もお出なさい、なる可く十時前が好いですよ、毎日胃を洗滌しなきア駄目ですから。」

「洗滌と申しますと。」

「今日のやうにして胃の中を洗ふのです。」と僕は傍から云つた。

家へ歸へる途中祖母は歩くのさへ難澁の模樣であつた。膝に力がなくて、下駄が滑りぬけて困ると云ふ。蒼い顏して足許ばかり見て歩いた。そして、家に歸へると直ぐ床に就いた。蒲團をシッカリ引被つて何を云つても返事が無い。翌日まで飲まず食はずであつた。そして、石の卷へ電報を打つてくれ、直ぐ歸ると云出した。

「何んです、まアお母さん、急に然う力を落したつて爲方がありますまい、今病氣が差重つたと云ふ譯ではなし、然う人を騷がせなくとも、家でユックリ寢て御座つたらば好う御座りすべもの。」

然うでない、苦しい所で主等の家に厄介になつて居るのも氣の毒、それに、私は何うで助かる生命でないから死ぬなら矢張り謙吉の手で死にたい。」とホロ〳〵涙をこぼして居た。

然し祖母は何う云つても、翌日から病院へ行く事を承知しない、藥だけ貰つて來れば好い、あんな甚い事をされるのは年寄つてから厭な事だと云つて聞かない。よく〳〵消息子に懲りたものと見える。全體祖母は嗜み深いに似合はぬ癖やみの强い性分で、些いとした庖丁怪我にも直ぐ騷ぎ立てゝ菲の血止めのと騷ぎ立てる。血を見ると顫え上がるのだ。で、病院でカテイテルを胃に押込まれる時でも、傍で見るに耐へぬほどの大苦しみ。目を白黑にしてゲッ〳〵と苦しむのを、若い助手と看護婦が笑ひながら、「お婆さん、最少しの我慢です、若い人はお產さへするぢやありませんか、我慢なさい、我慢なさい。」と先の鳩の卵ぐらゐもある二號消息子を捜せ切つた頸筋へ突込む。

「はい〳〵。」と云ひながらも、祖母はもう見得も外聞もなく手足を蹶く。目からは涙、鼻からは涕、ボロ〳〵こぼしながら、顏中を汚して苦しむ。その咽上げる聲は全るで鷄が締められる時の苦しみやうだ。ギッシリ攫んで居た僕の手までジットリと油汗に濡れて了つた。

二三日して、石の卷から伯父が來た。伯母も從妹も來た。そして、色々相談の上、祖母は擔架で石の卷へ歸へる事になつた。祖母は病院で初めて診察を受けた日からドッと床へ就いて死ぬまで起きなかつた。

その頃丁度二學期の試驗も濟み、冬季休業に際して居たので、僕は祖母と一緒に看護ながら石の卷へ行く事になつた。休暇は小半月もあるからユックリ近傍の景勝をも採る氣。正直の所、僕は然う大した病氣とは思はなかつたのである。

下田の家へは久し振りで行つた。尤もその前に一二度行つた事はあるが、何時も修學旅行か何かの急しい際なので、然うユックリして居た事がない。だから、曾祖母とシンミリ話したのは七八年振りと云つても好い。

變つたと云へば、曾祖母も全るで變つた、以前のやうにテタクタと氣忙しい人ではなく、離屋の四疊に手焙の炬燵一つ宛がはれゝば、晩までも凝つとそこを動かない。伯父が喧し

くするので、髮の毛も切り髮となり、赤い房の付いた繻紬の被布なぞ着て居る。臺所には下女と小間使、茶の間には伯母、別に手の出す用事がない所から雜巾をさす位が一日の仕事である。日和の暖かさうな所へ行火を持出して、チク〳〵やつて居るが直ぐ飽きると見えて、膝を組んだまゝ行火の上にクン〳〵睡つて居る。齒も弱くなつた。耳も些と遠くなつた。何より先づ喰べる事が樂みらしく、一日に二度、午前の十時頃と午後の三時頃胃に觸らぬものと云つて、ビスケットか輕燒を二つ三つ、九谷燒の菓子鉢に盛つて出されるのを子供のやうに待かねて居る。

「おひいさんも些と耄けたやうでね。この頃は食べる事より外に樂がおあんなさらぬ樣子。」と伯母は云つて居た。

祖母は寢たぎりゆゑ、僕も遊山らしう他出も出來ないから、閑さへあれば曾祖母の傍に寢ころんで四方山の話である。耄けたの耄碌したのと云ふが、僕には然うも思はれない。成程今話した事なぞを直ぐ忘れて了つて、昨日遇つた人の顏も今日忘れて了ふが、昔の事なら チャンと記憶して居る。僕等よりも確かな位のものだ。それに昔からあつた癖ではあるが、この頃は一層お世辭が好くなり、見る人〳〵に愛嬌ばかりを云つて居る。伯母まで樣づけにして、何と云ふと氣に入らないやうな事ばかり云つて居る。

「おひいさん、切髮になつて被布なぞ着て居るものだから、どこの御隱居樣かと思ふやうに立派になつた。」

「伯父さんがなれと云ふもんだでな。ならなくとも惡いと思つてな。」

昔の話が始まるのだ。

「强や、仙臺ぢやみんな變はる事はがアせんか兄弟は皆達者かな。」

「はあ、お蔭樣で。」

「然うか、それは何よりだ、病氣災難の無い位目出度い事ぱない、私は斯うして居てもみんなが達者で睦じく暮らすやうにと毎日鹽釜樣に願つて居ます。それだから貴方方も好く氣を付けてね、必ず鹽氣や穀類を無沙汰にしないやうにしなさいよ。」

と又そろ〳〵始まる。それから五十年來の辛捧話、屋敷を始めて買つた時の嬉しかつた事、三兩で買つた田地が急に百何圓と云ふ、嘘としか思はれぬ價に騰貴した話なぞを思ひ出し〳〵話し始める。

さもない時は昔の人の話である。誰が何うなつた、彼は何うなつた、おちうはおきんさはと僕等の知らない人の名を尋ねて居る。昨日話して聞かせた事を今日はケロリと忘れて了つて、又新しく尋ねる。

「昨日お話したぢやありませんか。」と云つても、

「あゝ、然うだつけかな、で、どうなりました、あの人は。」と念入りの尋ねやうなのだ。

從妹や、きよは傍に居てクス〳〵笑つても關ふものでな

い特に大條の家の事は好く聞きたがる。知つて居て態と聞くのではないかと思ふ位だ。大條は矢張り六番町の下田の直ぐ隣りの家だが、大身ではあり特にお役付の家格ゆゑ、暮しも下田からなぞ見るとズツト有福であつた。然し大條の老母と云へば評判のしやからなしで、自分の大暮を鼻にかけて、隨分ひどく下田の年寄どもへ當つたものだ。下田では木鮭を肴に飯を喰べてるなぞ惡態をつき、風の吹く日なぞは故と境垣の所へシヤ〳〵り出て「杉葉泥棒が來るから早く杉葉を拾つて了へ。」なぞ我鳴り立てる。餘りの事に祖母なぞは我慢しかねて、何時か一度はとッちめてやらうといきまくのを、曾祖母はたゞ「好いから、好いから。」と我慢しつゞけて來た。その内に大條には病人やら不幸やら續いて、到頭二三年前に乞食のやうになつて死んだ。話と云ふのは、その死態の話なのだ。

僕は知つてるだけ委しくこの話をして聞かせると、曾祖母は又出來るだけ委しく根掘り葉掘り話を聞いた上、最後には屹度斯う云ふ事に決める。

「だから私の云はない事かおごなぞはもき腹を立てゝ喧嘩もしかねない險幕で居るが、正直の光は夜でも出る、何時か知れる事だと我慢して居ました、それにさ、私の目にあの家が長持ちせぬと見た事はな、何より彼より穀を無沙汰にする事だ。何時であつたか、少しすえたと云つてお飯をドン〳〵と捨てゝ居たのを見ました。あれでは罰もあたる筈だと私は思つた。」とその頃の事をユックリ考へて「然うかね、そんなになつて死んだかね。」と又しても話を前へ戻すのだ。

「餘程恨があると見えて、おひいさんは大條の話になると眞劍になる。」と伯母なぞは笑つて居た。

それからが屋敷の話である。云後くれて居たが、六番町の屋敷は既うに手放して今では他の標札がかゝつて居る。もと〳〵山氣の絶えぬ伯父ゆゑ、こちらへ歸つた後でも製絲や木炭山に手を出して、屋敷も賣拂ひ田地にも餘程手を付けたのだ。祖母は知つて居るが曾祖母は何も知らないで居る。來る早々伯母に含められて居たから、僕等も飽までそれを秘密にして居た。

「庭前の山茶花垣は餘程伸びましたらうな、もう強の背丈もあるかな、あれは私が三十幾歳の時近所の遠山と云ふ家で根別けをして捨てると云つて居たのを貰つて來て植ゑたのだ、花が咲きますか。」

「咲きますとも、綺麗な花です。」と僕は云ふ、事實綺麗な花で、今でもその前を通る時には目に付くのだ。

「粟の木はな。」

「よく生るやうです。」

「三本だッけかな。」

「四—四本でせう。」

「あれもな、停車場から屋敷を半分買上げられるまでには十幾本とあつたのだ。北裏の丹波栗なぞと云つたら鷄の卵位の

大きさがあつたから。」

「知つてますよ、私が十二三まではありましたもの。」

「然うだッけかな、林檎も大きくなりましたらう。井戸の水は變らないかね。」

「いゝえ別に。」

「あれは名物の井戸でね、六道にもやし屋があつた時分には、掛水にすると云つて態々貰ひに來た位のものでがすよ。あゝあ。私も今一度行つて見たいな。裏へ出て、栗の木の下へ立つて、斯う屋敷を見渡した心持と云つたら無い、胡瓜が好く育つ上畠でな、あの黄色な花がズウとさかつた姿の好い事、今日小指位だと思ふと、明日は最う鰹節位になつて居る。」と行火蒲團へ頤をうづめてウツトリと考へ込む。

目の險しい伯母はキット傍から口を出すのだ。

「そんなに眷戀なさるんなら、強さんと一緒に行つて御覽になつたら何うです、汽車もあるし船もあるし。」と僕の顔を見ながら強く云ふ。云はれて年寄は狼狽する。

「なんのそんな事、無理に行つて見たいなんて氣はないけれど、たゞね、昔の事を思つたのさ。」

「それでも、そんなに思つて御座つて病氣でもなさると惡るい、お婆さんのやうに氣から病氣が出ます。」

「なんの〳〵〳〵。」と節を付けて、「私はこんなに大切にされてるもの。何の不足があつて仙臺さなぞ歸りたいと思ひすべ、もう〳〵こゝで死ぬ事に決めて居す。」

「それでもじや。」

「それでもッて、私は貴方たちが便りだから、生れてからこんな仕合な目に合つた事は御座いません。」

「ねえ、清や、おひいさんはおべんちやらが旨いから。」と伯母は僕を氣にしいしい然う云ふのだ。

清と云ふのは十八になる小間使だ。郡書記の娘で本當の名は辰子と云ふのだが、伯母の家ではきよ〳〵と呼んで居る。色は黑いが些いとあくぬけのした、何處か生々した娘である。看護婦になるのが志望で、夜は英語の稽古なぞして居る親切氣のある娘で、誰よりも曾祖母を大事にしてくれる。

「强の嫁にあんなのが好いね、身體は丈夫なり氣さくで面白い娘だ。」などと曾祖母は何時も〳〵然う云ふ。

「あんな田舍者。」なぞ笑つて居るが、僕も然う厭とも思はなかつた。

四

四月の中旬である。祖母の病症は食道癌腫と決つた。石卷公立病院長の某醫學士が吐物を數回の鏡的檢査の上、疑ひも無い癌腫細胞がプレパラアトの上に見られた。從つて豫後も轉期も明かになつた、長くて半年、老體の事ゆゑ何時どんな急變がないとも限らぬ、症狀も餘程進んで居るから、との事であつた。無論、當の病人へは聞かせないが親戚故舊へは夫々の通知を出し、早稻田に在學中の悌一從兄なども、事に寄

せて呼歸された。僕も學校の暇を見ては、時々看病に行つた。でも病人は僕の顏さへ見ると、「何しに來た、今大事の學校をかゝへて居て、私の事なぞ何うでも好いから、早く歸つてくなんせ。」と痩せた身體を大儀さうに氣を揉むので、僕はなるべく姿を見せないやうにして、離屋の曾祖母の行火へもぐり込んで居た。曾祖母は又伯母に止められて病室へは一度も入つた事がないので、ひどく氣を揉んで「何んだね、おごの病氣は。」と日に幾度となく尋ねる。

「なアに、大した事はありません。」

「心脾が弱つたのだ。乾棗を煮て溫めろと云つて下なんせ。棗は心の藥だ、私が云つたと云つて驗して見さんせ、屹度好いから、飢饉の年に仆れた人でも、乾棗で息を吹き返した事がある。」

「は、然うしませう。」とばかり、僕等は聞流して居た。

初めはさほどでも無かつたが、曾祖母のくどい話が段々煩さくなつて、終にはおきよとばかり話すやうになる。伯母は急しい人、閑でも世間話なぞ餘り好まない人、伯父は一日役所に居るし、從妹は妙に品作つた質だから話も餘りしない。そこへ行つてはきよが一等好い。可笑しくも無い話にコロ〳〵笑つて居て、何時も面白く相手になつてくれる。夜に英語なぞ教へてやるためもあらうが、伯父伯母へ內證で僕に酒なぞを飲してくれる。

第一聲が活々して居て、下らぬ事でも快く聞かせる娘である。性根もシッカリして居て、ませた分別もある。伯母にも忠實に仕へて何一つ不足らしい樣子は見せないが、偶々洩れる言葉端なぞで見ると、あの虛榮に勝つた守舊的な態度には餘程飽足らず思つて居るらしい、これも氣に入つた。

「奧樣は怜悧な方だけれど、餘りお心が狹くつて、あれでは自分から世間を狹めて被在るやうなものです。」なぞ云ふのを聞いた事もある。

婆の病氣は兎に角として、僕は仙臺へ歸りたくない譯が最一つある。外では無いが、嘗て聘はれた下田家に於ける權力を今度幾らか回復したやうな氣がするので。今まで度々來たけれど、今度ほど居心の好い事は無い。いつも來る時は全くの客あしらひだ。充れた座敷と茶の間と曾祖母の居る離屋との外へは滅多に足も蹈込めない。充ばれたものを食つて、充はれたものに寢て、そして伯父伯母との話と云つても、高が決りきつた世間話の外は無い。僕の家、僕の身の上、伯母たちの目には他人事と思つて居るらしい、從妹とだつて染々身內らしい話をした事がない。そこは却つて他人の方が打解けて、役所の給仕や雇なぞが來ると、伯母は心からの打明話もするのだが、僕等には何時も相應の距りと間を置いて交際ふ。何うかすると、僕を今井さんなぞと呼ぶ事もある、こッちから近付きたいとは思ひながらも、然うせられると氣が引けて恠々しい事も云はれない。

處が今度はガラリと違ふ。尤も病人があつて氣が氣で無

く、家の締りも付かぬ所以もあらうが、も一つは、病人へ對する遠慮もあつたらう、家中を解放して僕等の自由に任せて居る。客用の絹蒲團を出して病人の裾に寢ようが、夜々中勝手に膳立して食はうが、眠氣ざましの盜酒を公然しやうが、誰も何とも云はない。二階——伯父の書齋——へも奧の間へも勝手に入る事が出來る。昔見覺の八犬傳や太平記を勝手に引張出して讀んでも好い。それに看護人やら手傳やら、臺所には大勢居て、トント振舞にでも來て居るやうだ。そして、それ等が皆僕を尊敬して、「和子さん和子さん。」と呼ぶ。腹が減つた、酒が欲しいと云へば、皆爭つて僕の命を聞く。萬事が大手振だ、感じの惡るからう筈はない。賑か好きの、何時も浮々して居る僕に取つては、これ程得意な事はないのだ。

でも、病人は何時も、僕に向つて、試驗が近いから歸れ〻〻とせがむ、詮方が無いから厭々仙臺へ歸つて見ると、母は居ず、あとは妹や弟ばかりで、ガランとして火の消えたやうだ。話相手もない。だから、用事にかこつけて又行く、又追歸される。又行く、歸されると云つた譯だ。それに、僕は二學期からヅーッと怠け通しなので、今度の試驗は甚だ覺束ない。偶に學校へ出て見ると、筆記がドッサリ溜つて居る。大嫌ひな獨逸語はドン〳〵進んで居る。文法なぞは何時の間にか文章論へ入つて居る。落付いて勉强した所で、十日や二十日で追付くあてがない。級長には呼出されて、この頃の出缺席の不同を詰られ、所詮この學年は覺束ないだらうが、眞に勉强する氣があるならと厭な話を聞かせられる。實に〳〵厭な事ッた。友達から借りたノートを引繰返したゞけでもウンザリする。ペンを新しく、インキを新しく、眞面目に着手しては見るが直ぐ倦んで了ふ。耐らないから又石の卷へ行く、今度は母まで加擔して直ぐ歸れと云ふ。その內に試驗はドシ〳〵近づいて來る。

この難關、この試驗をうまく切拔けるには、と流石に自分だつて考へる。落第したい事はない。カンニングをしても及第したい。でも、そりや出來ない事だ。復習の日課表まで作つて見るが第一日目からウンザリして一日延に伸すから、日宛の紙數だけ殖えて行くのだ。で、こんな事も考へた。祖母の病氣が差重つて來て、介抱は僕でなければ氣に入らぬと云ひ出す。伯母も然うして上げてくれと頼む。頼まれて看護する、その內に試驗が濟んで僕は已むを得ず落第する。さも無ければ、何うせ死ぬものなら、試驗最中に死んでくれゝば好い。誰も夢中で通す事が出來るのだ。然うあれば好い、然うあれば好いと心に願つた。祖母の死活きるより、僕の方が大事な事になつた。いやな本を讀むより、きよと世間話でもして居たい、とも。

こんな事、こんな冷汗の出るやうな事を考へては、一週間と家に尻が落付かぬ。古雜誌なぞを見て癌腫の妙藥には鬼神草を黑燒にして飲むが好いと出て居るのを見ると、郵便でも濟む事を、翌日は故々出掛けて行つて一端の手柄顏をする。

祖母の容態が好くないと端書でも來やうものなら、僕は直ぐ欝いで、いら〳〵して、居ても立つても居られぬと云ふ容子を見せる。弟でも妹でも好い。

「それほど心配なら、又行つて見て來さい。」と言はれたいばかりなのだ。見もしない夢見を、特に心配らしく翌日涙ぐんで弟妹に話して聞かせたりなぞする。

日は忘れた。明日は歸れと伯父にまで叱られた時、僕は伯母を片陰へ呼んで、手を付いて、聲を顫はして、こんな事を云つた事さへある。

「伯母さん、何うぞお願ですからこちらへ置いて下さい。私は仙臺へ歸つても、學校の事なぞ手にも附きません私が斯うなつたのも皆お婆さんのお蔭ですから、せめて恩返しに看護だけもしたいと思ひます。」

「でも、貴方、試驗が近いと云ふではありませんか。」

「試驗なぞ何うなつても……それに事情を云ふと、追試驗を受けさしてもくれます。」と一寸逃れを云ふ。

「追試驗なぞ受けては損でせう。」

「損だつて、假及第の特典が無いばかりの事です。僕はこれでも、受けた試驗に落第した事はありません。」

「何れ伯父さんと相談はして見ますけれど、云はゞ家督の悌一でさへ、學校が大事と思つて東京へ歸した位ですから。」

「それは然うですが、悌一さんと僕とは違ひます。」

「何うしてね、矢張り同じ孫ぢやありませんか。」と伯母の聲は妙に力を持つた。

「でも、私は長年下田家のお世話になつた身ですもの。」

「祖母さんの御祕藏な强さんだから、悌一などとは違ふと云ふんでせう。」と伯母は聲低く笑ふ。

「決して、そんな。」

「何れまア、何と被仰るか、伯父さんへ相談して見ませう。」と伯母は立つた。

僕は傍に聞いて居た曾祖母に、「ねえ、おひんさん、僕は何んぼしても居たいから伯父さんへ貴方からも賴んでくなんせ。」と加勢を求めた。

「好いとも〳〵、お婆さんの看病するちに誰が何と云ふものか。あんたは孝行者だ私から好く話すから。」と安受合だ。其晩伯父の晩酌に僕は呼出されて「强、主は孝行がしたいとか。本當かな。」と笑ひながらだ。

「本當です。」と僕は俯向いた。何を云出すか分らなかつたので。

「心掛は結構だが、まアお斷りぢや。主等は家を何と思つて居る。まるで戰場だ、孝行する主等は好いだらうが、宿にされるこッちが迷惑だ、なる可くなら、見舞もの位の孝行にして、泊り込む事は御免蒙りたいよ、近頃は私や伯母さんも全で自分の家に居るやうな氣がないて。」

「はい。」

「それに學校もあるこッた。自分の金でもない金で勉强して

居る癖に落第なぞしては申譯ないよ。」

「はい。」

「明日は一番で歸んなさい。」僕は押してとも云はれなかつた。

その晩は月がよかつた。僕は家を出て北上川の川端を歩いた。シットリした夜氣が肌に觸れて何とも云へぬ心持である。袷は輕るし、下駄は輕るし、跫音まで快く自分の耳へ聞える。ブラリ〳〵と歩いた。

病院の前できよに出遇つた。祖母の頓服藥を貰ひに來た所だと云つて抱若荷の定紋ついた提灯を下げて居た。

「どちらへ被行るの。」と、きよの方から聲を掛ける。

「好い晩ぢやないか、全で眠つてるやうな晩だ。」と僕は見過ぎて來た背後を振返つた。濃い河霧は水面を壓付けるやうに低く立罩めて、中洲の松並がボンヤリ薄れて見えた。突端に際立つて濃いのは水神の邊と思はれる。七十幾里の大河はゆるく〳〵流れて居る。何所かそこらの掛船の中で、人の話聲が聞えるやうだが、見た所みな森閑と鎭り返つて、靑い敍燈ばかりがチラ〳〵と帆柱に並んだ。

「明日お歸りなんですッてね。」

「伯父貴があゝ云ふから爲方がない。僕は歸りたくないんだ。」と斯う云つて、凝つと娘を見た。

「伯母樣の被仰りやうが惡るいからですよ。」

「然うだらうと僕も思つた。」

「何しろ貴方を大變疑つてお出なさるから、お隱居樣には內所金でもあつて、それを眞逆の時は、貴方へでも讓りはしないかと思つて被在るやうです。」

「伯母さんが、そんな事。」

「私は何うも然う思はれます。」

「だつてお婆さんにや別に私得もありさうぢやない、見たつて知れさうなものだ——まあ、その邊を歩かう。」と僕は先に立つて歩き出す。

きよは立つた儘、「は、でも晩くなると不可ません、それに私は藥取りに來たのですから。」

「好いよ、何うで就眠前に飲む藥なんだ、お出よ。」と三四歩別れて女を振返つた。明かな月光は俯向いて思迷ふ娘の額にくだけて、何となく顏立を軟かく見せた。色も白々と見えた。

僕は、何が何んでも一緒に歩るかなきアならぬと、心に然う思つた。

思定めて、「ま、私は歸りませう、奧樣に叱られると惡るいから。」と、きよは私と別れやうとする。

「好いよ、それに賴んで置きたい事もある。」

「だツて、晩う御座いますもの。」とあたりを見た、病院の入院室は大方雨戸を鎖して靜かな春の夜をヒッソリと寢鎭まつて居る。

不意に横町からカタコトと人の跫音が聞えた。何所かの小

兒が壜を下けて酒でも買ひに行く所だッたらしい、二人を怪しみながら通り過ぎた。僕は行成駈寄つて、女の手から提灯を引奪つた。そして、フッと吹消した。

「行かう。」と僕は先に立つてズン／＼歩き出した。

きよも後から跟いて來た。「歸らう／＼。」と云ひながら、振切つて歸るほどの强味もない。

僕は何故と無く氣が上づッて、咽佛がこびり付くやうだ。咳拂ひしなければ聲も滿足には出ない。そして、そして、妙に氣がいら／＼する。ズン／＼足早に歩いて見たり、或はユックリ歩調をゆるめて見たり、自分でも自分の心持がわからない。話しは伯母の事だけであつた。僻みが强いとか、腹が冷たいとか、情合が薄いとか、全るで女同士の話のやうな濕つた事をクド／＼話して歩いた。

何會社か、材木を堆く積んである、白ペンキ塗の倉庫の前へ出た。そこからズッと川通りの倉庫がつゞく。河端を通らうとすると、是非その片庇の下、薄暗らい下を通らねばならぬ。

僕は肩をならべてその下を通つた。肩先がチョイ／＼女の肩へさはる。わざと、凝つとさはつて歩いたりした。でも、話はヤッパリ伯母の事であつた。

僕が先に歸つて、きよは後から調剤か手間取つてと入つて來た。祖母は眠り藥の晩いのでギク／＼苦しんで居た。

その翌日、僕は仙臺へ歸つた。

五

仙臺へ歸るには歸つたが、矢張り詰らぬ。家に居て面白い事もなければ、と云つて出掛けて見る所はない。友達どもは皆試驗の準備に忙しく、一人だつて相手になつてくれる者がない。行つても來ても、試驗の話ばかりだ、組織の先生はどんな問題が好きだの、藥物學は暗記が難かしいとそんな話ばかり。聞くのも厭だ、靴に小石が挿つたやうに、歩るく度にチク／＼やられる。落付かない、不安だ、慌しい、寧そ打拋てくれうとも思はぬではないが、偖それが容易な事では無い。思切り惡るく友人から筆記帳を借集めたり、參考書を引繰返したりしては見るが、中々今からの勉强ぢや追付さうにも無い。その時だけは拋出して見るが、直ぐ又未練氣が出るので困る。——試驗までは最う十日とも無いのだ。

殊にこの頃の陽氣が、風物がいかぬ。毎年この頃になると僕は妙に心慌しい、思ひに苦しめられる。東京ならば五月初め、蛙が鳴出す頃の夕暮である。何と云つても、風物の變移のこの頃ほど慌しいことはない。豌豆の蔓が一日／＼目に立つて伸びて、何時か紫色の小花を咲かせた。地には深く濕味と濕味が根差して、吐出す絲が日に／＼濃い、花は散つて葉となつた、青々しい青葉となる。栗の花は香しい香を放つてる。地にも空にも、何所から何所までせきごいろの布置が漲つて居る。靜かに、ゆつたり、暮れて行くこの頃の夕暮は殊に氣

をそゝりたてる。田甫には苗が伸びて蛙の聲がけたゝましい。

僕はその夕暮を、何となく、追立てられるやうな氣で眺めた。

歸つて三日目か四日目に、石の卷から手紙が來た、歸る時病狀を知らして貰ふやうにきよへ賴んで置いたので。それによると病狀は依然として惡るい。唯一の心賴であつた滋養灌腸もこの頃は最う効果がなくなり、一時間と持たずにその儘に通じる、院長も手の盡しやうが無いと云ふ。空しく餓死を待つより外はない。病人は存外氣丈夫らしいが、それだけ見る方はみじめで耐らぬ、と書いてあつた。そして終の方へ來て、故と字を小さくして來られるならば來て見ては何うかと書いてあつた。間に一行ほど眞黑に消した所があるから、日に射して見たが丹念に黑々と塗消してあるので、文句は讀むことを得なかつた。

僕はその手紙を、今年尋中の三年生なる弟に見せて、何うあつても又行くと云出した。この頃は弟や妹どもまで僕の試驗近いのを心配して彼是と云ふ。朝などは煩さく起されるのだ。

「でも試驗前だからね。」と弟は年に似合はず、考深い樣子で云ふ。

「試驗前だつて關はん。大事のお婆さんが死ぬんだ、僕は誰が止めたつて斷然行くと決めた。」と、さも決心したと云ふ目付で、あたりを睨むやうに見た。

「ぢや、僕も行く。」と弟は云出した。「僕も一度は過つて置きたい。」

「然うか、ぢや行かう。」と僕は喜んだ。一人で行くより、二人で行く方がどの位口實になるか知れないので。

「ぢや、今夜行かう、今夜。」と僕ははしやぎ出した。

「今夜と云つても船はない。」

「陸を廻つて歩るくのさ、松島まで汽車で行けば、あとは高々七里だ。夜道をかけると夜明までには大丈夫着くから。」

「だッて、この天氣ぢや、路が何うだらうな。」と弟は空を見上げた。昨日までの降續きの雨が上るには上つたものゝ、まだスッカリ晴れたと云ふでは無い。

「關はん行く。」と僕は云つた。

西洋蠟燭と蝙蝠傘と、それに釣に行く時の手提カンテラとを用意して、僕等は出掛けた。松島へ着いたのは午後九時、これから山越し七里を歩む了見なのだ。些と寒むからうとは思つたが、シャツを二枚重ねて僕は新しい方の夏服を着た。

舊曆の二十日過ぎ、殊に雨上りの路は思つたより難澁であつた。高城、行田、小野と段々道が惡るくなる。その上、近々東宮殿下の行啓があると云ふて、沿道は道普請の最中、砂利の山がそこゝにある。

早寢の田舍町は旣うに寢鎭まつて、眞黑く鎭り返つた繚林の下に深々と眠つて居る。小町の町はづれ、立場茶屋らしい家の戸が一枚明いて居て、そこから赤々とした光も洩れ、人の

話聲も聞えたきり、蜿り曲つた六里の田舍道の間、光も聲も聞かなかつた。僕等は用意の草鞋を三度踏切らした。

小野を出て矢本、それから大曲、こゝから石の卷までは既う一里半に近い、初夏の三時過ぎ、僕等はそこの田圃道をビシヤ〳〵越して行く。大曲は椿の名所、名物の椿油が出る。垣に沿ふて家毎に植込んだ椿の下道、それも長い〳〵鍵形の田舍町を出切ると、何とか云ふ長い木橋があつて、そこらは吹曝しの田圃道である。兩側は水田、所々に松並木はあつた。あれでも小半道、それとも未だ近いか、その道を通り越した所が大街道の入口で、コンモリ茂つた木立が闇を透して黑く〳〵見える。その直ぐ手前に又橋がある、これは野非運河の橋である。

橋の手前二町ばかりの前へ來ると、弟が偶と行手を指して

「兄さん、あれは何んだ。」と聞く。

高々と茂つた黑い森の上にキラ〳〵と明星より大きい光を見たので。

「舷燈ぢやないか、船の。運河に泊つてる船もあるから。」

「それにしちや高すぎる。」

「然うだな。」と話しながら歩いた。明けの星には形ちも大きい、それに雨空で星なぞのあらう筈はない。弟は切りに不審がるが僕は別に何とも思はなかつた。

運河の橋まで來たが、泊り船らしいものは一艘もない。渡場の竿燈かと思ふに、何うもそれらしくない。

「不思議だな。」と弟は聲を變らせて、「若しやお婆さんに變事でもあるんぢやないか」と云ふ。

「お婆さんの變事。」と聞いて、僕は、正直のところ、何とも云はれぬ心の輕るさを覺えた。伯母や伯父、第一は病人の意嚮を心に畏れて、何とか旨まく入り込む工夫はなからうかと、そればかりに屈托して居る所なので。

「然うだな、舷燈ぢやなし、星ぢやなし、おい、些と急がう。」と、僕は急ぎ出した。弟も默つて急いだ。

大街道の梨畑を通抜けると、これからは日向山續きのダラ〳〵坂である。雨に濕れた赤土道は一歩毎にズルリ〳〵とすべる。

山下まで來ると夜が明けた。路傍の馬屋ではバサリ〳〵と尻尾を振りながら、秣を嚙む馬の鬣がモリ〳〵と聞えた。牛乳屋の若衆は何か流行歌を唄ひながら、カンテラを點けて乳を搾つて居た、霧の深い夜明けであつた。

「然し今の光ものは不思議だな、見ろ、お婆さんに何か變つた事があるから。」と僕は弟を顧みた。

「不思議だ。」と弟も云ふ。

「船だら一艘無かつたぢやないか、無論星ぢやないな、そら、あれが星ならこゝからだつて見える筈だ。」と僕は飽まで弟の印象を深からしむべく、先づ自ら疑つて見せた。

弟は頷いて同意した、僕はそれを見て安心した。

六

伯父の家に着いて見ると、この朝早く、玄關も勝手も戸が明いて居る、自分は故と避けて弟に案内を乞はしたが返事が無い。家の中はヒツソリと鎭まつてコトリとも音はしない。二三度續けて弟は「伯母さん〳〵。」と呼んだ。

きよがヒヨツクリ顏を出した。疊に跫音も聞えなかつた。

僕等の顏を見ると、「サア早く、裏から廻つて、足なんぞ何うでも好いから。」と慌てきつた口振である。

弟は僕の顏をチラと見て、慌てゝ裏口の方へ廻つた。僕は故と後れて後に跟いた。

「勇三か、好く來た、泥足でも好いから緣端へ匐つて。」と伯父の聲である。そして、病人へは大きな聲で。

「お母さん、仙臺から勇三が來ました、勇三です。」と耳元で大きく叫んだ。

僕も顏を出した。皆の氣勢を伺ふ可く、わざと潛戸のところで脫れもせぬ脚袢の小鈎を直して居たのだ。人々への挨拶もそこ〳〵弟の上から顏を出した。病人は昏睡のさまで、些いと目を開いて二人の顏を見た。が、又ウツトリと眠つた。外から入つた病室は未だ夜であつた。昨夜のまゝである。一枚明けた雨戸の透間から、眞白な朝の光線が病人の顏へ落ちた。二分ランプが一つ細々と枕元に點いて居た。

今醫者の歸つた跡と見えて、枕元には手洗の金盥と石鹼とが出したまゝである。その傍には黃八丈のどてらを着た伯父が膝を高く坐つて、後には伯母を初め母も從妹もきよも、それから手傳ひの人々も坐つて居た。

「何うなすつたんです。」と僕は聲をはづませた。

「困つた。」と伯父は病人の顏を見て居られた。

「勇三さん、夜道なの。」と伯母は低い聲で弟に尋ねた。

「家を出たのが昨夜の九時です。」

「まア大變でしたね、さぞ疲れたでせう、最少しすると朝湯が沸くから錢湯へ入つて被在い。」

「は、なアに。」と勇三は何時もの謙遜した調子である。

「仙臺では誰も變つた事はありますまい。」と伯母は弟とばかりに話して居る。

「は、ありません。」

「從吉は來ると云ひませんか。」

「いゝえ、別にそんな話を聞きませんでした。」と横間から僕は話を奪つた。

「然うですか。」とばかり伯母は他に言葉が無い。

「それに、實に妙な事があるもので、途中で實に不思議を見ましてね。」と僕は言出したが、誰も身を入れて聞いてくれるものが無いので、「なア勇三、僕にや未だ分らない、一體ありや何んだらう。」と味方に取る。

「さあ何んでせう。」と弟は言葉すくなに周圍を窺つて居る。

「途中で光ものを見ました。」と僕はなるたけ弟に言葉を添へ

させながら、途中で見た事どもを委しく話した。そして、「僕は何う云うもんでせう、仙臺に居ても夢を見たり、あんな變事を見たり、自分ながら實に不思議で耐りません。」と添加へた。

弟が保證するので、人々も幾らか耳を立てたやうであつた。

「餘り不勉强をして祖母さんに心配をかけるから、祖母さんも强のために迷つて御座るんだ。」と伯父は苦い顏であつた。

「然し、全く知らせなんてものが……。」と云掛けると、伯父は苦い顏して、「おい枕元で何を云ふんだ、それより早く足でも洗つて來い。」と立ちながら枕元のランプをフッと吹消した。白い煙がホヤをスウッと騰つて、室の中が急に油烟臭くなつた。朝の强い光線は北向のガラス障子からスッと射込んで、病人の顏へ當つた。

痩せた、痩せた、五六日前の人とは思はれぬほど痩せた。

七

その日と翌日、二日續いて病人の元氣は大變好かつた。醫者は來るたびに眉を顰めて、「お大事に〳〵。」と言ひ置いて行くが、われ等には何うも飲込めない。この通りに行けば立直さないとも限らぬ。現に昨夜なぞは生薑湯を吸ひたいと云つて、旨さうに三口も吸つた。唇の色も目に立つて好い。今朝出勤がけに伯父が枕元へ行つて、「何うです。」と聞いたら、笑つて、「同じ事さ。」と言つたと云ふ。二月近く絶食して居る人の聲とは思はれなかつた。

伯母は勇三ばかりに目をかけて居る。それ氷囊の檢溫器のと、僕を置いて弟の手ばかり待つて居る。病人も勇三を引付けて、時々色んな事を話して居るやうだ。「今井の家を是非立てゝくれ。」などゝ、僕の事などは一向氣にも置かぬらしい。そして、病人と僕と二人ぎりで話しでもして居ると、屹度來ては妨げる。それがひどく面白くないので、僕はなるべく曾祖母の行火にもぐり込んで居た。曾祖母は又この頃の忙しさにかまひ手が無い所から僕を引付けて色々な話をする。そしちや、「强や、あすこからお菓子を持つて來なさい。」とビスケットやドロップを搬ばせては盜喰をする。僕には何方でも同じ事だから云ふがまゝに年寄の食慾を充させて居た。

きよも忙しいので、然う染々話して居る閑が無い。前の晩蒲團部屋の暗い所で顏を合はせた時、きよは聲を潜めて、「伯母樣が貴方を疑つて被在るから氣をお付けなさいよ。」と云ふ。

「何んで、僕は。」

「それでも、長くあゝして身上を持つてお出なさつたのだから、貯金か何かで私得金があつて、それを强さんに讓りなさるだらうと思つてお出のやうです。」

「馬鹿〳〵しい、そんなにまで人を疑るものかな。」

「見えるぢやありませんか。」

「關ふもんか、僕はお婆さんに萬一の事があつたら直ぐ東京へ行くから好い。」

「東京へ？」ときよは驚いたらしい。

「行くさ、最う爲方がない。斯う身内から見離されるやうでは。」

「本當ですね。」と、きよも溜息を吐いて、「本當に貴方はお氣の毒ですね。」と軟かい女心を見せた。

「お前ばかりだよ、同情して呉れるな。」

「だつて、私ぢや何の甲斐がありませんものね。」

「お前だけだよ、お前だけだよ、僕は決してこの恩は忘れないよ。」と故と意味深さうな聲を顫はして聞かせた。

「あれ、そんな事、私なぞは。」

「全く感謝するよ。」と僕は又繰返した。

「きよや、きよ〳〵。」と僕は又側の方で從妹が呼ぶ。

「ぢや。」ときよは僕の目をチラと見て、そして出て行つた。

夕方から祖母の樣子がグッと變つた。齒洩れはしても掠れても、何うやら聞えた聲はピッタリ止つて、咽頭佛がグビ〳〵と始終動く、眼が鈍つて、第一は足に腫れが來た。

「足が腫れた。」と看護に來て居るおきわが眞先に見付けて報ずると、皆代り〴〵用をかこつけて病間へ入つては足を見て來る。僕も見た。直ぐ使を走らせて、役所から伯父を迎へた。

伯父は忙しく袴のまゝに枕元へ通つて、「お母さん〳〵。」と慌てた聲で呼んだ。

病人は存外に落付いて目を開いた。腹が苦しい、押して〳〵。」と云ふ。

伯父は耳を押付けてその聲を聞きながら、「おい、强、腹を押して上げろ。」

僕は云はれるやうにした。

「苦しい、苦しい。」と病人は喚きながら、手を所在なさに蒲團の外へ出す。

「何うなつたんでせう、急に、今までこんな事はありませんの。」と伯母は手を引込めてやりながら、不安さうな小さな目を伯父に向けた。

「癌が破れるんだらう。」と伯父は祖母の額へ手を當てた。額からは油のやうな汗が流れた。

僕は片手にそつと脈搏を取つて時計に合せた。成程頻數だ、一秒に百七つを數へた。それに體溫も何時もよりズッと上つて居る。

「苦しい〳〵、もう些と上だ。」と病人は力を籠めて僕の手を鳩尾に引いた、果して凝りものゝある所である。

「こゝですか、お婆さん、こゝですか。」と僕は押へた。

「うゝ、うゝ。」と病人はツイに聞かせた事の無い、力ない喚き聲を聞かせた。

夜になつても、病人は鳩尾が苦しい〳〵と苦しみ通しであつた。二月近い絶食に痩せて、弛んで、彈性のない皮膚から油汗をブッ〳〵搔いて苦しむ。腹筋は板のやうに突ッ張つて、

時々ヒク〳〵と動く。醫者は二度も來たが別に手の盡しやうもなく、カンフルの注射をする位なものだ。モルヒネをと頼んで見たが、この衰弱した患者には無理だと云つて聞かなかつた。爲方がないから僕と弟と代り〴〵患部を擦つてやつた。

「蜜柑が喰べたい。」と患者が急に云ひ出した。十時過ぎでもあつたらう。その時は幾らか疼痛も落付いて、うゝ、うゝ、と唸りながら肩で息を刻んで居た。

「又吐く時に苦しむから。」と僕は止めて見たが、何うしても聞入ないから、夏蜜柑を二片出すと患者は旨さうに食べた。存外好く落付いた。そして、「强、くたぶれたらう、もう好い、落付いた。」と云ふ。で手を放すと、祖母は又苦しさうに喚いて、息遣ひが段々荒らく迫つて來る。押してやると直る。もう腹筋に力が無くなつて、獨りでは呼吸が難かしくなつたので、僕は息の呼吸に合はせて按腹して居たのだ。

「私些と代りませう。」ときよが濡手を火鉢で乾かして手を出した。

「なァに好い。」

「代ります。」ときよは夜着の中に手を入れた。

病人はスヤ〳〵と眠つた。眩しい光線を嫌ふので、枕元に小さなランプ一つ點けてあるばかりで、室内は薄暗かつた。それに伯父や伯母も故と遠慮して居るので、室の中には僕ときよの二人ぎりだ。

僕ときよは膝をならべて坐つた。互に肌温みが通る位である。僕の方で些と俯向き加減になると、きよの鬢のそゝ毛がサラ〳〵と僕の頰へあたる。蟲に這はれるやうで擽たい。些いと避ける。でも、細い髭の毛を便つて同じ感が娘にも傳はると見えて、眞面目な顏で他方を見ながらソロ〳〵と寄せて來る。腹が立つから今度は此方から突いと顏を押出す、慌てゝ女が逃げる。追つてやる、追はれる。そして、夜着の中でも互の手が些い〳〵と觸る、遁げたり追つたり同じやうな事をして見る。

「むゝ、苦しい。」と病人が唸つた。二人は顏を見合はせて、留守にした指に力を入れた。きよは首を縮めて舌を吐出した。

「强、誰も居ないか。」と病人はハツキリ目を開いて居る。

「孝行……母へ孝行……私の遺言だから、何うかの。」と云ふ。

「は、承知しました。屹度します。」

「それに、どんな貧乏しても屋敷は離す事ならないぞ、あれは婆がお母さんさやつた屋敷だから。」

「はい。」と話して居る時、「强、强。」と呼ぶ聲が聞える。伯父の聲である。

「强、きよに頼んで些いと來い。」と云ふ。

「はい。」と答へて立つ。

「伯母さまですよ。」と、きよは低聲で云つた。

「何有。」と僕は立つた。

薄暗い次の間へ出やうとすると、そこに伯母が立つて居た。伯父の用事は大した事でもなかつた。

祖母樣の話は何んだッた。」と常になく嚴かな聲である。

伯母は入つて來てキチンと坐つた。

「何でも無い事はあるまい、何かあるだらう。」と疑ふらしい目付。

「屋敷〳〵と被仰つたぢやありませんか。」と伯母が云ふ。

「何有。くだらん事です。」

「くだらん事でも好いが、餘り病人と話しては不可ないぞ、精神を刺戟して惡るいから。」

「は。」

「お母さんは强さんが御祕藏だから、何か御遺言でもあつたのでせうよ。」と冗談らしく云つて伯母は立つた。

僕はムツとしたが何も云はなかつた。病室へ入るのもいやだから、直ぐそこから離屋の曾祖母の所へ行つた。

曾祖母は獨りで氣を揉んで居た。

「お婆さんは何うだ、惡るいか。」

「然う大した事もありますまい。」

「何も食べないッてな、それ一番惡るいから、何か食べるやうに貴方からすゝめなさい、喰べないでは精がつきる。」

「はい。」

「そこらにビスケットがあつたらう。私にも一つ。」と直ぐ手を出す。

「は。」と菓子器ごと取つてやつた。

附錄(一)

第一人者

人物 理學博士 稻崎元城　同 長女 みち子
同次女 俊子　みち子長男 徹太郎
老婢 ろく　其他、下男多作、會社員人夫等

處——澁谷邊、博士自邸

時——現代

博士邸、裏庭、十月下旬、午後三時頃、大暴風雨の翌日の事とて滿目蕭條を極む、空は高く澄みて、日の光、夏よりも明かなり。

裏庭は博士逍遙の場なり。抱へ以上に餘る欅の樹中央より左手へかけて三四本立ならび、その前に秋草の花壇、盆栽棚、ベンチなど態好くしつらひあるが何れも夜前の風雨に傷ましく荒廢し、既に伸びつくせる秋草は風に折れ泥に伏し、木柵盆栽の破損も少なからず。特に霄氣に中りて、眞中なる欅の大枝のむごく枝裂せるが、まだその儘幹に掛れり。樹間を透して前に展開するは郊外の平原にて、低き森、雜木林、草野など遠く連續す、立樹の後に低き木柵あり、直に懸崖に續く心持を示す。

右の方斜めに西洋館の側面を見る。所々塗色の剝離せる、質素なる木造、二階建。階上は博士の書齋にて、半開きの窓には萠黃色のカーテンを掛く。階下の眞中に兩開きのドアあり。石段を下つて中央の裏庭に通ず。ドアの左右は硝子窓。石段の下、少し右手寄りにやゝ大形にして岩盤なる塔形の犬小屋あり、博士の愛犬ユウラを飼ふところ。

老婢ろく、六十二、白髮、眇目、竹箒を持ちて犬小屋の前に立つ、落葉を掃除し居たるところ、博士の妹娘俊子、二十二、色白く豐かなる肉置き。長き袂を膝にして、石段の上にしやがむ。

俊子。（屈託さうに）何うせうね、嫗や、私困つて了ふわ。
ろく。何うせうたつて、外に爲方はありません。
俊子。何うでもお父様へ然う申上げるのかね。
ろく。然うですとも、これが何時まで知れずに居るものぢや御座いません。
俊子。でも、私にや云へない。
ろく。何故な。
俊子。お父様がまアどんなにガッカリなさるだらう。病氣を

爲さるかも知れないわ。
ろく。高々犬一匹位な事で。
俊子。犬一匹だつて、お父様はあんなに大事にして被在つたんだもの。
ろく。だから貴方はお氣が弱すぎる。これが廣島のお姉様で御覽なさい、何でもない事です。幾ら旦那様が癇癪を起したと云つて、遁げて居ないものは爲方がありますまい。全體貴方はふだんから物事に臆病過ぎます、自分で自分の身體をつぼめ出しては際限のないもの。油賣が地獄、何所までも墜ちて行きます。
俊子。全く私は弱いのね。
ろく。弱い事が何の見得になります。些と廣島のお姉様でも見習つて、氣を濶達にお持なさい。人間弱い事を賣物にしては最う仕舞です。貴方は今が大事のお體ですよ。
俊子。廣島の姉様と私とは違ふもの。
ろく。だつて、同じ血統の御姉妹ぢやありませんか。
俊子。姉妹でも心は別々、みな違ふわ。
ろく。それ、そのお心だから、畢竟、今度のやうな目にもお遇ひなさる。貴方、口惜しいとは思召さないか、なんぼ親御だつて無理は無理、無理に從ふ理窟はない。
俊子。口惜しいなんて、そんな事。お父様の爲さる事だもの、何とも思はないわ。
ろく。心の、心の底から？
俊子。あゝ。と（俯く）
ろく。また、それだもの。貴方は何うして然う意地がないんでせう、嫗やは腹が立つてなりません。
俊子。けども、お父様だつてお可哀さうよ。
ろく。私は又旦那様の爲さる事が恐ろしい。以前はあんな方ぢや無つたが、近頃はまるで最う魔です。
俊子。そりや、賢吉の事があるから然う思ふのよ。
ろく。賢吉？　賢吉の事はもう過去つた昔です。私は旦那様の恐しいのは、今も將來も、何時までも〳〵續いて行く事です。
俊子。全くお父様は不運な方ね。考へると私、お氣の毒でならない。
ろく。何故そんな事を被仰る。
俊子。嫗やにはそれが解らない？　あゝして長い間、生命も財産も放り出してやつと爲遂げた事業を世間が認めてくれないんだもの。御當人の身になつたら、まあどんなに口惜しいだらう。この頃のお窶れなすつた事を御覽。まるでもとのお父様ぢやない。お食は減る、夜だつてオチ〳〵おやすみにならない、些いとした物音にも驚いては指先をピク〳〵動かしてお在になる。一日〳〵お痩せになるのが見えるやうだ。私はそれを見る度に、涙が零れるわ。これが一身の身欲に喰はれたとか何とか云ふではなし、みんな、學問の爲にお盡しなさるんだもの。（と優しき涙にくれる）

ろく。なんぼ學問の爲めだと云つて、人間には道と云ふものがあります。女房兒を泣かせて置いて、それで學問が何んでせう。

俊子。だから嫗やには解つて居ないんだよ。學問は一人二人の爲めぢやない、廣い世界中の人の爲めに盡すんだもの。（と、氣を換へて）そして、あの、ユウラは何うしたらうね何所へ行つたらう。

ろく。（忌々しげに首を振りて）何所へ行きませう、あんな、狂犬。

俊子。殺されやしまいか、可哀さうに、早く歸つてくれば好いにね。犬つてものは一生飼はれた家を忘れないと云ふから、今に疲れて歸つて來るかも知れない。

と庭へ下りて犬小屋など覗見る。

ろく。飼はれた家ですつて？　此家をですか、何んの、そんな事。繋れて居た家です。鎖が切れて自由な身體になつて、今頃はさぞ暢氣に飛廻つて居ませう、人に噛付いたかも知れない、狂犬！

俊子。でもお父様にだけは馴れて居てよ。

ろく。爲方なしに從つては居ました。鎖があるもの、犬だつて何うする事も出來ません。

俊子。嫗やは何故然う頑固だらうね。お父様の事と云ふと、仇敵のやうに憎むんだもの。——けど、無理もないわ。一人ッ兒の賢吉を亡したのも、云はゝお父様の爲めだもの

ね。あの時　お父様のお供さへ爲なければ、嫗やも今頃は樂に賢吉の世話になつて居られるんだのに。　嫗やには全く濟まない事をしたのね。

ろく。賢吉は賢吉、私は私。　あれの死んだのは心柄で、何も旦那様に關つた事ぢやありません、私は決して旦那様を恨みはしませぬ。旦那様が無くとも、あいつは何うせろくな死態をする奴では無い。（と、急に共邊を掃き集めながら）私には子ぢやもの、あれの氣性は好く飲込んで居ます。小兒の時から、妙に意地ッ張りの強い空騒ぎな、浮々した奴で、沈着いた考は微塵無い、調子に乘ると火水の中へでも飛込む馬鹿者でした。旦那様のやうな學者なら學問の爲めと云ふ事もありませう。テンで學問もした事のない賢吉が、何んでそんな考がありませう。北極とやら、人の行かない所へ行くのが、唯見得に嬉しかつた馬鹿者です。あれの親父と云ふのも矢張りそれでな、頼まれもせぬ尻馬に乘つて、到頭生命まで棄てゝ了ひました。

俊子。まア然うなの、西南の戰に死んだとは聞いて居るが——

ろく。あゝあ、血の筋は七代とやら、親子共に好く似た氣分でした。薩摩の戰の時、高が兵糧方の人夫の癖に要らざる忠義立てをして、誰も行手の無い田原坂のお使者を、自分から望んで出たと云ひまする。　怜悧な人は頼まれても御免を蒙ります。それをな、親父は度胸とか膽玉とか、それは下

らぬ馬鹿〳〵しい見得を張りたいばかりに、己から進んで死に行きました。その心は何も、お國の爲めとか、大將のためとか、そんな深い考のあつたのではない。調子に乘つて何でも他の出來ない事をして威張りたいのが疾ひ。かげで他に笑はれるのも知らない、お先ッ走りです。——好く度胸々々と云ふのが口癖でな、貴方。賢吉も矢張りそれです。唯もう我性氣に喰はれて、前後の考も分別も無く、益體もない空騒ぎに生命を棄てた馬鹿者です。

俊子。それとは違ふ、賢吉は學問の爲めに死んだのだもの、人間が續く限り賢吉の名は消えない。

ろく。體が死んで名が何になります。親父の死んだ時でも、皆様は然う云つて慰めて下さいました。それから五年經ち……七年經ち……十年經ち……あゝ。

俊子。賢吉は幾つだつたらうね。

ろく。東京を發つた時は二十六でした。でも、死んだ時も所も、旦那様にさへ分らない位ですもの、幾つで死んだか誰れが知りませう。

俊子。元氣の好い、賑かな人だつたがね。

ろく。（聞えぬさまにて）あゝ、馬鹿な奴、馬鹿な奴、大事な一生を火事場騒ぎに過した馬鹿な奴。（とつぶやき居る）

俊子。考へると嫗やも氣の毒な身の上ね。

ろく。泣かせる人は結構我慢も出來ます、でも、泣かせられる身は何うでせう。やれ、世界のため、學問のためと煽られて、それで縋が付きませうか。奥様——お母様を御覽なさい。矢張私と同様、何も解らない、何も知らない組の方で、世界のための、學問のためのと云ふ、そんな難かしい事は考へる閑も無く、たゞ御自分の一生を苦に疾んで被在つた。貴方々御姉妹の寄ばかり心配してお出になつた。旦那様が遠い向岸を見て被在るのなら、奥様は直ぐ足許ばかり見詰めてお出なさる。どちらも一役。遠い處を見ないと云つて、足許を見る人を咎めると云ふ法は無い。そして、あの通り一生苦しみ通し、ついぞ一日あけいしいと思ふ日もなく、旦那様のお身を思ひ死にお亡りなされました。奥様のお心になつたら何うでせう、心の中では屹度旦那様を恨んで〳〵恨み拔いて被在つた事と思ひます。

俊子。（黙然として）全くお母様の事を考へるとね、私——

ろく。奥様は貴方です。奥様は五年の間お苦しみなさいましたが、お孃様はこれからの一生です。

俊子。私は最う何も考へない事に決めてるの、考へたつて何うにも爲ようがないもの。

ろく。それ、そんな心で被在るもの、嫗やは心配で夜もロクに眠られません。

俊子。學者の妻子は何うで不幸よ、何所でも皆然うなんだから、お母様も學者と結婚なぞなすつたのが惡るかつた、初めから間違だつたわ。

ろく。いゝえ、私は然う見ない。皆旦那様がお惡るいのです

若い、世間見ずの娘樣に、何の深い考があります。娘がお嫁になるのは、たゞ今までより好く活きたいばかりの慾です、體を貰ふとも吳れるとも思つては居りません。みな銘々の慾です。誰がお嫁に行つてまで苦しみたがりませう。それほど大事な學問なら、寧ろ奧樣なぞお持なさらなければ好い。

俊子。眞逆そんな事、それが世間の慣習と云ふものだもの。

ろく。それならば、と、私は云ひたくなります。貰つた後にも慣習と云ふものがあります。あんなに生涯苦しめ通さないが好い。私は今度、ツク〳〵旦那樣のお心を見破りました。恐しい方だ、人情も何も無い、全るで石のやうな方だ。西洋からお歸りになつて、初めて奧樣のお位牌にお會ひになつた時、——貴方も側に聞いて、お出でゞした、お父樣は何んと被仰つた。「喜んで貰ひたい、私や辛つと目的を達して、北極を探險して今歸つた。」と斯うでした。嬉しさうなお聲でした。

俊子。「それで皆お前達のお蔭であつた。」とも心底から私共へ被仰つたわ。

ろく。それが何です。云はゞ、御自分が殺して置いて、そして喜べも無いもんだ。その人の生膽を取つて喰べて、それで病氣が癒つた、喜んでくれと死骸に禮を云うやうなもの。私はあの時から、實に恐ろしい人と顫へ上りました。

俊子。もう好いわ、嫗や。

ろく。いゝえ、好か御座いません。貴方のなさりやうが何うにも餘り手緩いから、私は默つて見ては居られません。

俊子。それは私より姉樣に申上るが好い、丁度今日お出になるんだから、都合が好いぢやないか、私には何うしても、そんな強い口は利けないもの。それよか、私差當つてユウラの事が心配、お父樣が若しお聞だつたら何う申上げやうね。

ろく。犬なんか何うでも——犬より人間が大事でせう。

俊子。だからさ、それで心配してるのよ。

ろく。あの犬は魔ものです、執れ業の惡るい四つ足です。あれが居るから段々旦那樣も氣が興ぶります。あの犬と凝と睨合つて、何か話して被在る時の樣子を御覽なさい。あの目、あの凄い目付、兩方で——人と犬と、その目を凝つて睨合つて居ます。あゝ思出してもゾッとする——あゝ、狂犬、狂犬、ペッ、ペッ。(其邊に唾を吐く)

俊子。でもお父樣にはそのユウラが唯一の慰藉者なんだもの。お友達にも味方にもあの犬だけよ。

ろく。(冷かに嘲笑つて)世間に棄てられて、狂犬がお友達!

それもまア好ろしからう。

俊子。お父樣の眞實を知つてるのはあの犬だけよ。

ろく。然うでせうさ、何うせ人間には解りません。

俊子。然う云つて了へば爲方が無い。嫗や何故然うだらうね。

ろく。私は旦那樣と性が合ひません、大嫌ひです。戊の我分を何所までも貫かうとなさる。貴方がお最惜しいからこ

そ、斯うして辛抱をしますものゝ、旦那樣だけなら疾くにお暇を頂いて居ます。

俊子。思込んだら一徹だからね。

ろく。(獨話のやうに)あゝ、奧樣はお憐憫な方だつた、お亡りになる際まで、ツイぞ一言、恨がましい事を齒の外へお出し爲さらぬ。よく辛抱なすつた。お心の中はまアどんなでしたらう。

俊子。(打萎れて)また、そんな事。もう〳〵その話は舍さうよ。お母樣の話になると、私はもう……(と吐息を洩して)それにね、嫗や、姉樣が被來つても、決してそんな事を云出さないやうにね、氣性の烈しい姉樣の事だから、又どんな事をお父樣へ云ふかも知れない、私それが心配だわ。あんなに苦勞して被在るお父樣のお壽命を削るやうなものよ。

ろく。でも、何方道一騷ぎはあります、また、無くては嘘です。態々廣島からお出なさつた甲斐がありません。

俊子。(大息を吐いて)困るのね。

ろく。それだから貴方は苦勞性過ぎる。

俊子。だつて、嫗や、お父樣だつてお氣の毒だものね。

ろく。(偶と心付いて空を見上げ)あ、日が射して來た、この分なら落付くかも知れない、お座敷の掃除でも爲ませう。お世話になる間は御主人の家だ。(と立ちかける)

俊子。あれ、嫗や、ユウラの方は何うするの、私一人に押付けて了ふのね。

ろく。さつきもお話しました通り——

俊子。ぢや斯う爲よう、姉樣が被來るまでは默つて居て、姉樣から折を見て話して頂く事にしよう。ね、それが好いわ、姉樣にはまた好い工夫があるかも知れないから。

ろく。は、それも宜しう御座いませう。

俊子。あれ、だつて嫗やがその氣で居ないでは、私一人何うする事も出來ない。

ろく。私は何方でも宜しい。(と入る)

引違つて檜崎博士、扉を開いて出づ。六十四、長髯、白髮、悄悴のさま著しく、顏容枯槁、烈しく目を瞬く癖あり。裾長き暗褐色の寬服を着け、杖にすがり蹌踉として歩む。眼底炎にかゝりて視力衰へ、口も吃して多く言ふ能はず、間々聞取れぬ所もあり。

博士。(扉に倚りて)ユウラが何うぞしたかね。

俊子。(ビックリして振向き)あら、もうお目覺めでしたの、私些つとも知らずに居りました。

博士。昨夜の暴れは何うだ。(と犬には何の氣も付かず、不隨の足を引擦りてヨボヨボ庭へ下りんとす)

俊子。あれ、危ない。(身敏く駈寄り、親切に介抱して樹下の籐椅子へと導く)

博士。何有、大丈夫〳〵(と椅子に重くかけて(俊、喜んでくれ、やつと原稿が出來上つた。

俊子。まあ、それは——全部で御座いますか。
博士。思ひの外大部になつてな、千頁近くもあるだらう。
俊子。では、昨晩も徹宵起きて被在つたのですか。
博士。あれが神來と云ふものかな、昨夜は恐しいほど興が乘つての、や、書ける〳〵自分ながら不思議に思ふ位だつた。
俊子。まあ、あんな恐しい中で？
博士。外の暴れなど、トンと耳にも入らん。持つて居るペンに雷氣が傳つて、中の指がビリ〳〵痺れる。その爽快さがよ——まるで魂が蘇へる心持ぢや。その中に丁度拂曉、三時頃だ——それ、暴風雨が絶頂と云ふ時分、私は獨り出廊の上に突立つて居たが、何しろあの雨だ、暴風だ、雷鳴だ。見る限り一面は、たゞ焔と闇の戰、力と響の大なる鬪ぢや。燃立つ時は空も土も總て燃える。滅する時はたゞ無限の闇。焔と闇——世界を支配するのは、唯この二つぢや、それが總てだ、外には何も無い、何も無い。人間の感觸と云ふもの、まゞ眼も口も耳も、こんな場合は何の益體も無いもの、まるで無覺性だ。一つ一つには何の働きは無い、たゞ總體に働く或る偉大なる力——大自然の威嚇と云ふものか、それを感ずるに過ぎない。私は物の如く無言で突立つて居た。たゞ豪壯で、壯嚴で、私はあの時以來こんな絶大な光景に接した記憶が無いと思つた。鄙顳の血がクル〳〵と鳴る。
俊子。私はまた嵐やと二人、寢床の上に顫へてゐました。
博士。その中に雷は益々烈しくなる。世界はたゞ焔ぢや、力ぢや、響ぢや、四五度も落ちた。それ、その欅に落ちた時なぞ、私は血の焔の中に突立つて居たと思つた。
俊子。まあ——。
博士。その時ぢや、私、偶と氣が付いて、耳を澄してな、ドンと強く床を蹴つて見た。（と大地を蹴つて）一度は聞えなかつた、二度……三度……然うするとな俊子、聞える〳〵、ドンと蹈む我の足音が聞える、何度でも聞える。嬉しかつたよ、俊。で、私は斯う思つた、如何に自然が大威力を振うても、此所に、此所に立つてゐる私の足音を奪ふ事が出來ぬぢやないか。音も響も焔も私の領分を侵す事が出來ぬ。外は外、我は我、別々の世界だ。自分の耳に自分の足音を聞く間は、吾、茲にあり、茲にあり、と然う叫ぶ權威を持つて居る。何人も拒み妨ぐる事の出來ぬ力を持つて居ると、然う思つた。（と、情激するまゝに、切りに拳もて胸を打ち打つ）

俊子氣を揉みて、先程より「お父様〳〵。」と、話を他に紛らさんとつとむ。

博士。（氣が付きて）何んだ。
俊子。あの、姉様はもうお着きになる位でせうね。
博士。二時に新橋へ着くと云ふから、最う追付だらう、徹太郎も來ると聞いたら、妙に待たれるわ。
俊子。さう〳〵お父様は徹ちやんに初めてですね。

博士。昨年來た時は道一人であつたから、ツイまだ孫の顔も見ない。
俊子。それはもう可愛い兒よ。
博士。今年八つになる譯か。
俊子。いゝえ、九つ、腕白盛りですわ。
博士。妙なものぢや、自分でも年寄つたと思ふよ。去年までは何ともなかつた徹太郎が切りと戀しくつて夢に見た事さへある。私は全く老込んで了つたの。
俊子。御苦勞が絶え無いからです。（と溜息を吐く）
博士。然うかも知れないの。
俊子。世間は世間で何うせ爲方がありません。然う餘り氣をお揉なさらないで、いつそ、打遣つた氣で被在つた方が好いでせう。
博士。さあ、私も時々はさう思はんぢやない。然し如何にも心外でな、何うも我慢が出來ん。如何に盲目な世間と云つても、事實を見せて尙信ぜられんと云ふ事が何所にある。事實は事實だらう、最後の證據だ、私を信ぜぬは好いとしても、事實まで疑るのは無法極まる、心外だ。
俊子。全く運が無いのですね。

處へ、ろく、一枚の名刺を持ちて出來る。

ろく。旦那様、この方が被來いました。（と名刺を差出す）
博士。（それを俊子に渡して）眼鏡を忘れて來た、お前讀んで見てくれ。
俊子。第三線行員、岡本淳吉としてあつてよ。
ろく。外に人夫らしい男が二三人も參りましたらうか。
博士。大方屋敷を測量に來たのだらう、御隨意に、と、然う云つてくれ。
ろく。（ヂロリと博士を見て）何ですか器械のやうなものを持込んで參りました。
博士。坪數でも檢べるのだらう、差支は無い。
ろく。ぢや、お屋敷を檢めさせるんですか、旦那様。
博士。まあ好い、お前達の知つた事ではない。
ろく。は。（と不平げに退く）
博士。（俊子に向ひ）今の話だがな、私は然う思ふ。何事にも犧牲者はある、大きい事業ほどそれが多い。その場合、犧牲者即ち功績者ぢや、光榮の座に坐る人ぢや。……お前にはお母様だがの、都賀ぢや、そりや無論犧牲者だつたに相違ない。私も好く知つて居る……私の事を苦に疾んで、その爲めに死んだと云はれても仕方が無い。然し、今日となれば犧牲はもう償はれて居る筈だ、立派に酬られて居る。私の極地探險が世界に證認されて、八百年來の學者冒險家が企てゝ遂げ得なかつた、眞の北極探險者たる名譽を擔得るとしてもそれは何も私一人のものぢやない、一家一族總ての榮譽ぢや。私の名と共に千古に消えない榮譽ぢや、妻として子として、皆その名譽とする資格がある筈ぢや。
俊子。お父様、何故急にそんな事を被仰るの。

博士。何故と云ふ事はないが、今日些と考へた事があるでな。

俊子。考へた事と被仰ると？　矢張りお母様の事で？

博士。さあ、それもある、その他——

俊子。その他つて？　お父様。

博士。詰らぬ事ぢや、何でもない事だ、まるで夢のやうな——いや、夢だ、夢を見たのだ。私は今朝方妙な夢を見た。

俊子。それ伺ますわ。

博士。（急に笑出して）まあ止さう〳〵。白晝夢を説くほどの愚でもあるまい。

俊子。だつて氣になりますもの。

と話し居る所へ、下男多作、六十恰好、正直さうな人物。汗を拭き〳〵出で來り。

多作。旦那様、唯今お着きで御座います。

俊子。あら姉様が？　然う！（と急に浮上るやうに）そして何所に被在るの、玄關？　お座敷？

多作。お座敷で休んで御出になります。

俊子。然う！（と父に向ひ）では、些いと御免蒙ります。（と小走りに入る）

多作も後につづいて入る。

後に一人、博士物思ひに沈む。

會社員、岡本淳吉、鳥打帽、背廣服。ノートを手に し出で來る。つゞいて人夫三人、測竿、測鎖など携へて、測量しながら出づ。一人はポオルを立て、二人はチェインを地に量りて、「B側點まで六チェイン三リンク。」「BよりC點へ三チェイン九リンク。」など呼ぶを、岡本は記手となりて、それ〴〵に書き付け居る。岡本、博士の居るに心付きて、側に寄來りて時宜の挨拶をなす。博士はたゞ會げに應答するのみ。

徹太郎、九つ、半ヅボン獨逸服、眼のくり〳〵せる利發さうな少年。俊子に手を引かれて入り來る。

俊子。（博士を指して）あれ、あすこに被在います、御挨拶を申上げるんですよ。

徹太。（博士の膝近く寄り）お祖父様、御機嫌好しう。

俊子。（傍より口を添へて）お父様、徹ちやんが參りました。

博士。おゝ、徹太か、どれ此方へ來た〳〵。（と引寄せて、頭を撫でながら）好く來たの、初めて會ひました、お前のお祖父様だよ。お母様は何うした。

俊子。今那方で嫗やとお話して被在います。

博士。また餘計な智慧をつけ居る。（と不快さうに眉を顰めたが、徹太郎に心付きて）何うだ東京は賑やかだらう。今に御祖父様が案内して、上野だの日比谷だの、方々面白い所を見せますよ。

徹太。僕、電車に乘りたいな、廣島に電車は無いもの——電氣燈はあるけれども。

博士。自働車と云つて、獨りで走る車もある。

徹太。僕、水族館も見るの。

博士。然うか、好し〳〵。そして、お父様は矢張り毎日會社の方へ御出勤か。

徹太。え、それから植木を造つたり謠をうたつたり。僕も謠を知つてるの、七騎落なら。

博士。さうか、偉い、偉い。

道子もろくと共に出づ。二十七、年には些と派手なる裝、眼大きく、背高く、言葉切れも正しく何れと云はゞ先づ威高さうな面色。

道子。博士の前に來りて）お父様（と會釋す）

博士。好く來なすつた。大層早やかつたの。

道子。多作が迎に出て居てくれたので、大變都合がよろしう御座いました。

博士。皆様も變る事がないさうで、誠に結構ぢや。

道子。難有う御座います。（徹太郎が博士の膝にもたれ居るを見て）何ですね、徹さん直ぐそれだもの、お祖父様が御苦しいぢやありませんか。

徹太。僕、お祖父様と上野へ行くの。——それから、あの、水族館へも。

道子。それは好いのね、でも、御行儀が好くないと、連れて行つて頂けませんよ。此方へ御出なさい。

博士。まあ好い〳〵。なア徹太郎、お前のお祖父様だもの、關はないな、そして、鶴橋さんは相變らず元氣だらうの。

道子。はい——お蔭様で——。

博士。それは結構ぢや、お母さん——御隱居は。

道子。皆、達者で御座います。

博士。何か春中からリウマチのやうに聞いたが、昨今は何うだの。

道子。何ですかもう、唯氣難しいので困り切ります。

博士。そして直行かの、汽車は。廣島から乘詰ぢや嘸くたぶれたらう。ユックリ休むが好い。

道子。は、難有う、好く眠りましたから、それほどでも御座いません。——そして、お父様こそ御不快のやうに伺ひましたがどんな御様子で被在います。

博士。難有う！　何有、大した事は無い。この頃中からあの本——それ、探險記ぢや。あれを書く爲めに些と無理をして、不規則な生活をやつたで、それが身體に利いたものと見える。然しその方も辛つと昨晩限りで脫稿したから、もう安心ぢや、心配しないでくれ。然了、何を云つても年だね。爭はれないものだ、高々八百や九百枚の本だが、スッカリ精力を消耗して了つた。若い時分なら何でも無い事だが、體量もズット減つたやうだ。

道子。では愈々御出版の御決心ですか。

博士。然う、可成なら來年までには本を爲上げて、世間を驚かしたいと思つて居る。それに、この十二月はお前達お

様の七回忌だから、些と俗な考だが、その靈前にも供へてやりたいしな――無論、本は仁鳳院と書いて、お母様にデヂケイトする積りで居る。斯うして出來上つた本を見るにつけ、あれの苦勞も一層氣の毒でな。

道子。然やうで御座いますとも。

博士。それに龍橘君にもぢや、何か酬ゆる道を講じなければなるまい。私を厚く信ずればこそ、こんな見當違な、云はゞまア冒險な事業にも莫大の資金を供給してくれた。財産の半ばも傾けたと聞いてはその儘にもならん。私には恩人ぢや、後援者ぢや。でな私は斯う思付いた。丁度、ナンセンの極地から西北へ百〇六七哩の所に非常に高い方錐形の氷山がある。四方は廣茫一面の氷原ぢや、トンと埃及のピラミットと云ふ心持よ。私はそれを龍橘の山とラテン語で名付けた。千年萬年、北極の氷山は世界と共に消えぬ生命を持つて居る。斯うして私は龍橘君の德に酬ゆる積りだ。

道子　然やうで御座いますかね、――そして矢張り何んですか、その御本は御自分で出版なさるのですか。

博士。無論、自費出版ぢや。

道子。何故本屋で出版を引受けないのでせう。

博士。本屋で引受ない。(不快さうに)假令引受けても私は本屋などに委すものか。あいらは何が解る。あいらは本を商品として見る外に能の無い奴等だ。私の探險記は商品ぢや無い。鹽や油を秤る同じ天秤にかけられて耐るものか。

道子。然し、もし被仰る通り價値のあります ものならば、本屋にしました所で。

博士。何と云ふ、! 道價値のあるものなら、と然う云うのか。

道子。はい、私にはこれ程數多い本屋のうちで、お父様の御本を出版しようと云ふものゝ一人も無いと云ふ譯が、何うしても解りません。

博士。私には好く解つてる。賣れないからさ。商人としてはこの判斷以上に何があらう。

道子。何うして賣れないでせう、八百枚や九百枚なら然う大して大部の本でもありませんのに。私は又別のやうに伺つて居ます。

博士。別のやうとは何う? それ聞かう。

道子。はい、何れ申上げます。それを申上げるために態々參つたのですから。

博士。今聞かう。

道子。それはお話しても差支は御座いません。

俊子はさき程より氣を揉みて「姉様」「貴方」など度々姉の袖を引いて止むれども、聞入れる模樣なければ、詮方つきて、

俊子。では徹ちやん、あちらへ行きませうね。そして叔母さんがピアノを彈きますから、徹ちやんは歌ふんですよ。

と徹太郎を連れて座を外さんとす

俊子。さあ、嫗やも行きませう。(と、ろくも共に促し立つ)

ろく聞かず、素知らぬさまにて樹下に佇立す。俊子心を殘して去る。博士は沈思、道子は凝と父の顏を見詰めてあり。

この時ガヤ〳〵と人聲して、さきの會社員人夫等と共にまた出で來る。

岡本。さあ、今度は立木だ、目通りの直徑と枝下の尺度だけ量らう。それも大凡で好いのだから、一々當つて見るにも及ぶまい。(とポケットより卷尺を出して一人の人夫へ渡す。)人夫共それを受取り中央の巨木を順々に卷尺に合せて、「一尺二寸―枝下八尺。」「二尺四寸―一丈四五尺」など呼ぶ。

ノオトマンそれを書付く。

ピアノ聞ゆ。

道子は何氣なくそを眺め居たりしが、偶と心付く所あるものゝ如く、不安さうに突とろくの傍に立寄り

道子。嫗や、お前知つてるだらうあれ。(と測量夫の方を指す。)

ろく。旦那様が御存知で被在いませう。

道子。お前何も知らないの?

ろく。旦那様のなさる事、私なぞへ御相談あつた例はありません。

道子は又博士の前に來り

道子。(氣忙しなく)お父様、お父様?

博士。ん? (と首を俯したるまゝなり。)

道子。(鋭く)お父様

博士やうやく頭を擡ぐ

道子。あれは何んです。お父様、あれは何んで御座います。

博士。屋敷を測量して居る。

道子。それは解つて居ります。では愈々、屋敷を他にお譲りなさるお心なんですね。……然うはなりません、なりません。

博士。お前は激して居る。些と落着いて話しなさい。

道子。(氣をいら〳〵させて)私は好く存じて居ります。貴方はあの御本の自費出版の費用――三千圓とか、それを龍橘に御相談なすつても出來ません所から、今度は屋敷を他に譲渡すお心になつたのに相違ありません。

博士。でも、他に財産はなし、屋敷でも賣拂ふより外に資金の出所が無いものな。

道子。龍橘だ所で、何所からその金を持つて參りませう。有つて出さないものぢやありません。

博士。それは私も知つてる。お前を嫁つた緣ばかりで、何萬と云ふ金を出してくれた。そのお蔭で私は、政府の補助も仰がず、この大事業を爲遂げる事が出來たのだ。

道子。龍橘は何とも申しませんが、姑や何かの手前、私は何の位肩身をせまくして居ると思召ます。

博士。然し、それも最少しの辛抱だ。

道子。お父様! 貴方は何所まで家族を犧牲になさるお考で

す。お母さんや私を苦しめ拔いたゞけでは足りないで、今度は又、あんな氣弱い、力の無い俊子さんまで犧牲になさるのですか、何んと云ふ恐ろしいお考でせう。この屋敷は俊子の財産嫁入りの仕度金にお母さんが決めて置いたものです。これまで手放して了つてはあれの身體が何うなります。假令何と被仰つても、この事だけはお止め申さずに居られません。

人夫の聲にて、「二尺一寸—枝下九尺。」など呼ぶ聲又聞ゆ。

道子。（氣をあせりて）何れお話申します。何うか先ずあの人達を歸して下さい。私はあんな聲を聞くと身を切られるやうに思ひます。

博士。然し然うも行くまい。私の方から頼んだのぢや。

道子。何故行きません。私嫌ひですから何うか歸して下さい。

博士。測量丈けは差支あるまい。今賣拂ふと云ふでは無い談の上で後から何うもなる。

道子。いゝえ〳〵不可ません。何うしても歸して下さい。假令貴方が歸さないと被仰つても私は歸します。嫗や、お前あの人達に然う云つて歸つて貰つておくれ。屋敷を讓渡すなんて、飛んでも無い事だ。

ろく。承知致しました。（と入る）

ピアノの聲聞ゆ。

博士。道！ 云つてくれ。探險記の出版は私の死活に關する問題ぢや。自ら救ふも仆れるにも、總てあの本にある。今日斯うして世に埋れ、嘲罵の的となつて居る苦痛も、總て雪がれる。家も立つ、名も立つ、有ゆる犧牲はあの本に償はれると私は信じて居る。それでもお前は飽迄私の出版を拒むと云ふのか。

道子。本の事は問題ぢやありません。私の心配はたゞ屋敷だけです。

博士。然し本の出版には金が要る。

道子。それは承知して居ります。でも、ある所から龍橋へ手紙がありました、お父様は何う思召してお書きになつたか知れませんが、その探險記は誰が讀んでも解らない、まるで取纒の無い夢のやうな——まるで謎のやうだと申します。それでは本屋が出版を承知しないのも當前ぢやありませんか。

博士。何？ 私の書いたものが謎だ？

道子。は。

博士。謎ぢやない、事實さ、確實なる事實さ。

道子。貴方には事實でも、他のものには謎としか見えません。引受ける本屋の無いのが何より證據です。讀んで見た人の話には、何をお書きになつたのか、一行も一句も殆ど意味をなさないとさへ申します。

博士。誰がそんな事を云つた。——上田だらう、大須賀だら

う。

道子。それは存じません。

博士。然うだ、屹度然うだ。聞かないでも解つてる。渠等より外にそんな中傷する者は無い筈だ。卑怯極る。それが學者たる者の態度か、恥を知らない、愚かな輩合ぢや。

道子。でもお父様、私は上田さんとも大須賀さんとも、それは申しは致しませんよ。それに、お二人とも、兎に角、博士です。大學教授です。眞逆そんな御卑怯な事を爲さりもしますまい。

博士。（咽低く嘲み笑つて）それだ、それだお前達の目は。博士も教授も矢張同じ人間だと云ふ事を忘れて居る。慾もあれば野心もあるよ、又、强い虚榮心もある。たゞ一つ普通人と違ふ點は、書物と實驗を綜合して得た智識と云ふものを持つて居るその一つぢや。丁度女の中から指環を篏めてる女を區別するやうなものぢや。他に何があらう。それを愛しそれを矜とする事も矢張女と同じぢや。指環一つで死もしよう。活もする。

道子。ですけど——

博士。まア聞け、私に云はしてくれ。そして、多くの女は富める隣人の指を羨む、な、咀ふものぢや、他人の手にある寶は胸に劍ぢや、恐しい毒ぢや。自分のものと云ふたゞ一言を聞きたい爲めにはどんな事も爲兼ねない。

道子。お父様は一人でさう決めて被在いますけど、私は外の方から聞いたのです。何の關係も無い他の人から聞いたのです。

博士。他の人？ まア好い、他の人なら他の人として置け。然し私の言ひたいだけは云ふ。九年間の辛酸と十幾人の貴い犧牲を拂つて、辛つと爲遂げた北極の探險ぢや。それを何故獨逸の學者達は否定した。見たと云ふ、爲たと云ふ、事實まで奪はうとしたのは何故だ。ナンセンが爲遂げなかつた事だから、極東の一學者に爲遂げらるゝ筈がないと云ふ。それが理由となるか。有を有ると云ふほど强い意味が世にあるまい。渠等は信じないのぢやない。信じまいとするんだ。それも好い。好いが、私を掴いて虚僞だ。騙りだと云ふ。私を海賊ガアダアと一緒にして、大法螺だと云ふ。或る學者なぞは勿體らしく私の健康を檢べて、楢崎は多年の心配と努力の結果、ひどく健康を害して居る。一種の精神病——妄想症に罹つたとまで、誠しやかに報告したではないか。狂者ぢやとよ。狂者ぢやとよ。狂者とまでして私を殺さないでは、私の事實を奪ふ事が出來ないのだ。學術を尊重すると云ふ獨逸すらその通りぢや。況して日本——學派と學閥の鬪爭以外に何の能も無い日本の學者達だ。私の功績を嫉む、咀ふ、中傷する、もとより當り前だ。如何なる手段を盡しても、私の探險を虚僞に騙りにするのだ。

道子。好く解りました。それならば其のやうに信じられるや

うに爲たら好いぢやありませんか。
博士。だから、私は事實を事實のまゝ報告した。
道子。それでは、證據がありません。
博士。證據？　事實に證據は無い。
道子。證據が無ければ、誰にしても信じやうがないぢやありませんか。
博士。然し事實だ。
道子。假令事實でも致方ありません。
博士。我は飽迄言張る。
道子。それはお父様の御勝手です。でも、他にまでそれを強ひる權利はありますまい。
博士。權利が無い？　權利が無いとは何んだ。事實の外に何の權利？——事實の外に證據まで出せと迫るのが權利か、總て反對だ、顚倒ぢや。闇が光を消すとは此事だ、闇が光を消すのだ。（と、髮を搔拶り、帽子を投付ける。）
道子。でも、爲方はありません。
博士。ぢや、お前も信じないな、信じないと云ふな。
道子。私は何方とも申しません。
博士。何故云はれない、疑にこそ二岐はある、信ずるに迷はない筈だ。
道子。ですけれど、何方にしても私は智識を持ちません。
博士。智識で信ずるものぢやない。
道子。お父様の人格だけならば私信じて居ります。
博士。私の人格を信じて、そしてこの事實を信じないと云ふのか。
道子。でも、私には解りませんもの。それ程の事實なら第一世間が信ずべき筈です。私共は兎に角、世間には學者もあります。然う〳〵盲目ばかりでは——
博士。それは、今私が話した——
道子。それは解りました。でも十人が十人皆然うとばかりは——
博士。（突如として立上り）道！　お前、この顏が見えるか。（と顏を突出す）
道子。はい、見えます。
博士。この聲が聞えるか。
道子。はい。
博士。この顏が見える。この聲が聞える。それで、何故この言葉を信ずる事が出來ないんだ。お前の父ぢやないか、父だぞ。（と道子の前をグル〳〵廻る。）
道子。俊子は何と申します。
博士。あれは何とも云つた事がない、然し、お前のやうに否定はしない。
道子。それは出來ないからです。心を聲に出し得るほど力ある人ぢやありませんもの。だから、私可哀さうでなりません。お父様、貴方然うは思召しませんか。
博士。では、俊も私を信じないと云ふんだな。

道子。信じて居るかも知れません。
博士。（いら〳〵して）ハツキリ云つてくれ、お前に、お前に遠慮は無い筈だ。
道子。俊さんの心は俊さんの心、私に解らう筈は御座いません。
博士。俊も矢張り信じて居ないんだ。信じて居ないんだ。あゝ、父が半生の苦心も子は信じない……二人が二人まで信じない。そして、虚僞だと云ふ、騙りだと云ふ。（と大跨に其邊を歩み廻る。）
道子。私だとて信じたいのは山々です。楢崎家の名譽。私の名譽。これが信じられる事なら、それはどんなに嬉しいでせう。
博士。（耳にも入らぬ態）私は見た……この目で見た……あの時、あの時……慥に見た……第一の人だ……第一の人だ……
道子。（凝とその後姿を戍りながら）お父様、貴方、餘程健康を損ねて被在いますよ。お父様。
博士。あゝ、私は第一人者だ。第一人者だ。誰が信じなくとも好い。自分が自分を信ずる。目が目を信ずる。耳が耳を信ずる。
道子。お父様。（高く）
博士。……（立停る）
道子。お父様。貴方。（と父の手を堅く握りて）お父様！
博士。（振ほどく元氣も無く）何んだ。
道子。貴方、お憔悴なさいましたよ。
博士。う。（と娘を見下すのみ。）
道子。何うかお身體を厭つて下さいまし、……髮もまアこんなに白く、痩せて……元のお姿は些つともありません。學問も、學問ですけど、お身體は尙大事で御座いますよ。
博士。好し、分つた（と手を振放つ）
道子。せめてお母様でも被在ればですけど、俊さん一人では何うする事も出來まいし、今御病氣でもなすつてはそれこそ大變ですよ。
博士。取越苦勞ぢや。今病氣なぞして居られるものか。私には今重大なる任務がある。
道子。まだ何か御研究でもあるんですか。
博士。研究も研究だが第一、私は飽迄世間と戰ふ積りだ。今に屹度、信じさせて見せる。世間を信じさせなきア措かぬ。
道子。では、何うでも御出版をなさるんですか。
博士。無論行る。あれが私の生命ぢや。
道子。それで、世間は信じてくれませうか。
博士。信ずるよりは先づ跪づく。驚いて私の前に跪づく。年代を云へば九世紀、エリック以來、多大の犧牲を拂つて、尙ほ、極める事の出來なかつた北極を、初めて、探險し得た私だ。私は名譽ある第一人者ぢや。私によつて過去幾十

幾百の犠牲者は始めて甦つたのだ。

道子。でも、もし頑固に抵抗しましたら。

博士。誰が？　世間がか。それでも關はん、私は最後の最も大なる犠牲者として滿足する。

道子。でも家族は可哀想です。價の無い犠牲は不滿足……

博士。未だ云ふか。

道子。云ひます、云ひます。それを云ふ爲めに態々廣島から參つたのです。家の爲め、俊子のため、出版だけは何うしても思切つて頂かねばなりません。

博士。お前は私を苦しめるんだ。

道子。私こそ、好んでこんな事申すのではありません。

博士。あゝ、何故お前は私の心になれないかな。（と倒るゝやうに椅子へ。）

徹太郎來りて道子へ云ふ。

徹太。お母樣、お召換なさいつて、伯母樣が。

道子。はい、唯今參りますと然う云つてね。

徹太。お祖父樣。（と博士の膝によりて）お祖父樣のお部屋には色んなものがあるのね。

博士。……

徹太。妙な形の鎗だの、象の牙だの、それから、白熊の皮だの。（母に向ひては）そしてね、お母さん、大きな人の骸骨もあるの。

道子。然うですか、お悪戯をしちやいけませんよ。（博士に向ひては）では、　お父樣何うか好うくお考へを願ひます、お母樣の例もあります、俊子まで同じ運命に陥したくは御座いませんから。（と行かゝる）

博士。（顔を上げて）道子！

道子。はい（立停る）

博士。考へる迄も無い。私は何うあつても斷念はせんよ。

道子。（もとの位置に戻りて）お父樣、貴方は未だこの上家族を犠牲になさらうと被仰るんですか。

博士。でも、私の活きる路はその他に無い、道？　無理だらうが貫かしてくれ。何うも私はこのまゝ、死んで居られない。

道子。ですけど、この事だけは爲方が御座いません。私飽まで反對を致します。

博士。この儘に終れば、お前の父は狂者になる。

道子。狂者でも。

博士。狂者でも？

道子。はい、私は固く決心して居ります。

博士。あゝお前、何故然う無情な事を云ふ、父だ、父だよ。その父が學問のために苦んで、八年の間と云ふものを氷山の中に活て來たんだ。

道子。貴方は氷の中に八年、私は又牢屋の中に八年、苦んで〳〵苦み拔きました。お母さんも俊も私も皆ですお父樣一人では御座いません。

博士。あゝ、私は歸るんぢやなかつた。歸るんぢや無つた。寧そ他の十二人と同樣北極の苔原に餓死すれば好かつた。なう、道、私は誤つて歸つて來たよ。

道子。（言葉なく俯き居る）

徹太。お祖父樣、北極つてどんな所。遠いの、近いの。

博士。遠い〳〵所よ。

徹太。汽車で行くの。

博士。私は橇で行つた。

徹太。橇つてどんなもの、え、お祖父樣。（と膝を搖ぶる）

道子。徹さん、煩さくするものぢやありません。お祖父樣は今お考事して被在います。

徹太。だつて。（と鼻を鳴す）

道子。何です。

博士。まあ好い〳〵。然う叱るほどの事でも無い。

道子。でも、何でも珍しがりで困ります。

博士。小兒は皆然うしたものぢや、珍らしがると云ふ事が智慧の原因ぢや。のう、徹太その内に北極の面白い話をしよう。世界中で誰も見た事の無い。誰も知らない北極の模樣を知つてるのはお前のお祖父樣一人ぢやぞ、外には誰も無い。

徹太。何故他の人が行かないの。その橇と云ふもので行つたら好いでせうに。

博士。行かないのぢやないが、行けないのだ。昔から何十何百と云ふ人が、幾百萬と云ふ金を費つて行きかけたが、皆好う行かん、途中で凍え死んだり、餓死したり、一人も滿足に行つた例は無い。

徹太。ぢや、鬼が島のやうなとこ。

博士。ま、ま、そこらぢや。

徹太。寒い〳〵所ですつてね、世界中で一番寒い所だつて、本當なの。

博士。然う、草も無く木も無く、四方は唯氷の山、氷の原、何萬年の昔から何萬年の後まで、何時も同じ姿で風も吹かぬ、雲も無い、雪も滅多に降らない所だ。總じて動くものゝ無い所だ。

徹太。そんな寒い所へ、お祖父樣何を着て行つたの。

博士。毛皮の外套を何枚も何枚も着た。寫眞がある筈だ、後に見せよう。鎗を持つて、犬の橇に乘つてな。

徹太。犬の橇！

博士。まア、云つて見れば輪の無い車だ。それを犬に引かせて、氷の中を滑つて行く。

徹太。馬は居ないの。

博士。居ない。

徹太。連れて行けば好いのに。

博士。連れて行けば死ぬ。

徹太。ぢや、犬が一等強いの。

博士。然うぢやとも、犬の外は何の役にも立たない。

徹太。大きな犬？
博士。然う、形も大きい。
徹太。愉快だな〳〵。僕もそんな所へ行つて見たいな。
博士。行つて見たい、徹太。その代り苦しいよ。食べるものはなし、臥る所はなし、白熊や麝香牛を捕つて食べる内は好いが、終には苦まで取つて食べなきゃならない。容易な我慢ぢやないぞ。
徹太。苦しくたつて好いな、面白いな、僕行つて見たいな。
博士。行きたければ行かれる、行かれると然う思つてさへ居れば屹度行かれる。お前行くか。
徹太。僕行く。
博士。お祖父様は行つて來た。お前も行つて、然してお祖父様の云ふ事の僞りでないのを確めてくれ。

俊子入來り話を聞き居る姉道子の耳に何事をか囁き博士の前へ出て、

俊子。お父様、電氣を用意致しました。もう四時で御座います。
博士。電氣、それは後にしよう。今徹太と面白い話をして居る。なア徹太。
徹太。叔母様、僕北極へ行くよ。
俊子。（徹太の頭を撫でゝ）それは好いのね、面白い話をして頂いて、徹さんは好い事ね。
道子。（突如として）お父様、貴方當地を御出發なさいましたのは何月でしたらう。
博士。五月、九年前の五月ぢや。
俊子。お庭の辛夷が眞盛りの時でしたね、私それは覺えて居ります。
道子。あの時、お父様は北極へ、私は廣島へ出發する朝、あの時のお母さんのお顏色と云つたら無つた。まるで病人でした。私を離屋へお呼びになつて、お父様が何うしても被行ると云ふなら爲方がない、戌生れの御氣象だ、お止りもなさるまいけれども、偶然にもしろ、十三人と云ふ同勢の數が惡い。何かの前兆かも知れないからと被仰つて、唇を眞蒼にして俯むいてお出でした。
博士。今になつて、何を下らない。現にお前も龍橋も、それを笑つて、元氣好く神戸まで送つて來たぢやないか。
道子。ですから、尙、濟まないと思つて居ります。お母さんはそれから後も、十三の數ばかり心配なすつて、眼は上吊る聲は掠れる。始終それを言續けでした。そして到頭三年目に、お父様が行方不明の電報があると一所にドッと床にお就きでした。
博士。（目を瞑りて）愚痴ぢや、今更ら愚痴ぢや。
道子。愚痴でも何でも、私はその時の事を思ふと悲しくなります。（と目を拭ふ）
徹太。（怪訝さうに目をクル〳〵させて）僕いやだな、そんな話。（と靴にて地をトントン）

博士。もう止さう、な、徹太郎。そんな話より今の面白い話の續きでも爲よう。

妹は姉をなだめて、小聲に何やら話しながら、博士と木蔭のベンチに後向に掛けて、しめやかに話合ふ

風

徹太。そして、お祖父様、北極ッてどんな所、早くそれ話して下さい。
博士。然うな、第一、夜と晝の區別がない、一年の半分は晝で半分は夜ぢや。長い晝と長い夜と、たゞこれだけぢや、そして、太陽はこの世界のやうに、東から出て西へ入るのぢやない。世界の周圍をグル〳〵と廻つて居る。それが半年の間續くのぢや。
徹太。ぢや、困るでせう。そんなに夜が長くては。
博士。その代り、北極には北極の太陽がある。北光と云ふ、遠い氷の原から眞紅の光が空に燃える、そして閃く。昔の人はこれを夜中の太陽と名づけた。その上、北極の空には雲が無い、何時も快晴だ、蒼い磨いだやうな月が何時も周圍を靜かに廻つてゐる。
徹太。愉快だな、そして。
博士。磁石は反對ぢや、南を指すべき針が北を指す。あゝ、お前に見せたいな、北極の夜！ 偉大、壯嚴、崇高、有ゆる人間の言葉を以てしても、あの大なる天地を說明する事は到底出來ない。どんな大詩人でも出來まい。たゞ心から心へ響なく傳へるだけぢや。

話の間に道子、時々父の話に聞惚れては耳を澄ます事あり。

徹太。そして、お祖父様はそれを見たのね。
博士。見たよ。この目で見た。それ、晩になるとこゝからは向ふの銀杏の樹の眞上に見える星、あれは北斗星と云ふ、それが自分の眞上に當る、私その眞下に立つた。世界創つて何萬年の間、嘗て何人も踏んだ事のない地の上に立つた。
徹太。一人？
博士。たゞ一人ぢや。尤も出發する時は十二人の仲間があつた。私ともに十三人ぢや、それが向ふへ行く途中氷山に圍まれて、船は粉微塵、一人も助つたものが無い。嫗やの息子もその内に居た。……あゝ、その内せめて一人でも生殘つて居てくれたら、私はこんな苦痛はせんのぢや。皆死んだ〳〵。他に見たものも知つたものも無い。だもんだから私が歸つて來ても、誰一人私の言葉を信ずるものがないのだ。
徹太。僕行く。屹度、その北極へ行く。
博士。行くか、徹太郎。
徹太。行きます。
博士。行つてくれ、屹度行てくれ。そして、そこへ殘して置いたお祖父様の名前を見て來て、世間へ話せ、威張れ、笑

つてやれ、稲崎元城と云ふ私の名は 立派に北極星の直下に殘して置いた。

徹太。何う殘つてるの。

博士。氷の中に斜めに埋つてある流木へ、——北極にも流木はある。私はその木の表面を削つて、稲崎の北極とラテン語で刻み付けて置いた。それを見て來てくれ、そして他に語つてくれ。

徹太。何方の方なの。

博士。少し東の方、……いや北極には東はない、北もない、西もない、あるのは唯南ばかりぢや。

徹太。北極つて方角のない所なの。

博士。無い、無い、吾々人間の定めた規則や掟が北極の天地に當嵌るものか。方角は人間の住む世界の外には無いものぢや。

徹太。妙だな。方角が無い所つて、何う云ふ所だらう。廣島でも、大阪でも、東京でも皆東もあるし北もあるのに。

博士。お前には些と解り難い事かも知れんが、名のあるのは人間の世界、絶對の世界には名と云ふそんな、小さなものゝ必要を認めない。

徹太。そして、お祖父様はその北極に どんな風をして立つたの、足を蹈んで見た？ 叫んで見た？

博士。足は蹈んで見た。然し聲は立てなかつた。

徹太。何故、僕なら君が代でも歌ふ。

博士。私は脣を固く噛締めて、息も好うせんかつた。永劫に亘るその壯嚴な永久の沈默を破る事が出來なかつたのだ。連れてゐた犬でさへ、頭を垂れて、吠えもしなかつた。

徹太。犬が居たの、お祖父様。

博士。然う〳〵忘れて居た。犬が居た、ユウラカと云ふラブランド種の犬が居た。

徹太。そして、その犬今居るの？

博士。居るよ、今に見せてやるぞ。その犬一匹ぢや。今となつて私の味方は。例令世界が擧つて私を嘘吐き、騙りと云つても好い、ユウラが知つてる、私と共に北極に立つたその時の心を持つて今にこの世に活きて居る。

徹太。そして、何うして歸つて來たの。

博士。たゞ歩いた、南へ南へと歩いた。そしてフランス、ヨセフスと云ふ島へ着いた。こゝにはの、エスキモ人と云ふ土人の流されたのが居て、氷の中に小屋を建てゝ活きて居たぢや。その土人に救はれての、六年の間、同じ氷に棲んで居た。今斯うして目も見えず。口も不自由なのは六年の長い間、空にも大地にも光りばかり見通したからぢや。綠も赤も黑も無い、たゞ光る、白く光るものばかりの世界ぢや、所へ六年目の去年、幸ひの便船があつて氷島へ歸る事が出來たのぢや。

徹太。犬も歸つて來たの。

博士。歸つて來た。

徹太。何所に居るの。

博士。そこの小屋に寢て居る。永く北極の荒びた風色の中に活て居た所爲か、可哀さうに些と氣が觸れての、人を見ると噛付いてならんから、鎖に繫いである。

徹太。お祖父様、僕にだつて屹度行けるわね。

博士。行けるとも、たゞ、屹度行けるものと信じて居ろ。信じさへすれば屹度行ける。

徹太。僕行けると思ふ。

博士。その心持ぢや、その心を固く持つて動かぬ人が行けるのだ。昔から偉い人、——第一の人は皆その心を持つて居たんだ。大發見も大發明も皆その信念から生れたのだ。

徹太。然うすると、北極へ行つた人は、お祖父様と僕と、世界にたゞ二人だけになるね。

博士。然うだ。私は第一の人、お前は第二の人。然し徹太郎お前はお祖父様の話を信ずるかの。

徹太。信ずるつて何うするの。

博士。嘘とは思はないか、僞を云ふとは思はんか。

徹太。だつて、本當の事でせう。

博士。無論、本當だ。

徹太。本當の話は嘘ぢやないもの。

博士。今一度、徹太郎、今一度聞かしてくれ。（と徹太郎を引寄せて視力衰へたる目に凝と見詰る）

徹太。（不審さうに）何故なの、本當の話は嘘でないもの。

博士。あゝ、お前だけだ〳〵。私を信じて呉れたのはお前だけだ。（と孫を抱締めて涙をハラ〳〵零す）

徹太。ぢや皆は嘘だつて云ふの。

博士。あゝ、伯母様も、お母さんも、嫗やも。

徹太。みんな女だもの、だから解らないんだ。

博士。然うだ、女だ。世界の人は皆女の心だ。みな耳に蓋して居る。心を開いて他の語を聞く事が出來ないんだ。淺間しいものだ。昔から耻蘇でもマホメットでも、その他科學者でも思想家でも大なる人は皆同じ苦痛を嘗めた。初めて云ふ事は全然別種なものと見える。馴れたと云ふ事が渠等唯一の便なのぢや。だから初めて見、初めて聞いた人の言葉を信ずる事は出來ないんだ。

徹太。お祖父様、犬は？

博士。おゝ、今見せるぞ。（と立上る）

木蔭に閑居たる道子急ぎて出來る。俊子は氣遣はしげにそこに佇立するのみ。

道子。お父様、ユウラですか。（と前に立塞がる）

博士。徹太が見たいと云ふぢや、がな、道子、矢張り私の言葉を信ずるものもあつたよ。

道子。小兒ですもの、分別がありません。

博士。（立停つて）分別と云ふのは、見馴れたものに或物を較べて似寄を見付ける事ぢや、初めてのものに似寄は無い。

小兒の世界は總て初めてぢや、それが生命ぢや。自由ぢやあゝ世に小なる者最も力ありぢや。（と犬小屋の方に行かんとす）

道子。（遮るやうに又前に立ち）お父様犬は居ません。

博士。何？

道子。犬は居りません。鎖を切つて遁げました。

博士無言にて犬小屋の前に行き、「ユウラ〳〵」と呼びながら鎖を引く、鎖のみスラ〳〵と拔け來る。

博士。ユウラ〳〵。

道子。お父様、ユウラは居りませんよ。

博士。ユウラ〳〵〳〵。（と地に俯して犬小屋を覗見る）

俊子。（恐る〳〵出來りて、憂慮さうに）お父様。

博士立上つて俊子の手をグッと摑む。

博士。俊！　ユウラは？

俊子。（顫へながら）昨晩の暴風で……

博士。昨晩の、暴風で、そして。

俊子。遁げたに相違御座いません。

博士。隱したな！　貴様は隱したな。（と急込む）

俊子。全く、遁げて了ひました。

博士。ろくを呼べ、ろくを呼べ、あいつの所業に決つた。

俊子。いゝえ、嫗やも知つた事では御座いません。

博士。呼んで來い。あいつ甚くユウラを邪魔にして居つた。そして、こんな氣違犬は殺して了へと、度々私に云つて居た。

道子。全く誰も知りません事です、今朝餌をやらうと思つて參つて見ますと最う居りませんでした。

博士。ユウラは私の生命ぢやよ。あれあればこそ幾らか慰められても居た。あれが居ないでは、私は全くの孤立になる。あゝ、敵の十人の中に居ても、私はユウラの目を見詰める度に新しい勇氣を得た。ユウラは物を言はぬ、然し、あの目、あの目ぢや、總ゆるものが凝つて動かぬ北極の地、空も山も水も總て靜止、總て沈默、動くもの活きたるものと云へば唯二つ。私と犬ぢや。二つの魂ぢや。二つのゴストぢや。犬の目にも私だけ私の目にもユウラだけ、姿を見るのぢやない、互の目に彫り付けた魂ぢや。そのユウラが居ない。ユウラが居ない。

俊子はたゞ顫へ居るのみ

徹太。（失望らしく）お祖父様、犬は遁げたの。

博士。居たんだ。昨日までは慥に居たんだ。誰にでも聞いて見ろ。（と其邊を歩き廻る）

道子。お父様、お氣を鎭めて下ざいまし。俊さんや嫗やが何んで遁がしませう。昨晩の暴で鎖を嚙切つて遁げたのに相違ありません。

博士。お前は何も云つてくれるな、私はお前の勿體らしい、落着拂つた理窟を聞くと腹が立つてならん。身體が顫へる。

道子。ですけど、遁げたものは……

博士。ユウラ！ユウラ！（と口笛を吹きながら其邊をウロ〳〵す）

道子。（心配さうに後に隨きながら）お父様……お父様。

博士。ユウラ！ユウラ！（と呼びながら下手樹立の中に入る）

道子も隨ひ行きしが、やがて戻り來りて

道子。徹さん、お祖父様はあつちの方へお出になつた。お前さん、後から喰付いてお出なさい、目が御不自由だから、好く氣を付けて上げるんですよ。

徹太郎駈入る

俊子。（家の入口に立つて）嫗やゝ。（と呼ぶ）

ろく出來る

ろく。何んぞ御用で。

俊子。今お父様がユウラを探しに、外の方へ出てお出だから多作に然う云つて、一緒に探さしておくれ。

ろく。犬は遁げたのです。近所にマゴ〳〵して居る筈はありません。

俊子。それに、お父様は目が御不自由なのだから。

ろく不精〳〵に入る。

俊子。（改つた調子）姉さん。

道子。何です。

俊子。姉さんの目にお父様は、何う見えます。

道子。さアね。（と溜息を吐きながら、塵を拂つて博士の腕倚子にかける）

俊子踞む

俊子。私は好うく考へべき事だと思ひますわ。（と思ハつて云ふ）

道子無言

俊子。財産も楢崎家もそれは大切でせうけど、お父様の身もお可哀さうぢやありませんか。私なぞは何うなつても好いから、何うかお父様の心が安まるやうにして上げて下さる譯には行きませんか。

道子。俊さん、貴方それで惜しいとは思はないの？

俊子。私諦めて居ますわ。

道子。お父様もお父様だけれど、自分を殺してまで他の犧牲になると云ふ事は無い、犧牲と云ふのは弱者のする事です。

俊子。私何うで弱者よ。

道子。貴方は本當に仕合せね、それで滿足して居られるんだもの。眠つて居るのです、昔から人が眠つて來たやうに眠つて居るのです。

俊子。これが眠つて居るのなら、私、一生を眠つたまゝで通したい。

道子。目が覺めたら、最う二度と眠られませんよ。

俊子。目は覺ましますまい。

道子。一生？

俊子。は、一生？

二人は又無言、所へろくノッソリと入り來る。

ろく。奥様、お召し換をなさい。

道子。まア好いわ、大儀だから今少し斯うして置いておくれ。

ろく。それが不可ません。大儀でも爲るだけの事は爲さらなければなりますまい。

道子。相變らず几帳面ね、嫗やは。

ろく。死ぬまではこれでせう。

道子。あゝ、死ぬまでく。（と家に入る）

ろく襷がけして、そこらの落葉を掻き集め始む。俊子は同じ姿なり。

ろく。（暫くして）お嬢様。

俊子。なあに？

ろく。シッカリ爲さらなくては不可ませんよ。

俊子。え。

ろく。親子も夫婦も兄弟も、詰りは皆聯です。

俊子。私はもう戰する力がないもの。

二人無言。道子平常着に改めて髪を掻上げながら出來る。

道子。お父様は未アだ……。

俊子。え、何うなさいましたらう。

道子。多作が行つたから大丈夫だらうね。

俊子。姉さん、嫗いやうですが、今一度考直して見て、何とか好い方法を取つて下さい。

道子。さア、考へて見ませうね。

ろく掻集めたる落葉を一所に集めて火を燃し付くる。

道子。嫗や、焚火と云ふ節でもあるまいに。

ろく。斯うしないと形付きません。

道子。小兒の時好く當つたものだつけね、お母様が又お掃除好きで、始終落葉焚きをなさる。大勢集つて四方山の話。ほんとにあの頃が一番戀しいわね。（と立つて火に寄り、枯枝を拾つて投げくべなどする）

ろく。坊様が被在ると好いに。

道子。今歸るだらう。俊さん、貴方もあたつては何う？

俊子。え、だけどね姉さん。

道子。（手を振つて）最うくその話は舍す事、あとでユックリ出來ませう。然うクヨクヨしないでこゝへ來て面白い話でもしませう。私は着くと早々この話で、氣がクサくして了つた。

俊子。ほんとに姉様は羨ましい。私何うして斯う意氣地がないんでせう。

道子。被來いよ。

俊子。は。（と寄來る）

道子。ねえ嫗や、私幾つの年かしら、丁度この木の下で、矢

張りこんな風にして焚火にあたりながら、お母さんに大變叱られた事があつた。小刀を人に與つたと云つて。

ろく。そんな事が御座いましたかね。

道子。嫗やが大變にお謝してやつと許されたけど、私あんなにお母さんを畏いと思つた事が無い。最う眞蒼になつて、唇なんか血の色は無いんだもの、思詰めると唯一心にお

なりなさる方でね。本當に畏かつた。

ろく。然うでしたらうかね。平常は最う誠にお優しい方でした。

道子。何でも桑の木の夢を三晩續けて御覽なつたとかで、最う〳〵そればかり氣にしてお出なすつた時さ。

ろく。桑の木の夢は子緣が切れるとさへ申します。

道子。然うだつたね。それに刀を他に與ると云ふ事も大變惡るいんだつてね。

ろく。惡い段では御座いません、私が添合に別れます時なぞは、二晩續いて刀を人に與る夢を見たもので御座います。

道子。然う〳〵、夢で思出した。私は今日來る途中、汽車の中で妙な夢を見てね、そりや餘程不思議な夢よ。俊さんがお嫁に行く、御婚禮の夢さ。

俊子。まア厭な。

道子。何が厭なもので、それは嬉しさうな顏をしてお出だよ。

俊子。私が？

道子。お嬢様は誰方と思召す。

俊子。私に分りますものか。

道子。處が直ぐ分る人なの。

俊子。誰でせう。

道子。さあ、誰でせう。背の高い、眼元の優しい、そして、大層親切らしい方よ。

俊子。私には分らない。

道子。然うかね。分らないものか知ら。

ろく。隈本様で被在いますか。

道子。そうら、嫗やでさへ分つてる。

俊子。私は、お嫁に行く氣なぞ無いから、チンでそんな事考へた事もないわ。

道子。然う云ふものだらうか、私なぞ俊さんの年にはもう徹太郎のお母さんでした。全く俊さんは氣樂なのね、自分つて事考へないで、一日の日を送れると云ふのが不思議さね。

俊子。餘程馬鹿なんでせうよ。

道子。ねえ嫗や、私は然う思ふね。自分の事を思ふからこそ人は活きて居られると。

ろく。然うですとも、だから私は齒痒くつてくなりません。同じ御姉妹でも、何うすりやかうお心意氣が違ふんでせうね。

徹太郎は慌しく出で來り

徹太。お母様。
道子。お祖父様は何うなすつて。
徹太。あすこの木の下に立つて被在つて何時までも〳〵動かないんだもの、僕弱つちやつた。
俊子。何か考へ事でもして被在るの。
徹太。何だか知らないけど、向の方、そら夕日が美しいでせう、あれを凝と眺めて居るの。
道子。犬は居ないだらう。
徹太。居るもんか、遁げたんだもの。そしてね、僕弱つた。お祖父様は幾度も〳〵轉んだり、水ッ溜へ落ちたり身體中まるで泥ぼつけよ。目が見えないのに、ユウラ〳〵つて狂者のやうに其邊を駈廻るんだもの、一度なんか、コロ〳〵と崖から轉んで、危なかつたの。
俊子。多作は付いて居ないの。
徹太。僕と唯二人、誰も來やしない。
博士來る。寬服は所々鍵裂して、一面の泥。髪は亂れ、顏色は蒼白、疲れ果てたる風體にて、杖を力によろめきながら出で來る。
俊子。まアお父様。
博士。俊か——犬は居ない。
道子。一體まア何うなさいましたのです。
博士。う。(と仆れるやうに倚子にかける)
俊子。お父様、まア、何うなすッたのです。お父様、手から何からまアこんなに。(と泥まぶれの手を取る)
博士。私は好い。心配するな。休まして呉れ、私は疲れた。まアお前方そこで話すが好い。
俊子。ですけどね。お父様。
博士。好い〳〵。
俊子心配ながら元の場へ歸る。暫らく沈默。
ろく。然して奥様、その夢のお話は何うなりました。
道子。なアに大した事でもないの、俊さんがね、糸縫のある鳩羽色の振袖を着て、お座敷の眞中に坐つてるの。そして悲しい顏をして、些い〳〵と私を見るの。兩方とも口はきかないのよ。そしちや、ちよいと袖で顏を隱すの、それが顏は見えないけれど何でも袖の隱では笑つてゞも居るやうに私にや思へるのよ。夢だね。それに、そのお座敷が變なの、斯う離室か何かのやうな所でね、四方の襖も天井も長押も皆銀張りなの、その銀張りへ櫻の花を一面に畫いてある、そして、それが妙なの、その畫いた櫻がヒラ〳〵〳〵と散つて來て眞中へ坐つてるお孃様へ散つて來るの、その奇麗な事と云つたら、全で繪の模様よ。
ろく。(凝つと聞き居りしが)そして奥様、どんな帶を締めてお出でした。
道子。さア、それは分らない。
ろく。私は存じて居ります。板琥泊曙染、流れに離菊の模様で御座います。

道子。何うしてそれが分るの。
ろく。私が締めて上げたのですもの、間違は御座いません。御容色はよし、お扮裝がそんなですから、まるで繪に描いたやうで未だに目に浮んで見えます。
道子。何がさ。
ろく。奥様。そのお嫁様はお孃様ぢや御座いません。お亡りになつた奥様です。貴方の御母様で御座います。
道子。妙ね、嫗や。
ろく。いゝえ、妙ぢや御座いません。然う四月の中頃ですから、お築山の花は眞盛り、それも好く適て居ります。
道子。お母様なの。
ろく。それ、それ、それに相違御座いません。貴方々は御存じありますまいが、今のこの西洋造の建ッて居る邊にお離屋が御座いまして、その四方は櫻の植込、春先きの景色と云つたら御座いませんでした。今のこんな眞四角な背ばかり高い西洋館はその後になつて旦那様がお建てなさいましたのです。
道子。でも、私は何うも俊さんのやうに。
ろく。いゝえ、先の奥様です、その晩の奥様のお姿にそつくりで御座いますもの。あゝ、奥様はお優しい方だつた、何時になつても全るで娘の時のやうな氣分の方だつた。
博士。(突然)ろく! (と叫ぶ)
ろく。はい。(と驚く)
博士。お前は夢を信ずるか。
ろく。押されないものは押しませぬ。
博士。お前達は仕合せだな。私はお前達から夢や空想やを奪はうとした惡人だよ。あゝ自然には堅い防禦があるな。
ろく。私には分りませぬ。
博士。私には分つた。而かも唯の今然う分つた。私は全く誤つて居た。
ろく。何で御座います。
博士。最う〳〵、敵意を持つてくれるな、私は自分の非を悟つて、お前達にあやまるのぢや。仲間に入れてくれ、その樂しい仲間に入れてくれ。あゝ自然が深山を作り幽谷を作つて、秘密を世界に設けた事は決して偶然ぢやない。千萬年來人の足を許さぬ北極は自然の大秘密だ。秘密や神秘があるからこそ、人生に歌もある。夢もある。又空想もある。その自然から秘密を取去らうとする科學者は人生を乾燥に枯淡にしようとする賊ぢや。惡人ぢや、敵對者ぢや。昔の譚に、神の封じた寶殿を覗いた者は、生きながら石になつたとある、こゝぢや、極意は。あゝ十二人の皆死んだのも、私の世間に信じられぬのも、目の惡いのも、口の不自由なのも決して偶然ぢやない。偶然ぢやない。天は一樹崎が侵した自由の大秘密を人間の耳へ聞かせまいとするのかとも取れる。私の書いた探險記が他人の目に謎であつた譯も、辛つと今わかつた。(と咽び入る)

道子。お父様。何うなさいました。
博士。昔から、第一人者は仆るべき運命がある。
道子。何んで急に然う弱い事を被仰います。
博士。人間は自然に忠實なる間、そこに初めて眞の人生を見るのぢや。私は慥かに誤つて居たよ。
道子。何うでしたか知りませんけれど、大變激昂なすつてお出でのやうです。お氣をお鎭め下さいまし。
博士。心配するな、私は甦つた。あの、壯大なそして美しい夕日を見ろ。
俊子。お父様。(と葬と父の手にすがる)
博士。(それを握り締めて)あゝ悪るかつた、私は……私は……小さい自分を活す爲めにお前達を殺さうとした悪人ぢや、お母さんの敵ぢや。悪い〳〵敵ぢや。
俊子。お父様、何うかお氣を沈めて下さい、私共お父様の心に逆らつたのが悪るいので御座います。姉様にもあやまらせます。何うかもうそんな事を被仰るのは舍して、ね、お父様。
博士。然うぢやない、私こそあやまる、私が悪い。
俊子。あれ、そんな事。
博士。私が悪い〳〵。ろく、堪忍してくれ私はお前の伴を殺した敵だ、堪忍してくれ。
ろく。伴は獨りで死にました。
博士。云ふな〳〵。敵は敵として憎んでくれ、責めてくれ。そして、その後ち救してくれ、私はもうお前方の味方ぢや。味方ぢや。
ろく。御氣性ぢや、若い時から然うした方でした、極端へ飛ばなければ我慢出來ない御氣性です。
博士。あゝ私は今日まで空に活きて居た。
道子。私共には未だ飲込めません、何うか有の儘被仰つて下さいまし。
博士。有の儘！　それは零だ。
道子。でも——
博士。ナッシング！　ナッシング
下男多作出づ。
下男。旦那様、辛つと犬の居所をつきとめて參りました。
博士。何所に居た。
下男。人に噛付いたとかで撲殺されて了ひました。
俊子。え、まア可哀さうに。
下男。警察から今に來ませう、菰をかけて置いたのを見て來ました、はい。
博士。それで好い、萬事片付いた。
下男。屍骸を貰ひ下げて參りませうか。
博士。好い、もう好い。(と手を振る)
下男入る
道子。お父様、私どもには分りかねます。何うして急に然う云ふお心になつたか。それを聞かして下さいまし、私共心

配でなりません。
博士。何うしてと云ふ事はない、私は今夕日を見た、その壯大なる光景を見て然う思つた。落込む光は美しい、登る光は勇ましい。犧牲者の美しさは夕日の色ぢや光ぢや、輝ぢや。
道子。では、御自分を犧牲者となさいますか。
博士。第一人者は何時も美しい犧牲者ぢや、耶蘇を見い、十字架がある、ゴルゴタの十字架がある。十字架が無ければ永く活きられる人ぢやない。
道子。でも、使徒がありました。
博士。恐らくは私にもある。第二人、第三人は自然と世に出る。
道子。(唇を噛んで)私は家族を悲しみました。財產を惜しみました、然しお父様の功績まで沒しようとは思ひも爲も爲ませんかつた。それに——
博士。愚痴ぢや、みな愚痴ぢや。
道子。でも餘り思切りが好過ぎます。
博士。思切るぢやない、悟つたのぢや。
道子。私にはまだ悟れません。
博士。悟る事は要らない、悟りと迷の間に多くの人間は活き得るものぢや。
道子。然しそれは情ない人生です。
博士。決して然うぢやない。一生、悟る事なく死に得る人は幸福だ。
道子。お母様は迷の中に死にました。
博士。然し、あれも又不幸な人であつた。
道子。氣の毒に思召しますか。
博士。あゝみな人々の天分ぢや。
俊子。あゝ。
博士。俊！　何を嘶いで居る。私のこの心の喜びがお前達の目には見えないか。
俊子。お父様、私は恐しくなりました。
博士。何が。
俊子。世の中と云ふものが。
博士。恐れるな、進め、目を瞑つて進め、
俊子。でも、山もありませう。川もありませう。
博士。山があつたら止れ、川があらば淺瀨を擇んで渡れ。のう、ろく、然うだらう。
ろく。然やうで御座います。
博士。お前は今まで然うして活きて來たのだな。
ろく。はい。
博士。決して悔恨はあるまい。振返つて見て悲しいの殘念の　と云ふものがあるまい。
ろく。何も御座いません。
博士。そこだ〳〵。私の今日までは總て反對ぢや。五十幾年の間、苦心して努力して來た後を振返つて見ても、功績は

何も殘らん。空だ、空の空だ。たゞ殘るものは悔恨のみぢや、少年、青春、壯年、總て悔恨だけぢや。知識と云ふ空虛を逐うて、今日まで幽靈のやうに活きて來たゞけだ。

徹太郎何時の間にか二階なる博士の書齋へ入り、そこより顏を出して、

徹太。お祖父樣。

博士。おゝ、徹太郎。

徹太。お祖父樣のお部屋には色んなものがあるね。

博士。あゝ。

道子。あゝおいたを爲ては不可ません。

徹太。この皮、白熊？

博士。あゝ。

徹太。あの犬を連れてる寫眞はお祖父樣なの。

博士。あゝ。

徹太。まるで別の人のやうね、今よりか瘦せて髯が生へて恐いやうだ。

博士。怖い筈だ。私は然し怖い事を知らなかつたのぢや。馬鹿ぢや。

徹太。そしてこんな繪を下げて行つたの。

博士。あゝ。

徹太。こつちにある大勢の寫眞は。

博士。その寫眞は皆死んだ。

徹太。でもお祖父樣は居るもの。

博士。そのお祖父樣も死んで了つた。今こゝに居るのはその寫眞の人ぢやない。

徹太。あ、こゝに（と叫ぶ）

博士。徹太郎！　その机の上に蒔繪の箱へ入つた本がある筈ぢや。それをこゝへ投げてくれ。

徹太。表に英語を書いた？

博士。あ、それ〳〵。投げてくれ。

徹太。はい。（と草稿を投出す。綴目切れて千紙落葉の如く落散る）

道子。まア亂暴な。

俊子。あら原稿です。（と走寄る）

姉妹二人して搔集めて原稿を博士へ渡す。博士默つてそを火中に投ず。燃上る。

道子。あら、お父樣。

俊子。お父樣！

博士。心配するな燃したゞけぢや。

俊子。何んで〳〵。

博士。私の仕事は言葉で殘すべきでない。心から心へ。

徹太。お祖父樣、あれ夕日があんなに奇麗！

博士。おゝ。

俊子。まア奇麗！

徹太。まるで燃えてるやうね。

博士。あゝ夕日。あゝ夕日。（と又倚子に仆る）

附錄（二）

生れざりしならば

人物　都筑龍作　代議士
　　夫人幸子
　　子息潔　文科大學生
　　森桂子
　　石見某　副院長
　　某　盲人
　　その他、院醫、看護婦、手代、人夫等出づ。

處——某外科醫院

時——現代

某外科病院の一等室。西洋室。四月中旬の午後、二時を過ぎたり。空低く曇りて、南の風吹く。中央に寢臺あり。白き寢具、白き毛布、白き枕など正しく整へあり。枕頭に檢溫表、藥壜、袂時計など置く。正面は白く高き壁にて中央に兩開きの硝子戸あり、露臺に續く。左右に硝子窓。直ちに道路に望む心持にて植込の梢、電柱の肘など窓より見ゆ、いふ迄もなく階上の室なり。壁上に一面の大油繪をかゝぐ。ラフアエルのマドンナ像を模寫せるもの患者寢ながら見んための便を圖りてやゝ低目に掛けたり。天井より患者の枕近く鐘形硝子製の吊花形を下げ、季にかなへたる草花挿せり。寢臺の裾（上手）少しく前寄りに圓テイブルあり、三四脚の絹張り椅子、裝飾付きの腕椅子を置く。

正面の壁より左右へ鍵形に折曲げて、上手に付添室に續く入口、下手は廊下につゞく出入りの腰高障子磨障子。下手の鍵形の壁際（ベットは下手を枕にす）に皮張りの長椅子あり。上手の同じ壁に添ふて雜具入を兼ねたる唐木製の洋風化粧臺あり。こゝにヒヤシンスの盆栽、委見鏡、一輪挿、詩集めける洋書五六册を見よげに飾る。壁間そこここに大小の懸額數面あり。重に風景の水彩畫にて輕快に紫だちたる色彩のもの多し。

——幕明く——

潔、二十二、白き筒袖の病院服を着てベットに腰かく。少しく病衰のさまはあれども、髮ぐせ軟かに眼中凉しく、若き人の優しき感情を表はせり。右の足腓腸に繃帶せるを裾にくるんで、前に据ゑたる椅子の上に出し、俯向きて詩集らしき本に讀耽ける。

室内の掃除を今漸くすませたるところと見え、桂子は看護婦と共に、額面その他の調度の整頓にいそがし。桂子、十九、色白く頬豐かに、諸事内氣なる娘。女子大學の生徒。年頃の前に幾らか地味なる紫紺がゝれる被布を着たり。言葉尻の掠れる癖あり。

潔。（讀書の目を擧げて）もう好いよ、桂さん、然うやつてお置き、後で誰か片付けるだらう。

桂子。え、でももう直きですから、序に片付けて置きませう。

潔。今日は大變働くね。

桂子。えゝ、些つとは。（と笑ひながら化粧臺の上なる盆栽ヒヤシンスを取上げて）まア、こんなに萎れて了つて、水を遣らないからなんでせう。

潔。どれお見せ。（と近寄せて見て）お母さんだよ、始終ソワ〳〵ばかりして居て、花なんか氣も付かないんだもの。何うしてあゝ噪急なんだか、日に一度ぐらゐ日に當てると好いんだ。

桂子。（潔に近く）甚いわ、葉の色もこんなに枯れて了つたわ。外へ出して置きませう。（と盆栽を窓の外に出す）

話の中に看護婦去る。

潔。然しヒヤシンスが枯れるなんて、餘り縁起でもないね。（と桂子を見て微笑む）

桂子。何うして？

潔。何うしてッて事も無いけど、好く世間で然う云ふぢやないか。

桂子。（故と閉えぬさま、大額の前に立ち）それからこのマドンナ像ね、毎日同じものばかりで何でせうから、何か別の額と取換へませうね。飽きたでせう。

潔。何有好いよ。ラファエルの筆だ。それだけは何時まで見ても飽きが來ないから不思議さ、五年以來僕の戀人なんだもの。

桂子。本當に何うしてこの繪がそんなに潔さんの氣に入るのでせう。飽ッぽい人なのに妙ですことね。

潔。一つは似ても居るからさ、目付なんぞソックリだ。

桂子。誰に。（後向のまゝ）

潔。誰でも好いさ。

桂子。だから誰ですよ（と脚を踏む）

潔。（笑ひながら）誰にでも好いよ。

桂子。（誘はれ笑して）可笑しな人ね。

都筑夫人幸子、潔の母、急しく入り來る。三十九と云へど、小格にシンナリせる麥付ゆゑ三十位に一か見えず。扮裝もそれに相應せる若好ゆゑ、潔の母と云ふより姉と云ふに近し。流行の縞の襲袷を裾輕く着て派手好みの帶、襦袢、襟、細きプラチナの鎖を襟にかけたり。

夫人。（急しく腕椅子に掛けて）駄目、駄目。

潔。ぢや今の電話は然うぢやなかつたんですか。

夫人。まるで聞いた事もない家なんだよ。銀座の何文館と云つたッけ。そして、お父樣への用なんだもの。

桂子。（化粧臺を片付けつゝ）ではお召は未だなんですね、何うしたと云ふんでせう。

夫人。（帶より金時計を出して）もう二時過ぎてる。氣が揉めるね、誰か使を出して見ようかしら。

潔。その店だつて電話がありませう。

夫人。越後屋？ だから電話を掛けて見たらね。今仕立てて居ますから、最う少し待つて下さいと云ふの。

潔。それなら爲方がないさ。六時ッからの會なら大丈夫間に合ふ。使を出したつて同じ事だ。

夫人。でも最初は今朝の八時迄ッて約束なんだもの。若しか今度後れると折角の間に合はなくなる。ああこんな事なら寧そ他處の店へ頼めば好かつた。ほかの物ばかり出來たつて何にもならない。それに天氣の模樣も變だし、何うも一降り來さうだ。ねえ桂さん、今朝の新聞には快晴とあつたね、全く天氣豫報ぐらゐ當てにならないのは無い。

潔。（噴き出して）又始つた、お母さんのお株だ、全るで駄々ッ子だ。

夫人。何とでも被仰いよ、自分の事で無い人は笑つてるさ。ねえ、桂さん。

桂子。屹度來ますわ、伯母樣。越後屋だつて今晩の事を承知しきつて居ますもの。

夫人。然うだらうね。

潔。呆れる。今自分で電話をかけて置きながら、直ぐ又氣を揉んでるんだもの。それぢや手が付けられない。

夫人。お前は大きに落付いておゐでだからね。

潔。お母さんよりや落付いて居るさ。

夫人。偉いもんですよ。（と笑ひつゝ偶と氣が付いて）あ、然う〳〵スッカリ忘れッちやつた、大事な手紙を書くんだつけ。（と化粧臺の上よりサック入の料紙文庫を持出し、卓の上にて急しく何か書き始む。卓に突俯して他に見せぬやう片肱を子供らしくかまふ。

看護婦、撒霧器を携へて入り來る。

看護。（夫人に向ひて）些いと御部屋を消毒致しますから、何うぞお立ちなすッて。

夫人。（書き損じの紙をベリ〳〵引裂きながら、氣さくに）さア〳〵、何うぞ御遠慮無く。

看護。臭う御座いますよ。

夫人。石炭酸でせう、大丈夫、私は却つてその臭ひを嗅ぐと頭が爽々して好い氣持なの。

潔。（不審さうに）おい、何んで又今日に限つて消毒なぞするんだ。

看護。何う云ふものですか。醫局から然う申付かりました。

（桂子に）お嬢様、貴方は？

桂子。ぢや潔様、私はヒヤシンスに水を遣つて來るわ。（と盆栽を持つて去る）

看護婦は桂、壁、牀など消毒し始む。夫人は考へては書き、考へては書き二三枚を書き損じて引裂く。

潔。（ベット上に足を投出して、又詩集を取上げしが、下へ置きて）大廨長いお手紙ですね。何所へ出すんです。

夫人。伯父様へ。（とペンを走らす）

潔。獨逸の伯父様へ？　何の用なんです、僕の病氣ぢやないですか。

夫人。いゝえ、そんな事ぢやない、何うしてなの？

潔。たゞ心配ですから——僕の事なら打遣つて置いて下さい。餘計な心配かける許りだもの。

夫人。本當に、そんな事ぢやないの。今は話せないけど、實はね。（と笑顔を上げて聲を潜め）お父様の爲めに大變お目出度い事が來るの、誰にも秘密よ。その時になつて屹度喫驚するわ。

潔。何んだらう。

夫人。何んでも。大變に〳〵好い事。（と書く）

潔。お父様も御存じなんですか。

夫人。知つて被居るとも。だけど、その時になつて見ると矢張り喫驚なさるわ。

潔。何んだな、洋行でもするのかしら。

夫人。まア默つておゐでよ。後になると知れるから。（と夢中に書き居る）

潔。相變らず急しい事ッた。（と又詩集を取上げる）

桂子入り出る

桂子。潔さん。貴方お存じなの。あの穢ない、凄い顏の老人を。蒼い偃僂の兒に手を引かれてる。

潔。どんな風？——盲目ぢやないか。

桂子。看護婦室の前に立つて、切りに貴方の事を訊いて居てよ。そりや氣味の惡るいほど痩削けた、白髮を伸して、爪の長い、凄オい人よ。指の先きが始終ピリ〳〵動いてるのね。そして長い裾の着物を引摺りながら、廊下を煙のやうにスウッと歩くの。

潔。あ、ぢや又來たんだ。何か訊いて居たかい。

桂子。何も知らないから私はその前を通つたでせう。すると二號室〳〵ッて切りにこゝの話をして居るから、私默つて聞いて居たのよ。あの二號室におゐでなさる若い方に何か變事がないかッて、何度も〳〵諄いほど尋ねてゐるの。そして、取締が何の事もないと然う云つて聞かしたら、いやそんな筈は無い。そんな筈はないッて、頸をひねつて何か考へて居たわ。貴方何うして知つて被仰るの。

潔。又かい、（心持聲を顫はせて）一昨日かも來て同じ事を訊いて居たと云ふ。

桂子。何んなの、あの人。

潔。按摩なんだ、四五日前に一度揉んで貰つた。

桂子。だッて、目はパッチリ開いて居てよ。

潔。丙障眼とか云ふんだ。

桂子。あら、ぢやあの目は死んで居るの、まア厭！　道理で眞黑な、そりや何んとも云はれないほど眞黑な目だつた。人形の目ね、丁度あれなの。そして、俯向いて妙にニヤ〳〵笑つて居る顏ッたら、——人の話を馬鹿にしてるやうに——はア〳〵ッて云ふ度に、眞黑な口の中が見えたわ。まるで洞穴のやうに冷たく黑かつたわ。

夫人。潔さん、謙遜の遜と云ふ字は何う書きましたッけね。

潔。孫の字の下に辶です。（と答へて、桂子に）それに、あの手の冷たい事ッたら無いんだ。揉んで了つても氣味が惡いまるで死人に觸られるやうだ。

桂子。まア厭だ！　何故またそんな者を病院なぞへ入れるのでせうね。

夫人。努力の努は？

潔。奴の下へ力です。

夫人。あ、然う〳〵。（と書く）

潔。あれで易を見るんだ。この頃の晩、然うだ、お母様が歌舞伎座へ行つた晩、餘り退屈だから肩を揉んで貰つた。奴切りに僕の骨組なぞ見て居たッけ、そして不意にね、貴方は今絶壁の上に立つて居る、右にも左にも路は無い、お若いのに氣の毒なものだッてね、妙な事ばかり云つて歸つた。それから、あゝして毎日のやうに看護部屋へ訊きに來るんだ。

桂子。まあそんな事を、言ふ事にもよるわね。何時頃から來てるの。

潔。つい此頃からだ、誰に斷つたと云ふんでも無く、あの偃僂に手を引かれて、ズル〳〵に入り込んでるんだ。然し療治も軟かいし、それにその八卦が上手だと云ふんで、近頃は方々から頼まれて居る。

桂子。そんな厭がらせを他に云つて、お金にする氣ぢや無いんでせうか。

潔。そんな事はないだらうね。療治の代は取るけど八卦のお錢は何うしても受取らないもの。

桂子。名前は。

潔。さあ知らん。手を引いてる偃僂の眞似して、お師匠〳〵と皆呼んでゐる。

夫人。（手紙を封筒に收めながら、偶と聞き付けて）桂さん、何の話、それ。

桂子。何んですか、妙な盲人の話なのよ。

夫人。あ、然う。（と別に氣にも留めず、何か考へ居る潔に手紙を出して）潔さん、御苦勞でも上書を願ひます。

潔。え、書いて置きませう。（とベットの前に置く）

夫人。急ぐんですよ。明日の郵便船へ出すんだから。

潔。えゝ。（と頭を抑へて考へ込む）

夫人。ちよッ、爲樣が無いね。ぢや桂さん貴方書いて下さい、伯林の大使館宛に。

桂子。伯父樣へですか、はい。（と卓に坐つて書く）

夫人。（不審さうに潔を見て）何うしたの潔さん、又何か考へたの。好くないわ、元氣になさいな。あゝ草臥れた、肩が痛くなつた。（と又時計を見て）あ最う二時半だ、越後屋は何うしたんだらう、今日なんか間を缺かせやうものなら、私それこそ承知しない。

桂子。（上封を書き終りて）ぢや私最う一度電話かけて見ませうか。

夫人。御苦勞樣ですけど、ぢや何うか。

（襲の看護婦、病室、付添室等を消毒し居たるが、この時出で來たる。

桂子。吉田さん、（看護婦の名）電話室は何方でせう。

看護。では御案内致しませう。

夫人。あ、些いと〳〵、桂さん。私餘程憤つて居るやうに云つて下さいよ。今度後れるやうなら最う着物も何も要らないッて、好御座んすか、キッパリですよ。

桂子。承知しました。（と立掛る）

看護。（潔に向ひて）貴方最うお湯へお入りでせうね。

潔。今朝入りました。

看護。ぢや、お爪を好く取つて置いて下さい、何れ今内科の御回診があるでせうけれど。

潔。爪だ？（と不審さう）

（桂子、看護婦兩人去る。夫人はその間に化粧臺より編物を持出して潔の靴下を編み始む。

潔。お母さん、今日の夜會は何時頃までかゝります。

夫人。さあ可也晩いでせうよ。餘興や何か大分大仕掛けのやうですから。

潔。お歸りから直ぐ此方へ廻つて下さいますか。

夫人。え、直ぐ歸りますとも、着物も此所へ取寄せて、家へも寄らずに行つて來る積りだから。

潔。さうですか、何うか然うして下さい。僕は何んだか心細くて耐らない。

夫人。何が又心細いの。

潔。僕ァ今日の手術が氣になつて耐らないんです。

夫人。何うして？　氣の弱い人ね。

潔。又笑はれるかも知れないけれど、僕は何うも普通の手術ぢやないやうな氣がする。死ぬとか活きるとか、何方にしても生命賭けの手術らしく思はれるんです。

夫人。お止しなさい、冗談にも。高がそんな腫脹一つ位で、生きたり死んだりして耐るものか。然う云つた日には底豆でも遺言を書かなきァならない。

潔。けれども、これや唯の腫脹ぢやありませんよ。何しろ餘程惡性なものには相違ない。

夫人。神經ですよ。何故然う神經質なんだらう。男のやうに

も無い、潔さんだからッて、將來抱負でもあらうと云ふ人が、高が根太一つぐらゐで死なれますかよ、馬鹿々々しい。

潔。貴方にや見えないんです。まあ些いとこの額に觸つて御覽なさい、熱の潮退ッたらありません。惡寒はする。それに脈搏も變つたやうだ。ドッ、ドッと搏つてドッと休む時がある。（と自脈を引いて見てゐる）

夫人。まア、あれだもの。困るね。そんなら些ッとは痛むとか疼くとか、何うかしさうなものだ。

潔。痛まないから猶心配なんだ。性の惡るい病氣ほど外に顯はれない。表面はシャンとして居るけれども骨の髓が少しづゝ腐つて行くのぢやありませんか。お父樣の足と場所が丁度同じだし、僕は二三日前から氣になつて耐らない。それにあの腐骨瘡と云ふ病氣は遺傳すると云ひます。

夫人。（煩さげに編物を投遣りて）最う〳〵聞きますまい、お前の相手になつて居た日にや際限が無い。意地になつて厭な事を聞かせるんだもの。

潔。でも僕は、今から斷つて置く、お父樣のやうな、あんな體になつてまで活きて居ようとは思ひませんよ。

夫人。あゝ、何うとも御勝手さ。

潔。お父樣はね、あれで……

（夫人聞かぬ態にて、潔の讀半せる詩集を取上げて、挿繪など拾ひながら、小聲にワルツの曲譜を口號む時々は足拍子。

潔。お母樣！

夫人。……

潔。お母樣。

夫人。何ですね、煩さい。

潔。（少しく間を置きて）お母樣は氣樂ですね。

夫人。えゝ、氣樂ですともさ、心配して何うかなつた例が無い。蚯蚓はね、この土を食べたら何うしようと心配しますとさ。

潔。鋏を取つて下さい。

夫人。（棚より爪切を取りて）切つて上げやうか。

潔。獨りで取ります。（と受取る）

夫人。相變らず强情なのね。似ない〳〵ッて云ふけど、そんな所はお父さんにソックリだよ。血の統は爭はれないね。

潔。然しお父樣は自信があるから好い。飽迄底の底まで押して行く强い所がある。あゝして行けたら人生なんて恐ろしいものぢや無いかも知れない。

夫人。けれども、そりや近頃の事だよ。以前は矢張りお前のやうに弱い、取越苦勞の、神經質の人だつた。それを勵ましたり、慰めたり、私も隨分骨を折らせられたわ。全くよ。だから私は何時もお父樣にそれを云つて自慢するの。然もなけりやお父樣と云ふ人は一生貧乏學者で書齋の中で終つたかも知れない、兎に角政治界の表面へ出て、他に何とか

云はれるやうになつただけでも私の手柄なんだわ。

潔。　あゝ、僕は何故斯う弱いんだらう。世間が恐ろしくなる。

夫人。體？　そりや運動しないからさ、分つてるわ。今は爲方がないけど、今度病氣が癒つたら些と張氣を出して運動して御覽。屹度好くなるよ。朝も早く起きて冷水浴でもして、出來るだけ身體を疲らせるやうにするんだね。然うすりや夜も好く眠られるよ。

潔。　性分ですな、生れつきだ。お祖父樣やお父さんの惡い結果に生れたんだ。斯うして三代から四代、段々と血が腐つて行くんだ。

夫人。それからお前は好く夜深しゝて書物を讀んでるけど、あれも好くないよ。ランプで頭が熱てるばかりでも好くない血が欝するもの、寢られないのが何より毒、これからは枕元へ蓄音機でも置いて上げやう。そしてランプはお廢止にして電氣燈にするんだね。九時なら九時とチヤンと時間を決めて置いてその時が來たら私がボタンを押して消して了ふ。例令ひお前が何と云つても聞かない。ね、好いでせう。然うすりや爲方がないからお前も寢て了ふだらう。好いね、それが一番だよ。

潔、俯向いて爪を切る。

夫人。ねえ、潔さん、潔さん。

潔。　何です、お母樣。

夫人。折角話して居るのに、聞きもしないで、お前何を考へ込んで居るの。

潔。　お母樣、僕の云ふのは身體なんかぢやないです。もツと〳〵大きい事なんです。貴方は何も知らないんですよ。

夫人。そら又始つた。十八番よ。一體私が何を知らないと云ふんだらう。何うせ私は學問が無いけど、四十年近くも斯うして暮して來たんだもの、潔さんなんかに較べりやこれでも幾らか世間も知つてる積りよ、それにお前やお父樣は、何時も二言目には何も知らない〳〵ツて然う云ふのが、私にやそれが何うしても分らない。學問？　理窟！　然うぢや無いでせう。ぢや何んだらう、何を知ら無いだらうと色々考へて見るけれど矢張り判らない。全く不思議なの、云はゞお父樣だつてお前だつて私だつて同じ世間を——まア同じ道を歩いて居るやうなものぢやないか。それをお前達ばかり別の道を歩いて居るやうな顏して、お前は知らない〳〵ツて云ふ譯が、私には何うも飲込めない。

潔。　でも、同じ道を歩いても、先を見る人と見ない人とある。

夫人。まアお待ちよ、私に云はして頂戴。私も今それを云はうと思つてる所なのよ、世間と云ふものは、然う難しいものでせうか。お前だつて私だつて誰だつて、同じやうに寢て同じやうに喰べて、そして爲る事も考へる事も皆同じ事して活きて居るんぢやありませんか。お前の世間だつて私

の世間だつて同じだ。同じ中に活きて居るんだもの。それに、お前達ばかり然も〳〵偉い人、私だちと別な世界を見て活きてるやうな事を云ふ。それが第一私には判らないんです。それほど別な事を見て考へて居るのなら、何所か私どもと違つた活きやうをしさうなものだ。然うでせう、潔さん、私の云ふ事は何うです。

潔。　だつて、現在この胸の不安——この私の心配、恐怖、それはお母樣には分らない。丁度月の好い晩に外の景色を見るやうなものです。遠い森でも川でも好く見えるやうな氣はする。然しハツキリとは何も見えないで、直ぐ傍に立つて居るものに驚く事が度々です。あれが然うです、私どもの心なんだ。形は無論見えないが、何かしら恐ろしいものが直ぐ前に横つて居るやうな氣がしてならない。

夫人。詰らない事が苦勞になりますね。何うで月夜には形は見えません、見えるのは陰ばかりです。

潔。　その、その影です。黑く——眞黑くその影……

夫人。可笑しいわ、ぢや影を見て畏がつて居るの？　ほゝほゝゝゝ、矢張り腦が惡い所爲よ。まあ私どもに云はせると病氣の中ですね。

潔。　或は然うかも知れません。然し、近頃妙に氣が滅入つて、何だか今にも暗い冷たいどん底に落ちて行くやうな氣がするのは事實です。その不安たら何にも譬へやうも無い。次いで來る運命！　あゝこの心持が誰に分かりませう。

夫人。それが詰り病氣なんですよ。

潔。　然しお母さんだつて、着物が來ない間は待遠しいでせう、氣が揉めるでせう、同じ事です。來る者を待受ける程不安な事は無い。

夫人。だつて私は着物だもの。

潔。　着物だからでは無く、着物でさへでせう。途中どんな間違があつて時間の間に合はなくなるとも限らない。假令間に合つた所で、寸法を違つて仕立てたとか職人の粗相からして……

夫人。お舍しなさいよ。然うで無くてさへ心配して居るのに。

潔。　矢張り心配でせう。

夫人。最う〳〵そんな話は舍しませう。聞く丈でも氣に掛る。お前と云ふ人は何故然う厭な事ばかり云ふのだらう。——厭な事と云へば、大分暗くなつて來た、降らないと好いがね。厭な天氣だ事。

潔は默然として暗愁に沈む處へ、看護婦廊下の外より。

看護。副院長先生の御回診で御座います。（と摩掛けてドアを開ける）

副院長、石見學士、四十三四、年の割に頭ツルリと禿げ、もの馴れて輕快なる言葉つき、態度。

白き手術衣着、看護婦二人を連れ、小股に性急なる

歩き振。

石見。（夫人の會釋に答へて）また厭な天氣になりましたね、今に一降り來ますよ。御主人は、都筑さんは。

夫人。最う既くに參る筈になつて居りますのですが、（と椅子を取りすゝむ）

石見。いや、何うか、何うかお關ひ無く。然し何れお見えになる事はなるでせうね。

夫人。は、今日は議會も御座いません筈ですが、何をして居るのですか。

石見。何しろ私どもと違つて、政治家の方は御繁忙なぐらゐでなくちや歇目です。實際お羨しいですよ。

夫人。何ですか最う朝ッから飛廻つてばかり居ります。

石見。兎に角些いと拜見致しませう。（と火鉢に烙れる手を揉みながら病床に寄り、笑ひながら）坊ちやん、今日は何うしましたね。（と診察にかゝる）

學士は潔をベットに仰臥さして、胸部、腹部、特に心臓部を精しく診察して、尿利便通の事など、色々尋ねたるのみに終らんとす。

潔。（寢ながら）繃帶を解きませうか、足は見ないんですか。

石見。（患者の瞳孔を檢しつゝ）なアに好うがす。私は内科だもの、見ても解かりませんよ。そして今朝灌腸をかけたでせうね。

潔。え、昨晩も。

石見。然うですか、ぢや宜しい。（と行かんとす）

潔。（不意にベッドに起上り學士の手を掴みて）副院長！（と聲を顫はす）

石見。（驚きて）何んですな。

潔。僕の病氣は腐骨瘡でせう、右の足は腐つて居る。隱しても歇目です、僕は皆知つて居ます。

石見。誰も隱しやしませんよ。貴方は一體神經質過ぎる、不可ません、然う氣を焦つては病氣の毒です。醫者の云ふ通りになつて穩和にしてると、坊のキイ〳〵は直ぐ癒る、後でお母様が御褒美をドッサリ下さるとさ。

夫人。何ですね、潔さん。失禮です、手をお離しなさいな。

石見。まア好うがすよ。この坊ちやんは形ばかり大きくても、からヤンチヤで困るんです。ね、都筑さん、はゝはゝ。

潔。ぢや云つて下さい、僕の病名は何です。今日の手術は何です。切斷でせう、僕の足を切るのでせう。

石見。そりや君、僕に訊いても歇目。僕は内科だもの。

潔。でも院長は教へてくれません、今日まで何度も訊いたんです。

夫人。潔さん、貴方も判らなさ過ぎるね。病名は何うでも病氣さへ癒つたらそれで好いぢやありませんか。

潔。僕には隱してるんだ。屹度然うだ。皆で相談して僕に隱して居るんだ。（と副院長の手を突離す）

石見。然う氣を揉んぢや不可ん。然う氣を揉むと蟲が出ますよ。それよか一日も早く癒つて鎌倉か何處か轉地でもするんだね、桂子さんと云ふ美しい看病人はあるし、理想ぢやないか、ねえ坊ちやん。（とおどけて眉を叩き）病院中評判だよ。（と笑ふ）

と夫人も笑つて聞いて居る

潔。聞かなくとも好い。そんなに云ひ憎いものを聞く必要がない。

石見。云ひ憎いッてね、そりや間違だ、僕等は商賣だもの。まア早い話が米屋にしろ、薪屋にしろ、代物の價値が格別に騰貴したからッて、それをお得意様に觸れずに居られますまい。同じ事でさ。氣の毒だ言ひ憎いなんて云つて居ては第一醫者と云ふ商賣が上つて了ふ。はゝはゝ。

潔。何うでも好いんだ。僕ア寧そ死んで了つた方が好い。（とベットの上に突伏して了ふ）

夫人。また、あんな事。（眉を顰めて副院長に）あれで本當に困るんです。

石見。一體お氣が小さいんですね。然し今の學問した青年は皆あれですよ。宅の伜どもなぞも始終あれで困らせます。死ぬの活きるのと云ふ問題を極めて容易に考へますからね。私だちにや分らない考へですよ。尤もこれが時世と云ふなら爲方がありませんが、こんな時勢に生れるのは第一自分が損ですね。私どもの若い時にや思ふの考へるのと云ふ事が無かつたものだ。（と笑ひて）。そしてと、都筑さんは未だお出でなさらんやうですが、——手術室の都合もある事ですが——兎に角お立會ひ下さる事は下さる筈なんでせうね。

夫人。本當に何う致したんでせう。他にも用事がありますから、參る事だけは必ず參るだらうと思ひます。

石見。ぢや、お見えになつたら直ぐ醫局までお出でを願ひませうかね、お打合せして置く事もありますから。

夫人。承知致しました。

石見。潔さん、餘り氣を揉んぢや不可ないよ。煩悶病は不治の症ぢやよ。はゝはゝは、では奥様。（と會釋して、看護婦と共に去る）

夫人。（學士を送り出して戻り來り）あゝ、急に風が冷たくなつた。それに空も暗らくなつて來たやうだ。潔さん、お前薄着のやうだが寒くは無いかね。

潔答へず

夫人。本當に世話の燒ける坊ちやんだね。（と掻卷を着せながら、偶と心付きて聞耳を峙て）あ、——降り出した、雨かしら。（と慌てゝ窓際に駈け寄り窓を開く）

ハラ〳〵と雨の音

夫人。あゝ到頭本降りになつて了つた、潔さん、何らしやう困つたね、西の方なんか眞暗よ。歇目々々、それに風も出さうだ。困るねえ。（と時計を見上げて）おゝ、最う三時

だ。

潔。（突伏したる儘）最う三時ですか、あノ、あと一時間だ。

夫人。何に？　手術に？

潔。　え、。

夫人。最う舍しませうよ。そんな話をすると私まで氣が揉めるから。それでも、桂さんは何うしたんだらう。晩いね。

潔。（顏を擧げて）おッ母様。

夫人。又なの、最う舍して頂戴。

潔。　お父様は何うしたんでせうね、三時だと云ふに。

夫人。なアに、最う追付け被來るよ。私も約束して置いた事があるんだから。

潔。　然しね。お母様。お父様は何故この頃僕をあんなに憎むのでせう。もとはああぢや無かつた。

夫人。お父様がお前を憎む？　そんな事があつて耐るものか、私よりお前を可愛がつておゐでなさる。男親がそれでは躾が付かないッて私が小言を申上げる位、そりや子煩惱だわ。それに憎むなんてそんな事が聞えて御覽なさい、屹度腹をお立てになるから。今度の病氣だつて然うです。何も腫脹一つ位に大騒ぎして、入院までしなくてもと私は思つたんだけれど、お父様は態々石見さんと相談して被來つて、無理に入院さした位なの。私が病氣したつてこんな事は無いよ。そして、あの心配して被在る樣子を御覽、議會に行つても氣になると云つて、日に幾度電話をかけてお寄越しなさるか知れないよ。

潔。　そりや僕も知つて居ます。然し近頃、――この二三日の樣子は確かに變だ。僕が何を云つても返事も碌になさらない。昨夜なぞ何う見たつて僕を憎んでる樣子が見えた。

夫人。何う變なの？

潔。　何うつて事もないが。確かに變だ。

夫人。何か又被仰つたんでせう。あれはお父様の癖だと思へば好いぢやないか。

潔。　そんな事ぢやありません。僕が醫者の診斷を聞いたら――今日の手術ですね、默つて斯う睨むやうな目付で私の顏を見て、明日の事は明日知れる。明日を支配する力は人間に無い、と斯う云ふ。そして、それから何度訊いても默つて、腕組して返事もなさらない。

夫人。そりや當前さ。お前のやうに然うクヨ〳〵明日の事ばかり考へてる人は無いもの。詰りそこを云つたものでせう。

潔。　それだけぢや無い、何かある、屹度何かある。

夫人。煩さい人だね、その何かゞ分らないぢやないか。

潔。　僕にも分らない。然し苦しい。

夫人。まア結構ですよ。誰だつて何か種があるからこそ心配もする。お前のやうにその種から探し廻るやうな心配なら樂なものですよ。

潔。　それが無いから苦しいんです。

夫人。また始めるのね。お舍し〳〵。そんな煙のやうな摑み所の無い話でも、お前が凝つと目を沈めて齎ぎ込んでるのを見ると、私まで何だか氣を煽られるやうで耐りません。好く似たものね。お父様にも矢張り同じ癖があつて、時々妙な變哲も無い事を云出しちや他を困らせる事がおあんなさる。

潔。　でもお父様は根に强い所があるから好い、力もある。

夫人。もう〳〵そんな話は無い事〳〵。私はまア桂さんでも見て來やう。（と立上る）

桂子慌しく入り來る。

桂子。伯母様、いま伯父様が被行いました。

夫人。あゝ、然う、ぢや丁度好かつた。そして電話は。

桂子。伯母様被仰る通り。然う掛けましたの。然うしますとね、先の番頭らしい人が云ひますには――。

夫人。そして、出來るんですか、出來ないんですか、結局。

桂子。大變あやまりましてね。何うか奥樣へは貴方から宜しく申上げてくれつて、切りと私に賴んで居ました。

夫人。ぢや出來ないんだね。

桂子。いゝえ、今持つて參りますよ、直ぐお達け致しますから、三十分ほどお待ち下さいッて。

夫人。三十分ほど？　ぢや屹度出來るんだね、それでは、まア〳〵好かつた。何うかと思つて、私本當に氣が氣で無かつた。桂子さん有難う。

この時、廊下の扉にカチリと握手に觸る音、ドシンと重き物の扉に突當る音。

桂子。あら、伯父さん。

夫人。さう。（と扉に寄らんとす）

桂子。（小聲に）大層醉つて被居ることよ。

夫人。（眉を顰めて）さう。又？　困るね。

扉を開きて都筑代議士入り來る。五十二三。脊高く肩幅廣く、逞しき骨格。半白の五分刈、軍人風の鬚中折帽を目深く、麁末なる鼠色の長外套を着て、太き杖にすがり出づ。右の足は膝膕節より切斷せる不具者なり。片手に新聞紙包の大額面やうのものを携へ、肩のあたりシタ、カに雨に濡れ、帽子の緣よりポツリ〳〵と雫垂る。

都筑。寢てるな。（と潔を見ながら、その前を重く歩みて、腕椅子の上に重く腰掛く）

夫人。まア何うなすつたの、外套も何もビツショリよ、歩いて被來つたの。寒むかつたでせう、末だ降つて居ますか。困るわ。

都筑。あゝ。

夫人。まアその外套をお脫ぎなさい。帽子も。

都筑。好い、この儘で好い。

夫人。好いぢやありませんよ。身體の毒です。（と自ら帽子を取り）さ、外套も。

都筑。煩さいな、この儘で好い。桂、咽が渇いた、紅茶か何か一杯くれ。（と動かず）

桂子茶を煮れに立つ。

夫人。まだそんな剛情をお張りなさる。不可ません、不可ませんよ。さ、私が脱がして上げます、お脱ぎなさい。（と忠實しく手を貸して無理に外套を脱がせながら顔面をさして）貴方、そしてあれは何？　見ちや悪いんですか。

都筑。お前なぞ見て判るものぢや無い。

夫人。まア何うなすつたの、本當に今日は畏いこと、他をこんなに待たせて置きながら。（と濡れものを他の椅子へ始末する）

都筑。あゝ、用事があつた。

夫人。用があつた、そりや然うでせうけれど、私一人にまアどの位氣を揉ませたと思つて。最う四時ぢやありませんか。あの時計を御覽なさい。

都筑。時間を忘れて居たんぢやない。

夫人。だから、猶更ですわ。私は最う蠱から〳〵心配で〳〵立つても居ても居られませんでしたわ、人が悪いのね。

都筑。そして、石上博士は？

夫人。は、被來いました。そしてよ（と娘らしく頸をかしげて小聲に）あれは持つて來て下だすつたでせう。若しあの方が不可なかつたんぢやないかと思つて、私どんなに氣を揉んだか知れないわ。

都筑。博士は何も云はんか、私は石上の方を訊いて居るんだ。

夫人。ほ、御機嫌が悪い。何うしたんでせう、今日は。そして何所でそんなに召上つたんです。まア酒臭いこと。

都筑。内でも飲んだ、途中でも飲んだ。

夫人。ほう、暴風〳〵、何うして然う今日に限つて當り散らすのでせう、あ、何か面白く無い事があるんですね。理らないわ。私ばかり。全體、貴方が悪いんだ、後れたのを謝るのが當り前ぢやありませんか。

桂子紅茶をいれ來る。都筑は默然としてそれを飲み居る。

夫人。貴方、そしてあれは好かつたんですね、早く聞かして下さいな、氣が氣でないんですから。

都筑。あれとは、金だらう。

夫人。（聲を低めて）え、持つて來て下だすつたのでせう。

都筑。（思はず苦笑して）お前は相變らず氣樂だな、羨ましい。

夫人。出來なかつたの、え、出來なかつたの。

都筑。總べてがその氣で居るんだ。それも好いさ。（と投出すやうに）その人のためにや何より幸福だ。

夫人。（氣の毒さうに）あら出來なかつたの、え、出來無くつても好いわ、出來なくつても好いのよ。たゞね、何うだらうと思つて私心配して居たのですけど、都合は悪いと云へば先だつて待つてくれますよ。今まで一度だつてそんな事を

云つた例がないんですもの、大丈夫だわ。今度はキツパリ私から然う云ひます。貴方の名を出さないで私一人の考へで然う云ふわ、ね、好いでせう。

都筑。（煩さげに）金は茲にある。（と懐より袱紗包の金束を投出す）

夫人。あら、本當に。（と袱紗を開きて員數を檢めて）貴方、五百圓！　これを皆私に下さるの、本當に？

都筑。（苦笑しながら）何うせ見込まれたんだ。

夫人。難有う〳〵。でも本當に皆頂いても好いんですか。

都筑。要らなきア返すが好い。

夫人。厭ですよ、返すもんですか。頂けば私のものですもの私の好きなものを買つたつて好う御座んすね、貴方、好いでせう。

都筑。そして、博士は何んと云つた、何か云ひ置いて行つたらう。

夫人。（金を算へながら）いゝえ、別に。

潔。（突然頭をもたげて）お父様。

都筑。起きたのか、何んだ。（と險しき聲、振り向きもせず）

潔。曩副院長が來ました。そして、毎と違つて、胸部だの、瞳孔だの、特に心臓を好く檢べて行きました。何うも樣子が變ですが、全體、今日の手術は何んです。

都筑。それ訊いて何んになる、患者は醫者にさへ從つて居れば好んだ。

潔。でも、身體は私のものですもの。

都筑。然うだ、お前のものだ。私のものでも醫者のものでも誰のものでも無い。

潔。ですから僕は何うも——

都筑。何うも？

潔。お父様、僕は決心して居ることがあるんですよ。

都筑。決心だ？　決心とは何んだ。

潔。それは然し云ひますまい。お父さんは眞面目に聞いて下さらない。

都筑。云ひたくなけりや云はぬ方が好い。貴樣たちの決心は何うで泣く事だ、訴へる事だ。そして悔む事だ。譬にも鵙は叫び獅子は默するとある。はゝゝゝゝ。待て〳〵、今好いものを見せてやらう。（夫人に）おいそのマドンナ像を外して、私が持つて來たこの像を掛けてくれ。

夫人。何故今日に限つてそんな甚い事を病人に被仰るの、氣にするわ。

都筑。何んでも好い、その額を見せりや好いんだ。

去人。（怪しみながら）本當に妙ですわ、暴風々々。

と夫人は立上りて、椅子を踏臺に、マドンナ像を下して持來たれるユダの像を壁にかゝぐ。使徒ユダ、主の基督を銀三十枚に代へて敵にわたしたる後、深くその罪を悔みて指を嚙み地を凝視して悄然と樹下に佇立する圖なり。

都筑。これだ。（と指す）

潔。　エスカリオテのユダでせう、何て沈鬱な色だらう。見て居ても心が暗くなる。少なくとも中古の繪ですな、オランダですか。

都筑。繪を見せるんぢやない、その題字を讀んで見ろ。その繪の下に書いてある。

潔。　If he had not been born. これは馬太傳にある言葉です。

都筑。お母さんにも聞かせるやうに、日本の言葉に現はして見るが好い。

潔。　馬太傳の二十六章の二十四節にあります。キリストがユダを咀うた言葉。その人生ざりしならば反つて幸ひなりしならんと新約全書にある、あれです。詰りこんな人は生れなかつたら幸福だ、生れたからこそ罪を犯す、その人の罪は生れた事にある、と云ふのでせう。深い強い主の同情が一句に盡きてゐるぢやありませんか。僕はこの句を讀む度に實に廣大な神の慈悲に打たれます。尊い言葉だ。實にクリストは人間あつて以來の偉人です。

都筑。潔、お前でもその一句にそんな權威を認める事があるな。

潔。　何故ですか。聖書は私子供の時からの愛讀書です。一日だつて傍を離した事がない。（と枕許より手擦のせる聖書を取上げて）この通り、特に馬太傳なぞは詩として文學として、殆ど諳誦するまで愛讀して居ります。

都筑。然うだらう、お前は詩として讀んで居るんだ。（と嘲けるやうに咽頭にて笑ふ）

潔不平げに口を噤みて父の顏を見るのみ。

夫人。この繪が何うかしまして。まア見ても厭な繪ぢやありませんか、恐ろしい、あの凝つと俯向いて中の指を噛んでる樣子を御覽なさい。

都筑。默つて見るんだ、そして深く〳〵考へるんだ。

夫人。何を——繪ですか。

都筑。繪ぢや無い、活きた權威ある言葉だ。

夫人。その生れざりせば何うとやら云ふ文句でせう。

都筑。潔、お前は何んと見る。

潔。　この繪をですか。

都筑。胸に手を置いて、好く深く考へて見ろ。

潔。　僕にや分りません。

都筑。分らんでは濟むまい。遁げずにどん底まで考へて見ろ。

潔。　何れ考へて置きませう。

都筑。何れとは何んだ、自分の事ではないと。繪を見たら直ぐ感ずる筈だ。

夫人。貴方、そんな無理を被仰るひまに、何故斯う〳〵だと繪解きしてお聞かせなさらないんです。その方が早いぢやありませんか。

都筑。いや、私は云ふまいよ。口から耳へ聞く可き事ぢや無

い、心の底、ズツト底を探つて見ろ、キツト感ずるに相違ない。

潔は、俯向きて何をか思ふ。

看護婦入り來る。

看護。奥樣、あの日本橋の呉服屋で御座います。御注文の品を唯今自動車でおとゞけ致したさうで御座います。

夫人。おや、然うですか、誰か參りまして御座いますか。（と出でんとす）

看護。いゝえ、あの電話で。

夫人。然うでしたか、故々何うも難有う、桂さん、衣服が出來たさうですよ。桂さん。（と叫ぶ）

桂子付添室より出で來る。

桂子。おや、それは好う御座んしたね。

夫人。今自動車で達けたんですつて、あすこからぢや三十分もかゝりますか、四十分？　そんなものでせうか。

桂子。どの道、もう直ぐでせうよ、伯母樣、お目出度う。さぞ、お待ち兼でせうね。

夫人。本當に、何うして私は斯う氣急でせうね、今の事が直ぐ今で無くちや、氣が揉めて爲樣がないんですもの。

桂子。早く見たう御座いますこと。嘸ぞ、仕立榮え致しましたらうよ、本當にあの紫がかつた柄は新しう御座いますよ。

看護婦入る

夫人。然う〳〵忘れて居た、貴方、あの獨逸の伯父樣へ私から手紙を書きました、好いでせう。

都筑。何と書いた。

夫人。何と書いたッて好いわ。何うで私が書いたんですものの。貴方の爲に惡いやうな事は一行だッて一句だッて書きはしません。貴方は默つて見て被在い、キツト好い返事が來るに相違ありません。

都筑。又お前の早合點だらう、それにも困るて。

夫人。困りませんよ、大丈夫、大丈夫困りませんよ。貴方の口からは、そら、男の口からは賴まれない事もあるでせうそこを私からなら何んとでも書けます。

都筑。ぢや承諾の手紙だな。

夫人。何うですかね、斯うと…まア二月の後を御覽なさい、辭令を見て貴方はキツト喫驚なさるに相違ない。

都筑。最う出したのか。

夫人。えゝ、最う既つくに。

都筑。それなら何故私に一應相談しないんだ。困る。

夫人。あら、ぢや不可なかつたんですか。

都筑。可けるも、不可ないも、何故お前は然う淺墓だらう。私の立場を思つて見るさ。私は主義を棄て政友を棄て、そして節操を棄てゝまで高が領事ぐらゐの出世が私に出來ると思ふか。

夫人。ぢや、何故伯父樣からそれを云つて來た時、貴方は最

初にキッパリ斷つて下さらないの。今になつてそんな事を云つても最う駄目よ。

都筑。お前が餘りワイ〳〵云ふから。

夫人。なんぼワイ〳〵云つたつて、不可ないものならキッパリ云つたら好いでせう。それが貴方の癖よ、その時は何方付かずの事ばかり云つて居て、後になつて、必ず何とか彼とか難ケしい事を云ふんですもの。爲樣がないわ。

都筑。好い〳〵。最う然う煩さく云つてくれるな、私は何うでも好い。

夫人。ぢや、本當に、本當に不可なかつたんですか。

都筑。出したものなら、今更ら何を云つたッて追付くまい。

夫人。出しやしません。

都筑。何んだッて。

夫人。本當は未だ出しやしませんの。たゞ書いたばかり、こゝに有りますよ。（と嚢の手紙を出す）

都筑。又例の事だ。（と苦笑する）

夫人。だッて、貴方が色々難かしい事を云ふからですわ。

都筑。困つた人だ。

潔。（突然顏を上げて）お父樣？

都筑。何んだ。

潔。僕にや何うしても分りません。

都筑。分らない筈はない、最う少し深く考へて見ろ。

潔。この繪と僕と全體何んの關係があるでせう、分りません。

都筑。そりや貴樣は繪ばかり考へるからだ。繪を考へる前に先づ自分、自分、と云ふものを考へて見ろ。自分が解れば好い、繪の心も自然と分かる。

潔。自分の罪惡をですか。

都筑。まだ分らんか。自分の生存…さうだ、生存と云ふ事を考へろ。何故、何故人間は生存しなければならぬかを考へて見ろ。キリストの言葉はこの場合ユダの罪惡に向つて放つた呪詛だが、換へて總ゆる人間にも云ふ事が出來るだらう。

潔。If he had not been born.

都筑。好し、考へろ！

潔。If he had not been born.

都筑。まだ分らんわ、はゝはゝゝ。ぢや、私がその繪を買ひ求めた順序を話して聞かせやう。

潔。聞かして下さい、何うか。

都筑。昨夜であつた。私は病院を出たのが十一時頃、銀座の露店を冷かしながら家へ歸つた。寒い晩でな、電車の通りを眞直にヒュウと風が吹く。人通りも途絶えて、電車も赤い警燈（アラムライト）のが多かつた。寒い、寒い。

夫人。夕方からはチラ〳〵白いものが降つたぢやありませんか。

都筑。降つた、粉のやうなのが外套の襟から吹込む。

潔。If he had not been born.

都筑。潔！

潔。は！

都筑。お前の話ぢやないか。

潔。あゝ、僕は——

夫人。何うしたの潔さん。

潔。あゝ！（と深き溜息）

都筑。その前に私の心持も云はう。私はなその時、或る一事に甚く屈托して居た。云はゞ心の革命だ。新しい革命だ。將に來らんとする革命の劍光は底に動いて、心は磁石のやうに搖れては居るが、さて、何うしてもその新しいものを掴む事が出來ない。影か、閃きか、その尖端が見えるやうで、掴めるやうで、扨それが出來ない。

潔。その或る一事とは何んです。

都筑。ある一事ぢや、然う思つて居れ、何れ、自然に分かる時があるだらう。

夫人。だッて、大切なそれを話さない事には何も分からないぢやありませんか。

都筑。お前なぞの知らん事だ、この事…この事ばかりお前なぞの知らん事だ。

夫人。だッて…

都筑。默つて居なさい。

夫人。おゝ恐い、また私にまで當り散らすんですか。

都筑。耳元でワイ〳〵云はれると、私の心は搖れるばかりだ。

夫人。おゝ。暴風〳〵。

潔。お父樣。

都筑。默つて聞くんだ。

潔。あゝ！（と俯向く）

都筑。すると、私は偶とあるものに目をひかれて立傳ゐた。繪ぢや、こゝにある繪ぢや。この繪をチラと見ると、私は總身に強い電氣が傳つたやうな氣がした。先づ目に入つたのはその目付だ——、底の知れぬ深い目付、そして口付、そして最後にその文句に目が付いた。燒鏝（やきごて）と云はう、血の文字と云はう、心の底を覆顚返（ひっくりかへ）すやうなその文字が目に付いた。

夫人。まア不思議もありますね、貴方が繪なんか見やうたア思はなかつた。

都筑。別に手を取つて見る氣もないから、その儘行き過ぎた。するとな、妙に唆かされるやうに心が動く。それに、その繪を賣つて居る老爺の形相がよ。唇の厚い瘤鼻の、痩せたな、素ッ氣のない乾燥びた老爺ぢや。大通りでも夜深けは寂しい、敷石を踏む下駄の音が遠くへ〳〵と響く。老爺は痩せた大きい掌を寂寞（じゃくばく）と膝の上に組合せて、凝つと地の上を見て居る。著（めぢ）しい代物はこの繪ばかり。外には古鍔や、古花筒、別に目新しいものはない。まア賣物と云ふよりは

この繪の番人と云ふ形ぢや。價ひは幾らかと訊いた。老爺はヂロリと私を見上げて、フフンと鼻先に冷たい笑を泛べた。黄色い齒を見せた。五圓と云ふ氣だらう、痩せた五本の指の裏を見せる。五圓かと念を押したら、そして、フウンと笑ふ。で金を投出して私はこの繪を買つた。そして昨夜は一晩枕元に置いて眺めた。ウヰスキイをチビチビ嘗めながら、夜明まで繪と對向ぢや。が何う云ふもんか些つとも醉はん。頭が始終氷で洗はれるやうな氣がして些つとも醉はん。その癖、眠りたいにも、氣は自づと興つて來て、飲めば飲む程心は冷たくなるんだ。なんぼ飲んだらう、イヤ、隨分飲んだ。それからズウと今まで飲みつゞけぢや。

夫人。あら、そんなに召上つたんですか、道理で曇から變だと思つて居た。媼やも媼ぢやないか。あれほど言付けて置くのに、そんなに上げると云ふ事はない。だから私が居なくちや爲樣が無いのね。

都筑。お前が居たつて駄目だ。昨夜ばかりは誰が何んと云つても飲んだに相違ない。

夫人。私が居れば、何と被仰つたつて上げるもんですか。上げませんとも、えゝえゝ上げませんとも。

都筑。私は飲む、玆にちやんと持つて居る。（と外套のポケットを叩いて笑ふ）

夫人。あら、何うしませう。貴方、何うして今日に限つて急にそんな事をなさるんです、私何うしても上げません。お出しなさいよ。（と立寄りて壜を取らんとす）

都筑。今日は飲む。はゝはゝゝゝ、飲むんだ。

夫人。不可ませんよ、貴方は今氣が立つてるから、そんな無茶を被仰るんですけど、後になつて屹度後悔しますよ、また屹度私に謝まらうと思つて。

都筑。後悔しても、謝つても私は關はん、私は飲む。（とウイスキイの角壜を出して口を拔かんとす）

夫人。（涙ぐみて）不可ませんよ、不可ませんよ。（と引奪らんとす）

都筑。はゝはゝゝゝ、餘計な世話だ。（と先きの紅茶々碗に注ぎグイと飲む）

夫人。あら、不可ない。（とコップを持つて夫の手に縋りて）桂さん、早く壜をかくして下さい。桂さん。

桂子。はい。（と云へど、流石に手を出しかねてモヂ〳〵するのみ）

都筑。（やゝ聲を激して）おせつかいも大抵にせんか、私が飲むんだ、私が飲むんだ。（とまたドク〳〵と注ぐ）

桂子。伯父樣！

都筑。今日は誰にも手は出させん。私は飲む可き事があつて大いに飲むんだ。（と快さうに一盃を呷る）

夫人。ぢや貴方は酒で氣を紛らさうとなさるの、それこそ卑怯ぢやありませんか、男子の樣でも無いわ。

都筑。卑怯でも關はん、私は私の思ふやうにする。

夫人。（爲方なく思ひ定めて）ぢや止めません、それが貴方の病氣なんだから、後になつて後悔なさるやうな事があつても私は知りませんよ。

都筑。私はお前どもに助けられて生きてやせんぞ。

夫人。好うござんす。明日になつてもその言葉を忘れないで被在いよ。

都筑。忘れるもんか。

夫人。今日は大層大きな口が利けます。

桂子。（獨りハラ〳〵して）伯母樣。

夫人。好いんですよ、打遣つてお置きなさい、最う何時でもなんだから、又病氣が起つたと思つて居れば好いんです。

都筑。また病氣！ 然う病氣だ、お前方正氣な人の目には病氣とも見えやうよ。然し私が病人なら、お前も立派な病人だ。

夫人。何んですつて。

都筑。ま、ま、然う憤る事はない、憤るは神經の毒だ。又今夜眠られないつて騒ぐぜ。

夫人。知りません、何とでも被仰い。

都筑。お前は私を助ける氣で居やう。お前があつて、お前の伯父樣があつて、そして、僕は生きて居るやうに思つて居る。豈圖らんやだ、はゝはゝゝゝ。

夫人。何か豈圖らんです。ハツキリ被仰いな。

都筑。云ふよ、云ふよ。私はお前や、お前の伯父樣に助けられて、一端の政治家、代議士になつた。書齋に引込んで書物と頸引きして居べき私が、まア兎に角舞臺の表面に立つて活動する人になつた。酒の上が悪い、節しろとあれば、はい好ろしいと素直に節する。本を讀むな、はい好ろしい。嗅煙草より英國煙草にしろ、はい好ろしい。と、まア斯うして何うやら人らしい事を云ひ得る身になつた。處が豈圖らんやだ。

夫人。貴方！

都筑。何んです。

夫人。幾ら御酒の上でも、後で酒とばかりぢや濟まなくなる事があります。

都筑。大きに然うだ。が、お前が私に世話燒くのを悪いたア云ひません。結構です、結構です、私は又世話を燒かれるほどお前が可愛い。

夫人。貴方何を被仰るの。

都筑。誰が居たつて關はんさ。詰り、お前の助力——まア大きく云つて——は私の爲と云ふよりお前のためだ。お前は人に世話を燒かなきア活きて居られない人間なんだ。

夫人。もう〳〵聞きますまい。貴方は貴方の思ふやうになさいまし。

都筑。はゝはゝゝゝ、いや酷しい立腹ぢやで。

夫人。何か豈圖らんです。ハツキリ被仰いな。

都筑。云ふよ、云ふよ。私はお前や、お前の伯父樣に助けられ

都筑。何んだ、又泣くか。好く泣ける涙だ。
潔。この繪は恐ろしい謎でせう。
都筑。謎ぢやない、說明ぢや。
潔。僕はこの恐ろしい謎を解かうたア思はない。このまゝソットして置いて、解きたくない。繪を見るのもいやです、恐ろしい。
都筑。馬鹿者！　目を眞直に好く見ろ。
潔。あゝ、何うして僕は斯う弱いだらう。
都筑。瞬目もするな、瞼を大膽にぢつと見るんだ。
潔。あゝ、（と蒲團の上に突伏す）

都筑は凝つとその樣子を打戍る、この時、看護婦入り來る。その姿を見るより、都筑は行也、

都筑。あゝ最う手術の時間ですか。（と叫ぶやうに云ふ）
看護。いゝえ、あのその前に院長が御相談したい事がおありなさるさうですから些いと被來つて下さいまし。
都筑。私に？　何です。
看護。私には分りませんが、何でも御打合せ致したい事があると被仰いました。
都筑。今行きます、院長室ですか。
看護。いゝえ、手術室、第一號の。
都筑。第一號？　ぢや、大手術室だ。（と立ちてよろめく）
桂子。あれ危い。（と支へんとす）
都筑。大丈夫。（と立直りて、潔の枕邊に立寄り）潔！　もう卽ぐだ、用意しろ、用意をしろ。

看護婦と共に出でまる。夫人心配しながら送出す。

桂子。（慌しく潔の傍に依り）潔さん、何うかなさいまして、え、え。
潔。あゝ、（と突伏せるまゝ溜息をして）僕はもう絕望だ。
桂子。何故。何故急にそんな事を被仰るの、潔さん。（と聲を顫はす）
潔。今に解りますよ、今に。
桂子。何故急に伯父樣はあんな事を被仰るのでせう。御酒のためなら好いけども、私何んだか心配でならないわ。
潔。あゝ。（と俯向いて泣く）
桂子。潔さん、何うなすつて、潔さん。聞かして下さいよ、私心配だから。（と頰を擦らんばかりに顏を差寄せて問ふ）
潔。そりや何んだか僕にも分つては居ないんだ。
桂子。貴方にも？
潔。でも、何か來る、屹度何か來る。何か恐ろしいものが
桂子。だツて、それが——
潔。あゝ、來るなら寧そ早く來てくれゝば好い、遠くに足音を聞かせられる苦みは、面と向いた惡魔よりも恐ろしい。

夫人慌しく入り來り

夫人。桂さん、來てよ〳〵、着物が出來て來てよ。
桂子。え、何が。（とベッドを遠退く）

後より手代らしき男風呂敷包みの衣紋臺をさゝげて入り來る。

夫人。さア、此方へ、晩かつたわね。このテイブルの上に置いて下さい。何うしてこんなに晩かつたんです。まアどの位氣を揉んだと思つて。
手代。へえ、誠に御申譯が御座いません。職人を擇んだものですから存外手間取りました。その代りには仕立を御覽下さいまし。手前どもゝ、自慢なんですから。
夫人。然うですか。それは〳〵。（と自ら風呂敷を解いて）まア、思つたよりは上出來。桂子さん來て見て下さいよ。
桂子。まア引立ちましたこと。好い色ぢやありませんか、（と褄施など見て）それに仕立ても大層好く出來ました。
夫人。それだから、御覽なさいよ。皆が派手過ぎ〳〵ッて心配したけど、矢張り私の眼が高かつた。それに、帶との配合もあるし、この位の色でないと引立ちません。
手代。まア例に召して御覽なさいまし。斯うして御覽になるより又一段お召勝りが致しませう。
夫人。着て見ませうか。
桂子。お手傳ひ致しませう。

と話して居る所へ、戸をする〳〵と開けて一人の盲人あらはる。六十以上、硬き白髮を總髮にして、猫脊、這ふやうに手探りつゝ入り來る。

盲人。もし、もし。（とボク〳〵首を振りながら低聲にて何か云ふ。殆ど聞き取れず）
桂子。あら、曇の人よ。
盲人。もし、もし。
夫人。何んです、何か用事なのですか。
盲人。もし、もし。（とズル〳〵部屋へ入り來る）
手代。耳が遠いやうです。（と側に進みて）按摩さん、何んぞ用事なんですか。（と耳元に大きく云ふ）
盲人。……（と何やら小聲に云ふ）
手代。え、え然うです——いゝえ、別に。（と大きく云つて）ね、奥樣、別に今日若樣の御病氣に變りは御座いませんね。
夫人。また、そんな事を云つて來たのですか。まア緣起でもない、何うしたと云ふのだらうね。
盲人。……（頸を振りながら何か嘶く）。
手代。それで、あゝ。
盲人。……
手代。違つてるよ、全るで、別に何にもない。何を勸進へして居るんだね。
盲人。……（と冷たく笑ひながら頰を振つて聞かず）
潔。（顏を上げて）おい、盲人が何んと云ふんだね。
手代。何んですか。私には些つとも解らない事を云つて居ります。些と氣が何うかして居るのぢやありますまいか。

盲人は手探りよりて潔の枕元に坐る。

潔。　おッ母様、貴方から訊いて見て下さい。何か屹度あるんでせう。
夫人。厭な事、私は厭だ。薄ッ氣味が悪いもの。
手代。何か若様の體に大變な大難でもある様な事を申して居ります。全く何うかして居ますよ。
盲人。……（獨り何やらつぶやき居る）
　　都筑は蹌踉として入り來る
夫人。貴方、着物が出來て參りましたよ。
都筑。（聞えぬさま）潔。最う手術が始まるさうだ。今擔架を持つて來る。
潔。　僕は歩きますよ。
都筑。歩くッて？　行く時は歩くさ。然し、（と氣を變へて）まアそれも好いだらう。
潔。　何故です。
都筑。何故でも好い、（と偶と曩の盲人を見付けて）あれは何んだ。
夫人。按摩ださうです。
都筑。何しに來た。
夫人。何んですか知りませんけれど突然入つて來まして、何か潔の身體に大變が起るやうなことを申して皆の氣を悪がらせます。多分氣が何うかして居るんでせうよ。ぢや私は些いと着物を着換へて參ります。
夫人、桂子、手代の三人、着物を持ちて付添室に入る。
都筑。（潔の枕元に立ちて）何？　お前の體に大難がある？
——うむ、面白い。が、何うして知れた。
潔。　それは分りませんけど兎に角、然う信じ切つて居る様子です。
都筑。面白い、何か據る所があるだらう。（とツカ〳〵盲人の傍へ寄り）おい、お前それを誰に聞いた。
潔。　耳が餘程遠いやうですから、大きな聲でなきァ聞えません。
都筑。耳まで遠いのか、もう半分死んで居るんだ。おい、お前。（と盲人の手をグイと掴みしが、急に振放して）何うだ、何うだ、この手の冷たい事、全るで魚のやうに冷たい。
　　盲人は空しく宙を見上げて、冷かに、偏屈らしく笑ふのみ。
潔。　多分易の上にでも顯はれたのでせう。冗談半分、一二三日前に易を見て貰つた事がありますから。
都筑。むゝ、そして何んと云つた。
潔。　その時は別に何んとも申しません。暫らく考へて居ました。そして、何か變つた事が無いかと訊きます、何も無いと云ふと、頸を拈つて、はて、そんな筈はない、そんな筈はない、と云つて信じません所へ貴方が眞着な顔して入つてお出でになつたのです。
都筑。一體、そりや何日の事だ。

潔。　一昨日——いやその前の日、お父様が院長と何か御相談のあつた、その日です。
都筑。看護婦が私に來た、あの日だな。
潔。　然うです。お父様、一體あの日に何の相談があつたのです。何うも氣に掛る。何うか隱さずに聞かして下さいませんか。
都筑。（急に苦り切つて）それを聞いてお前は何にする。
潔。　覺悟します、男らしく立派に覺悟をします。
都筑。（仆るゝやうに椅子にかけて）覺悟をする？　覺悟をする位なら、何もそれを聞く必要はあるまい。聞いた上にするは覺悟ぢやない、諦めぢや。
潔。　諦めでも好ろしい。僕は——僕はこの二三日夜も碌々眠りませんよ。強ひて云へばまア來る可き運命の壓迫とでも云ふのでせうか、始終心が動搖して、搔亂されて不安で不安で耐りません。
都筑。……（俯向いて聞きながら、又卓上のウヰスキイの壜を取上げて、チビ〳〵飲み始める）
潔。　お父様、貴方は隱して居る。屹度隱しておゐでなさる。僕は死ぬんですか、不具者になるのですか、何うです、それを聞かして下さい。貴方は屹度知つて被在る筈だ。貴方の心の中に活きてゐる僕の身體は屹度最う今の僕の身體ぢやない。僕は知つてます、あの日から貴方の態度がガラリ變つた、お父様、全體僕と云ふ身體は何うなるのでせう。
都筑。……
潔。　ねえ、お父様。この指先の顫へを見て下さい。毎晩床の中に寢て居ても、始終ビクリと動く、これで目が覺めます。（と掌を打返し〳〵眺めながら、涙聲に）ねえ、お父様、僕は夢さへ滿足に見られないんですよ。始終不安と恐怖とに襲はれて、眠つてる間も心だけは覺めて動搖して居ます。汗の滲むのも、筋肉の痙攣るのも皆現に知つて居る。愉快な樂しい將來の夢に醉つてゐる中でも、一つの冷たい自分は自分を離れて、冷かな悲しい自分の運命を見詰めて居るのです、云つて見ると、自分は確かに二つに分れて居る。一つの自分は高い所に居て一つの自分は傷しい運命を見て居るんです。あゝ、この不安、この恐怖、あゝ、寧そ死んだ方が好い、見えない將來の恐怖に苦しむよりも死んでも好い、生きても好い、唯この動搖と不安から免かれて落付いた安定の場所に坐りたい丈が望です、最う外に何にもありません、ありません。お父さん、僕はね、僕はね——（と泣く）
都筑。潔！　最う考へるな。考へたつて何うもなりやせん。お前痩せたぞ。（と側に寄つて、脊などさする）
潔。（その手に縋つて）お父様、何うか聞かして下さい、隱さずに聞かして下さい。
都筑。聞かすにも……聞かす事が無いんだ。それに、それにお前は生れながらにして不幸者だ。心も身體も共に弱い

自分の腿の肉を喰つてまでも世間と奮闘して活きる力が無い。生れた時既に敗けて居る。運命に反抗するのは力だ。お前にはその力が無いぞ。（と潔の手を見て）この、この、蒼白い痩せた、頸へた腕ぢやとても駄目だ。お前は人生を何う見て居る。他の闘ふ姿、苦しむ姿を見て恐ろしいとは思はんか。惨憺とは思はんか。

潔。それは思ひます。他が泣きながら、蹠きながら、喚きながらこれが人生だと叫んで居るのを聞く度に、僕は目を塞ぎたいほど悲惨に思ひます。

都筑。お前もやがてその人生の中に泣き叫ぶ人だと思つて見ろ。

盲人。（ふと見惚めたる人のやうに、又）もし、もし。（と叫ぶ）

潔。お父様、僕は何うなるんでせう。あゝそれを思ふと寧そ死にたい。活きてるなァ厭だ。

都筑。馬鹿者、死にたいとは何んだ。それが産まれたる父の前に云ふべき言葉か。

盲人。（左に、右にウロ〳〵しながら）もし、もし。（と聲を求む）

潔。そして、あの繪は何んです、あの繪の心を聞かして下さい。

都筑。好く見ろ、そして考へろ。生れざりしならば却つて、幸福なりしならん。これを自分に放たれたる言葉として好く考へて見ろ。

潔。ぢや、僕はその……

都筑。ユダは犯した罪悪のため、多くの人は、與へられたる天分のため、世に榮ゆるは擯ばれたる人に限ぎる。疾める者は雀や鳩の生涯すら羨むと云ふ。紡がず耕さず活きる無爲の生涯が羨ましい。われ嘗つて饑るに死せる魚を見ず、而して人は多く路傍に仆るぢや。

盲人。もし、もし。（と手を擴げて、よろぼいながら都筑の裾にすがり付く）

都筑。何んだ、う、う。（と盲人の口に聞きて）何が來る、え何が來る。（高く）何が來ると云ふんだ。

盲人。……

都筑。えッ聞えない。（と身を換す）

盲人ベトリと膝を付く、

都筑。見ろ、この汚ない、醜い、恥づべき人を。これでも活きて居ると云ふ人だ。手は手として從がはず、足は足として從はず。耳も、目も、口も、總べて、體が體に背いて居る。それでも活きて居る。いや活きて居なけりやならん。思ふても見ろ、この人に、何の望みがある、喜びがある、滿足がある、單に生きん爲めに生きて居るんぢや無いか。恥しい事、傷ましい第一醜い事ぢやないか。

盲人。もし、もし。（と又縋り付く）

都筑。煩さい、何んだ。（と好くも聞かず）あゝ、未だ生れざる魂。思へ、世界には未だ生れざる魂がある。幾千となく

幾萬、いやそれに六十倍し、六十倍して倍して幾億となく無限にある。（激するまゝに其所此所を指して）いや、そこにもある、此所にもある。それ等に何の苦痛がある、抵抗がある。生れて苦しむと、生れずして苦しみを知らぬとは果して何れが幸福だ。私は此繪のパプテスマに依つて、急にクリストを讀みたくなつた。昨夜、夜を徹して讀んだ。果して書いてある、善き樹は悪しき果を結ばず、悪しき樹は善き果を結ぶ事能はざるなり。これぢや。人は苗にして分たれる。火に投燒べらるゝ樹は生れながらにその結果をそなへて生れて來る。

盲人。もし、もし。（と這ひ上るやうに縋り付きて何やら云ふ）

都筑。見ろ、この老人を。斯の如く活きても、なほ生を誇り喜ぶ資格があらうか。斯くの如くにしてまで人は尙世に生きなきアならないか。（と襟頸を掴んで顏を潔の前に突出さす）

潔。あゝ。（と突俯し聲を擧げて泣く）

都筑。何を泣く、泣く間に考へろ、そして處決しろ。

處へ桂子何心なく、「伯父様〳〵。」と呼びながら出て來りしが、この態を見て驚きて慌てゝ。

桂子。あッ伯父様、何をなさるんで、危い、伯父様。

都筑無言にて盲人を突離す、ヨロ〳〵と蹌きて前に仆る。

桂子。まあ、酷い。（と盲人の傍に寄りて介抱して起す）

盲人。（戸口の方を指して桂子に）あれ、あれ、……（と敎ふ）

桂子。（不氣味さうに）伯母様、伯母様。

夫人。はい〳〵、今行きますよ、些いと待つて下さいよ。何うだらう、このバチンの固い事は。（と付添室にて獨言）

人の重き足音に雜りて數人の言ひ罵る聲外に聞ゆ。

潔。（恐ろしげに顏を上げて）お父様！

都筑は仆るゝやうに枕元なるソファに掛ける。

夫人は慌と氣取りたるさまにて付添室を出でゝ無言にて潔の枕頭に立つ、着物を見せん心持なり。

潔。お母様、最う出るんですか。

夫人。まだ間はあるけど、天氣の模様が變だから早く行かうと思つて。良人の前に立ちて）さア貴方何うです、矢張り私の云つたこの色が勝つぢやありませんか。

都筑。……

夫人。帶がこんな色ですもの、貴方の云つたあれなぞにしたら、それこそどんなに可笑しかつたらう。それにこの襦袢も、ね、然うでせう。私の方が目が高かつたわ。

都筑。う、う。（と懶げに聞き居る）

夫人。あら、う、う、だつて。（と口眞似して）本當に氣の無い返事だこと。些つたァ何とか云つて賞めるもんですよ、ね、似合ふでせう。（と袖など打返して見る）

都筑。あゝ、（と兩手を頸に組んで長椅子に寢ころぶ）

夫人。まァ、未だ醉つて被在るんだわ。人困らせの旦那様だ

（と濟して椅子へ）

看護婦と共に人夫三名擔架を持ちて入り來る。

看護。手術の用意が出來ました。

桂子。こんな天氣でも？　何だか眞暗になつて來ました。

夫人。大丈夫よ。暗けりやチヤンと電燈もあるわ。

潔。擔架なんか要りません、僕は歩いて行く。

看護。いゝえ、でも些つとでも凝つとして被在る方が好ろしう御座います。

潔。僕は歩るける。（と立つ）

桂子。（その顏色に驚いて）まア、何うなすつて、眞蒼よ。

潔。なアに。

看護。貴方、矢張り擔架の方がお好ろしう御座いますよ。

夫人。（看護婦に）いゝえ、屹度病人あつかひされるのが厭なんでせうよ。だけど、潔さん擔架だつて好いぢやないか。何も大病人が乘ると決つたものでもないから。

潔。ぢや乘つたつて好い。（と擔架に乘り）そしてお父樣。貴方は立會つて下さるのでせうね。

都筑。私は行くまいよ。

潔。だつて、私一人ぢや何んだか恐ろしい、ではお母さんでも好いから傍に居て下さい。

夫人。お母樣は今出て行く身體ですよ。

潔。お父樣。

都筑。馬鹿、獨りで行け。

盲人。もし、もし。（と又立上る）

潔。（擔架の上より）お父樣、この繪の話、何うしても聞かして下さらないんですか。

都筑。そりや言はん。獨りで、獨りで考へて見ろ。

潔。あゝ、責め殺されるんだ。

擔架去る

遠雷の音、大粒の雨ハラ〳〵と窓に鳴る。

夫人。あゝ、到頭本降りになつた、困るねえ。桂さん、眞暗だから、電氣を拈つて下さいな。

桂子。は、（と電燈を拈る、室内パツト明らかになる）ねえ伯母樣、何うしたんでせう、今日の潔さんは餘程變ですよ。顏色も眞ッ蒼だし、それに、涙含んで被在つたわ。

夫人。（それには答へず、突伏せる盲人を見て）あら、未だ居たのね、何うしたんだらう。

桂子。手術ッて、唯傷口を破つて膿を取る丈なんでせうか。

夫人。（盲人を見て）まア、何うしたんでせうね、この人は。

桂子。そんなら、潔さんは何故あんな心細い事ばかり云ふんでせう、私氣になつて〳〵爲樣がないわ。

夫人。どんな事。

桂子。あら、聞いて被在らなかつたの、死ぬとか不具になるとか、そんな事を云つて居てよ。

夫人。また何時もの癖ですよ、煩悶病！

桂子。それに、この盲目の人も、曩から妙に不氣味な事ばか

り云つて、本當に何うしたんだらうね、伯母樣吃度何か譯があるんだから伯父樣に伺つて御覽なさいよ。

夫人。駄目〳〵、今日はお天氣が悪い、荒れ模樣だから。

桂子。ぢや、驗しですからこの盲目の人に易でも見て貰ひませう。私、氣になつて爲樣がないもの。

夫人。まア、そんなに氣になる事？（と都筑の方に寄りて）貴方、潔は見てやらなくつても好いのですか。

都筑。お前は早く夜會へ行つたら好からう。

夫人。全體、擔架なんて、何故斯う大業に騷ぐのでせう。

都筑。お前は何も知らないのだ。

夫人。又ですか、一體私が何を知らないんですよ。

都筑。今に直ぐ分かるさ。

夫人。何を手術ですか。

都筑答へず

夫人。何んだらう、今日は妙に氣を持たせて、厭な事ばかり被仰るのね。私寧そ會へ行くのを止さうかしら。ねえ、桂さん。

桂子。だつて……、まア驗しに易でも見て貰ひませう。此人が却つて知つてるかも知れないわ。

夫人。然うね。（と進みなき顏）

桂子。（盲人の耳へ口寄せて）お前さん、易を一つ見て下さい。え？　えゝ、今の、あの潔さんのよ。

夫人。桂さん、何うせ見るなら私のも見て下さいな。

桂子。（高く）ぢやね、彼の人、三十九。

盲人。……

桂子。（盲人に聞いて）伯母樣　孔の開いた錢を六枚お出しなさいッて。

夫人。そんなものは無い、銀貨ぢや不可ないか訊いて御覽なさい。

桂子。あのね、銀貨ぢや不可ませんか。好いの？　うむ、うむ、縱に？　横に！　六枚？　ただそれだけ？　一枚取る？　どれでも好きなのを？　そして、うむ、うむ。（と盲人の言葉を聞取りて、夫人に）斯うなんですッて、その六枚のお錢を縱に好きなやうに並べるんですつて。

夫人。（銀貨入れより六枚の銀貨を取出して、云ふまゝに卓上に並べ）ぢや、斯うなんでせう。

盲人。……

桂子。え？　なめかかたか、そして一枚取る？　それだけ？　え？（卓上を見て）一番上が裏それから表、次が表、表、表、最後が裏。（と盲に人教ふ）

盲人は兩手の指を三本づゝ出し、裏とある分を一本づゝ折る。

桂子。そして、伯母樣、そしてその中から貴方のお好きなのを一枚取るんですつて。

夫人。はい。（と一枚取る）

桂子。見て）取りました、四番目、表の方なのよ。

盲人。（やゝ驚いて）悪いな。（と叫ぶ）
夫人。悪い？　（と一歩乗出す）
盲人。……
夫人。さ、何？　澤風大過。
盲人。（正しく坐りて、やゝ明かなる聲、所々聞ゆるのみ）大過は棟撓むなり。往く……亨る。大過は……過ぐる也。……本來弱き也。……過ぎて中、巽にして悦び行ふ。往く處あるに利し、大過の時、大矣哉。（と中指にて地を指しつゝ一句一句に句切を切る）
夫人、桂子、首を鳩めてウム〳〵と聞き居れどもその意を解しかねて、
夫人。そして、何うなんです、早く云つて下さい。矢張り悪いの？　ぢや何う悪いんです。
盲人。（靜かに考へて）才力共に弱く、志の時々を濟はんとして危難を顧みずして身を失ふに了る。破滅瞬目の前にあり枯楊の華くなり。されど人知らず〳〵。（勿論二人の外へは聞えず）
夫人。病氣？　いゝえその、目下の者の病氣　何うなんですつて？
盲人。疾を問へば大凶なり。
桂子。大凶ですツて、まア何うしませう。伯母様。
盲人。事既に去る。（と明かに）
夫人。まア、それでは…（と良人の傍に駈寄りて）貴方〳〵、貴方。
都筑。何んだ、何を慌てる。
夫人。だつて潔の病氣は大凶ですツて、嘘でせう、嘘でせう。
都筑。あゝ、今頃は最う私と同じ身體になつた時分だ。
夫人。ぢや切つたのですか、あの腫物で、足を。
都筑。腐骨瘡ぢや、私に祟つた病氣が潔にも血を引いた。
桂子。まア伯母様、何うしませう。（と涙聲に立竦む）
夫人。（急にボアをかなぐり棄て）それを、何故今まで私に隠して被在つた、何故聞かして下さらない、そんな、そんな大病を何故早く聞かして下さらない。
都筑。それ、それ、その通り騒ぐもの。
夫人。騒ぎますとも。騒ぎますとも。私は些つとも知らなかつた。あ、だから潔はあんな妙な事ばかり云つたのだ。
都筑。もう晩い〳〵。追付きませんぞ。
夫人。まア何んと云ふ言葉でせう、貴方は片意地だから、然う落付いて居られる。私には懸換の無い子です。一人の子です。
都筑。私にも子ぢや。
夫人。何んで知らして下さいません。
都筑。同じ事ぢや、聞いても聞かんでも、總て同じ結果ぢや。

下女きよ風呂敷包を持ちて入り來る。

下女。あ、まだ被在いましたね、好い鹽梅で御座いました、天氣がこんなですから、御合羽の用意をして參りました、それにお俥も玄關まで參つて居ります。
桂子。（蒼褪めたる顔して力なく）伯母様。
夫人。いゝえ、いゝえ、私もう行きません、何處へも行きません。潔が心配だ、何うなつたらう。（とスリツパア片足脱げたるも心付かず、セカ〳〵して駈出す）
桂子。あれ伯母様。お前もお出で。（と下女を促してその後を追駈る）

風の音、雨の音、時々雷鳴の音、外は暮近き空合にて、電燈の光り時々に明滅す。
都筑はソファを離れ、肩を下して疲れたる人の如く踏き出でゝ、中央の腕椅子にかけ、さきの角壜を出して又ウイスキイを傾く、盲人はその前に坐したまゝ寂寞と動かず。
遙かに夕餉の柝聲聞ゆ。
舞臺薄闇のまゝ暫らく沈默、次第に近づく雷鳴、電光を窓に見す。
桂子。（色を失ひて駈來り）伯父様。手術が濟みました。伯母様が手術室の前で卒倒なさいました。
都筑。卒倒？　（と立たんとせしが又バタリと椅子に仆れて）まア好い、好い、打遣つて置け。
桂子。何うぞ見て上げて下さい、大騒ぎですから。
都筑。好い〳〵。（と又切りに酒を呷る）
雷鳴激しく、硝子窓に響く。桂子恐ろしさにソロ〳〵と伯父の側に寄る。
看護婦、醫員など付添ふて夫人幸子を介抱し來る。
夫人きよの肩にすがりて力なく入り來る。
都筑は醉體を起して立ちて迎ふ。夫人を見る。夫人も見る。兩方無言。やがて勸められて夫人は付添室に入る。
醫師、看護手當を施して去る。桂子も付添室に入る
電光雷鳴。都筑は椅子にかけて又酒を始む。
やゝ經て、
盲人。もし、もし。（と手探りながら付添室に行かんとす）
都筑。（その襟を掴みて）おい、何所へ行く。何？　歸る、歸るなら其方のぢや無い、此方だ。
引擦るやうにして出でんとする所へ、副院長付添ひ昏醉の潔を擔架に乗せて入り來る。
石見。御安心なさい、手術の經過は至極良好です。
都筑。切斷した足は。
石見。後からお屆けしませう。然し何を云つても若い内の事ですな、魔醉中も切りと何か戀の話らしい。心は戀人と囁きながら身體の足を切斷されてるなんかも面白いぢやありませんか、大方當人は切られた足で公園でも散歩して居たんだらう、はゝはゝ、これで後出血さへなきアもう大丈

夫だ。（と云掛けて偶と、醉體に心付きて）都筑さん、大分行けましたね。また奥様が心配しますよ。若い奥様だ。餘り氣を揉ませなさるなよ、はゝはゝ。

都筑卓上に頭を埋めて言葉なし。話の中に人夫等看護婦と共に潔をベットの上に移す。

けい子蒼褪めたる顏して出で來りて遠くより病人を眺め居る。

石見。（患者の脈部を診察して）では鎭靜劑をこゝに置きますから、氣が付いたら飲まして下さい。なるべく安靜に。（と桂子に注意して去る）

人夫も去る。雷鳴次第に激し。

桂子竊かに潔の枕元へ立寄り、心配さうにその顏を打戍る。

都筑夫人、前の姿。顏蒼ざめ、髮も亂れ、衣紋も亂れたるまゝ、上靴も穿かず落付かぬ態にてスル〳〵と出て來りて枕元に立ち、

夫人。潔さん、潔さんや。（と二三度呼掛けしが、患者の昏醉せるを見て、喪心せる如く良人の傍に立ちて目据ゑて）貴方！

都筑は言葉なし。

夫人。貴方、潔は最う駄目なんでせう。院長は何んと云ひます、貴方、貴方。こんな事なら何故早く私にも聞かして下さらない。昨日からも一昨日からも貴方は知つて居て隱して被在つたのだ。私は最う何うなれば好いんです、私は潔に濟みません。

都筑は無言。患者潔はこの時、苦しげにうゝむと呻く。夫人はツカ〳〵と寄りて、顏さし寄せ。

夫人。潔さん、氣が付いたの、潔さん〳〵、潔さアん、お母さんも茲に居る、桂さんも居るよ、潔さん、潔さん。

桂子。（氣を揉みて）伯母様、然うお氣を揉んでも爲方がありません、靜かにして居るやうにとお醫者も申しますから、那方（あちら）へ被行つて休んで被在いまし。まア、お顏が眞ッ蒼。

夫人。（突除けるやうにして）潔さん、潔さん。（患者又うゝむと呻く。）

夫人。おゝ苦しいの、然うだらうね。苦しいの、苦しいの？

桂子。伯母様、然うお氣を昂らしちゃ不可ません、

夫人。潔さん〳〵、潔さん。

都筑。（ツカ〳〵と寄り、夫人を引離して）何んだ、馬鹿な眞似。潔は死にやせん、唯……不具者になッただけだ。

夫人。そんなら何故前から私に聞かして下さらない。それに、斯うなる者を摑（つかま）いて貴方は何故曩（さき）きあんな酷い事を被仰つた。

都筑。何うで生れ損ひだ。

夫人。生れ損ひでも何でも私の兒です。

都筑。あッち行け、そして寢てるんだ。

夫人。貴方は醉つて被在る、この病人の潔に曩き何を被仰つた。貴方こそ那方へ行つて被在い。

潔。（うゝんと喚きて）お父様！（と幽かに）

夫人。（良人を遮つて）あれ、貴方默つて被在い。潔さん、氣が付きましたか、潔さん、さ、これをお飲みなさい、これを。（と藥を飲ます）

潔。（ビシャ〳〵と唇を鳴らして）お父様は。

都筑。（ぬつと顏を突出して　う、何んだ。

潔、物に怖ぢたるやう、アット叫んで又昏醉に陷らんとす。

夫人。それ御覽なさい、それ　まア潔さん何うして、潔さん。

桂子も共に名を呼ぶ、潔やゝ正氣づきて水など求む。

夫人、桂子切りに介抱する時。電光窓に一閃して、轟耳を劈く　桂子、夫人思はずアッと叫んで耳を蓋ふ。

盲人も顏へ上りて、「もし、もし、」と呼びながら人の居る方に擦寄る。都筑一人肩を聳かして立つ。

潔。（却つて平氣、目をバッチリ開き、聲も明確して）お母様も桂さんも居るね、（と起上らんとして仆る）

夫人。あら、何うして？　潔さん。

潔。足に觸らして下さい、足に。

桂子。何うして、痛む？　そして胸氣持が惡るいやうな事はない？

潔。お母様、お父様は？　聞いて下さい、私は足を切られたやうな氣がする。

夫人。（ギョッとしながら、故（わざ）と）そんな事があるものかね、たゞ切開したばかりの事だから氣を揉まないで凝つとしてお在なさい、ね、ね、動くと心持が惡くなるよ。

潔。全身魔醉だ。

夫人。大丈夫よ、あれんばかりの腫物（はれもの）で足を切られて耐まるものかね、神經ですよ、氣の所爲ですよ。

潔、切りに周圍を見廻はすうち、前のユダの像を見付けて、

潔。お母さん、あれ、あれ、（と蒲團に頭を埋む）

夫人。（不審さうに）あの繪、何うかして。

潔。あれを取つて下さい、見ると恐ろしい、早く、早く取つて下さい。

夫人。あゝ、この繪、（と何心なく取除けんとする所へ、都筑は突然）

都筑。不可ん、取つちゃ不可ん。

夫人。何故不可ないんです。

都筑。好く目に染み込む程見せてやれ。

夫人。だッて、あんなに厭がつて居るものを。

都筑。厭だと云つたら首根ッこを摑（つかま）いても見してやれ、斯うするんだ。（と突如潔の蒲團を引剝ぐ）

潔。あ、お父様、最う赦して下さい。

夫人。あれ、何をなさる、厭がるものに無理をなすつて。（と手を拂はんとす）

都筑。何をする、お前の知つた事ぢやない。衣服、指環、ブロッチ、お前の心配はそれで澤山だ。

夫人。不可ません。貴方は蠱から潔を責殺さうとなさるんだ。

都筑。責めるんぢやない、覺醒さすんだ。

夫人。何と被仰つても不可ません。あれ、お放しなさい。

都筑。なに、不可ない。（と荒らく掠れたる笑聲を聞かせて）昨日までと違ふぞ、最うお前の權威は無い。今日は總て新しくなる時が來たんだ。

夫人。何が新しくなるんです。

都筑。お前は妻としてその良人に、母としてその子に、强き權威を持つてると信じて居る。そりや然し然うだつた——昨日まで。然うだ、昨日まで。然し今日は最う行かん。次の新しい時が來たんだ。

夫人。何故不可ません。貴方はお酒に醉つて被在るから、例の病氣でまた亂暴をなさるんですね。

都筑。亂暴ぢやない、踏むべき新しい道を踏むんだ。

夫人。何が新しい道です。

都筑。お前にや見えまいよ、今日は總て新しき道が開けて居るんだ。

夫人。私は何うしても止めます。

都筑。止めて見ろ。（と嘲笑つて）潔、目を塞ぐな、見ろ、見ろ、見るんだ。

桂子はら〳〵して切りに二人を宥むるをも肯かず、都筑は潔の襟頭を引掴んで無理にユダ像と顏を合さしむ。

潔。あ、あ、お父樣。

都筑。見ろ、見ろ、見ろ。

夫人。何をなさる！

雷鳴又烈しく、窓硝子にビリ〳〵と響き、電氣燈フッと消えて、室内眞暗となる。

夫人。あれ、貴方、潔！

潔。お母樣、あゝ、あゝ、（と怖える聲）

桂子。伯父樣。

雷鳴又烈しく、電光切りに窓に閃く、やゝ暫くして看護婦燭臺を持つて入り來る。

看護。電氣が止まりましたから。（と顫へ聲にて走り去る）

風雨雷霆の音、轟然、喧然、都筑起ちて四方の窓を開け放つ、外の音急に甚しく聞ゆ。

夫人。あれ、何故開けるんです、閉めて、閉めて下さい。

都筑聞かぬ態にて枕頭に立つ。

潔。（聲も切れ〳〵に）閉めて、閉めて下さい。

都筑。見ろ外の暴れを。

夫人。あ、貴方は氣が違つた！

都筑。大丈夫だ、はゝはゝ、大丈夫だ。

潔。お父樣、貴方は私を何うなさらうとするんです。

都筑。狼狽へるな、何うなさる？　さう云ふ體がお前自身の身體だ。

潔。僕の身體？

都筑。自分の身體を顧みろ。

潔。（急に聲上げて）足を觸らして下さい、足を。

都筑。それ。（と潔の身體を引立てんとす）

桂子。あれ。伯母樣！

夫人。貴方、そ、然うしてまで——（と立竦むのみ）

都筑。それ、觸つて見ろ。（と引起す）

潔、漸く自分の足を探り得て、アッと叫んで倒る。雷鳴。二人の女は耳を被ふて伏す。

都筑。見たか、分つたか。それが貴樣の身體だぞ。

潔、肩を顫はして嘘欷するのみ。

都筑。貴樣の前途は略見えやう。俺と貴樣と同じ道を踏むんだ。貴樣は生れながらにして人生の落伍者だ。弱者だ。敗北者だ。

潔。お父樣。（と聲をあげて泣く）

都筑。何を泣く。

潔。僕は最う……僕に……最う

都筑。足ばかりぢやない、貴樣の如き弱者は心も不具だ。この旋風のやうな、（と外を指し）それその外の暴風のやうな人生と戰つて、苦んで、勝つて突拔けるほどの勇氣があるか、私でさへ苦んだ。過去の四十幾年は惡戰と苦鬪の歷史だ。その力のないその身體で、その心で貴樣はこの暴風雨を侵して見事突ッ切る勇氣があるか。

夫人。徐々立寄りて窓を閉めんとす。

都筑。（心付いて）何をする、見せてやれ、見せてやれ。

潔。寧そ死んだ方が好い。

都筑。が、然し死ぬるほどの勇氣も貴樣にや無い、恥は死を以て償ふと云ふ。貴樣のやうな弱者は恥を恥ぢずに、穢なく見臭く十年も、十五年も、長く〳〵活きる人なんだ。

潔。では私は何うなれば好いです。

都筑。それは然し云ふまい、自分の事だ、自分が考へて見ろ。そして處決しろ。

潔。無理です〳〵教へてくれないのは無理だ。

都筑。私は言はぬ。

電烈しく閃めく

潔。あれ又鳴る。窓を……窓を……

都筑。貴樣あれが恐ろしいか、臆病者！

潔。桂さん、窓を。

都筑。誰も閉めちや不可ん、目を明いて、耳を開いて、あの、あの音を聞け。

夫人。（喪心したる人の如く）貴方、窓だけは……潔は小兒の時から雷嫌ひです。

都筑。不可ん。潔、今のは遠いが段々强くなつて來るぞ。

潔。あゝ。

強雷の音

都筑。何んだ卑怯な、頭を擡げて聞け

潔。お父さん。

都筑。聞け、好く聞け。

盲人。もし、もし。

都筑。（雷を指して）世の中はあれだ、暴風だ、戰ひだ。耳を塞いで、息を殺して、そして活きて居て何になる。日を立て、肩を聳かして吾が足を踏んで活き得るが眞の人の世だ。そして、眞の世界はもう我々のものぢやないぞ。祖父樣は私の身體に勇氣と力とを與へなかつた。私もお前に勇氣と力とを與へなかつた、父は子に、子は孫に……あゝ、われ〳〵は遂に擇ばれざる人なのだ。

潔。If he had not been born.

都筑。同じく仆れる時が來たのだ。仆れる時が來たのだ。

電閃く

潔。あ、お父樣。

都筑。まだ恐ろしいか。

潔。あゝ。

都筑。貴樣は遂に活き居る奴ぢやない。恐いか、又來るぞ、今度は今度は前よりもズツと烈しく來るぞ。

潔。あゝ。

強電、強雷。

都筑。それ見ろ、今光つた、あれだ、あれが來るんだ。

潔。お母樣。

都筑。遁げるな、聞け。

強雷、間もなく又閃く。

都筑。それ、又來た、又來た。

潔、父の手に縋り付く。夫人桂子は牀に突伏して死者の如し。盲人は空しく空を見上げて寂然たり。頭上にはためく雷。

都筑。それ、それ、それ。

潔。あゝ。（と悶絶す）

都筑狂者の如く笑つてわが子を見戍る。

幕後、しばらく雷の音を聞かす。

昭和三年一月十五日印刷
昭和三年一月十八日發行

版權所有

盲魚
定價壹圓五拾錢

著者　眞山青果
發行者　山本美　東京市麹町區内幸町一丁目三番地
印刷者　杉山愛二　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　東京市麹町區内幸町一丁目三番地　改造社
振替東京八四〇二番
電話銀座（一七五三番　四五〇六番）

株式會社秀英舍印刷

5
2

529
209